

# SD

Space Design

9909

Monthly Journal of Art and Architecture

スペースデザイン ISSN 0563-0991

創刊号 1999年9月1日発行 (毎月1回1日発行)

定価 400円 2月6日第三種郵便物認可

特集1

## ベルリン・トポグラフィ

### Berlin Topography

オラニエンブルグ通り／クロイツベルグ

パリ広場・フリードリヒ通り／ポツダム広場／アレキサンダー広場

シュプレーボーゲン／ツォー駅・クーダム

特集2

## 個性の彩る集住群

長野市今井ニュータウンの試み

Distinctive Housing Complexes:

The Imai New Town Experiment In Nagano





## 大切なのは、 何かをつかもうとする心。

電気は光・熱・情報・音響などに姿を変え、私たちの暮らしを支えています。関電工はこうした電気を、住宅で、オフィスで、劇場で、工場で、環境への配慮と安全性を第一に具体的なシステムや設備のカタチでお届けしています。そしてつねに、さらなる可能性を広げようと、新たな夢を描き、日夜さまざまな研究を続けています。今までも、これからも、関電工の技術はいつもあなたの近くにいます。

いつも、人に優しい技術で未来へ。

 **関電工**

本社：〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号  
☎：NTT03(5476)2111 TTN03(4431)2111



# OSAKI

検針の大崎が初めて実用化

電力線通信方式集中検針システム  
POWER LINE CARRIER-ONE-O

びい えろ しー いち まる

## PLC-10

カンタン

シンプル

ローコスト

### の電力線通信検針システム

リニューアルetc.  
既設の建物に  
お手軽に  
導入できます。

#### 電力線通信方式とは？

通信経路として、**屋内配電線**を利用します。  
ですから……

専用のケーブルの敷設が不要なので……

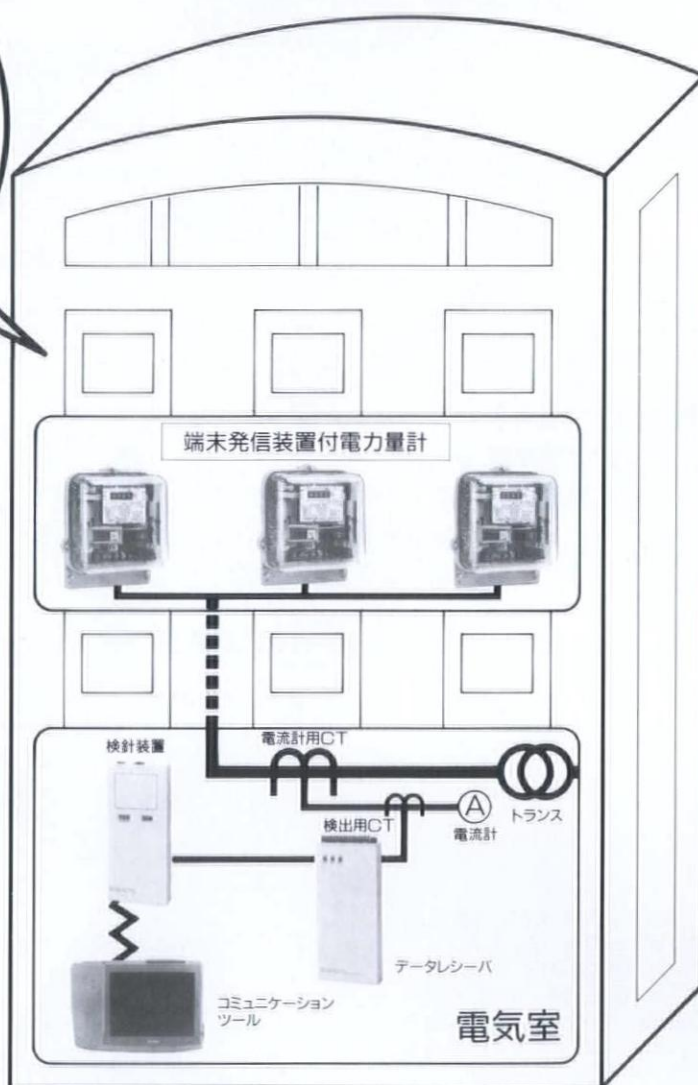
- 工事が簡単
- システムがシンプル
- 導入がローコスト
- 既設の建物(ビル、寮など)に手軽に導入できる
- 増設にも即対応可能

#### コンパクトだから……

- 設置場所を選ばない

#### 検針の大崎だから

- 電気のほか水道、ガスも検針



## 大崎電気工業株式会社

本社 〒141-8646 東京都品川区東五反田2-2-7 ☎03-3443-7171

システム・機器営業部第二課 ☎03-3443-7176 FAX03-3443-0265

大阪支店 ☎06-6373-2556

営業所 札幌 ☎011-251-6622 / 仙台 ☎022-223-3747 / 北関東 ☎048-653-5901 / 千葉 ☎043-221-5714

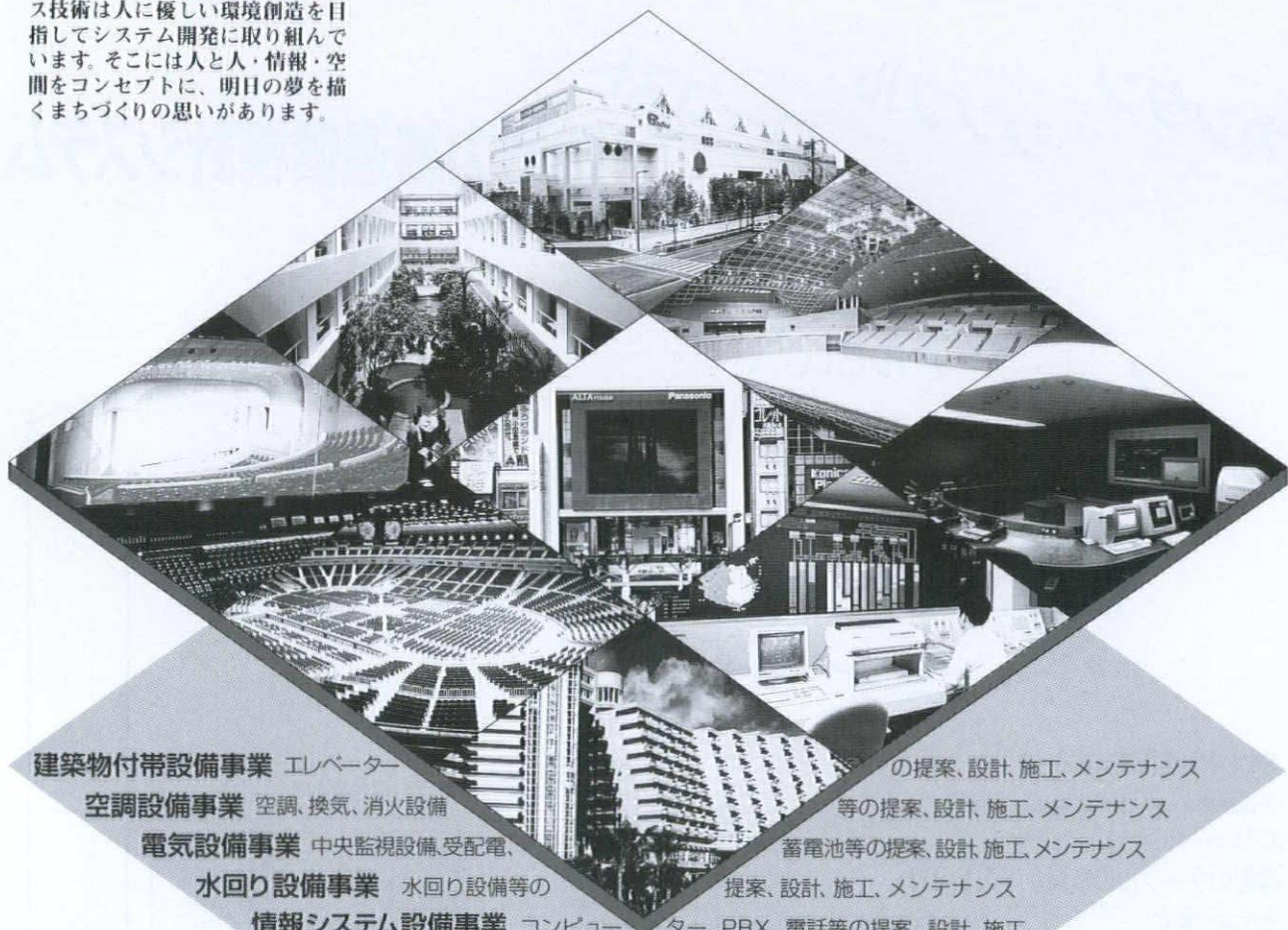
横浜 ☎045-664-5561 / 広島 ☎082-243-1611 / 沖縄 ☎098-832-7406



# National/Panasonic

## 私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



**建築物付帯設備事業** エレベーター

**空調設備事業** 空調、換気、消火設備

**電気設備事業** 中央監視設備、受配電、

**水回り設備事業** 水回り設備等の

**情報システム設備事業** コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

**映像・音響設備事業** 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

**まちづくり事業** 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

の提案、設計、施工、メンテナンス

等の提案、設計、施工、メンテナンス

蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

提案、設計、施工、メンテナンス

FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めていきます。



松下電器産業株式会社

建設システム営業本部 ☎03-5460-2931  
北海道支店 ☎011-207-7722  
東北支店 ☎022-711-3551  
新潟支店 ☎025-246-1031  
関東支店 ☎0286-37-2241  
神奈川支店 ☎045-651-5051  
建設システム営業本部中部支店 ☎052-951-6010  
長野支店 ☎0262-26-3990  
北陸支店 ☎0762-23-1121  
静岡支店 ☎054-247-5155  
建設システム営業本部関西支店 ☎06-6949-2111  
中国支店 ☎082-247-5272  
四国支店 ☎0878-26-1711  
九州支店 ☎092-431-1100  
沖縄支店 ☎098-869-2926

# AV & CC FLAPS

AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM



より快適な  
水環境を  
めざして。



文明の栄えた土地には、必ずといっていいほど豊かな水がありました。  
自然に恵みを与え、生命を育み、人々の暮らしをうるおしてくれる“水”。  
地球規模の環境汚染が問題となっている今、  
西原は、都市のより快適な水環境の創造を通して、  
社会に貢献してまいります。

水と人のあいだに  
**NISHIHARA**

**株式会社 西原衛生工業所**

東京都港区芝浦3-6-18 TEL.(03)3452-7441大代表 支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋 事業内容/給排水衛生設備、冷暖房設備、消火設備の設計、施工





# 意外なカジマは、 身近なカジマ。

えっ！こんなところにも、  
と驚くほど、鹿島の商品は  
私たちの暮らしの周辺で活躍しています。  
健康、快適、安心をキーワードに  
研究開発が進められ、人と自然に  
やさしい新しいタイプの  
商品やシステムが次々と誕生しています。





## 健康

### ゼオライト建材

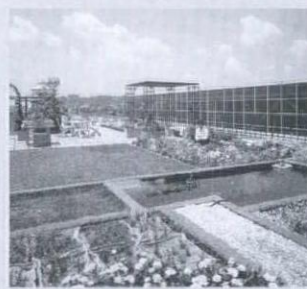
住まいは健康を大きく左右します。湿気や結露、カビなどの発生は住まいを損なうだけでなく、そこに暮らす人々の健康にも影響を与えます。鹿島は、空気中の水分を吸ったり吐いたり、脱臭機能もつ天然素材「ゼオライト」に注目。耐火性にも優れたこのゼオライト建材は、室内の湿度を一年中快適な状態に保ち、健康住宅を実現する夢の建材です。



## 快適

### エコヒーリングガーデン

ガーデニングを楽しむ人がたいへんな勢いで増えています。庭やベランダで自然を楽しむのはとても素晴らしいこと。鹿島の「ケイソイル」「草花名人」は、バルコニーや屋上庭園にぴったりの、軽くて保水性の高い人工土壌です。重さの条件が厳しい屋上やベランダ、バルコニーでも、緑豊かな自然を育てることができ、生活に潤いを与えます。



## 安心

### 戸建て住宅免震

住まいを考えると、地震への対策が不可欠です。壊れない住まいを目指すのであれば、構造を強くすれば解決します。しかし、家具の転倒などによる被害は防ぐことができません。鹿島の「戸建住宅免震システム」は、建物と基礎との間に設置するボールベアリングを活用。建物に伝わる地震エネルギーを1/5以下に減らし、安全で安心な住まいを実現します。



ボールベアリングが受皿の上をなめらかに動きます。



100年をつくる会社

**鹿島**

KAJIMA CORPORATION

本社：東京都港区元赤坂1-2-7 〒107-8388

ホームページ <http://www.kajima.co.jp/>



# 四季宴会

KARUIZAWA  
MEETING  
& PARTY



軽井沢  
ホテル 鹿島/森

ホテルオークラチェーン

ご予約お問い合わせ:  
ホテル鹿島/森予約係  
☎03(3478)6220  
現地☎0267(42)3535(代)  
FAX:0267(42)5335





ロビーラウンジ

## ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。

ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、  
あなたの新しい物語がはじまります。

### (客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。  
(シングル¥15,000～ ツイン¥25,000～) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した  
2,000㎡の“ガーデンプール”。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。  
●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル(3F)。ガーデンプールの一角  
に設けられたガーデンチャペル(5F屋外)。厳肅な神殿(八幡殿=やひろでん)(3F)。●最  
大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完  
備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプの  
ヘルスクラブ“ジ・イースト”。●都内初のホテル直結型多目的ホール“イースト21ホール”。

### (レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……………【プラスリー ハーモニー(2F)】  
●本格的広東料理……………【中国料理 桃園(2F)】  
●アフリカムードのメインバー……………【バー エレファント(2F)】  
●旬の素材が織りなす食の芸術……………【日本料理 さざんか(21F)】  
●四季折々の味覚……………【鉄板焼 木場(21F)】 ●心に残る夜景……………【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



チャペル



地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。  
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ  
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135-0016 東京都江東区東陽6-3-3  
TEL 03(5683)5683(代) FAX 03(5683)5775





# 大興物産の海外建材シリーズ

## No.6 木製品(ツーバイフォー, 集成材)



大興蓼科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。  
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

## 建設資機材の総合商社 鹿島グループ 大興物産株式会社

本 社 〒107-8307 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本 社 ☎(03)5474-6060 FAX(03)5474-6076  
東京支店 ☎(03)5474-6072 FAX(03)3423-1915  
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996  
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179  
大阪支店 ☎(06)6762-5661 FAX(06)6762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074  
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867  
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719  
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248  
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722  
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996  
シンガポール  
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714



## ビルの、工場の、街の、 すみずみに、つながろう。

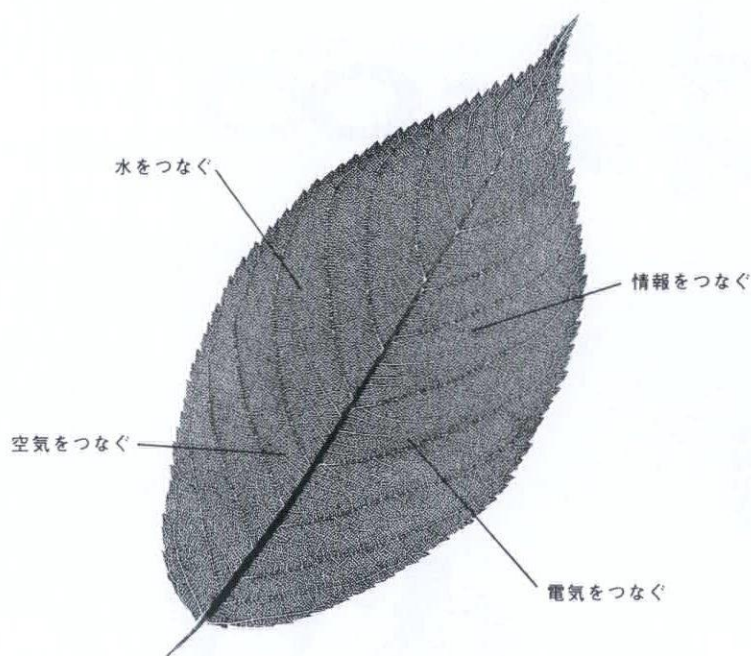
私たちの仕事は、ビルに、工場に、  
街に、生命を与える葉脈として、  
そのすみずみにつながっています。

もっと、人が快適になる環境へ。

総合設備業の

リーディング・カンパニーとして、  
先端の技術で、高度な未来を  
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



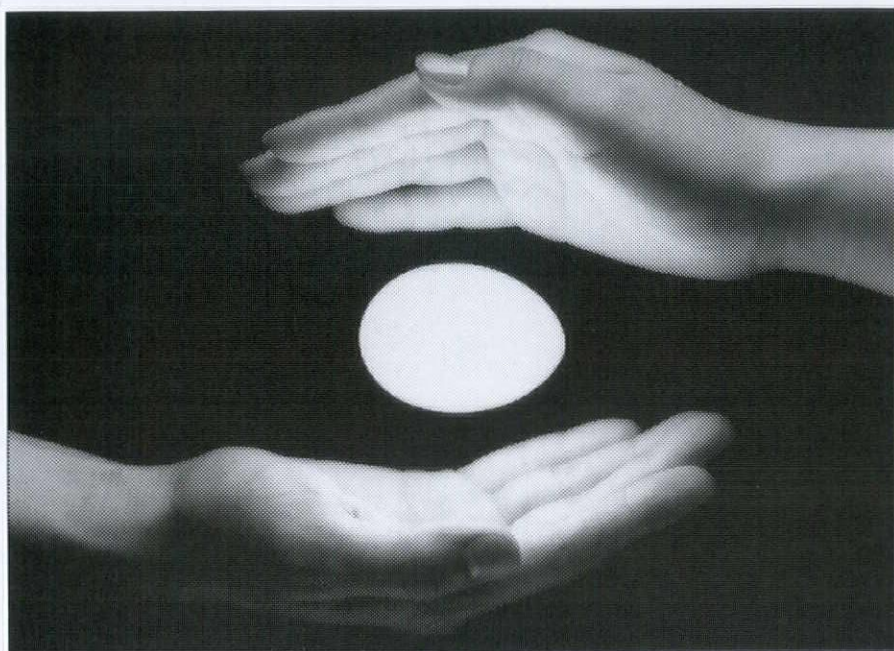
住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06(6537)3400  
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 Tel 03(3454)7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／  
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他



# 設備は手にとって選べません。 だから……



大切なのは、技術の信頼性。  
豊富な実績と、  
そのなかで培われた  
確かなノウハウです。  
私たち三建設備工業は、  
求められる環境を  
信頼の技術で創りだします。

望まれる環境を、信頼の技術で。

**三建設備工業株式会社**

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-35-8 TEL.03-3667-3431

夢×技=無限大

YUME 夢 TRONICS

安らぎと喜びがある。  
生み出すための第一歩は  
夢からもらった。  
形を築くための第一歩は  
技からもらった。  
ふたつの可能性が会う時  
私たちのフィールドは  
無限大です。

何時もあなたの街で、  
お会いしている  
クリハラ。  
私達の生活環境に必要な  
電気設備・エネルギー  
情報通信・環境の分野で  
企画、設計、施工、保守に  
わたる一貫したシステムで  
事業を展開しています。



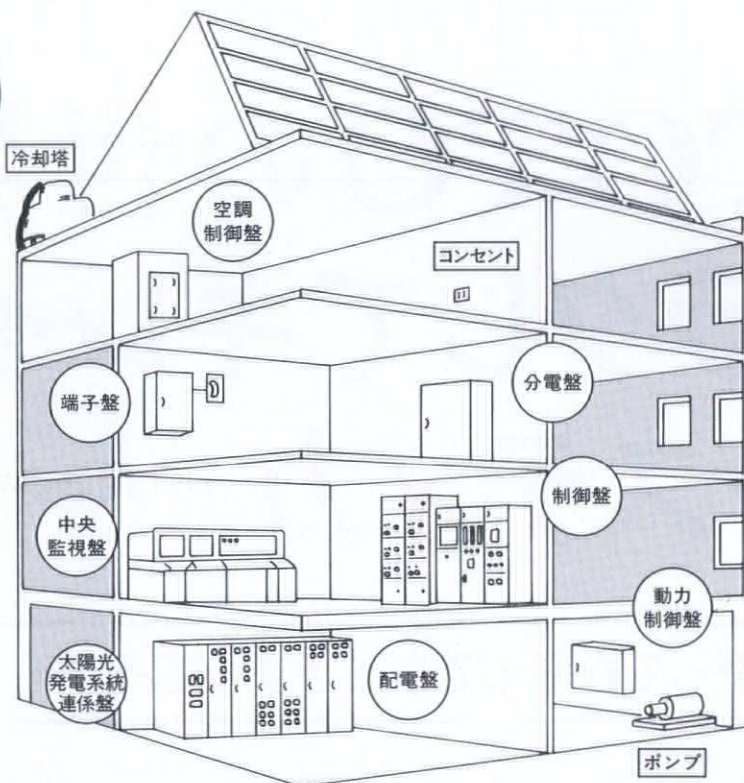
創業1919 あなたの街でお会いしています

**K 栗原工業株式会社**

本社／〒530-0017 大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル) TEL.06(6313)1101  
東京本店／〒105-0012 東京都港区芝大門1-4-8(浜松町清和ビル) TEL.03(3432)1901



# 見えない電気を交通整理 それは**盤**



## 川崎電気株式会社

- 東京本社／東京都港区芝浦3-7-4
- 本 社／山形県南陽市小岩沢225

# 信頼と確かな技術で 未来を築く



## 大栄電気株式会社

代表取締役社長 伊 藤 赳

本 社 東京都中央区銀座3-7-10 TEL 03(3562)0311(大代表) FAX 03(3562)0300  
支店営業所 大阪,名古屋,北海道,東北,北関東,東関東,神奈川,浜松,神戸,四国,中国,九州,沖縄

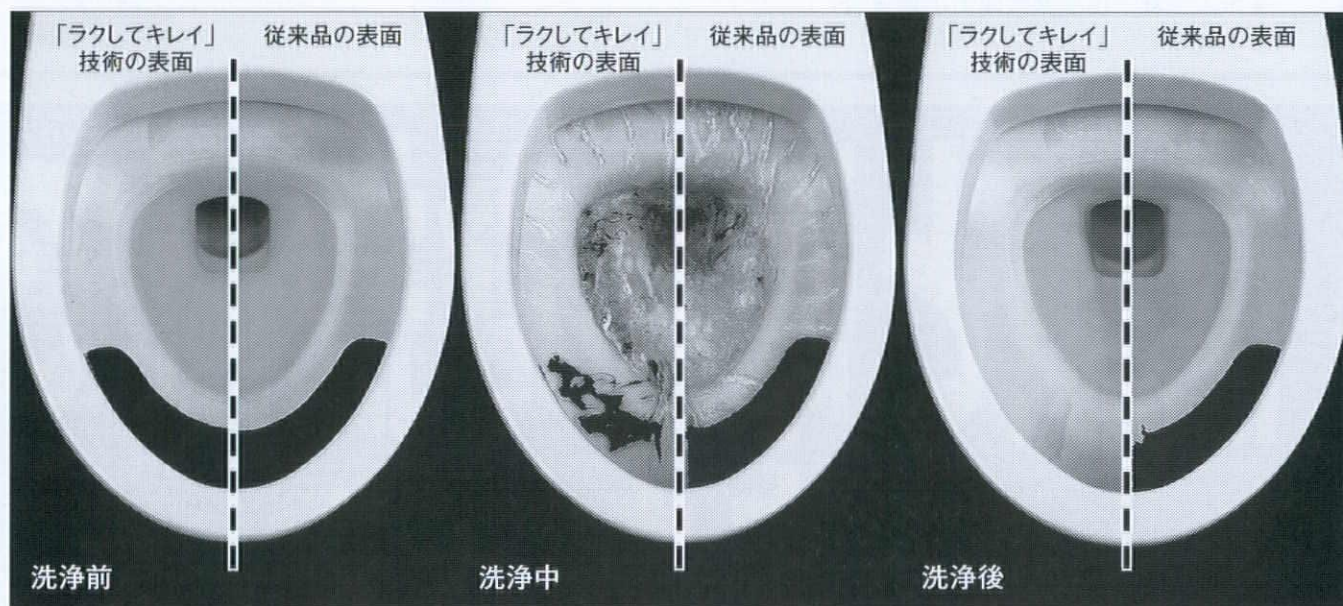




# TOTOの世界初。 「ラクしてキレイ」便器、 レスティカ

〈7月15日新発売〉

使っても使っても、「ラクしてキレイ」を半永久的に約束します。



汚れのもととなる脂肪酸を含ませた疑似汚物による洗浄実験

- ◎イオンパワーとナノテクノロジーという世界初の技術を開発。汚れを浮かし、汚れを流し、さらに汚れの付きにくい便器表面を作ることになりました。
- ◎その効果は半永久的に持続。汚物の付着や黒ズミなども抑え込みます。
- ◎当社従来品23%の節水。使用時の不快な水のはねかえりが減少。
- ◎(社)日本住宅設備システム協会の抗菌基準もクリア。
- ◎新設用の〈レスティカ〉に加え、取替工事の簡単なタイプも、ご用意しています。

商品の技術的なお問合せは技術相談室へ

ナビダイヤル FAX.0570-01-2111 TEL.0570-01-1010 受付時間 9:00~18:00(土・日・祝日を除く)

受信地:神奈川県茅ヶ崎市・福岡県北九州市

インターネットホームページ <http://www.toto.co.jp/>



レスティカ CS80B+SH91BA  
¥85,000(税別・ウォシュレット含まず)



## 9910

特集

## 東京リノベーション

経済的な影響もあり、倉庫や工場、民家を改装して再生転用する事例が増えている。これらは古くても家賃が安く、また広く自由なスペースを求めるアーティスト、クリエイターたち、あるいは先端的なショップのオーナーなどによるものである。本特集では、都市において、彼らの、場とアクティビティがリンクした事例を紹介し、リノベーションの手法やスペースの新しい可能性を探る。また、倉庫・工場などの転用を積極的に行い成功させている人々へのインタビューを掲載。倉庫・工場の空き物件情報も提供する。

## ●事例紹介

Deluxe（西麻布）、スタジオNOPE（田町）、コマンドN（秋葉原）、エグジット（飯田橋）、A-Net（新大橋）、Baden Baden（学芸大）、Time & Style（自由が丘）、他

## ●コラム

佐賀町エギジビットスペース、芝浦インクスティックはそれぞれ、古い事務所ビルや、倉庫などを再生転用して甦らせるという点において、先駆的な役割を果たしている。ここではその仕掛人たちにインタビューをし、そのスペースに至った経緯あるいは、動機などを伺う。

## ●東京の空き倉庫・工場情報

編集協力＝粕谷姫中 撮影＝村角創一

## トピックス：隅田川再生とリバーサイド・ウォッチング

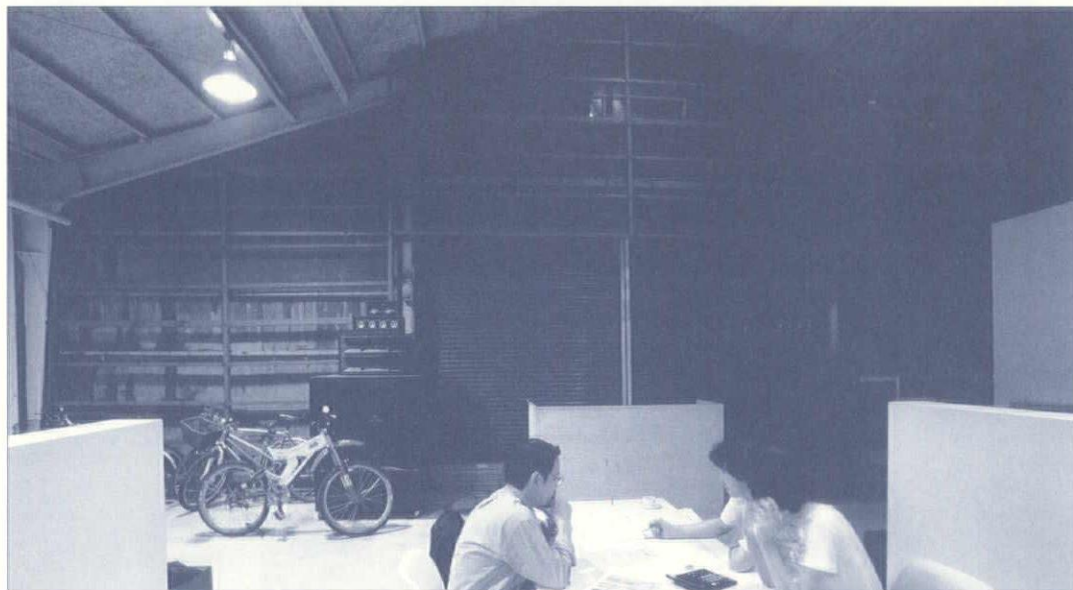
自然を呼び戻すこと、親水テラスの整備など再生の進む隅田川。隅田川の水辺空間を散策する。

文＝陣内秀信、藤澤紫、他 撮影＝加藤嘉六

## 連載：

エントロピーの森——都市のインフラストラクチャ10 写真＝ハイナー・シリング 文＝山形浩生  
カルチャー・カフェ——今月の演劇・音楽 文＝原研哉、服部のリ子

Deluxe はもと自動車修理工場をリノベート  
撮影＝村角創一





## 9907

特集

### 学校建築

個性を育む環境創出へ向けて

コミュニティセンターや生涯学習センターの機能をも求められるようになっていく今、学校建築が変わりつつある。

本特集では、学校設計の手引きとして、今後の学校建築に必要な事項を解説し、実例を現地レポートを交えて紹介する。

●21世紀の学校のための17章

●デザイン・マニュアル

●作品＝東京都立晴海総合高校／アルセッド建築研究所、宮城県岩出山町立岩出山中学校／山本理顕設計工場、福島県三春町立桜中学校／香山アトリエ十環境造形研究所、新宿区立落合中学校／船越徹十アルコム、岡山県吉備高原小学校／小泉雅生十小嶋一浩／C+A、茨城県つくば市立東小学校／現代計画研究所、他。

●文＝上野淳、倉斗綾子、力安拓

●座談会＝佐藤学十堀昭代十船越徹十小嶋一浩十上野淳

連載：

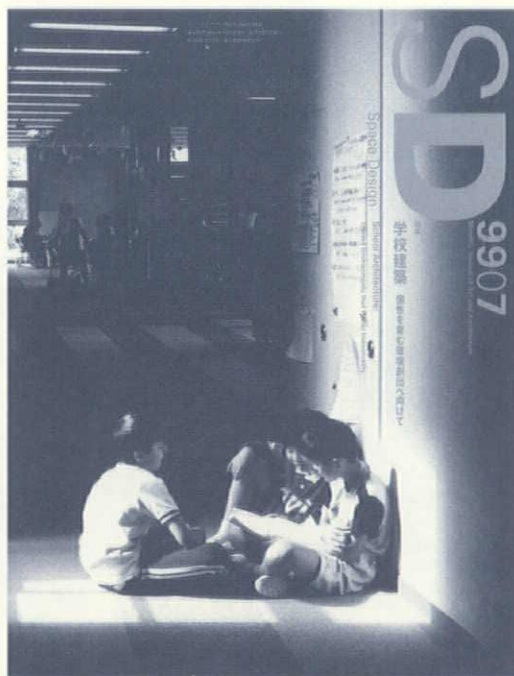
エントロピーの森——都市のインフラストラクチャー7

写真＝ハイナー・シリグ 文＝山形浩生

カルチャー・カフェ——今月の舞踊・演劇

文＝多木浩二、原研哉

特別定価＝2500円／本体2381円



## 9908

特集

### 階段

BEYOND FUNCTION

階段には、上下の階を繋ぐという機能を超えた何か詩的な雰囲気がある。そこには、明快な役割を担っているからこそ、逆に人々の心を惹きつけるたくさんの余白が存在しているのではないだろうか。本特集では、近年の国内の階段を「起伏」、「移ろい」、「軽み」、「天空」といった4つのキーワードで緩やかに分節しながら紹介する。

●作品＝新津市美術館／横山正十アルセッド建築研究所、岐阜県営住宅ハイタウン北方南ブロック妹島棟／妹島和世建築設計事務所十山清設計、木村邸／インテンシオナリーズ／大堀伸、F5／石田敏明建築設計事務所、White Echoes／米田明／アーキテクトン、清涼山霊源皇寺透静庵／山口隆建築研究所、梅ヶ丘の住宅／佐藤光彦建築設計事務所

●シネマの中の階段——ドラマの喚起装置 文＝渡辺武信

●階段をめぐるカメラ・アイ 文、写真＝下村純一

連載：

エントロピーの森——都市のインフラストラクチャー8

写真＝ハイナー・シリグ 文＝山形浩生

カルチャー・カフェ——今月の音楽・映画

文＝ピーター・バラカン、鶴沢隆

定価＝2000円／本体1905円





鹿島出版会

東京都港区赤坂6-5-13

電話：03-5561-2550

振替：00160-2-180883

Home Page Address：

http://www.kajima-publishing.co.jp/group/publish/index.htm

年間定期購読料

26,000円（特別定価号+消費税、送料込み）

# SD

Space Design

SDバックナンバー常備店

東京

八重洲ブックセンター 03-8231-8203

三省堂書店（神田）03-3233-3314

青泉ブックマート 03-3294-0011

紀伊国屋本店 03-3354-0131

大盛堂書店 03-3463-0511

大阪

旭屋書店本店 99-999-9999

柳々堂 06-443-0167

札幌/旭屋書店 011-241-3007

横浜/有隣堂本店 045-261-1231

京都/大龍堂書店 075-231-3036

大学生協内書店

東北工業大学 東京工業大学

法政大学工学部 早稲田大学理工学部

関東学院大学

## 9710 ガラス建築 3000円

光学的、構造的特性など、ガラスの性質を幅広く採り入れた作品を紹介し、ガラス建築の現在と今後の可能性を探る。ガラス建築23作品、他。座談会＝伊東豊雄×難波和彦×今川恵英、他

## 9711 隈研吾 2800円

ポストモダン以降の建築における言説を続けてる隈研吾。今年建築学会賞、ヴェネディクタス賞を受賞した近作を紹介する。射野公園、他。文＝飯島洋一、グレッグ・リン、対談＝横文彦×隈研吾

## 9712 SDレビュー1997 2000円

第16回SDレビュー誌上発表。建築研究室高安重一事務所＋佐久間達也＋橋爪宏直＋重富博之、川人洋志、藤本壮介、松澤稔、他。[光と色が彩る空間——チェコのガラスアーティストたち] 写真＝鈴木豊

## 9801 SDレビューの15年 2800円

これまでのSDレビューを一挙に振り返る。出版作、建築界での意義などを再確認し、今後の方向性を探る。文＝横文彦、原広司、飯島洋一、中筋修、他。座談会＝元倉眞琴＋鈴木了二＋栗生明＋小嶋一浩

## 9802 都市へ向かう透明性： 2200円

スイス・ドイツ諸国の建築。建築の生まれる文脈を捉えながらその魅力を探る。文＝貝島桃代、ハンス・フライ、他。往復書簡＝篠原一男×ヘルツォーク&ド・ムロン

## 9803 表層革命再考：チェコ・キュビズム建築 2000円

現存するプラハのキュビズム建築を掘り下ろし写真により紹介する。撮影＝鈴木豊。[香山壽夫のドローイングと空間] 文＝香山壽夫、八木幸二、鈴木博、青木淳

## 9804 次世代のマルチ・アーキテクトたち 2000円

30歳代の若手建築家たちの作品と創作活動を紹介し、時代性を浮かび上がらせる。インテンショナルリーズ、みかんぐみ、他。[デスクトップ・コミュニティ]

## 9805 空間演出の最前線 2000円

建築家とデザイナー、アーティストとのコラボレーションの具体例を紹介。藤江和子、中村綿平、新宮晋、他。[カーロとリベラの家] ファン・オゴルマンの建築とメキシカン・モダン

## 9806 風景創出の現在： 3000円

ランドスケープ・アーキテクトの挑戦  
風景創出の現在：ランドスケープ・アーキテクトの挑戦  
「公共的な価値」によって自然の風景と区別され、積極的な社会性が意図されている事例を紹介。佐々木葉二、プレイスメディア、三谷 徹、登坂 誠、他。

## 9807 シーラカンス 2600円

彼等の12年間の建築活動の軌跡を、作品紹介を中心に振り返る。作品＝吉備高原小学校、大阪市水上消防署、(仮称)外ヶ岡交流拠点施設、他。論文＝原広司、土居義岳、インタビュー＝山本理顕

## 9808 光のデザイン・ヴォキャブラリー： 2500円

LPAの仕事1990-1998  
LPAのデザイン言語を40に厳選して紹介する本書は、光が生み出す空間を全般的に考察する本格的な照明バイブルである。文＝磯崎新、而出 薫



## 9809 2300円

ディテールが創る風景：  
細部に宿る美と技巧  
建築作品のディテールを写真と図面で紹介する。宮崎浩/Plants Associates、渡辺明設計事務所、竹中工務店、谷口建築研究所、KAJIMA DESIGN、他。



## 9810 2000円

オフィス環境の近未来  
最新のオフィス環境を、事例を中心に紹介する。作品＝電通インタラクティブ・ソリューション・センター、他。文＝仲隆介、他。  
[京町屋再生の手法——時を超えて生きる空間を求めて]



## 9811 3000円

「白」と「透明」の詩：  
モダンデザインの秀作135  
白い陶磁器と透明ガラスで出来た日常生活の中の小モノたち135点を紹介する。カシミール・マレービッチ、ゲートルード・ヴェースガルト、柳宗理、他。



## 9812 2000円

SDレビュー1998  
第17回SDレビュー誌上発表  
小特集4題：[シャルロット・ベリアン] [「ハブニング」展] [アアルトの空間構成] [メタルシート・ストラクチャーによる遠藤秀平の近作]



## 9901 2700円

環境共生の現在  
プロジェクトを紹介しながら近年の動向を俯瞰し、次世代のヴィジョンを示唆する。  
エムシャーパーク、東京ガス〈アースポート〉、世田谷区環境共生住宅、2005年国際博覧会構想案、他。



## 9902 2000円

タッチ・モデル：  
建築・都市・ランドスケープ  
オランダの都市・社会のシステムを5つのキーワードによって探る。OMA、MVRDV、West8、クーン・ファン・フェルゼン、メカノ、ケース・クリスティアーンズ、他。



## 9903 2000円

木の空間  
木素材による快適建築  
次世代スタンダードを示唆する木の使われ方を紹介する。趙海光、インテンショナルリーズ、河西立雄、葛西潔、みかんぐみ、H DESIGN、他。



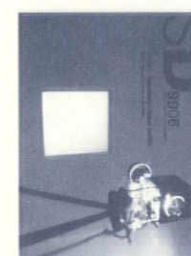
## 9904 2000円

ガウディの愛弟子ジュジョールの夢  
ジュジョールの遺した作品を、写真とオリジナル・ドローイングで紹介する。撮影＝鈴木久雄、文＝丹下敏明、他。[ドナルド・ジャッド：空間と認識のコンシステンシー]



## 9905 2500円

挑発するマテリアリティ：  
素材の進化とデザインの可能性  
国内外における素材と技術のデザイン事例を取り上げながら、そのデザインに隠された素材の応用の「手法」、「技術」を分析する。  
素材史年表、素材地図1999、他。



## 9906 2000円

小川晋一  
Transbody / Super traffic  
小川晋一の13年間の仕事を、実作、計画案、展覧会への出品作品を通して紹介する。作品＝キュビストの家、ミニマリストの家、他。文＝鶴沢隆、岡河貢、小川晋一、他。



## 9907 2500円

学校建築：  
個性を育む環境創出へ向けて  
学校建築設計の手引きとして、今後の学校建築に求められる事項を解説し、事例を現地リポートを交え紹介する。文＝上野淳、他。座談会＝堀昭代十・佐藤学・船越徹十・小嶋一浩十・上野淳。



## 9908 2000円

階段  
Beyond Function  
近年の国内の階段、21作品を、「起伏」、「移ろい」、「軽み」、「天空」といった4つのキーワードで緩やかに分節しながら、階段をめぐる詩集のような形で紹介する。文＝渡辺武信、下村純一。





## SD 9805 The Cutting Edge in Space Design:

Introduces specific examples of collaboration between architects and designer artists: Kazuko Fujie, Kinpei Nakamura, Susumu Shingu, etc.

**House for Frida Kahlo and Diego Rivera:**

**Juan O'Gorman's Architecture and Mexican Modern**  
¥2,000



## SD 9806 Landscape Creation Today:

**The Challenges for Landscape Architects** Introduces landscaping set apart from the natural environment and purposefully designed to serve society. Architects introduced are Yoji Sasaki, PLACEMEDIA, Hiroki Hasegawa, Toru Mitani, Makoto Noborisaka, N. Finley+M. chiba, Ken Smith, Kyathryn Gustafson, Douglas Reed, etc. ¥3,000



## SD 9807 Coelacanth Architects:

Traces their activities over twelve years, mainly through introduction of their works. Kibikougen Elementary School, Suijo Fire Station of Osaka City, Sotogaoka Exchange Forum, etc. Text: Hiroshi Hara, Yoshitake Doi. Interview: Riken Yamamoto

¥2,600



## SD 9808 Design Vocabularies of Light:

### LPA Works 1990-1998

Introducing a selected list of 40 concepts from LPA's design vocabulary, this book is a bible of illumination lore for the overall study of space created by light. Text: Arata Isozaki, Kaoru Mende

¥2,500



## SD 9809 The Landscape of Detail:

### Its Art and Techniques

Introduces the details of architectural works with photos and drawings. Hiroshi Miyazaki, Akira Watanabe, Takenaka Corporation, Yoshio Taniguchi, Kajima Design, Shinichi Ogawa, Waro kishi, Fumihiko Maki, Yoshihiko Iida. ¥2,300



## SD 9810 Office Environments for the Near Future:

Introduces recent developments in office environment design through specific examples. Works: Dentsu Interactive Solution Center, etc. Text: Ryusuke Naka, etc.

**Machiya Restored: The Future of Central Kyoto and The Development of Machiya Restoration**

¥2,000



## SD 9811 135 Outstanding Works of Modern Design:

Introduces 135 coffee and tea services, glassware, and other utensils made of white ceramic or clear glass.

Kasimir Malevich, Gertrud Vasegaard, Trude Ptri, Wilhelm Wagenfeld, Josef Hoffman, Peter Schlumbohm, etc.

Text: Sori Yanagi, Angelo Mangiarotti, Shukuro Habara, etc. ¥3,000



## SD 9812 SD Review 1998

The 17th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings. **Four Small Features:** Charlotte Perriand, Designer's Catalogue of "Happening", Aalto's Space Composition, Shuhei Endo's Recent Works in Metal Sheet Structure

¥2,000



## SD 9901 Sustainable and Ecological Design Today

Specific Projects that have achieved symbiosis with the environment provide a bird-eye view of recent trends and display the vision of the upcoming generation of architects.

Emscher Park, Tokyo Gas "Earth Port", Setagaya-ku Fukazawa Symbiotic Housing, etc. ¥2,700



## SD 9902 The Dutch Model:

### Architecture, Urban Design and Landscape

Explorations of Dutch cities and social systems in terms of five key words.

OMA, MVRDV, West8, Koen van Velsen, mecanoo, Kees Christaense, Wiel Arets, Benthem Crouwel, etc.

¥2,000



## SD 9903 Spaces of Wood:

### The Elements of Comfortable Architecture

Introduces uses of wood construction materials that suggest next-generation standards.

Cho Umihiko, Intentionallies, Tatsuo Kawanishi, Kiyoshi Kasai, MIKAN, H. DESIGN ASSOCIATES, etc.

¥2,000



## SD 9904 Josep Maria Jujol i Gibert's Vision:

Introduces the legacy of Jujol's work through photographs and original drawings.

**Donald Judd: Consistency of Space and Cognition**

¥2,000



## SD 9905 Alluring Materiality:

### Evolution of Materials and Their Potential for Design

Takes up some examples of material and technical design from Japan and overseas and analyzes the applied methods and techniques hidden in the design. Also includes "A Chronology of Materials" and "The Map of Materials 1999." ¥2,500



## SD 9906 Sinichi Ogawa: Transbody / Super traffic:

Introduces 13 years of Sinichi Ogawa's achievements through Cubist House and Minimalist House and other completed works, plans, and works submitted to exhibitions. Text: Takashi Uzawa, Mitsugu Okagawa, Sinichi Ogawa, and others.

¥2,000



## SD 9907 School Architecture:

### Toward Environments That Foster Individuality

Offered as a guide for the architectural design of schools, this issue comments on topics to be addressed in school architecture from now on, combined with on-site reports of specific examples. Text: Jun Ueno et al.

¥2,500



## SD 9908 Stairs: Beyond Function

Introduces 21 recent Japanese stair designs in the manner of a poetic anthology, dividing the works loosely in four categories: "undulation", "transition", "lightness", and "open above". Text by Takenobu Watanabe and Junichi Shimomura.

¥2,000





**アルヴァ・アアルト**

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集、A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武蔵 康、アアルトの年表1898-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円

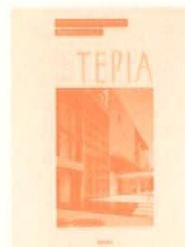


**高松 伸**

**高松 伸**

68年度建築学会賞受賞作のキンブラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、紙ぎ澄まされた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。編纂：I、III、他。

3800円



**横事務所のディテール/TEPIA**

機械産業情報会館(TEPIA)というハイテクの館室にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。横文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



**菊竹清訓**

**菊竹清訓**

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭展、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



**Kunihiko Hayakawa**

**早川邦彦**

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円



**Kenji Takamatsu**

**磯崎新 1985-1991 part 1**

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流に分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジヨールディパレス、お茶の水スタジオ、他。

4800円



**白井 辰一**

**白井 辰一**

孤高の建築家・白井辰一の独王の作品集。懐賢館、ノアビル、聖アキラ館、昨宵軒、尻別山荘、虚白庵、他。論文：磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井昌磨。座談：大江宏十郎・藤正一郎・宮内真久。作品文献年表1935-1975年。

3605円



**ドイツ表現主義の建築**

**ドイツ表現主義の建築**

1920年代のドイツを席捲した表現主義の集。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



**Kenji Takamatsu**

**磯崎新 1985-1991 part 2**

part 1同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティーム・ディズニー・ビルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、バラディウム、[蝶々夫人] 舞台美術、他。

4500円



**象設計集団**

**象設計集団**

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協市民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、造修館、他。論文：荒俣宏、宇佐美圭司、他。

4000円



**Wooden Architecture Today**

**続・木造建築の現在**

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲英 X 安村基。

3708円



**Carl Mosch**

**カルロ・スカルパ 図面集**

ブリオン家墓地を始めとする主要作品のドローイング約150点を収める。ブリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

3500円



**横 文彦**

**横 文彦 ②**

横文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



**Bruno Taut**

**ブルーノ・タウト**

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品＝熱海の家、ポスボラス海峽に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



**Tadashi Ando**

**安藤忠雄 ①アンビルト・プロジェクト**

70年代からの見逃せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトII、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円



**伊東豊雄**

**伊東豊雄**

風のように、光のように変化する建築。独自の感性で育かれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム、他。

3914円



**ボザール その栄光と歴史**

**ボザール：その栄光と歴史**

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高橋秀爾、ボザールーその歴史と思想：三宅理一編、ボザールの成立とネオ・グレコ形成、折衷主義の世界、近代の憂鬱、戦後のボザール、パリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



**Urban Design Yokohama**

**都市デザイン | 横浜**

横浜市の20年におたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を語る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、横 文彦 X 義原敬 X 小澤恵一、他。

5000円



**Space Design** published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:  
Space Design: 81-3-5561-2561

Or mail the card to:

Subscriptions Department  
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.  
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,  
Tokyo 107-8345, Japan  
tel: 81-3-5561-2561

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

#### Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

- ☐ Please enter my SUBSCRIPTION to  
Space Design,  
starting in

|           | sea mail | air mail |
|-----------|----------|----------|
| 12 issues | ¥30,000  | ¥55,000  |
| 24 issues | ¥50,000  | ¥80,000  |

Price includes postage and bank charges.

- ☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

#### Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life: 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

#### Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

#### Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work: Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

#### Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980: Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

#### Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

#### Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

#### Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

#### Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

#### Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

#### Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

#### Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

#### Kunihiko Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

#### Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

#### The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

#### Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoen Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

#### Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

#### Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix: List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections: Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

#### Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

#### Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

#### Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944



## SD

Space Design

編集長：相川幸二  
副編集長：高木伸哉  
編集スタッフ：  
飯塚りえ 松口 健  
川崎 勝 田中晶子  
制作協力：久世 健  
株式会社シンクス  
発行人：平田輪郎  
編集人：長谷川俊子  
発行所：鹿島出版会  
107-8345  
東京都港区赤坂6丁目5番13号

電話：  
03-5561-2551 営業  
03-5561-2555 編集  
FAX：  
03-5561-2561 営業  
03-5561-2565 編集  
TELEX：  
02422467 KAJIMA J  
振替00160-2-180883番  
URL：  
http://www.kajima-publishing.co.jp

## 005

特集1

## ベルリン・トポグラフィ

006

ベルリン誕生から現在まで  
杉本俊多

013

グローバル都市ベルリンのポジション  
杉本俊多

018

オラニエンブルグ通り

024

クロイツベルグ

028

バリ広場・フリードリヒ通り

032

ポツダム広場

036

アレキサンダー広場

040

シュプレーボーゲン

044

ツォー駅・クーダム

048

ベルリン復活のシナリオ  
山下昌彦

053

ベルリンはどこへ行くのか  
飯島洋一

054

ベルリンのアクチュアリティ：断片的な視線  
インタビュアー：花田和幸

054

分断される場所と記憶  
ダニエル・リベスキンド

056

様式から社会性へ  
クリスティン・ファイライス

057

ベルリン的ラショナルイズムの展開へ  
ヨゼフ・クライフス

058

切断のマニフェスト  
リチャード・ノイマイヤー

059

虚のトボス  
花田和幸

## 061

特集2

個性の彩る集住群  
長野市今井ニュータウンの試み

061

写真構成  
写真＝堀内広治／新写真工房

077

A工区：  
新居千秋都市建築設計十後澤建築設計事務所十  
竹村建築設計事務所十第一設計  
長野サンパウロ計画／新居千秋

080

B工区：  
長谷川逸子・建築計画工房十エル設計事務所十  
誠設計事務所十基設計  
住居群をネットワークでつなぐ／長谷川逸子

083

C工区：  
内藤廣建築設計事務所十宮本忠長建築設計事務所十  
団設計十アーキプラン  
白い立体格子／内藤 廣

086

D工区：  
富永謙十フォルムシステム設計研究所十  
山口設計事務所十岡澤仁建築設計事務所十  
関建築十まち研究室  
小さな都市の尺度の構想／富永 謙

089

E工区：  
近代建築研究所十池田設計事務所十  
大沢昇建築事務所十橋建築設計事務所  
「生活」から「構成形式」へ／松永安光

092

F工区：  
スタジオ建築計画十エーシーエ設計十金井設計十  
植田設計  
早回しされた時間の中での試み／元倉眞琴

095

G工区：  
遠藤剛生建築設計事務所十アルス設計十  
新長野設計十北沢建築研究所  
組織化された混沌／遠藤剛生

098

今井ニュータウンの風景  
渡辺定夫

099

私の選んだショット  
植田 実

101

連載 エントロピーの森：都市のインフラストラクチャー9  
写真＝ハイナ・シリグ 文＝山形浩生

106

SDレビュー1999：展覧会開催のお知らせ

108

連載 カルチャー・カフェ：今月の舞踊  
「ピナ・バウシュ&グッパタール舞踊団」 尼ヶ崎樹

110

連載 カルチャー・カフェ：今月の演劇  
「ネネム——おかしなおかしなおぼけのはなし」 清水裕之

112

展覧会レポート：「アンジェロ・マンジャロロッチ彫刻展」  
堀川納江

114

展覧会レポート：「ハーバードGSDレビュー」  
榎本弘之

117

ニュース：シンポジウム「Design for the World '99 東京」  
山内陸平

118

書評

119

新刊紹介

120

お知らせ

印刷・製本：凸版印刷株式会社  
174-0056 東京都板橋区志村1丁目11番1号  
電話：03-3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・大阪屋・大洋社・栗田出版販売・  
誠光堂・鈴木書店・西村書店・中央社

定価：2,000円 [本体1,905円]  
年間直接購読料：26,000円  
特別定価号＋送料込み

表紙：ドイツ連邦議事堂屋上から東を望んだ風景  
表紙写真：アンナ・フェラー  
デザイン：山口デザイン事務所／山口信博＋高梨裕子



## 005

Special Feature 1:

## Berlin Topography

006

From Birth in Berlin to Today  
Toshimasa Sugimoto

013

Berlin's Position as a Global City  
Toshimasa Sugimoto

018

Oranienburger Strasse

024

Kreuzberg

028

Pariser Platz + Friedrichstrasse

032

Potsdamer Platz

036

Alexander Platz

040

Spreebogen

044

Zoo, Kudamm

048

A Scenario for the Rebirth of Berlin  
Masahiko Yamashita

053

Where Is Berlin Going?  
Yuuichi Iijima

054

The Actuality of Berlin: Fragmentary Views  
Interviewer: Kazuyuki Hanada

054

Divided Places, Several Memories  
Daniel Libeskind

056

From Form to Social Character  
Kristin Feireiss

057

Toward the Flourishing of Berlin's Rationalism  
Josef P. Kleihues

058

A Manifesto Against Division  
Fritz Neumeyer

059

Topos of Emptiness  
Kazuyuki Hanada

## 061

Special Feature 2:

Distinctive  
Housing Complexes:The Imai New Town Experiment  
in Nagano

061

Portraits  
Photo=Koji Horiuchi/N.P.A

077

Construction Area A:  
Chiaki Arai Architect and Associates +  
Yutaka Ushirozawa Associated Architects &  
Engineers +  
Takemura Kenchiku Sekkei Jimusyo +  
Dai-ichi Sekkei  
Nagano Sao Paulo Project/Chiaki Arai

080

Construction Area B:  
Itsuko Hasegawa Atelier +  
L Architect & Associates + Sei Sekkei Jimusyo +  
Motoi Sekkei  
Networking Housing Complexes/Itsuko Hasegawa

083

Construction Area C:  
Hiroshi Naito/Naito Architect & Associates +  
Tadanaga Miyamoto Architect & Associates +  
Dan Sekkei + Archi Plan  
White Three-Dimensional Latticework/Hiroshi Naito

086

Construction Area D:  
Yuzuru Tominaga+Form System Institute +  
Masuo Yamaguchi Architect & Associates +  
Okazawa Jin Kenchiku Sekkei Jimusyo +  
Seki Kenchiku to Machi Kenkyushitsu  
Concept on a Small City Scale/Yuzuru Tominaga

089

Construction Area E:  
Modern Architecture Institute +  
Ikeda Architects-Planners Engineers +  
Noboru Ohsawa Kenchiku Jimusyo +  
Tachibana Architects & Engineers  
From 'Living' to 'Compositional Form'/  
Yasumitsu Matsunaga

092

Construction Area F:  
KENCHIKU design studio + ACA +  
Kanai Architect & Engineers +  
Ueta Kenchiku Sekkei Jimusyo  
Experiment in Forwarded Time/Makoto Motokura

095

Construction Area G:  
Takao Endo Architect Office + ARS Sekkei +  
Shinnagano Sekkei +  
Kitazawa Architects & Institute  
Organized Chaos/Takao Endo

098

Landscape of Imai New Town/Sadao Watanabe

099

Favorite Snapshots/Makoto Ueda

101

The Entropic Forest: Urban Infrastructure 9  
Photo: Heiner Schilling Text: Hiroo Yamagata

106

SD Review 1999: Upcoming Exhibitions

108

Culture Cafe: This Month: Dance,  
'Pina Bausch & Tanztheater Wuppertal' Akira Amagasaki

110

Culture Cafe: This Month: Play,  
'Nenemu: Funny, Funny Ghost Tales' Hiroyuki Shimizu

112

Exhibition Report: Angelo Mangiarotti's Sculpture  
Kinuo Horikawa

114

Exhibition Report: Works of Young Architects from the Harvard  
University Graduate School of Design Hiroyuki Enomoto

117

News: Symposium, 'Design for the World '99 Tokyo'  
Rikuhei Yamauchi

118

Book Review

119

Book Information

120

Announcement

Published by  
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.6-5-13 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-8345, Japan  
TEL: 03-5561-2551 [Management], 03-5561-2555 [Editing]  
FAX: 03-5561-2561 [Management], 03-5561-2565 [Editing]  
TELEX: 02422467 KAJIMA J  
URL: <http://www.kajima-publishing.co.jp>

Printed in Japan

This Copy: ¥2,000  
¥30,000 a year  
¥50,000 two years

Order Form: Page 128

Cover: Looking east from Reichstag's roof  
Photo: Anna Ferrer  
Design: Nobuhiro Yamaguchi / Yamaguchi Design Office



始めていたら、と思えば彼らの無謀さが理解できよう。それほどまでに彼らは「壁」の向こう側に一度出てみたかったのであり、向こう側の連中と接してみたかったのである。

ちなみに、1970年代の中頃、私は西ベルリンに住んで、建築史の研究のために一日ビザを取りながら東西ベルリンを行き来していたが、そんな私を容易にはビザを発給してもらえないドイツ人が羨んでいたことを思い出す。若者が「壁」それ自体にいらだっていたこと、「壁」を消し去ったのは本当は新しい世代の若者だったことをそういうところに理解してもらいたい。

都市は人間の集団がつくったエネルギー空間組織である。「壁」はそれを真ん中で堰き止める障害物となった。堰を切られた水が混じり合うように、改めて都市は熱い有機体に戻る。そればかりでなく、私はベルリンが改めて進化を継続し始めると直観した。「壁」という傷を縫合するだけでは終わらないだろうと思った。そして、「壁」が20世紀の象徴であったとしたら、20世紀の意味を最もよく知っているがゆえに、まず21世紀の都市像を予感するのはベルリンであろうと推測した。

現代の進化論はダーウィンの進化論などの次元ではなく、遺伝子工学の次元にまで進行している。都市の進化ということは、都市が遺伝情報を次第に獲得し、増やしてきた軌跡でもある。従来、都市の歴史は時代毎にテーマを取り替えながら変遷してきたと考えられてきたわけだが、ここで言う進化論では、都市は各時代の価値観を反映させて、新しい器官を次々に獲得してきた多細胞生物であると言える。それは各時代の多種の遺伝情報を内包する複合体としてのDNAを所持しており、古い遺伝子はOFFにしておいて、必要なときだけONにするシステムを持っていると仮定される。

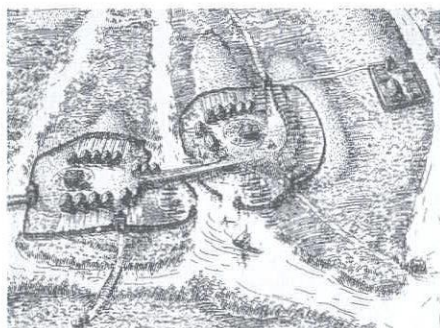
そのような新しい都市観でベルリンの歴史を眺めてみると以下のようなになる。

### 中世都市の誕生

ベルリンは、穏やかに平地を流れ、エルベ川を経て北海に注ぐ、シュプレー川という川のほとりに成立した。歴史上、はっきりと都市の存在が確認されるのは1237年という年である。ヨーロッパの大都市の中にあってはかなり新しい都市である。というのも、ロンドン、パリ、ウィーンはそもそも古代ローマ時代に植民都市として、碁盤の目の計画都市として誕生したという歴史を持つ。もちろん、ローマは別格であり、紀元前後にはヨーロッパの首都となっていた。つまりそれらはヨーロッパ規模の都市ネットワーク・システムを形成する多くの拠点のひとつとして位置づけられ、都市群の中から生き残った都市だった。その生命力は中世においても旺盛だった。

ベルリンは、素朴な田園風景の中で、農業と漁業を背景に小さな市場集落として誕生した。街道は川を横切るところで流れが止められ、渡し場に市場を成立させる。ベルリンはそんな自然発生的な都市だった。当初、そこにはシュプレー川の中州に生まれた魚市場と、川を挟んだ農業市場の双子の市場が生まれた。その頃には前者をケルンと呼び、後者をベルリンと呼んだ。文字通り「フィッシュマルクト（魚市場）」と言うケルンの広場は魚の輪郭のようにやや細長く膨らんだ広場であり、漁村特有の櫛状の路地群を持っていた。他方、「モルケンマルクト（乳清市場）」と呼ばれたベルリンの市場は三叉路に位置する三角形の広場だった。この両広場はシュプレー川上の堰に設けられた橋と粉ひき水車小屋でつながっていた。

実はそもそも当初からベルリンは双子都市として誕生していた。東西ベルリンは無理矢理切り分けられたものではあったが、二つの原理を備えた双子都市だったとすれば、ベルリンの歴史は意外に一貫しているのかも知れない。考えてみれば人間の脳もどういふわけか右脳と左脳という双子であり、それが喧嘩するのでなく、直観と論理をそれぞれ分担しながら、相互に連携しあっている。その間は脳幹という橋でつながっていて、



1200年頃のベルリン。ケルン両集落の推定図。左：ケルン、右：ベルリン



## Special Feature BERLIN TOPOGRAPHY

ちょうど橋でつながる双子都市ベルリンに似ている。

中世の時代に、ノイマルクト（新市場）を加えて、ベルリンはそれぞれに教会堂を持つ3つの広場を有することとなる。3つの教会堂のうち、フィッシュマルクトのベトリ教会堂は消えたが、モルケンマルクトのニコライ教会堂、ノイマルクトのマリア教会堂は現存する。

### 近世の王都

中世の都市のままであれば、ベルリンはヨーロッパ大陸の五万とある小都市のひとつに過ぎなかっただろう。そこにブランデンブルク辺境伯となったホーエンツォレルン家が居を構えることとなる。神聖ローマ帝国の皇帝選挙権を有する選帝侯の地位に立った同家のフリードリヒ二世はケルンの北、つまりシュプレ川の中州の北に残っていた土地に立派な宮殿と庭園を築きはじめる。

自由都市の市民にとってはこれは歓迎どころか、いい迷惑であり、両者の間に紛争が持ち上がったという。しかし、それは一種の臓器移植のようなものと言え、拒絶反応が終わった後には宮廷がもたらす文化や経済力が都市ベルリンの格をいやがうえにも引き上げる。そこにより進化した有機体の形が生まれたことになる。つまりひとつの生命体都市としてのベルリンは、宮廷文化の遺伝子を獲得したわけである。

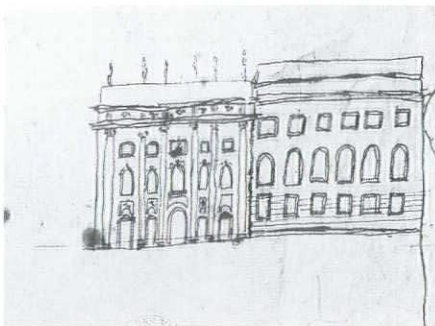
宮殿のルネサンス風への改造とともに、ベルリンはヨーロッパの一辺境であるとは言え、一国の首都として、華やかな一面を加える。その後、やがて18世紀始めにプロイセン王国が成立し、宮殿は王宮となり、増築、改造を繰り返す。そしてそれは第二次大戦で大きく破壊され、社会主義政府の手で爆破、撤去されるまで存続する。ベルリン統一後、この宮殿を復元しようとする動きが起こって、仮設の足場に外観を描いた復元パフォーマンスが試みられたが、それはおらが町の城を復元したがる日本人にも理解できることだろう。もちろん王政を復活させ

ようなどと考えるのは戯言であるが、宮殿というものが都市において持った文化的役割は確かに大きかったと思われる。

メムハールトが1652年に描いたとされるベルリン地図は、ルネサンス宮殿とルストガルテンと称された付属庭園の有り様を教えてくれる。それは田園地帯に細い濠を巡らせて切り取ったかのような双子都市と宮廷敷地の有り様を示し、モニュメンタルな建築物である三教会堂と宮殿を立体的に描いている。しかし、その姿はこの後、すぐさま変貌を始め、強固な星形稜堡が市街地全体を取り囲むこととなる。都市はまるで棘を持った毬栗のように防衛的となり、田園地帯との間に石造の城塞、環濠、そして敵を遠ざけるための幅広い空き地が誕生する。その城塞技術は幕末の函館に築かれた「五稜郭」にも見ることができる。

実は東西分割の「壁」はこういった市壁に性格が似ており、それは必ずしも20世紀特有のものとは言えない。20世紀の「壁」は薄いコンクリートの壁であり、むしろ近世よりも中世の市壁に近いかもしれない。かつての市壁は田園の中に都市を孤立させたわけだが、現代の「壁」は逆に田園が都市を囲い、閉じこめる形となったという点も異なるが。

17世紀後半に築かれる壮大な星形稜堡は実はレオナルドやミケランジェロもデザインしたような幾何学芸術作品という性格も有していた。そして同じルネサンス的な幾何学文化はベルリンの西部、フリードリヒ・シュタット地区の碁盤目の街路網を生み、またその端部の都市門に築かれた正方形、八角形、円形の三つの幾何学広場をも生み落とした。そのそれぞれが今も残っており、それぞれ、ブランデンブルク門の建つ正方形のバリ広場、今ちょうど話題のポツダム広場が隣接する八角形のライプツィヒ広場、そして円形集合住宅の建つメーリング広場である。かつてベルリンの都市門を西に出て、郊外へ延び、狩猟遊びの場所だったティーアガルテンの森に至る道としてつくられた並木道「ウンター・デン・リンデン」は、この地域の市街化



大王によるハイニリヒ王子宮殿ファサードのスケッチ  
SD9909



フンボルト大学



とともにようやく目抜き通りの性格を与えられる。

現代に息づく都市空間の幾何学精神は、その一端がルネサンスの理想都市構想に始まるものであり、いわばルネサンス時代に獲得された遺伝子と言うべきものであることを指摘しておきたい。

### 第一期近代としての19世紀都市

18世紀のフランスで市民階級から始まり、フランス革命を引き起こすに至ったとされる啓蒙主義は、プロイセンでは国王自ら、つまりフリードリヒ大王自身が先頭を切って遂行した。彼はベルリン都心の改造を志し、王宮の西側に「フリードリヒのフォルム」と呼ばれる、古代ローマの広場を模した壮麗な広場を構想する。そこにはオペラ座、図書館、そして後にフンボルト大学となるハインリヒ王宮殿、カトリックのヘトヴィヒ大聖堂が建ち並んだ。つまりベルリンのみならず、プロイセン王国の知的センターが形づくられたわけである。その際に、大王は友人の貴族である建築家クノーベルスドルフに設計させていたが、自らネオ・パラディアンズム風のファサードや広場平面形のスケッチさえ残している。もっとも、大王は都市の喧噪を嫌ったと言われ、西方のポツダム宮殿で過ごすのを好んだ。

絶対主義王制の時代は、突出した一人の人物いて、その下に有能で強固な官僚組織ができていた。その後、この官僚システムが国家の中核組織として継承され、君主の能力にかかわらず国家が運営されていくこととなる。そこに宮廷建築家とは異なる官僚建築家という新しい建築家像が誕生する。首都のデザインは気まぐれな国王でなく、有能で理論武装した官僚建築家が想い描くプログラムのもとに整えられていく。フランス革命は市民階級に権力を移させたが、その余波はプロイセンにも及び、官僚による政治、社会の近代化が始まる。建築家もそこに加わるのである。

国家官僚として啓蒙主義の時代にふさわしい建設行政、教育機関、また建築スタイルを生み出した建築家として、ダーフィット・ジリーが現れるが、その息子フリードリヒ・ジリーは英才教育を受け、天才建築家の名をほしいままにする。しかし、彼はフリードリヒ大王記念碑案（1797）という見事なプロジェクトを描いたものの、若くして世を去り、目立った建築物を残していない。代わって彼のサークルにいたカール・フリードリヒ・シンケルが、ベルリン都心の重要な建築物をデザインし、ベルリンの都市景観を新古典主義のスタイルに変える。

「ノイエ・ヴァッヘ」（旧近衛兵詰め所）、「アルテス・ムゼウム」（美術館）、「シャウシュビールハウス」（劇場）、「ヴェルター教会堂」が今もベルリン都心の景観を飾るが、赤煉瓦の「パウアカデミー」（建築学校）は第二次大戦後、撤去された。シンケルの設計した建築物には、他にも都心部に新教大聖堂、声楽アカデミー、レーデルン邸などがあったが、現存しない。実現しなかった多くのプロジェクトは彼自身が出版した銅版画集に見ることができる。

18世紀後期から19世紀前期にかけて、ヨーロッパの大都市はいずれも新古典主義の洗礼を受けるが、とりわけ新興都市ベルリンは「シュプレー河畔のアテネ」と呼ばれるほどに古典様式の建築物で埋まる。アテネのアクロポリス聖域への入場門であるプロピライアを模したブランデンブルク門（ラングハンス設計）が建築されたのも18世紀末のことである。

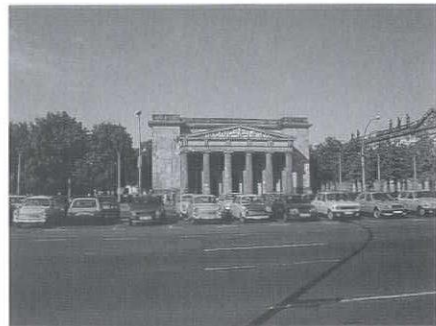
18世紀後半にフリードリヒ大王が建設した「フリードリヒのフォルム」は星形稜堡の一部を潰しながら建設された。実はそれは近世型の強固に守られ、閉じられた都市に風穴が開くことを意味し、開放型の都市への移行を象徴するものだった。19世紀中頃になると、産業革命の進行とともに労働者が集中し始め、一気に市街化が進む。都心を囲むように鉄道のターミナルが置かれ、都市は積極的に開放化をめざす。1838年にポツダム駅が置かれたのを皮切りに、1870年代には駅は9箇所とな



シャウシュビールハウス



シャウシュビールハウス幕間ロビー



ノイエ・ヴァッヘ



り、鉄路が四方に触手を伸ばす。そして鉄骨造、ガラス張りの駅舎建築はモニュメンタルなスケールを帯びるに至る。また、市内には今日のSバーン（市内電車）、Uバーン（地下鉄）が交錯し、都心の動脈となる。

## 第二期近代としてのモダニズム都市

1871年にプロイセンがフランスとの戦争に勝ち、ドイツ帝国が誕生してドイツ国土が統一されると、ベルリンは帝都となり、建築したばかりの「赤い市庁舎」（現存）で祝われる。ベルリンはますます意気盛んとなり、人口を膨張させる。そのような繁栄の時代を背景に、ネオ・バロックの過剰な装飾で覆われたドイツ帝国議会議事堂（ライヒスターク）、新教大聖堂（ドーム）が誕生し、都市景観を威圧する。いずれも第二次大戦で大破するが、後者は東ドイツ政府の手で文化財修復事業として手仕事的に復活し、前者は「壁」際にあったかろうじて存続していたところ、つい先頃ノーマン・フォスターの設計でガラスのドームを加えて、統一ドイツの象徴となったことで知られる。また世紀末にはユーゲントシュティルのデパートや劇場といった華やかな建築群を加え、帝都ベルリンは20世紀へと疾駆する。

その勢いは第一次大戦を勃発させるに至るが、1918年の敗戦は共和国への転換を余儀なくさせる。先行するロシア革命を追うようにドイツ革命が起こり、社会主義色が色濃くなり、皇帝が去った後の無政府状況は、政治的、文化的な混乱状態を引き起こす。いわば中心を喪失した都市ベルリンは、一種の真空状態となり、国内外のあらゆるものや人を吸引し、「空洞都市」とも呼ばれる。

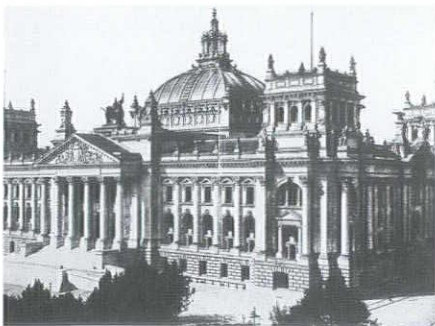
中欧の大都市であり、モスクワの芸術家たちを吸引するなど、国際都市の様相も呈する。表現主義の芸術家たちは活気づき、建築家たちもユートピア構想に明け暮れる。敗戦後のため、建設活動は衰退するが、その分、現実にはとても建築不可

能な構想が次々に描かれ、文化的には豊饒な時代となるのである。ポツダム郊外にメンデルゾーンがアインシュタイン塔を建築するのもこの時期である。好景気を迎える1920年代には、彼はベルリンでは流線型スタイルの商業建築を手がけ、「スウィングング20s」を象徴する建築家となる。

ヴァイマル共和国のもと、社会民主主義が主流となり、ベルリンでも大衆社会のモダンな都市へと改造が始まる。都心のアレクサンダー広場のコンペではベーレンス案が採用され、他方、郊外には多数の住宅団地（ジードルンク）が誕生し、その後の世界の住宅団地のモデルとなる。とりわけブルーノ・タウトはその多くを設計したが、大きな馬蹄形のブリッツ・ジードルンクは今も有名である。そこに都心と健康的な郊外住宅地はスムーズにつながられ、ゆったりと広がる近代都市の景観が形づくられるに至った。

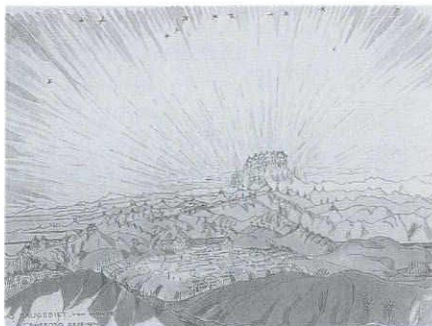
しかし1930年代、ドイツ南部から強まったナチスの暴力的な政治勢力はベルリンをも席卷する。開放的で国際色、楽観主義に染まっていた都市空間は、ユダヤ的とされ、ゲルマン民族の優越性を説く神話のもと、独裁と統制の社会に一変する。青年時代に建築家になる夢を持ったとされるヒトラー自身の直接の指示のもと、若き建築家シュペーアによって壮大な凱旋道路を南北軸とするベルリン大改造計画案「ゲルマニア」が構想される。しかし、その古代風で誇大妄想の計画案は第二次大戦の敗戦とともに消える。

後には空襲と市街戦で瓦礫の山となったベルリンが残される。永遠の首都の構想は逆に廃墟の首都に終わった。1920年代に国際社会をリードしたベルリンの建築家たちは、アメリカなどに逃れるが、皮肉なことに彼らがアメリカの戦後建築を牽引するなど、ベルリンの文化は世界に種をまかれることとなる。ブルーノ・タウトは日本に逃れて、日本の建築美を説き、日本人を鼓舞したが、ある意味ではそれもベルリン文化の落としたものだったと言える。



初期の帝国議会議事堂

SD9909



「アルプス建築」ブルーノ・タウト



ブリッツ大ジードルンク、1920年代



## 東西分割の経験

ベルリンを陥れた英米仏とソ連の四カ国の軍隊は、それぞれに統治地区を分け合った。ベルリン都心をいち早く支配した社会主義国ソ連は他の三者と折り合わず、ついには1961年に突如として「壁」を築き、住民の移動を不可能とする。それがもたらした悲劇については多くが語られてきた。しかし、それは世界構造の縮図であり、ベルリンはいわば世界の問題をひとりで背負ってしまったことになる。しかし冒頭にも述べたように、そのことは必ずしもベルリンという都市での一エピソードではなく、世界史そのものであり、新しいタイプの都市の姿でもあったと見なすべきなのかもしれない。

もちろん、「壁」で囲まれた西ベルリン市民の心理状況は穏やかなものではあり得ず、四六時中ストレスとフラストレーションにさいなまれた。陸の孤島ベルリンはかろうじて空輸作戦で都市の生命が維持された。

東西のイデオロギーのどちらが優れているか、その競争は互いに都市計画に示されることとなる。東側では社会主義リアリズムの理論に則ったスターリン通りの建設、テレビ塔を中心とする広大な公園広場、共和国宮殿の建設、アレクサンダー広場の改造など、社会主義の優等生東ドイツの首都としての景観が与えられる。他方、西側では、ハンザ地区の国際住宅展、「壁」沿いのベルリン・フィルハーモニー（シャロウン設計）と20世紀ギャラリー（ミース設計）、またグロピウス・シュタットの住宅団地などが自由主義の都市を象徴した。東西は「壁」を挟んで相互に大見得を張り合ったわけである。

それは世界の有名建築家を総ざらえするような1987年のベルリン建築展においてピークを迎える。実はそれは新築部門と保全部門の二者を組み合わせたものだったが、後者は地味な事業であるためにあまり知られていない。つまりそれは双子プロジェクトだったわけである。二つのテーマを立てて拮抗させ、その緊張感から何かを生み出す、という東西分割と同様の

発想法がここにも小さな形で反映していたと言える。

しかしその2年後、そのような東西の建築競争が突然無用となるなど、誰も予測していなかった。気がついてみると「壁」は至る所で破られた。東ベルリンには日本も含む西側資本が流入し、市場獲得合戦の様相を呈する。アレクサンダー広場の屋上には日本社のネオン広告が居並ぶこととなる。東ベルリン郊外の田舎らしさが残る市街には煌々と明かりをつけた西側資本のスーパー・マーケットがいち早く陣取り、異様な光景を示す。東西統一に期待した東ベルリン人たちは予期せぬ事態に「壁」を壊したことを後悔する者も出てくる。

東西統一はプログラム抜きでしか実現しなかったろうが、プログラムがなかったことが多くの問題を引き起こしてしまった。しかし、終わったものは終わったわけである。時は素早く移ろい、新しい時代をやがて迎えるだろう。19世紀後半から20世紀にかけてのテーマ社会主義は一応、一段落したもの、今やエコロジーという新しいテーマが立ち上がっている。実は陸の孤島時代の西ベルリンでは、エネルギーの自家供給のために、狭い市域の中で原子力発電所建設の問題が大きな論議を巻き起こした。いわば東京都内に原子力発電所を置くようなものであり、それはまさしくエコロジー問題の一事例だった。西ベルリンは宇宙船地球号にも似た立場にあったわけであり、何らかの知恵がそこに育まれているはずである。「壁」が消えた今、そのようなノウハウはむしろ普遍的な意味を持つに至っていると言える。

そのようなことを含め、様々の知恵を収蔵し、漁村に始まるベルリンは改めて水を得た魚のように、750年の生命を蘇らせて、改めて生命体都市として21世紀に向かおうとしている。  
(すぎもと・としまさ／広島大学教授)



ナチス党員で埋められたパリ広場

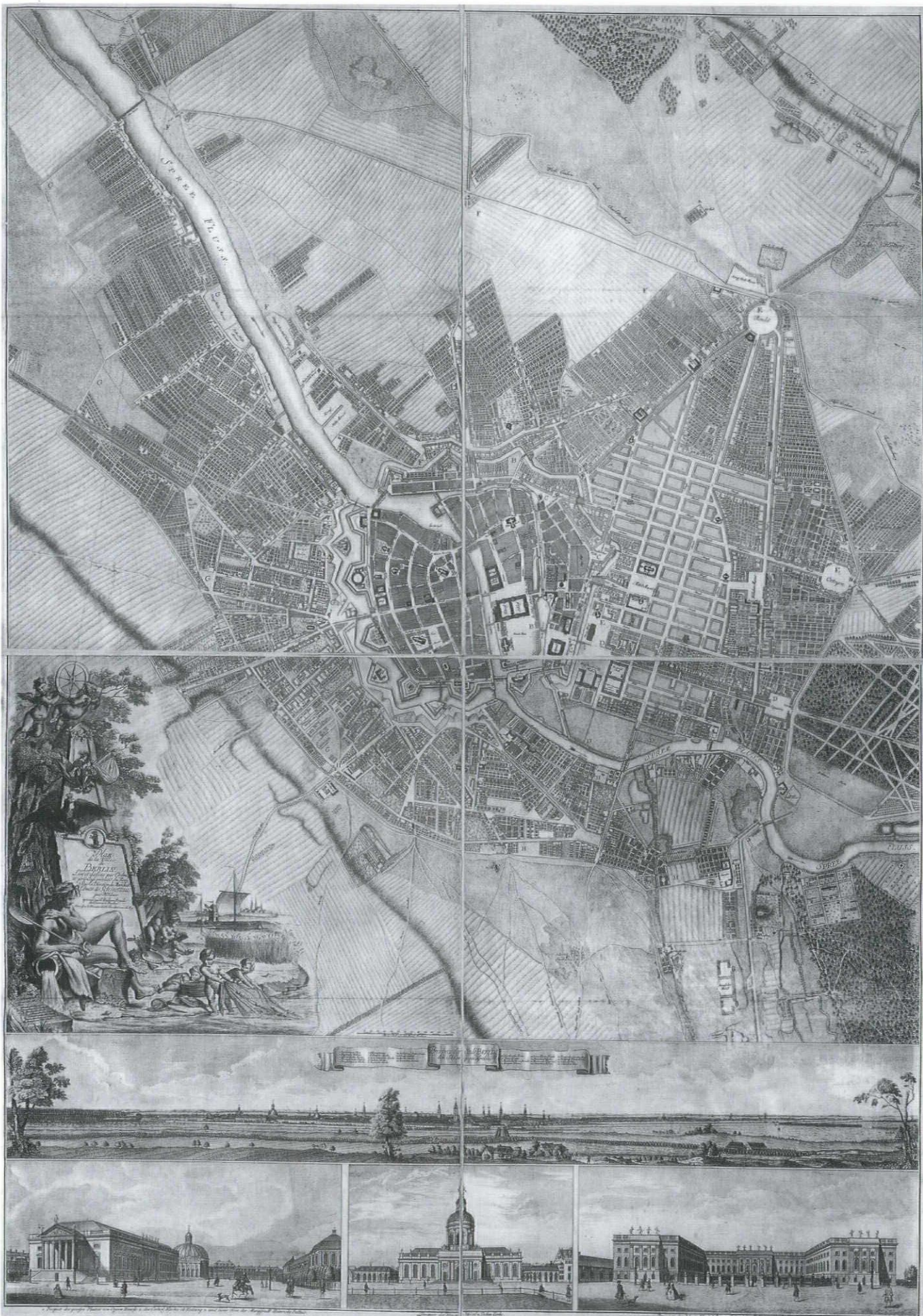


マルクス・エンゲルス広場



ベルリン・フィルハーモニー





ベルリン全国、1750年



杉本俊多

## Special Feature BERLIN TOPOGRAPHY

西ベルリンは陸の孤島の立場から開放されて地続きとなり、統一ベルリンは新たなポジションを獲得しつつある。それはグローバル都市の新たな姿でもある。

### 「壁」が崩れて

東西分割の時代には、ドイツ全土が東西に区切られ、東ドイツの真ん中に位置するベルリンも東西に区切られていた。東ベルリンは東ドイツ、つまりドイツ民主共和国の首都として東ドイツの芯であり続けたが、他方、西ベルリンは東ドイツの中で孤立する、「壁」で囲まれた絶望的な構図の都市だった。政治的には西ドイツであるドイツ連邦共和国と一体ではなく、単に連携する自治的な都市州の地位しかなかった。しかし、西ベルリン市長から西ドイツ首相に就任したブランドがいたように、実質的には西ベルリンは西ドイツの重要な構成員だった。

西ベルリンと西ドイツは、空路のほか、ノンストップの鉄道、高速道路、水運で結ばれていた。それらは途中で東ドイツの市民と接触しないよう、厳重な警戒のもとにあった。ちなみに、東西分割以前からあり、東西ベルリンの市街地を縫って走る、東京の中央線のような市内電車「Sバーン」の各駅は、東ドイツの、逃亡のおそれのない職員が運営した。地下鉄も二つに分けられ、西ベルリンの地下鉄で東ベルリン側の地下を走るものがあったが、それは自動小銃で武装した兵士がプラットフォームに立つ東ベルリン領内の駅を猛スピードで通り抜けるのだった。

「壁」が崩れるとあっけないもので、交通ネットワークも再統合され、元の状態に戻った。路線バスは何事もなかったかのように「壁」跡を横切って進み、また西から地下鉄に乗って「シュタットミット（都心）」駅で地上に出ると、活気のない旧東ベルリンの石畳や煉瓦造建築群が迎えてくれた。血は通ったものの、しばらくは血の気がもどるまでには行かない。

陸の孤島だった西ベルリンは、周囲と陸続きとなる。しかし、陸の孤島であるがゆえに、また存続させるために特に大事に甘やかされてきたがゆえに、西ベルリンは西ドイツともやや性格を異にしてきていた。取り巻く環境が、物理的にも政治的、社会的にも異常であるため、特異な雰囲気生まれ、個性的な都市となっていたのである。30年間の孤立は、元に戻そうとする保守派と、その個性を新しい都市像に結びつけようとする急進派の二つの流れに分かれたようである。

「壁」が崩れた後、ベルリンには旧西ドイツのナンバープレートをはめた自動車が旧東ドイツの貧相な自動車トラバントと混じり合って走った。そのことが象徴的に示すように、堰を切った後に水が混じり合って複雑な波を立てるように、一時の混乱は続いた。よりパワフルな西ドイツ側のエネルギーは東側の経済構造を破産させ、圧倒した。しかし、それは単なる弱肉強食の世界をもたらしただけでは終わらないだろうことが予感され

る。問題意識好きで、しかも理詰めの実践が好きなドイツ人が、どのような20世紀社会を紡ぎ出すか、予断を許さないものがある。

### 回復される田舎のネットワーク

1920年代にブルーノ・タウトらが多数のジードルンク（郊外住宅団地）を建設したように、ベルリンという大都市は郊外なくして存在できない都市となっていた。かつてのベルリン都心は東ベルリン側にあったから、西ベルリンは実はそもそも郊外市街地だった。西ベルリンの中心となった「ツォー駅」は、「ツォーロギーッシャー・ガルテン」つまり「動物園」の略称から出たものであり、いわば郊外遊園地が都心に成り変わったようなものだった。「クーダム」という西ベルリンの目抜き通りは1920年代には副都心の新興商店街として映画文化、カフェ文化を特色とする洒落た並木道だった。歴史的な都心を東側に取られたために、西ベルリンはかえって緑豊かな郊外の風景を背景に、自由で新しい文化を育て得たのだった。

また、黄金の1920年代のドイツは「ヴァイマル共和国」と呼ばれたように、国家統合の象徴はベルリンではなく、南西200km余りにあるヴァイマルだった。そのヴァイマルに1919年、バウハウスが誕生し、新しい時代の芸術思想を展開したことはよく知られている。その後、バウハウスが移転したデッサウはベルリンの南西約100kmだった。この距離関係はメトロポリスたるベルリンにつかず離れずという微妙なものだった。

確かに1920年代のベルリンは国際都市として文化のつぼのようになっていたが、それは周辺地域の有機的な都市ネットワークに支えられていたわけである。ヴァイマルは領邦国家の宮廷都市とはいえ、田舎の中規模都市に過ぎない。そこにかつてゲーテとシラーがドイツ古典文学を誕生させた。デッサウもまたフィランソロフィーの伝統で知られる小さな宮廷があった文化都市だった。そもそも領邦国家群からなるドイツは、中央集権の国家構造を持つフランスとは対照的に、田舎都市が文化を育てるという独特の国家構造を持ち、田舎同士の連携、つまり地方分権を得意とする国民性を生んでいた。

地方にはアンチ・ベルリン気質も根強くあった。伝統的にドイツの北部は新教が強く、南部はカトリックが強い。気質もミュンヘンを中心とするバイエルン州は、情熱的で、また後期バロック文化の非合理主義で知られ、ベルリンを中心とするプロイセンの合理主義とは対比される。その他、ケルン、ハンブルク、フランクフルト（・アム・マイン）など、多心型の国土構造を持っていて、必ずしもベルリンを首都として復活させなければならぬわけでもなかった。ベルリン遷都に反対する声が大きかったことは、そもそもベルリンなしでもドイツ連邦共和国は成り立つからだった。



ドイツ国土はいわばリゾーム的なものだった。どこへ行っても適度の都市があり、田舎の都市に驚くほど深い精神性を示す芸術があった。今日、フライブルクを代表として、ドイツの各地にエコロジー都市やビオトープのモデルが誕生しているが、先端的な田舎らしさという興味深い状況を生んでいる。ベルリンの大建設ラッシュはむしろ異常な現象なのかも知れない。さしずめベルリンは、そういった大なるリゾーム空間の中に登場した芋のようなものであろう。ハコモノで埋められて行く新しい都市景観に驚く前に、ベルリン都心に田舎らしさがどのように進入しているかを見出そうとする方が面白いかも知れない。かつてデープリンの小説『アレキサンダー広場』は世界都市に進入する田舎を題材にし、1920年代の都市の状況を描いたが、その構図は今の姿を見るためのヒントとなるだろう。

#### グローバル時代の可能性

ポツダム広場周辺、ティーアガルテン地区の大開発はインターネットを通して画像が世界に発信されていた。一日数度、パノラマ写真が新しく送り直されるのだった。林立するクレーンが移動し、次第に壁が建ち上がっていく様は、インターネット時代の面白さを如実に物語っていた。いわゆる定点観測のようなことが地球の裏側からできるわけである。それは建設活動を観光化したという新しいベルリン観光のスタイルとも共通する。

ベルリンはもはやドイツの首都であるよりは世界市民の気をひく、新しいタイプの世界都市である。19世紀末から20世紀初頭はベルリンが「ヴェルトシュタット（世界都市）」を自負した時代だったが、それはまず帝国主義経済の中心都市としての意味を持っていた。その後、1920年代の平和な時代のベルリンは世界の文化を吸収、映画産業などを通して新しい芸術文化を発信するタイプの世界都市となった。21世紀のベルリンはもう一度姿を変え、グローバル化した時代の世界都市となるうとしている。

ロンドンやパリ、またニューヨークや東京がグローバル社会の拠点都市であるように、ベルリンはシステムが整えばすぐさまそこに参入すると思われる。戦後のドイツでは、東西いずれも、それぞれのやり方でナチスの民族主義思想を徹底的に自己批判してきた。一時の混乱は特に旧東ドイツでネオ・ナチ気分を高めさせたようであるが、グローバル社会の中に地位を確保すれば、その種の問題はあまり目立たなくなるはずである。

グローバル社会とは「地球村」なのだという説が正当だとすれば、田舎のネットワークで成り立ってきたドイツは、そういうことを得意とする。ヴァイマルから古典文学がドイツ語圏内ばかりでなくヨーロッパ全土、また日本にまで影響を及ぼしたように、見えない知的ネットワークはベルリンから新しいタイプの文化を発信することだろう。より正確にはサーバー都市ベルリンを介してドイツの田舎のコンテンツが発信されると言

うべきだろうか。

他方、1910～20年代のドイツ表現主義や機能主義は、ポーランドやチェコなどの東欧にも傑作を生んだ。ハンス・ベルツィヒやミース・ファン・デル・ローエらの作品が今も残されているようだが、東西対立のせいで日本からは見えないでいた。中欧の核であるベルリンは東欧とも密接なネットワークを持ち、広域の文化を形成させていた。1920年代にはモスクワからも芸術家たちがベルリンに流入し、エル・リシツキーやカンジンスキーがやってきて活躍するなど、ロシア構成主義の西への窓口となっていた。地理的な位置はゲルマンとスラブ、あるいは北欧やラテンなどの多様な文化が入り交じるところにある。そのような足下から湧き出てくる文化を土壌として、戦後ドイツの積極的な開放政策の延長上に、情報機器を介して入り込むアメリカや日本の文化を吸収して行くとするなら、ベルリンの動向は目を離せなくなるだろう。

ちなみにその開放政策は世界の建築家を招待して驚くほど多数の建築作品をつくらせたベルリン国際建築展（IBA）に、また世界の有名建築家を総なめにして現在進行中のベルリン建設活動の有り様に顕著に見られるが、そのような開放的なスタンスはドイツの歴史がつくった気質であり、一時のものに終わらず、21世紀にも継続することは間違いなさだろう。ベルリンは新しいタイプのグローバル都市の姿をまとい始めていると見るべきだろう。

（すぎもと・としまさ／広島大学教授）

Special Feature  
BERLIN TOPOGRAPHY



# ベルリン・トポグラフィ

エリア解説：内山佳代子  
texts：Kayoko Uchiyama  
写真：アンナ・フェラー  
photographs：Anna Ferrer

ベルリンの成長過程はまるで生物の変態のようにダイナミック。  
統一後再開発計画が次々と実現してまた新たな姿を見せ始めた。  
そのダイナミックさはその場所場所がもつ文脈の多様さでもある。  
そこで最近進化の著しい7つのエリアを眺めてみる。  
これはベルリンの7つの風土を映すピクチャ・ショウ。

## Berlin Topography

1

場末に自然発生するオルタナティブ・スペース：オラニエンブルグ通り  
Alternative Space Spontaneously Emerging in the Outskirts: Oranienburger Strasse

2

壁の存亡とシンクロする表裏の逆転：クロイツベルグ  
Back to Front Reversal Synchronized with the Wall: Kreuzberg

3

歴史的なファサードの埋め戻し：パリ広場・フリードリヒ通り  
Renovation of Traditional Facade: Pariser Platz + Friedrichstrasse

4

中心街の蘇生：ポツダム広場  
Building Up a City Center: Potsdamer Platz

5

スクラップ・アンド・ビルドされる街区：アレキサンダー広場  
Scrap-and-build Square: Alexander Platz

6

首都をコントロールする都市軸：シュプレーボーゲン  
The Axis Controlling the Capital: Spreebogen

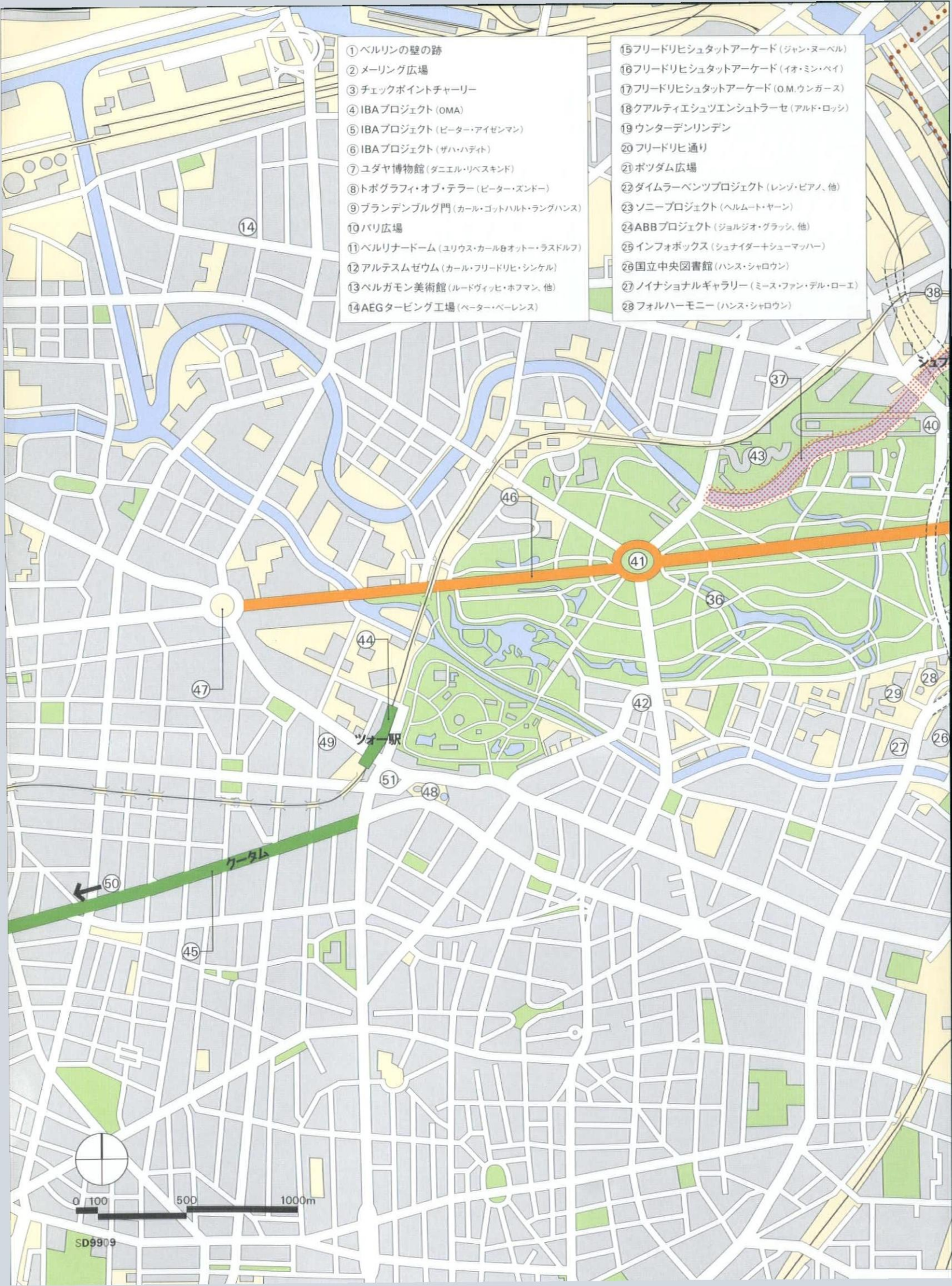
7

歴史と共存する商業資本主義：ゾー駅・クーダム  
Capitalism Coexisting with History: Zoo, Kudamm



- ①ベルリンの壁の跡
- ②メーリング広場
- ③チェックポイントチャーリー
- ④IBAプロジェクト (OMA)
- ⑤IBAプロジェクト (ピーター・アイゼンマン)
- ⑥IBAプロジェクト (ザハ・ハディット)
- ⑦ユダヤ博物館 (ダニエル・リベスキンド)
- ⑧トボグラフィ・オブ・テラー (ピーター・ズンドー)
- ⑨ブランデンブルグ門 (カール・ゴットハルト・ラングハンス)
- ⑩バリ広場
- ⑪ベルリナードーム (ユリウス・カール&オットー・ラスドルフ)
- ⑫アルテスムゼウム (カール・フリードリヒ・シンケル)
- ⑬ベルガモン美術館 (ルードヴィヒ・ホフマン、他)
- ⑭AEGタービニング工場 (ペーター・ペーレンス)

- ⑮フリードリヒシュタットアーケード (ジャン・ヌーベル)
- ⑯フリードリヒシュタットアーケード (イオ・ミン・ペイ)
- ⑰フリードリヒシュタットアーケード (O.M.ウングース)
- ⑱クアルティエシュツェンシュトラッセ (アルド・ロッシ)
- ⑲ウンターデンリンデン
- ⑳フリードリヒ通り
- ㉑ポツダム広場
- ㉒タイムラーベンツプロジェクト (レンゾ・ピアノ、他)
- ㉓ソニープロジェクト (ヘルムート・ヤーン)
- ㉔ABBプロジェクト (ジョルジオ・グラッシ、他)
- ㉕インフォボックス (シュナイダー+シュマッハー)
- ㉖国立中央図書館 (ハンス・シャロウン)
- ㉗ノイナショナルギャラリー (ミース・ファン・デル・ローエ)
- ㉘フォルハーモニー (ハンス・シャロウン)

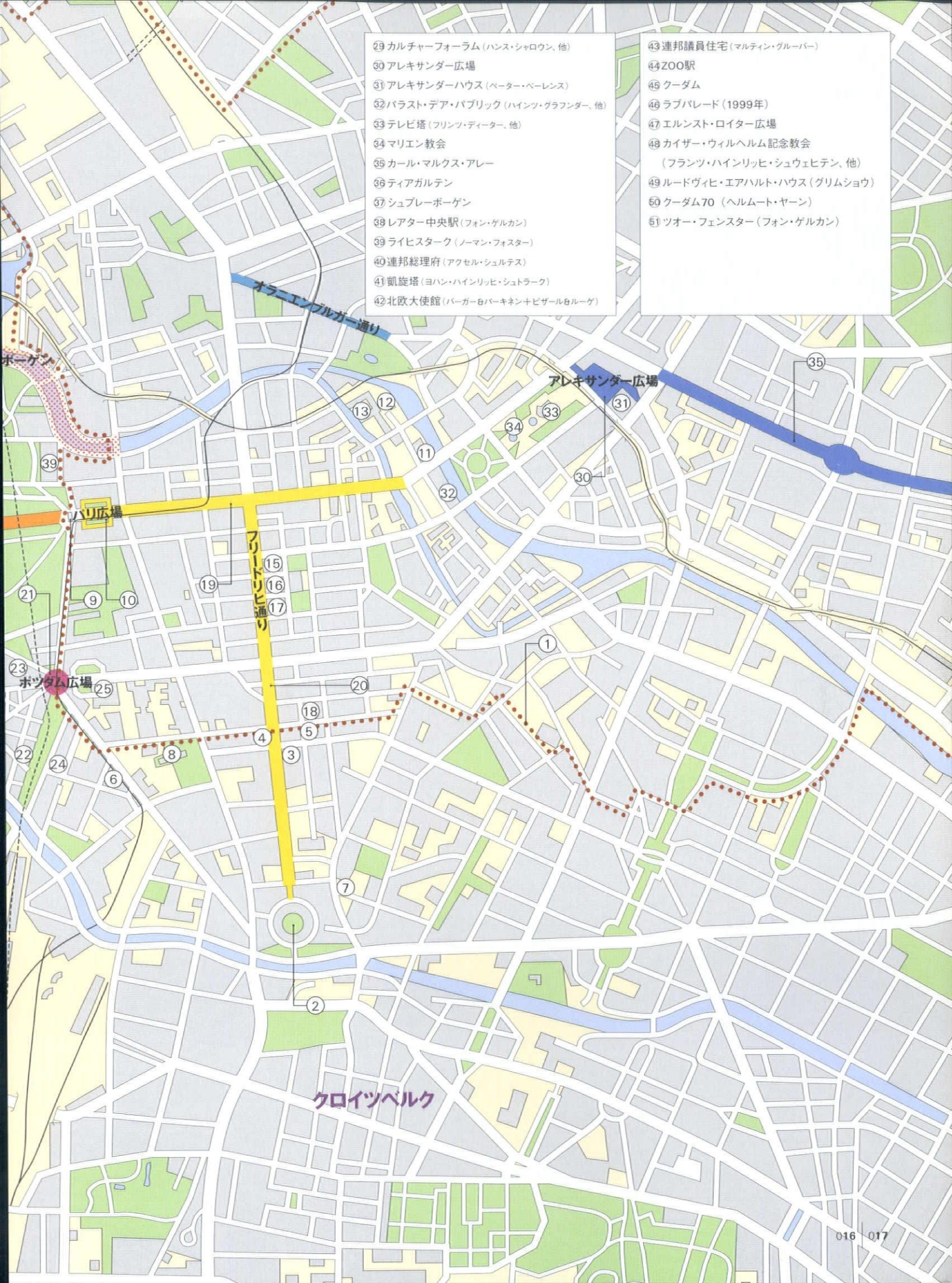


0 100 500 1000m



- 29 カルチャーフォーラム (ハンス・シャロウン、他)
- 30 アレキサンダー広場
- 31 アレキサンダーハウス (ベーター・ペーレンス)
- 32 バラスト・デア・パブリック (ハインツ・グラフンダー、他)
- 33 テレビ塔 (フリッツ・ディーター、他)
- 34 マリエン教会
- 35 カール・マルクス・アレー
- 36 ティアガルテン
- 37 シュプレーボーゲン
- 38 レアター中央駅 (フォン・ゲルカン)
- 39 ライヒスターク (ノーマン・フォスター)
- 40 連邦総理府 (アクセル・シュルテス)
- 41 凱旋塔 (ヨハン・ハインリッヒ・シュトラーク)
- 42 北欧大使館 (バーガー&パーキネン+ビザール&ルゲ)

- 43 連邦議員住宅 (マルティン・グラーバー)
- 44 ZOO駅
- 45 クーダム
- 46 ラブバード (1999年)
- 47 エルンスト・ロイター広場
- 48 カイザー・ウィルヘルム記念教会  
(フランツ・ハインリッヒ・シュウェヒテン、他)
- 49 ルードヴィヒ・エアハルト・ハウス (グリムショウ)
- 50 クーダム70 (ヘルムート・ヤーン)
- 51 ツォー・フェンスター (フォン・ゲルカン)



クロイツベルク



## 場末に自然発生するオルタナティブ・スペース オラニエンブルグ通り

ユダヤ人の悲劇の記憶を残しながら、旧東時代に放置され続けたネガティブなエリア。

そんなエリアこそ新しい動きを模索する若者やアーティストを刺激し、  
自由でアクティブなスポットを発生させた。

いまベルリンで最も注目されているオルタナティブ・スペース。



### オラニエンブルグ通り周辺

ウンター・デン・リンデンや博物館島をさらに北に上がったところに位置するオラニエンブルグ通りは、いま若者に最も人気を呼んでいるナイトスポットである。壁構築時代、境界線沿いの南側に位置していたクロイツベルクがカフェ文化の中心であり前衛アートの活動の場であった。それが、壁崩壊後、旧東の廃墟やバラックの多いこのエリアにその拠点を移したのだ。

そもそもこの周辺は、フリードリヒシュタットと同じく、プロイセン帝国時代（1699）に行われた都市拡張によって建設された。今でもこの通りに「オラニエンブルグ・トア（門）」や「ハンブルガー・トア（門）」という名称がつくのは、ベルリンの城壁の関所があった名残りである。また、オラニエンブルグ通りに面したシュプレー川沿いには、当時「モンヴィジュー城」というバロックの庭を持つ可憐な城が建っていた。

19世紀末頃には、ベルリンに17万人いたといわれるユダヤ人の街として発展し、カフェやデパートやキャバレーなどが集まる繁華街としてにぎわいをみせた。オラニエンブルグ通りの中心に建つ玉葱形の屋根をしたシナゴークをはじめ、立ち並ぶ商店や病院、学校、墓地などはすべてユダヤ人のものだった。ところが、その栄光も長くは続かず、ナチス台頭時代、ユダヤ人の故郷であるこのエリアは、アウシュビッツなどの強制収容所に連行されるまでのユダヤ人が待機させられた招集場所に成り変わった。ナチスによるユダヤ人迫害と戦争による二重の破壊によって、モンヴィジュー城やシナゴークとともに、この通りの繁華は焼け落ちてしまったのである。

その後の壁崩壊まで、この辺りはほとんど改修されることなく放置されたままだった。旧東時代というのはこのエリアにとって、封印された状態のまったく空白の時間だったのだ。しかしその後、価値観の反転が起きる。東西統一直後の混乱

の最中、半世紀前にタイムスリップしたような朽ち果てた建物や通りが常に新しい動きを模索する若者やアーティストたちを刺激し、定義付けのない自由な場所として人気を呼んだのである。壁構築時代、彼らが境界際に位置するクロイツベルグに惹き寄せられたのと同じように。この街では、つねにこのようなオフシートの空間から新しいものが生み出されるという伝統がある。フリードリヒ通りとの交差点に近い、オラニエンブルグ通りに建つ廃墟を呈した「タヘレス」は、このエリアにそういうパラドクスな空間をつくり出す火付け役となった。

銃弾の跡が残る黒ずんだ外壁に、栄光を物語る重厚なアーチ型のファサード。中庭を通り抜けると建物は半分に切り取られたような断面を見せ、そこから鉄筋が突き出ている。この半壊の建物が「タヘレス」であり、アーティストのアトリエやギャラリー、カフェやシアターなどが入った、いまベルリンで最も注目されているオルタナティブ





前頁：トホルスキー通りとアウグスト通りの交差点からオラニエンブルグ通りを見る。これらの建物は20世紀初頭に建てられた歴史様式の建築がほとんどであり、新しく改修されたファサードとまだされていないものとのコントラストが著しい。右側の煉瓦造の建物は旧郵便局であり、今年のベルリンビエンナーレの会場としても使われた。突き当たりに建つ高層ビルは、旧東時代に計画された日本のプロジェクト。

左：ハケッシャホーフの第1の中庭。この中庭にはレストランの他、シアターや映画館、バーなどが軒を並べ、夕方になると、新しく再現されたアウグスト・エンデルのデザインによるタイルの壁面がライトアップされる。この中庭の他、交差するソフィエン通りまで、ギャラリーやカフェ、住宅などが入った、それぞれ違った趣をもつ8つの中庭が後ろに続いている。

## Alternative Space Spontaneously Emerging in the Outskirts ORANIENBURGER STRASSE

スペースなのである。壁崩壊後、廃虚のまま放置されていたこの建物にアーティストたちが「芸術」の名の下に不法占有で住み着き、ここをアートの聖地に築き上げたのだ。もともとこの建物は、この辺りの全盛期であった1909年、アーケードを持つデパートとして建てられた。高さ48m、直径26mのガラスドームは当時のヨーロッパの大きさを誇り、そのバサージュはオラニエンブルグ通りからフリードリヒ通りまでつながっていたという。しかし、この華麗なバサージュも6ヶ月という短い運命をもって閉鎖されてしまう。21kmの通気管をもつ巨大な建築に、当時の人々は不安を持ったのだ。その後、大企業ジューメンスの展示会場になったり、旧東時代には美術学校に利用されたりしたが、結局、ベルリン市の文化財としてその価値が認められたのは、皮肉にも半壊した現在の姿を止めてからであった。

このような歴史のある通り抜けの空間や連続する中庭空間が、時を経て、その重要性が再発見さ

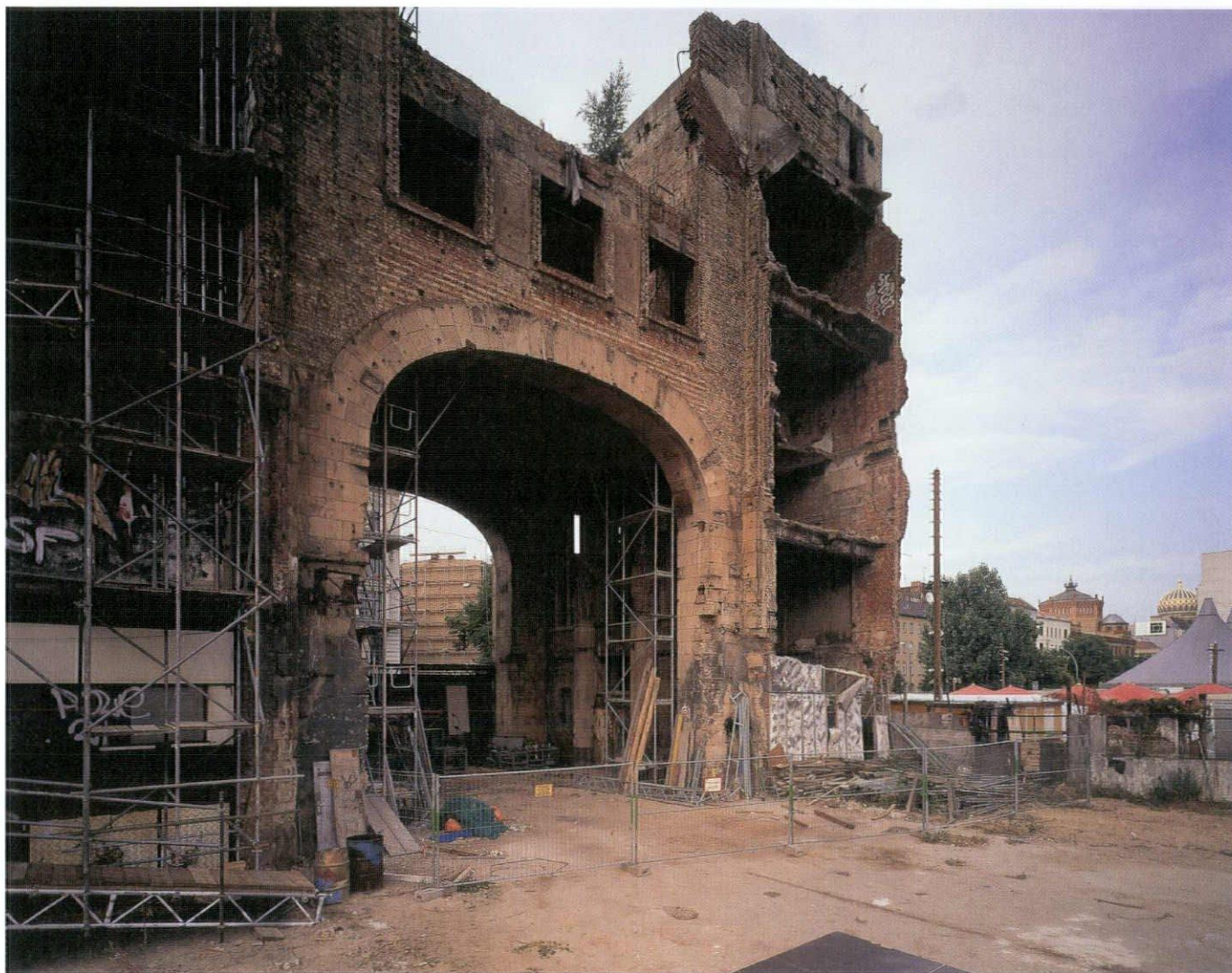
れ、効果的に演出され得るのもこの辺りの特徴といえよう。中でも、ハケッシャホーフは、オラニエンブルグ通りを東に入り、ローゼンタール通りに面した、9つのホーフ（中庭）を持つ建物だ。入り口から中庭へとくぐり抜けると、次々に映画館、シアター、ギャラリーなどが現われる。中庭に並べられたカフェの椅子に座る人々や無造作に置かれたオブジェ。9つの中庭はそれぞれ違った様相を持ち、人々は予期せぬ空間の演出に魅せられて奥へ奥へと誘導される。このような中庭が、いまベルリンで最も賑わうナイトライフスポットの一つなのだ。

歴史的にもこの建物は、ベルリンの全盛期といわれる「黄金の20年代」の舞台であった。この建築のファサードと内装のインテリアは、1907年、その当時ベルリンで活躍したユークントシュテールの建築家、アウグスト・エンデル（1871-1925）によってつくられたものだ。いま建つ建物は1995年に新しく改修されたものであるが、と

くに中庭の色とりどりのタイルで敷き詰められたファサードのデザインは、当時のエンデルのものが再現されている。前世紀末に登場した、過去の様式に拠り所を求めないこの新しい建築様式は、のちにナチスによって「頹廢芸術」の代表として取り壊される運命になり、このハケッシャホーフも例外ではなかった。半世紀を経て、エンデルのファサードは人々の活気とともに取り戻されたのである。

このように、このエリアで新しく魅力ある空間を生み出すカギとなっているのが奥へとつながる中庭であるが、実はこれらは貧困な住生活の中で計画された苦肉の作であった。19世紀末頃にはベルリンの人口が急増し、その住宅難を回避するため建物を奥へ奥へとつくるしかなかったのである。当時は階級順に表通りに近い住居を得ることができた。奥に入るにつれて十分な採光も確保できず、不健康で住環境が劣悪になった。現在、このような中庭を新築することは建築基準法的に不





可能であり、昔の中庭を改築するにしても、2方向避難や避難距離を確保することが必要とされる。例えばハケッシャホーフでは、新しい計画にあたって、後ろの建物の中庭とつなぐことで袋小路をなくし、後側の通りへの連絡を可能にしている。

過去の廃墟が、若いアーティストたちに未来のインスピレーションを与え、住宅苦からできた連なる中庭が、いま一番新しいナイススポットに成り変わるというパラドックス。ユダヤ人にとって因果な場所であるこの周辺に、再びユダヤのレストランやカフェが建ち並び人気を得ているという転生現象。歴史という意味での「デカタン」と、壁崩壊後のベルリンの「新生」とが互いに共存しているのは、断絶の連続が歴史であったベルリンにおいて、唯一オラニエンブルグ通り周辺だけといえるかもしれない。

Berlin Topography 1

## Anarchic Renovation

廃墟を利用した「タヘレス」の中庭から、半分に削ぎ取られた建物の断面を見る。この後側にある建物の残り部分がシアターやギャラリーなどのオルタナティブ・スペースになっている。この建物は現在ベルリン市の文化財に指定され、半壊された状態をその当時のまま保っている。建物の中は、朽ち果てた壁の上にカラー・スプレーでペインティングされたり、窓には色ガラスがはめ込まれたりして、異様な雰囲気をかもし出している。アーティストたちのオブジェが置かれている中庭には、建物の後方がすべて破壊された分、広々とした手付かずの空き地があり、街の中に取り残されたヴォイドのようでもある。





## Ornamentation of Street Facade

「クンストヴェルク」と呼ばれるベルリンの新しいアートの拠点。建物の中には若い作家によるアトリエやギャラリーが入る。中庭の中央には、アメリカのアーティスト、ダン・グレアムによるガラスでできた矩形のカフェがオブジェのように置かれている。その他、この中庭はアーティストの作品のプレゼンテーションスペースや作業場としても使われる。今年のベルリン・ビエンナーレの本部として中心的活動を担った場所であり、それに合わせてオープンされたばかりでもある。





昔の工場の跡地につくられた「ヘックマンホーフ」と呼ばれる中庭から、東隣にあるシナゴークを後方を見た風景。シナゴークの玉葱形のドームと新しく増築された円錐形のガラスのドームのコントラストが面白い。全面に見える低層の建物は工場跡を改装したものであり、1階がデザイナーたちの店、2階がそれぞれのアトリエとして使われている。ヘックマンホーフへの入り口は非常に狭いが、中庭には人がたたずむために十分なゆとりある広場と小さな噴水がある。先日、この中庭でベルリンの若いデザイナーたちによるファッション・ショーが行われ、大勢の観客で埋め尽くされた。

## Layers of Generations

### Berlin Topography 1

旧東のミッテ区、オラニエンブルグ通りを中心とするエリアが、今ベルリンで最も活気づいている。この辺りに残る廃墟や、朽ち果てたファサードのホーヘ（ドイツ語で「中庭」の意）が、新しいオルタナティブ・スペースとして次々に姿を変えている。今年9月には、このエリアのギャラリーを会場にしてベルリン初の国際ビエンナーレが行われた。このオフシーンな空間の中で、いまベルリンの新しいアートが醸造されつつある。



フリードリッヒ通り

# Map of Courtyard of Oranienburger Strasse

- ①ハッケンシャーヘ [HACKESCHE - HÖFE]: 9つの違った中庭があり、それぞれにカフェやシアター、レストラン、ギャラリー、住宅が入る。この辺りの最初の中庭プロジェクトであり、最大のもの。第2の中庭には「アエデス [Aedes] という建築専門のギャラリーがあるが、これは駿馬場前から旧西のサビニー広場にあった。第7が東にもできた。ギャラリーのオーナーは、ロッテルダム建築博物館のディレクター、クリスティアン・ファイラス。
- ②クンストホーヘ [KUNST - HÖFE]: シナゴークの東端にある、新しい中庭のプロジェクト。「クンスト」はドイツ語で「芸術」の意味であり、その名の通り、中庭に面した建物の中にはギャラリーが立ち並び、その他、カフェやアートを専門とした書店などもある。この辺りにはあまねく正方形の中庭をもつ。
- ③シナゴーク [SYNAGOGUE]: 昔の破壊されたユダヤ人のシナゴークを改修した。ファサードだけを昔のように改修し、後の部分はまったく新しく計画され、現在ドキュメンタリーセンターとして使われている。正面の入り口には、常に機関銃を下げた警察が監視している。
- ④ヘックマンホーヘ [HECKMANN - HÖFE]: 1860年に当時の工業資本家であったフリードリヒ・ヘックマンによってつくられた工場跡。ファサードは黒ずみ汚れて、入り口も通りから見通さず、狭い。中庭には新しいカフェやブティックが立ち並び、郵便局がアートなどの展覧会場として貸し出すことになり、今年のベルリンビアンナ・レの会場ともなった。

シュプレム川

カールス通り

ユダヤ市民記念碑

モンヴィジュー城跡

マリエン協会

- ⑥タヘレス [TACHELES]: 半壊したオルタナティブスペース。1階にカフェ、2階にシアター、3階に映画館、4階、5階にアーティストのアトリエとギャラリーが入っている。この半壊の建物でアーティストたちが活動し始めたことが、その後この辺りにベルリンの新しいアートシーンを呼び寄せる起爆剤ともなった。
- ⑦ソフィー・ギプスホーヘ [SOPHIE - GIPS - HÖFE]: 昔の工場跡で、中庭にはカフェ、バー立ち並び、建物内には「ジャズラジオ」というラジオ放送局が入っている。夕方に消灯される。ベルリンの繁華街といえど、その建物の上は住宅であるから、「住・職・遊」が共存するというのは、ベルリンの街のつくられ方の特徴でもある。
- ⑧クンストヴェルク [KUNSTWERK]: 古い建物の中庭をリニューアルし、ギャラリーや別イベントにも使われる。中は改築されて、外観はそのままバラックのような状態で、ライオンナップもあり広告せず、そのほとんどがメールなどで情報交換されるという。また、オープンの日、クンスト+テクニク [KUNST + TECHNIK]: この建物は1909年、「手工業者クラブ」として、ユダヤ人のシアターグループによってつくられた。この伝統は旧東時代にも引き継がれ、ドイツ共産党が「ソフィー・エン・ゼーレ」と命名した。中には、劇場やコンサートホールを始め、アジアの作家を中心に行っているギャラリー、アジア・アート・ファクトリーなどが集まっている。



## 壁の存亡とシンクロする表裏の逆転 クロイツベルグ

ベルリンの壁ができたことで、都市の辺境となってしまったエリア。  
住宅と軽工業が混在し、閉鎖された建物が目立っていたこの場所は、  
一方で新しいアートグループの根城ともなる刺激的なエリアだった。  
しかし背後の壁が消滅したとたんに、その方向は都市の中心を向くことになってしまった。

**Berlin Topography 2**



壁から通りへの転換

## Reversal of Wall and Street

**Back to Front Reversal  
Synchronizing with  
the Wall  
KREUZBERG**

左側に立つのは「ベルリンの壁」の残りである。ここはクロイツベルグ区とミッテ区のボーダーであり、左側は旧東、右側は旧西だった。そんな場所に、こんな和やかで静かな散歩道がある。そもそもこの辺りは19世紀、「ルイゼンシュタット」と呼ばれ、フリードリヒ・シッケルと同時代人でプロイセン王の意匠師であったペーター・ヨーゼフ・レネイによってつくられた歴史あるエリアだった。『装飾的および周辺の街路』と呼ばれるその計画では、工場の誘致を目的としてつくられたが、それによって、この辺りにたくさんの広場と運河をもたらした。この散歩道も、昔はこの北側にあるシュプレー川からつながる運河だった。長い時を経て、再びその静けさを取り戻し始めた。





チェックポイント・チャーリー付近から北側を望む。中央に見える道路は昔の境界線であるが、もちろん壁はすべて撤去されていて残っていない。中央には、昨年完成したばかりの新プロジェクト「ネットワークオフィス・チェックポイント・チャーリー」が見える。これは6つのブロックからできていて、ガラスのダブルファサードの建物はニューヨークの事務所SOMが設計し、その左隣にはフリップ・ジョンソンによる「ジョンソンハウス」が建つ。この計画の全面道路は「マウアー（壁）通り」と新しく改名された。中央に見える道路を西に進むと、昔のナチスによるゲシュタポ本部やSS本部などの施設が立ち並んでいた跡地にぶつかる。また、右上に見えるのは、旧東時代に建てられたシンボリックなテレビ塔とブレハバアパートである。

Berlin Topography 2

Backyard and Frontyard Reversal



## Breakthrough Street at a Dead End



### クロイツベルグ

クロイツベルグ区は、現在の中心地ミッテ区の南側に位置する。壁構築時代は西側に属していたが、「ベルリンの壁の影にある街」と呼ばれていた通り、北側から東側にかけてベルリンの東西を隔てる壁が立ちはだかっていた。このエリアには四半世紀の間、北と東がなかったのである。

冷戦時代の戦勝国による分割の線引きも矛盾していた。プロイセン帝国時代につくられたフリードリヒシュタットでは、南はメーリング広場までフリードリヒ通りが伸び、ここを終点として城壁がはり巡らされていた。にもかかわらず、その中間地点のチマー通りがソ連とアメリカの境界線に当てられたのだ。このエリアにおいて、東西の壁がもたらした影響の方が、プロイセン帝国時代の城壁よりも大きかった。歴史ある南フリードリヒシュタットは、クロイツベルグ区に属し、北部分とはまったく違う発展を遂げるようになった。

街の果てにあって、通常の都市機能をはたさない境界際のこのエリアでは、閉鎖された建物や空家が多く、家賃も安かった。またこの付近は、「クロイツベルグ・ミクスチャー」と呼ばれる通り、19世紀から住宅と軽工業が混在する街であり、これらのロフト空間がアーティストのアトリエに最適だったこともあって、多くの若者やアーティストが集まった。70年代には、壁に接していたモリッツ広場の工場跡のギャラリーがサロメを中心とする「新野獣派」の居城となった。しだいにここは新しいアートグループによるギャラリーの街となり、アートと密接するカフェ文化を生んだ。そして壁が開放されて東への門が開かれ、その拠点が旧東のミッテやプレッツナーベルグにかわるまで、ここは西ベルリンの最も刺激的な場所だったのである。

またこのエリアの忘れてはならない特徴として、外国人労働者の街の顔がある。戦後、クロイツベルグは、トルコ本国のイスタンブール、アンカラ

### Berlin Topography 2

チェックポイント・チャーリー付近、フリードリヒ通りとコッホ通りの交差点から北側（ミッテ）を見る。右に建つのは壁崩壊前に計画されたピーター・アイゼンマンのIBAによるプロジェクトであり、左側の平板の屋根をもつ建築はOMAによるもの。北に進む道路の中心に、ソ連軍の兵隊のポートレートが立っている。この反対側から南側を見ると、アメリカ軍の兵隊のものが立つ。壁構築時代、ちょうどここがチェックポイント（検問所）であり、アメリカとソ連の軍隊が機関銃を抱えながらお互いの領域を見張っていたことを意味する。ベルリンの写真家フランク・ティルの作品。当時ここから先、クロイツベルグに北はなかった。現在見る北への見通しは永遠である。





に次ぐ第3のトルコ人街となった。人口密度の高いこの街では、60年代から70年代にかけて多くの住宅団地が計画された。とくにクロイツベルグ北部からメーリング広場にかけては、伝統的なエリアであるにもかかわらず、爆撃によって壊された一切の歴史様式の建物に代わって、中廊下式の高密度な中高層アパートの開発が行われた。ベルリンの歴史的なレギュレーションにまったく沿わないこの付近の都市風景は、どの街でも見られる都市周辺団地のようでもある。

この時の反省と経験の上に立ち、再び伝統的な中庭式の閉じた街区の「批判的再構成」によって都市をつくり直そうとしたのが、87年に行われた「IBA」だった。そして、この計画の重要な対象地区がクロイツベルグに置かれたことは、当時の壁の存在と無関係ではない。OMAやピーター・アイゼンマンの店舗付き住宅ビルが、機関銃を抱えたアメリカ軍の駐屯するチェックポイント・チャーリーのすぐ隣に建ち、ザハ・ハジドの壁の

断片を呈した建築も境界線の際に計画された。これらの建築が、南側から東ベルリンをうかがう姿勢を見せて計画されたことは注目に値するが、ひるがえってみれば、壁があったからこそこれらの建築が生かされた、と考えることもできる。「IBA」の最後のコンペで1位に指名されたダニエル・リベスキンドの〈シティ・エッジ・プロジェクト〉は、その過激さゆえに実現にいたらなかった。しかし、その提案が壁崩壊直前に、壁に隣り合わせたクロイツベルグの境界近くでなされ、壁の崩壊とともに消えてしまったという点で、これも壁によって生かされたプロジェクトとして指摘できる。さらにその後計画された「ユダヤ博物館」は、今年完成したばかりであるが、この建物をとってみても、当時は壁を意識してその南側に計画された。しかし壁の崩壊によって位置性の意味を失い、今では既存のベルリン美術館の増築という場所のカテゴリーに取り込まれてしまったという感が強い。

また、クロイツベルグとミッテの境界線沿いには、現在工事進行中のピーター・ズンドーによる〈トポグラフィ・オブ・テラー〉が、もとナチスのゲシュタポ本部などの建物があった跡地にドキュメンテーションセンターとして計画されている。それらの建物の基礎が残る反対側には、ちょうどその基礎の輪郭に沿って東西の壁が今も建つ。それはナチス独裁も冷戦もベルリンにとっては隣り合わせの悲劇だったことを象徴する。そしてこの建築もまた、それまでの歴史をも含めた「壁」へのオマージュに他ならないのである。

このように、このエリアの発展や特徴は壁とともにつくられた。壁がなくなった今、クロイツベルグは砂漠に放り出されて方向性を失った迷い人のようにさまよっている。壁によって生まれ消えた街が、ベルリンの壁の影から離れ、日の当たる場所を見つけることができ始めて、本当の意味での壁が崩壊したことになるのではないかと思う。



## 歴史的なファサードの埋め戻し パリ広場・フリードリヒ通り

ベルリンの中心部を支えるふたつの大通りは、  
18、19世紀様式のファサードで占められ、都市の威厳を代表していた。  
後に爆撃にあい、東ドイツに放置されくずれていったこの街区は再び都市の中心に返り咲く。  
そのファサードはどんなカタチで再生されるのか？

# Renovation of Traditional Facade PARISER PLATZ + FRIEDRICHSTRASSE

Berlin Topography 3



パリ広場のファサード、1890年

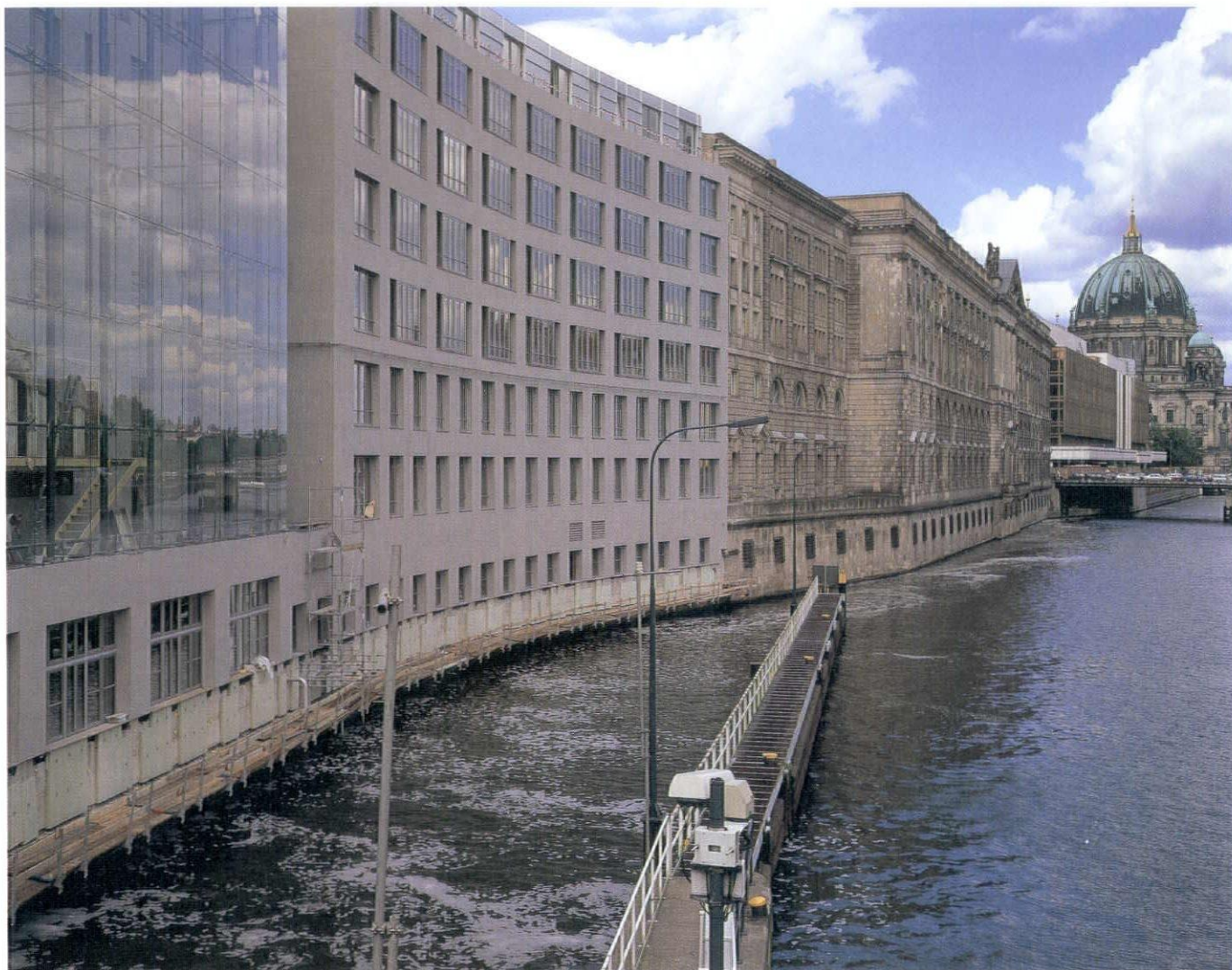
上左：パリ広場からブランデンブルグ門（1791）を見る。  
これは、プロイセン帝国首席建築家であったカール・ゴット  
ハルト・ラングハンスによって設計されたギリシャ復興様式  
の建築。崇高なイメージを持つギリシャ建築は、当時のプロ  
イセン帝国の威厳を示すための恰好の様式であった。その両  
端には、城壁の関所として建っていた「ハウスゾマー・ハウ  
スリーバーマン」が再現された。（1998）設計はヨーゼフ・バ  
ウル・クライフスで、現在、展示会場として使われている。  
上右：パリ広場から北西を見る。正面に見えるのはマインハ  
ルト・フォン・ゲルカンによるドレスナーバンク。ファサード  
はあくまでもブランデンブルグ門のモジュールに沿って決  
められている。建物内の中央には、大きな円形のアトリウム  
があり、土日にはイベントやパフォーマンス空間として使わ  
れることもある。

徹底的な遵守

Thorough Observation



# Gradations of History



ベルリン中心部、1920年

シュプレー河沿いの旧城跡付近に建つ、すべて時代背景が異なった建築群。手前から、新しく建てられたグラスファサードの工業連盟ビル（1999）、プロイセン時代の旧蔵舎であった国立図書館（1669）、旧東時代のバラスト・デア・パブリック（1976）、ネオバロックとネオルネサンス様式の混ざるベルリナー・ドーム（1905）。



フリードリヒ通りから南東を見る。中央に見えるのは、イオ・ミン・ペイによるカルティエ206。縦ラインを強調したファサードと横使いの石、そして夜になるとボーダー状に光るライトアップが20年代の古き良き時代の建物を思い起こさせる。南側にはO. M. ウンガースによるカルティエ205、北側にはジャン・ヌーベルによるカルティエ207が建つ。これら3つの建築は地下のショッピングモールでつながっている。20世紀初頭、この辺りにあった古いアーケードの名に因んで「フリードリヒシュタット・アーケード」と呼ばれている。



#### バリ広場+フリードリヒ通り

18世紀初頭のフリードリッヒ・ウィルヘルム一世の治下、ベルリンは大きく西に広がった。ウンター・デン・リンデンを東西軸として西はバリ広場のブランデンブルク門まで、フリードリヒ通りを南北軸として南はメーリング広場まで拡張され、フリードリヒシュタットが建設されたのである。そしてこの時代、カール・フリードリヒ・シッケルによるアルテス・ムゼウムやブランデンブルク門を始めとする、プロイセン帝国の軍事的スペクタクルとなる新古典主義様式の建築が建てられていった。

このような壮大なパースペクティブに基づく都市計画は、20世紀に入ってもこのエリアで続く。ムゼウムスインゼルに建つペルリナー・ドームは、もともとシッケルの設計による教会であったが、ネオルネサンスとネオバロック様式の入りまじった現在のドームに建て替えられた。ドームの北側

に建つベルガモン美術館のデザインは、ギリシャ様式の更なる復興であった。このエリアに限らず、今世紀初頭、ベルリンでは歴史復興様式が建築の主流となっていた。歴史様式主義の時代を「シュタイネルネベルリン（石のベルリン）」時代と呼び、現在ベルリンの町並みを形づくっている建物のほとんどがこの時代に建てられたものといえてよい。

時はすでにアールヌーボーを越え、近代化、モダニズムという新時代の幕開けを迎えていた。ベルリンでは、ドイツ工作連盟の推進者、ペーター・ペーレンスのAEGタービン工場が近代建築史上に出現する一方で、19世紀末までの様々な様式を折衷させた歴史様式建築が主流をしめ、少なくとも今世紀末現在のベルリン建築のレギュレーションのプロトタイプをつくったのである。

ブランデンブルク門前のバリ広場は、フリードリヒシュタット建設時につくられた城壁前の広場であり、正方形の幾何学形をもつ。東西壁構築中

は、境界線に接していたこともあって荒地のまま放置されていたが、壁崩壊後、バリ広場の新プロジェクトが計画され、そこでは徹底的な歴史の様式に準ずる規定が定められた。

例えば、各建物の軒の高さは、ブランデンブルク門のエンタブラチュアの高さによって20mと設定され、軒部分にはギリシャ様式のフリーズに代わる段差を持つことが強要された。バリ広場からウンター・デン・リンデンに面する建物については軒高20mに加えて最高高30mが許容されている。また、ファサードの開口部の許容面積は、ブランデンブルク門よりも少ないことを原則として70㎡未満、かつ壁面全体の30%を限度とし、開口部のピッチもブランデンブルク門の柱のそれに合わせて2.5～3.6mに決められた。その他、外壁材もブランデンブルク門に準じて、明るいオーク系かグレーの系の砂岩が使われることを原則とした。

このようにバリ広場は、高さや壁面線規制など



# Injection of Distinctive Modules



フリードリヒ通り、1999年



フリードリヒ通り、1898年

の細かい建築条例をもつベルリンの中でも、最も厳格で保守的なゾーンであるといえる。新しいプロジェクトの中には、過去様式の組み合わせを代えただけの時代錯誤の建築や、ホテルアトロンのように20世紀初頭の建物をそのまままったく新しく復元したりヴァイヴアル建築が建つ。そこには、ブランデンブルク門に見下ろされた歴史的な「パリ広場の再復古」という目的がある。

ベルリンの重要な南北軸として発展したフリードリヒ通りは、戦前、歴史様式の商店やシアター、デパートなどが立ち並び賑やかな目抜き通りであった。しかし、戦争による爆撃でこの通りの建物のほとんどが破壊されてしまい、旧東時代はその歴史的重要性を見い出されることはなかった。

壁崩壊後の最初の大規模開発となったフリードリヒ通りでは、バロック時代や歴史主義の町並みを基準として軒高22m制限や昔の区画制りが厳守された。しかしながら計画されたオフィスビルの多くは、エコロジーを考慮した二重ガラスファサードの新しい工法が取り入れられるなど、パリ広場とは違った様相を見せている。

フリードリヒ通りで再開発が行なわれたフリードリヒシュタット・アーケードでは、3つのブロックの建物がそれぞれジャン・ヌーベル、イオ・ミン・ペイ、O.M. ウンガースによって計画された。

これらの建築は地階のショッピングモールのアーケードでつながっている。一番北側に建つジャン・ヌーベル設計のカルティエ207では、地下1階と4階の中央部分にフランス系デパートのギャラリーラファイエットが入り、その他はオフィスと住宅である。ここでも室内の環境を調節するためにダブルファサードが用いられており、表面には熱線吸収のための黒ガラスが使われている。夜になると、黒く沈んでいたファサードは内側から光が放たれ、中の表情を浮かび上がらせて宝石箱のように輝くという仕掛けになっている。

また、フリードリヒ通りから東に入った通りでも一際目立つファサードのプロジェクトが完成している。事務所、飲食店、住宅が入る、原色を使ったカラフルな着色がなされたアルド・ロッシ設計によるブロックがそれである。彼のデザインでは、建物の間口が細く分割され、それぞれに20世紀初頭のベルリンのヒストリズム様式の建物がコラージュされたように並んでいる。中には古代ローマ様式風のものも混じっているが、ここでは時代は重要ではなく、様式を真似るという手法が必要なのだ。そういう意味でこのロッシの建物は、ヒストリズムに傾倒したベルリンの建物を皮肉ったパロディのようで興味深い。

このように、フリードリヒ通りでは、ベルリン

の歴史的な南北軸であるにもかかわらず、ウンター・デン・リンデンの町並みやパリ広場に見る新しいプロジェクトに比べて、自由な試みが行われている。そこには、商業建築やオフィスビルが近代的な技術革新とともに急速に発展しているという、時代の流れに沿った理由がある。フリードリヒ通りでは、歴史主義が必然の建築様式として横行していた1912年にも、ミース・ファン・デル・ローエによって斬新なガラスのオフィスビルが提案されたという伝統があった。当時は工法的に建築不可能であり、実現には至らなかったが、ミースのガラスの摩天楼計画は、現在のオフィスビルのプロトタイプを提示していたと同時に、この通りの方向性を予言していたといえる。



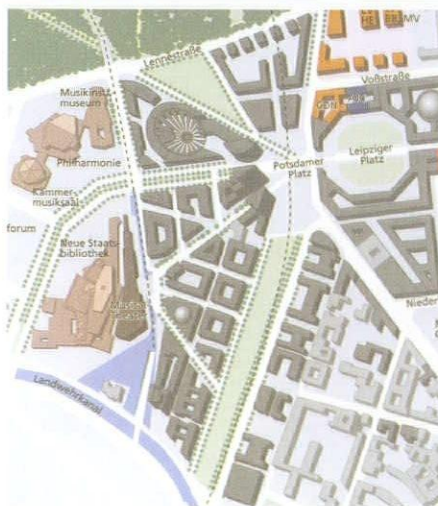
## 中心街の蘇生 ポツダム広場

ベルリンがかなり元気だった1920年代の繁華街は、その分東西分裂後の悲哀の象徴となった。  
この場所の復活はベルリンそのものの復活を暗示する。  
したがってこの広域街区の再生は、ベルリンの「いま」の都市づくりの態度を示すモノだ。



### 次世紀の中心街区

タイムラーベント・プロジェクトの中にあるマレーネ・デードリヒ広場。ここから東につづく旧ポツダム通りによって、ポツダム広場と結ばれている。広場前の右側の建物は、レンゾ・ピアノによるシアターとカジノ。その後ろ側（西側）には、ハンス・シャロウンによる国立中央図書館が建つ。この広場の周りにはその他、I-MAXと呼ばれる3Dスクリーンのシネマや映画館、レストランやバー、ホテルなどが立ち並び、新しい文化の中心としてにぎわいを見せている。



上：ベルリンの壁があった時代のポツダム広場、1984年  
下：ポツダム広場、1903年

**Structure of City Center  
of the Coming Century**



# Building Up a City Center POTSDAMER PLATZ

Berlin Topography 4

## ポツダム広場

昨秋、計画から約十年もの歳月をかけて、ポツダム広場の「タイムラーベントプロジェクト」が完成した。残る二つのヘルムート・ヤーンのマスタープランによる「ソニープロジェクト」と、ジョルジオ・グラッシらによる「ABBプロジェクト」は、西暦2001年までの完成が予定されている。

壁崩壊とともに始まったポツダム広場再開発計画は、冷戦後の「一つのベルリン」をつくる構築事業として、また、規模的にはヨーロッパ最大の大工事現場として世界中の注目をあびた。月面のクレーターを彷彿とさせる工事現場、林立する60本ものクレーンを見たさに世界各国からの観光客が訪れ、ベルリンは奇妙な活気に溢れていた。未完成の街には、完成された都市よりも計り知れない可能性がある。そして未完成で断片的な状態こそ、ポツダム広場の、しいてはベルリンの歴史そのものだった。

20世紀初頭、ポツダム広場駅の鉄道はバりに通じ、この広場はヨーロッパ最大の交通量を誇る交差点広場として発展していた。その周りには劇場やレストラン、カフェ、キャバレーが立ち並び、時代はベルリンの「黄金の20年代」を迎えた。この時代がいかにベルリンにとっての最盛期であったかということは、現在の新しいポツダム広場を見てもよくわかる。ソニーセンター内に計画されているメディアテークのイメージにマレーネ・デードリッヒの初演映画「ブルーエンジェ

ル」が使われ、タイムラーベントプロジェクト内にあるメイン広場の名前を「マレーネ・デードリッヒ広場」とし、グランドハイアットホテルのインテリアに20年代のモダンデザインが多用されたりしているのは、黄金時代へのノスタルジックな回帰の他ならないからだ。

しかし、この華やかな時代の後に待っていたのはナチス台頭とこれにつづく大戦による徹底的な破壊だった。ポツダム広場は47年、戦勝国の分離管理のボーダーラインで真っ二つに分断され、その線引きの上に残る建物はさらに撤去されて更地になった。61年には「東西の壁」が築かれて、それから四半世紀の間、この広場には空白の時間が流れる。かつての「中心」は「果て」へと成り変わり、地雷の埋まる荒涼たる荒地地となって放置されたのである。

東西統一後、ポツダム広場で最初に行われた「タイムラーベントプロジェクト」では、マスタープランにレンゾ・ピアノ案が選ばれた。各ブロックでは、ピアノを始め、磯崎新やリチャード・ロジャース、ハンス・コロホフらが住宅、店舗、事務所、映画館、ホテル、シアターなどを設計し、ひとつの小都市を構成した。ポツダム広場の再開発プロジェクトは、ナチス台頭を端に発し、東側がソ連の支配下にあった一昔前の時代に終止符を打ち、ベルリンが再び新首都となり得るかどうかの20世紀最後のチャンスといわれた。そして、ポツダム広場再開発の計画の要となったのが、切り離されたベルリンをいかにつなぎ合わせることができるかということであった。



手前：国立図書館。奥：ソニー・センター



インフォボックス。工事中の広場を一望できる展望室

ピアノの案は、とくにポツダム広場の西隣の、東に背を向けて建つハンス・シャロウンの国立図書館などの既存建築物との縫合の重要性を説いたものだった。敷地の北と東のゾーンはマッシュヴなブロックで構成され、それとは対称的に、シャロウンの建物の前には自由な形態をした劇場とカジノが組み込まれている。これは東側に背を向いた図書館の「第2のエントランス」を意図してつくられた。その前には「ピアッツァ（マレーネ・デードリッヒ広場）」が置かれ、先のポツダム広場と旧ポツダム通りによって結ばれる。劇場、カジノ、広場は島のごとく水面に浮かび、その水面は南側にながれる水路とつながる。北側に配された緑は「ティアガルテン（都市公園）」と一体となって、自然を小都市に引き込むというコンセプトだ。

旧西側とどうつなぐかにおいて、この計画のコンペに参加したほとんどの建築家の提案が、ポツダム広場からのびる旧ポツダム通りを延長させただけだった。それに対してピアノの案は、ベルリンの歴史をつなぎ合わせることを最大のテーマにしたひとつの解答といえるだろう。

ポツダム広場にあるシアターでは、今年からベルリン映画祭の会場に使われることが決定し、そのプレミアレでは世界中の映画業界人やスターたちが顔を揃えた。現在、この広場には20を越える映画上映ホールが集まる。夜の長い夏の間は、西隣にあるフィルハーモニーの夏の休館に代わって、ほとんど毎晩のようにマレーネ・デードリッヒ広場で野外コンサートやイベントが行われている。この一体は黄金時代でもそうであったように、ベルリンの文化ゾーンとして再びにぎわいを見せはじめている。







冷戦時代、ハンス・シャロウンやミース・ファン・デル・ローエは、将来このポツダム広場が再び街の文化的中心地となるということを見込んで、当時西の果てにあった広場横の敷地に国立中央図書館やノイ・ナショナルギャラリーを計画したといわれる。かつての巨匠たちの先見の目は鋭く、その思惑通り、新しいポツダム広場の計画は彼らの建築を要とし、現在の建築家たちは故人とのコミュニケーションに最大の集中力を注いだ。しかしその意図とは裏腹に、モダニズムの巨匠たちの巨大な作品は、中心となったポツダム広場の横に並べられるより、だっ広い吹きさらしの荒地地にシンボリックに、挑戦的に背を向けてそびえ建つ光景の方が似合っていた。そしてそれこそが真意であったともいえるのではない。

ポツダム広場は、20世紀に繰り広げられた様々なレイヤが折り重なってできた小都市なのである。

上：ポツダム広場の南側に流れるラントヴェール運河から、敷地の南端に沿って建つ新しい建築を見る。中央に建つのは、レンゾ・ピアノによる高さ82mの塔を持つタイムラー・ペンツの主要管理棟。右端には磯崎新設計の事務所棟が見える。左端にあるのは、新しく計画された人工池の上にぼつと残る、20世紀初頭の歴史様式の建物。

右：レンゾ・ピアノ設計によるタイムラー・ペンツ主要管理棟と、その前に広がる人工池を見る。この建物内の中央にある高さ35mのアトリウムは、展示ホールとして使われるオープンな空間。中廊下を挟んで屋外とアトリウムに面する事務室が、これを口の字型に取り囲んでいる。塔の部分のファサードには開閉自由なガラスのルーバーが用いられているが、これらは設備環境を調節するためのダブルフェンスター（2重窓）。内側のガラスファサード（ペアガラス）との間にはキャットウォークを取り付けた中間層が設けられている。

Berlin Topography 4

Relations between  
New and Old Areas of the City







## スクラップ・アンド・ビルドされる街区 アレキサンダー広場

かつてコミュニストは既存の建築を一掃して

社会主義国家を象徴する広場をつくった。

いまベルリンはその既存の社会主義的広場を葬り、  
新たな都市を生み出そうとしている。



### コミュニズムの象徴

旧東時代に計画されたアレキサンダー広場に建つフォーラムホテルとショッピングセンター、そして駅を挟んで反対側に建つテレビ塔を望む。社会主義リアリズムの新理論とともに東ドイツの首都として国家建設計画が大々的に行われたのは、この付近周辺とここから東にのびる大通り、カール・マルクス・アレー（旧スターリンアレー）にかけてであった。



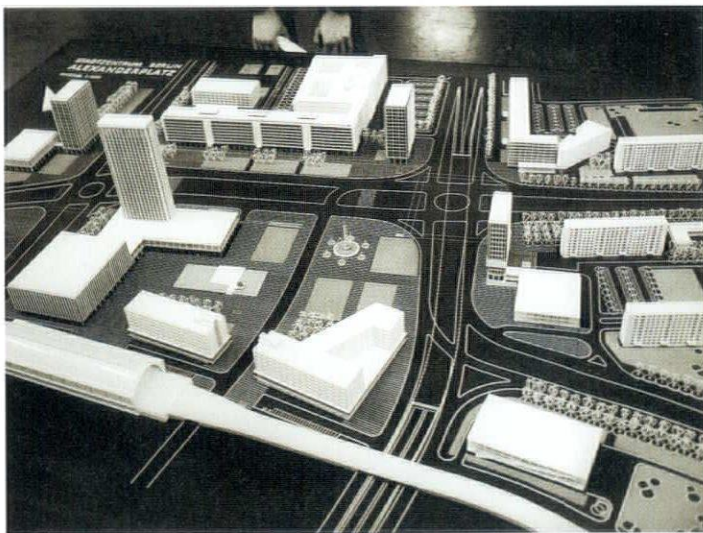
**Symbols of Communism**

**Berlin Topography 5**





アレキサンダー広場、1898年



アレキサンダー広場計画模型、1964年



アレキサンダー広場計画コンペ優勝案／ハンス・ホルホフ

Scrap-and-build Square  
**ALEXANDER PLATZ**



## Dynamism through Historical Layers

中世時代のマリエン教会（1314）と旧東時代に建てられたテレビ塔（1972）、そして右側には「赤の市庁舎」と呼ばれる市役所（1869）が建つ。ベルリンの起源は、今日博物館島と呼ばれるシュプレー川に挟まれた中洲と、この周辺から始まった。現在、この周辺には旧市街地の面影は皆無といえる程残っていないが、マリエン教会や南に下がったところに今も建つニコライ教会（1380）は、中世の旧都市地図の上でもその位置を確かめることができる。



### アレキサンダー広場周辺

アレキサンダー広場は、ブランデンブルグ門からウンター・デン・リンデンを東に通じ抜け、博物館島を越えて、旧東の象徴的建築であるテレビ塔のさらに東側に位置する。旧西の中心街からすれば東の果てであるこのエリアは、ベルリンの最も古い旧市街地であり、歴史的につねにポーランドやロシアといった東欧諸国のための出入口であった。

20世紀に入り、この歴史的な広場はその容貌に変化を見せ始める。1929年、アレキサンダー広場の開発計画コンペが行われ、これに参加した当時の偉大なモダニズムの建築家、ミース・ファン・デル・ローエやリュックハルト兄弟、ペーター・ベーレンスらは、ダイナミックな建築と大交差点広場を組み合わせながら、まったく新しくこのエリアを作り替えることを提案した。現在建っているのはペーター・ベーレンスの案で、一つは

戦前のものであり、もう一つは96年に新しく改修されたものである。

このように、1920年、30年代を通じて多くの建築家がこのエリアの開発に取り組んだが、結果的にはナチスの台頭や戦争という時代の流れのため実現できなかった。しかし考えてみれば、すべてを壊して作り替えるという破壊的発想の方が、後の戦争による破壊よりも先攻していたともいえる。そしてこれらの名高い計画案をきっかけとして、完全に取り壊されては作り替えるという、このエリアの歴史的特徴ともいえる転回がくり返されることになったのである。

ベルリンは戦争によって都市の8割りが破壊されたといわれるが、その後の旧東時代の破壊的な計画によるものも少なくない。例えば、ベルリン城は、半壊したものの致命的な打撃はまぬがれたが、旧東の新しい開発地域に組み入れられて破壊された。跡地には「バラスト・デア・パブリック（人民宮殿）」という会議場がつくられ、その建物

からアレキサンダー広場に至るまでの幅270m、長さ800mのゾーンは、すべての建物がスクラップされて、テレビ塔や公園広場に成り替わったのである。

アレキサンダー広場では1964年にコンペが行われたが、ペーター・ベーレンスのビルは残されたものの、あとは新しい建物、新しいスケールがあるばかりであった。ここを起点として始まるカール・マルクス・アレーは、幅120m、長さ1.8kmの統一的な街路が交差配置された巨大な大通りだ。これらはすべて、西のイデオロギーに対抗する東の新しい都市計画であり、政治的な宣伝キャンペーンの要素が多い。このとき、このエリアは戦争破壊に次いで、政治破壊を受けたのだった。

壁崩壊後、またしてもこのエリアの転回が、新首都ベルリンの重要な東の門という形で持ち上がる。1993年、世界中から招待された18人の建築家たちの間で、アレキサンダー広場を対象とした2段階選考に分かれるプロポーザルコンペが行わ



## Urban Concentration in Eastern Berlin

チェックポイント・チャーリー付近から旧東を見る。最も高く見えるのは365mのテレビ塔。将来はこの後ろのアレキサンダー広場に、ハンス・コルホフによる12の摩天楼が建つ予定だ。ベルリンで最も古いエリアであるアレキサンダー広場周辺には、新しいスケールがあるばかりである。



れたのだ。このエリアの再開発計画は、ヨーロッパ一大きい現場といわれたポツダム広場を上回る、戦後ドイツにおける最大規模のプロジェクトであった。

今日、旧東時代に建てられた既存の建物は、建築造形上の失敗作と見なされている。それは美学的な観点よりもベルリンの政治的方針からの見方が強い。そのためか、このコンペに参加した建築家のほとんど全員が、既存のすべての建築を取り壊すという案を提示した。その中で唯一、旧東の体制や造形は批判できてもそこに住む人々の生活は否定できないと考えたのが、コンペに参加した建築家の一人、ダニエル・リベスキンドであった。

彼の案は、都市を再び総破壊してはならないという考えの下にあった。全体を変えようというのではなく、現在あるものに追加と変更を提案するものであった。交通路は変更せず、新しい街路はつくらず、新たな方法で既存の街路の再利用を考えた。旧東時代の高層ビルやプレハブ式建物も単

純に取り壊しの対象とせず、エコロジ的な配慮の下に全体へと組み入れられた。「スクラップ・アンド・ビルト」の全体主義的な計画法を否定し、代えて混在的で多元的な建築をつくることを提案しているという意味で、この広場の歴史的な反復にペリオドをうっている。しかし結局、たった1票の差でこの案は二等となり、この案と対極をしますハンス・コルホフの計画案が最優秀として選ばれたのである。

彼の計画では、アレキサンダー広場は整然たるグリッドに分けられ、その上に花崗岩でできた12の摩天楼が、同じ形、同じ高さで聳え建つというものであった。ベルリンの最新の開発計画であるポツダム広場さえ、厳しい高さ制限が厳守され中高層の風景を呈している中で、アレキサンダー広場計画の模型写真やパノラマパースは、ニューヨークの真ん中に林立する摩天楼を思い起こさせ、いかにも未来的な都市を想像させる。しかしその一方で、ベルリンの伝統的な外壁材料であ

る花崗岩で埋めるつくされているところや、街側に閉じた街区ブロック、あるいは高さを揃えるという計画方法は、まさにベルリンの懐古的歴史主義に倣っているのである。

このエリアの歴史的特徴からすれば、1930年代に提案されたようなユートピア的な計画が提案されてもよいはずであるが、結局、21世紀の新しいアレキサンダー広場の計画に選ばれたのは、全体を白紙状態に戻してから行われる歴史主義であった。全体性、究極性をも含む懐古主義、つまり、都合の悪い過去の記憶は徹底的にスクラップし、理想とする時代へとワープする「復古」なのである。そういった計画は戦争直前の独裁時代にすでにベルリンで行われたはずなのにである。「人が歴史から学ぶことができる唯一のことは、人は歴史から何も学ばないということである。」といったのはヘーゲルだった。歴史主義に傾倒したベルリンの建築は、本当の意味で歴史からは置っていないのかもしれない。



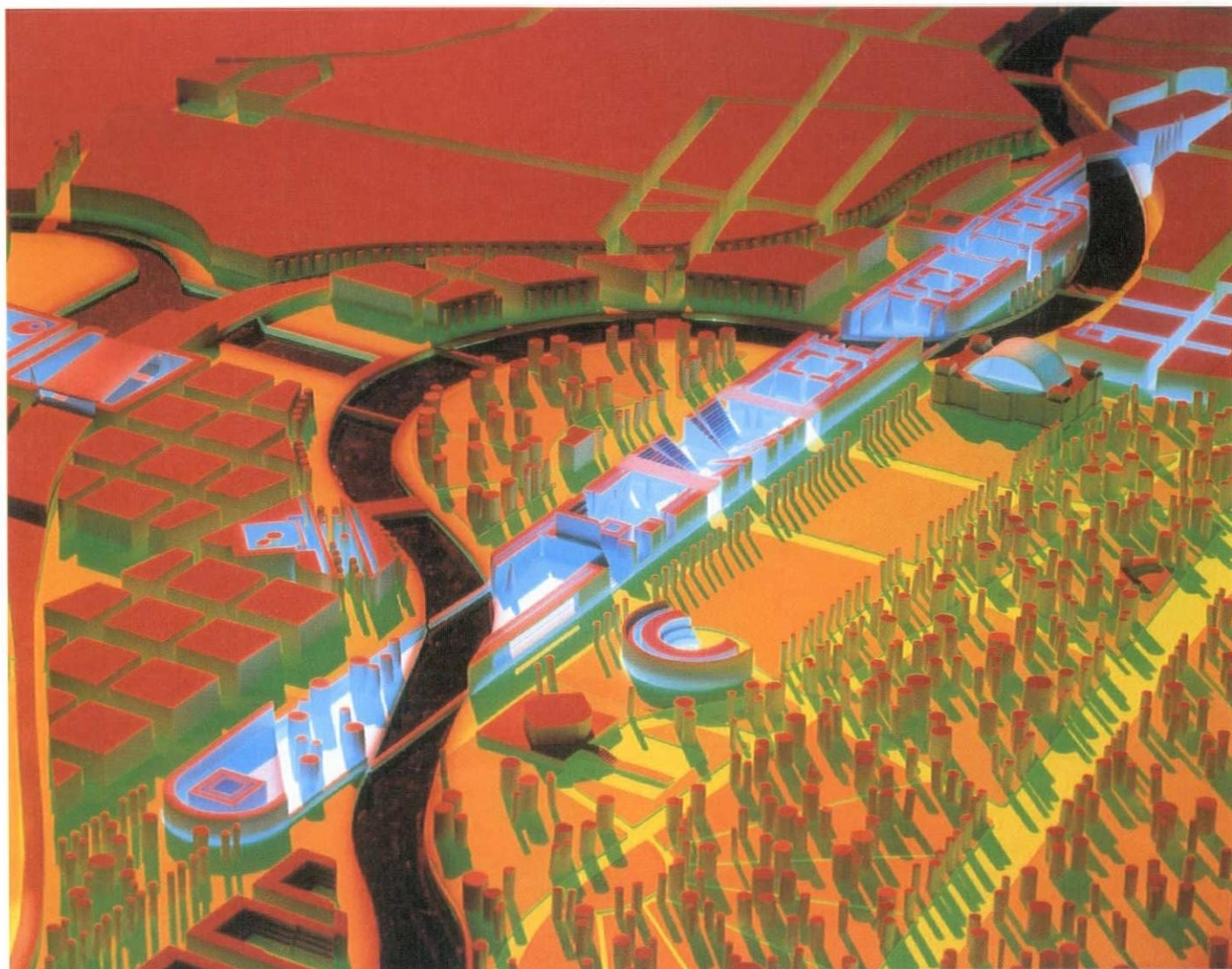
## 首都をコントロールする都市軸 シュプレーボーゲン

1920年「大ベルリン計画」の南北軸。

1939年ナチス政権下「ゲルマニア」計画の南北軸。

そして今回コンペで優勝したシュルテス計画案の東西軸。

首都機能を強化しようとするとき、たびたびこのシュプレーボーゲンに都市軸が画かれてきた。



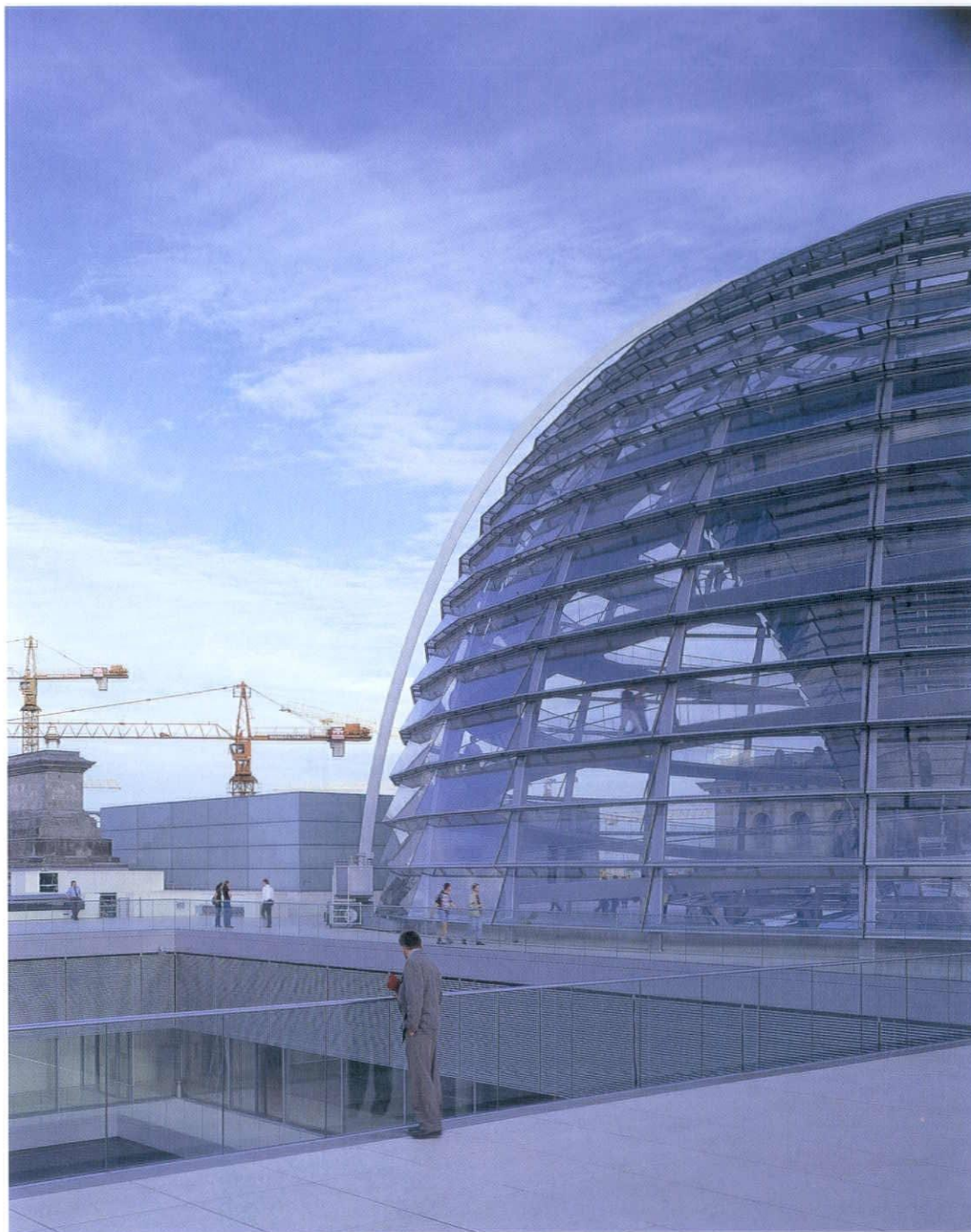
アクセル・シュルテス案

The Axis Controlling the Capital  
**SPREEBOGEN**

Berlin Topography 6



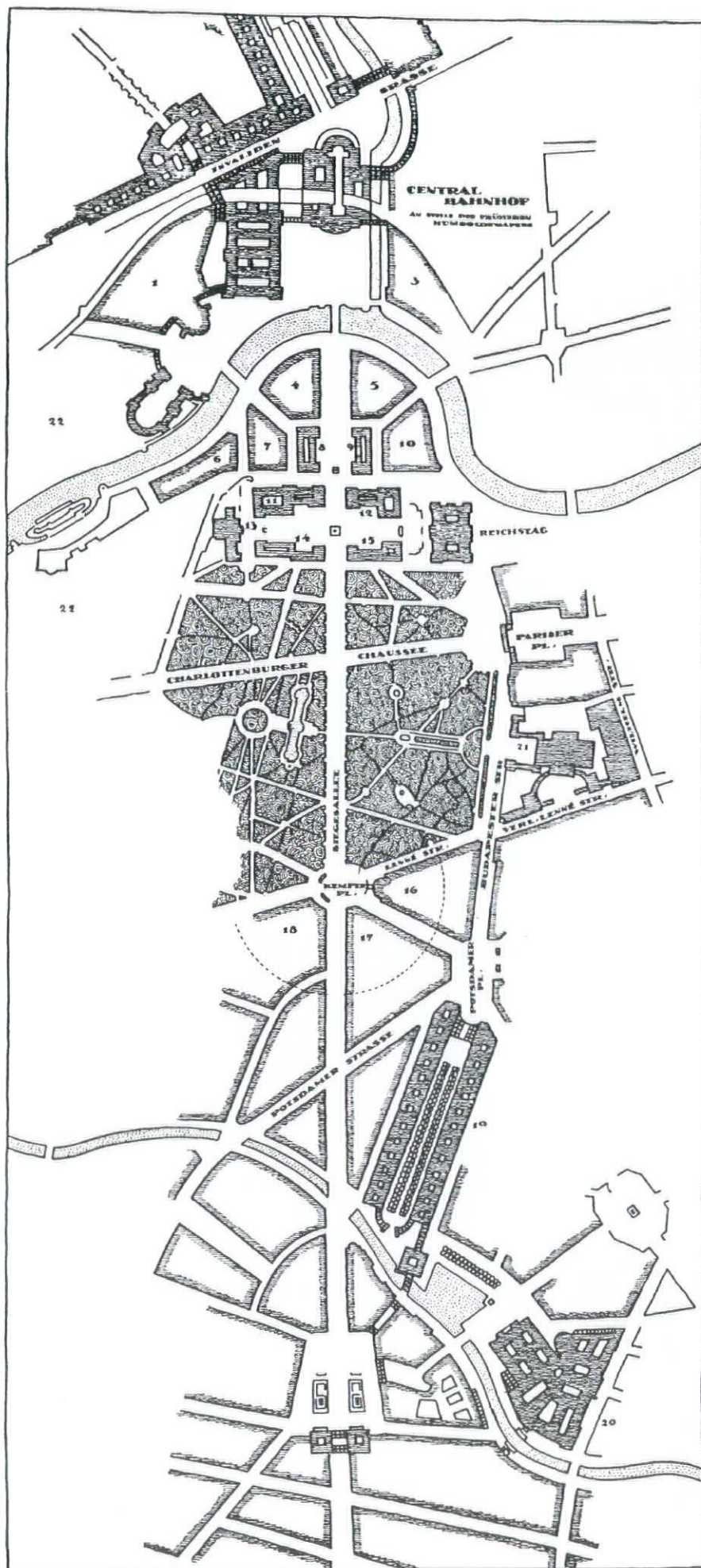
## The Pivot of the Axis



新しくなったライヒスターク。95年、アメリカの芸術家、クリストによる梱包パフォーマンスで銀色の布にすっぽりと包まれ、世界中の話題をさらったのは記憶に新しい。ビスマルク政権時代のドイツ帝国議事堂として建てられたライヒスターク（1894）は、あらゆる様式を結集した様式のオンパレードであり、当時の帝国ドイツの威厳を誇示していた。20世紀に入ってドイツ初の共和国であるワイマール共和国のための国会議事堂となるが、33年のナチス政権掌握からまもなく、ある放火事件によって炎上してしまう。ナチスはその放火を共産党員の仕業として共産党弾圧を強化するが、これがナチスの陰謀であったことに疑いの予知はない。そして、その時焼け落ちたドームは戦後も再建されることはなかった。東西統一後、再び首都の国会議事堂となることを機に、ライヒスタークは半世紀以上の歳月を経て、中央にガラスのドームを頂く姿を取り戻すことができたのである。



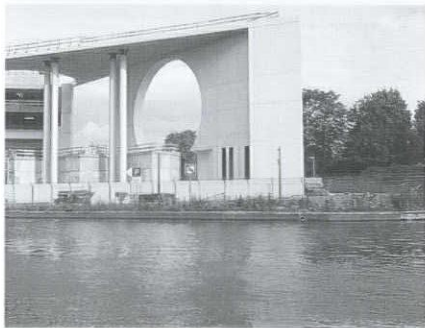




グロース・ベルリン計画

ブランデンブルグ門の西側には、ベルリンの「緑の肺」と呼ばれる25,000haの都市公園、ティアガルテンが広がっている。そしてその北側に流れる弓形のシュプレー川に囲まれた一体をシュプレーボーゲン地区と呼ぶ。この辺りは、共和国広場前にあるドイツ連邦議会議事堂のライヒスタークをはじめ、連邦総理府、連邦議員住宅などの行政施設が集中して計画されているエリアだ。さらにこの一体の北側には、ベルリンの中央駅となるレアター駅とその周辺の敷地において、約45haのおよぶ大規模開発計画がフォン・ゲルカンとO. M. ウンガースの設計によって進められている。またティアガルテンの南側は、各国の大使館通りとして、北欧大使館を始めとする新しい建築が次々に建ちはじめている。ここは、連邦諸官庁の本格的な首都移転を控えて、いまベルリンで最も大きい大工事現場を抱えるエリアなのである。

シュプレーボーゲンの東端に建つライヒスタークでは、99年春、中央の新しいガラスドームと





ともに改築工事が完了したばかりだ。設計はサー・ノーマン・フォスターによるもので、ガラスドームの内側にある螺旋上のスロープからはベルリンが一望でき、展望台として開放されている。ライヒスタークは時代を経て、その姿を変えながらドイツの過去100年の歴史を目の当たりにしてきた。この前の広場は、その都度「国王広場」になったり「共和国広場」になったりと国家体制に合わせて名前を代えた。そしてここで繰り広げられた数々の計画は、現在工事中の新プロジェクトを除いて、そのほとんどが現実に至らなかった。それは、このエリアが行政の中枢ゾーンとして最も可能性を持っているということを示すと同時に、ベルリンの出来上がることのない不連続な歴史性を物語っているともいえる。

中でも、20世紀に入り、このエリアで行われた都市軸のプランニングは都市の方向性を位置づけていて興味深い。壁崩壊後、新首都として政府諸官庁の拠点となるシュプレボーゲン計画の東

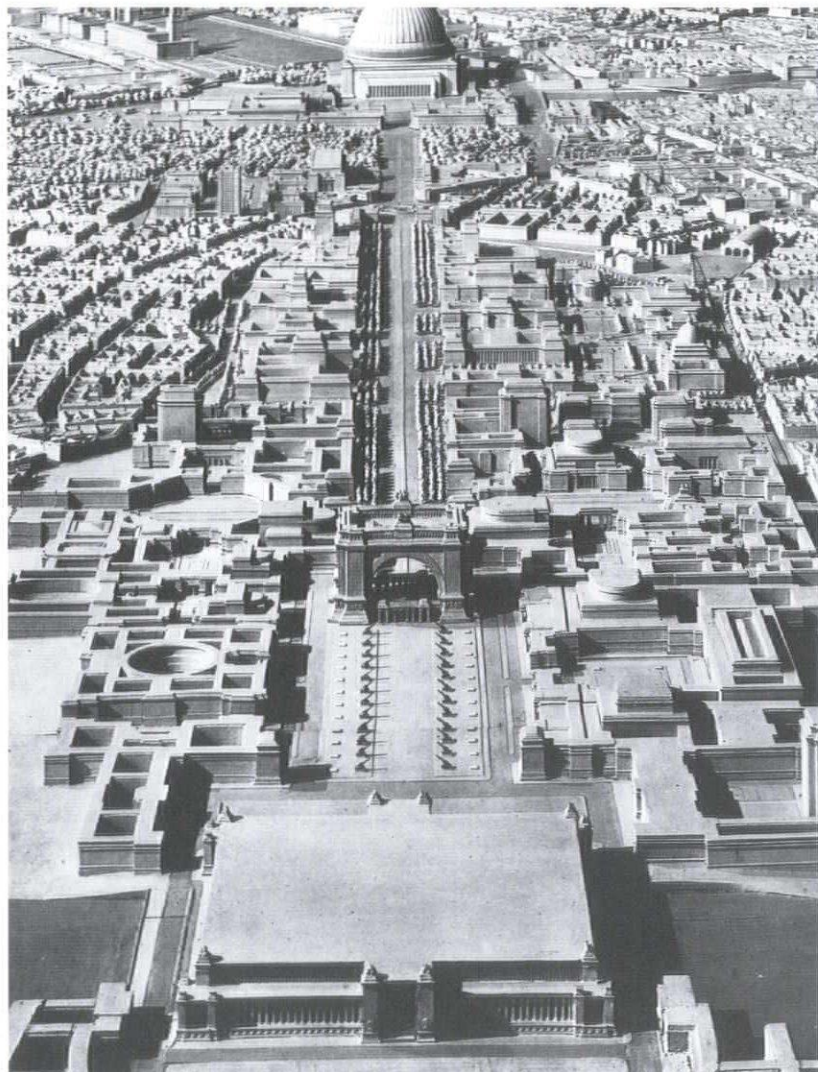
西軸と、終戦前に行われたナチスのゲルマニア帝国計画の南北軸がその代表例といえよう。

ヒトラーの第三帝国「ゲルマニア」は、1950年にその完成が予定されていた。新しい都市の中心軸が、シュプレボーゲンから南に伸びる7kmの巨大な南北軸だったのである。ナチスの建築家アルベルト・シュペアーによる1939年に行われた計画の要点は、ウンター・デン・リンデンからさらに西のティアガルテンへと伸びる東西軸に対し、フリードリヒ通りをはるかにしのぐ巨大な南北軸をつくることであった。南への「華麗なる道」は、ヒトラーのあこがれの都市であった古代ギリシャ、ローマにつづく道でもある。その軸の起点になるのは、ライヒスタークの西側に建つはずであった「グロース・ハレ」と呼ばれる、15～18万人を収容するという315m四方、高さ290mの大ホールであった。この大ホールの上には、内側の直径が250m、高さ220mという巨大なドームが計画されているが、このメガロマニア

ックなまでに巨大なスケールを知るには、当時の計画模型の中に小さく建つ既存のライヒスタークを見つけるとよい。「グロース・ハレ」を中心とし、そこからは南に計画された壮大な凱旋門を経て、南の駅やその東に位置し現在も利用されているナチス様式のテンベルホーフ空港に至るまで、ナチス中枢機関の施設が大通りの両側に建設される予定だった。

ナチスのゲルマニア帝国計画が行われる前に、すでにこのような南北軸が計画されていたということはあまり知られていないだけに興味深い。ベルリンは20世紀に入って人口が急増し、無制限にそして無秩序に膨らむ街をコントロールするため、「グロースベルリン（大ベルリン）」計画と呼ばれる数々のコンペや提案が行われた。その中でとくに注目されたのが、1920年のマルティン・メッヒャーによる南北軸の計画であった。ここでも、南北軸はプロイセン時代の東西軸に対して計画され、シュプレボーゲンを行政の中枢エリアとしてその起点としている。とくに、ポツダム広場の南にあるポツダム駅やアンハルター駅などを拡大して新しくすることを提案し、ベルリンと世界とをつなぐということに重点がおかれた計画であった。この計画とゲルマニア計画とはスケールもまったく違っていて、これらを同じ計画としてひとまとめにすることはできないが、これらの二つの計画がそれぞれ二つの世界大戦前後に行われたということは偶然ではないだろう。また、どちらも世界に目を向けて計画され、しかもその世界というのは当時のドイツにとって「南」にあったということは少なくとも共通していたといえる。

しかし、冷戦による「ベルリンの壁」が、再び東西軸の重要性を決定的にしたのだった。東西統一後に行われたシュプレボーゲン地区のコンペで一等になったアクセル・シュルテス案では、連邦総理府を始めとする諸官庁の建築都を、昔の東西の境界線をつなぐように東西に一直線の帯状に配置した。これらの施設は、連邦総理府、連邦議会、連邦首相官邸とその庭園、そして中央部の都市公園として開放されたフォーラムから構成されている。シュルテスはこの帯状の計画を「ブント（絆）」と呼び、ミッテの「街」とティアガルテンの「緑」、あるいは「東ベルリン」と「西ベルリン」をつなぐ縫合の役目を担わせただけだ。このエリアで計画された都市軸は、ベルリンの複雑な歴史という迷宮から導いてくれるアリアドネの糸として、20世紀末、ようやくその実現がなされたのである。



ゲルマニア計画



## ツォー駅・クーダム

旧西ベルリンの中心地であったこのエリアは

商業資本主義的まちなみがつくられていた。

統一後もその表情は変わらない。伝統と共存する商業主義の風景。

Berlin Topography 7



商業主義的風景 1

ツォー駅の南側から東を望む。この周辺は戦後、西ベルリンの新しい中心地として整備された。全面の敷地には、リチャード・ロジャースによる「ツォー・フェンスター」が計画中だ。120mのタワーを頂く駅前ビルとして2001年の完成予定。

# Capitalism Coexisting with History ZOO, KUDAMM

Landscape of  
Commercialism 1

左側に建つのは半壊した姿を今も止めるカイザー・ウィルヘルム教会（1895）。右側に建つのは戦後増築された鐘楼であるが、現在修復期間中でその費用を捻出するため、一時的に広告塔に成り変わっている。写真は化粧品メーカー「レブロン」のものであるが、その広告期間が終わり、次はミネラルウォーター「エビアン」のペットボトルに変身した。113mの重要文化財である教会と、30cmのペットボトルとが同じスケールになって見える。コマーシャリズム的幻覚である。



# Landscape of Commercialism 2

Berlin Topography 7





# Landscape of Commercialism 3

Berlin Topography 7

クーダムから北側にあるツォー駅の方向を望む。角に建つのは戦後すぐに建てられたカフェ・クラutzラー。その左には、このカフェのコンプレックスになる「ノイエス・カンツラー・エッケ」が現在工事中である。ヘルムート・ヤーンによる設計で、17階建の建築にオフィスや店舗、住宅等が入る予定である。



## ツォー駅・クーダム周辺

旧西ベルリンの繁華街クーダムで10年前に始まったテクノの祭典「ラブパレード」は、今や15万人が参加するベルリン最大の夏のイベントである。東西統一とともに中心が旧東に移り、新プロジェクトの開発のほとんどが集中して、日ごと観光客の訪れるにぎやかな旧東に対し、この日はかりは旧西のパワーを見せつけた。東のミッテ区では警察が厳しく、このようなパレードは禁止されているのだ。今年は東はブランデンブルク門から、西はツォー駅の西にあるエルンスト・ロイター広場から出発し、中央の凱旋塔の天使の下で出会うという、旧西の中心をまっすぐに横断するルートをとった。

ツォー駅とクーダムの発展は、ベルリンの壁が引き起こした「ポジとネガ」の奇妙な反転によって生じたものであるといえる。戦前まで、ベルリンの旧市街地や繁華街は東に集中していた。とこ

ろが、かつての中心を東側に取られ壁が構築されたために、場末でしかなかったツォー駅が西ベルリンの中心となり、貴族の狩猟のための道としてつかわれたクーダムが繁華街に取って代わったのだ。こうして、旧西ベルリンのセントラル、ツォー駅とクーダムのウエストサイドストーリーが始まることになる。

ツォー駅の南でクーダムの起点となるブライシヤイド広場には、カイザー・ウィルヘルム記念教会が、半壊した姿を街の意志として止めている。この横には61年に増築された教会部分と鐘楼が建つが、この鐘楼が、いま大手化粧品メーカーの広告塔となって話題をよんでいる。工事用の50mの足場に広告用の覆いを掛け、鐘楼の修復工事費を調達しようというのだ。重要文化財でもある教会までがコマーシャルの覆いを被る。商業第一主義がモラルも覆ってしまうという、東では見られない西側独特の都市風景だ。

この広場を中心として周辺には高層のヨーロッ

パセーターやショッピングセンター、オフィスビルが立ち並ぶ。この辺りは戦争でほとんどが破壊され、60年代に新しく建てられたものが多い。クーダムでは、ベンツやBMWの展示場、ベルリンバンクの本社の横に、19世紀後半から20世紀初頭にかけてつくられた豪華な歴史様式の建築が立ち並ぶ。これらの建物の1階には、現在その9割以上が店舗として使われ、クーダムはグッチやカルティエなどの高級店が軒を並べるブランド通りでもある。

壁崩壊後にも、いくつかの新プロジェクトが進められている。ツォー駅の西側には、グリムショウ設計の「ルードヴィヒ・エアハルト・ハウス」が昨年暮れに完成した。商工会議所の増築であり、その他、エキビジョンスペースやフレキシブルオフィス、レストランなどが入る複合ビルである。その形から、「アルマジロ・ハウス」とも呼ばれている。また、ツォー駅の正面には、リチャード・ロジャースによる「ツォー・フェンスタ



# Super Composition



ー」の工事が進行中だ。店舗やオフィス、ビジネスホテルなどが入る駅前ビルであり、ツォー駅のアイストッとして120mのタワーがそびえ建つ予定である。クーダムをさらに西に歩くと、ヘルムート・ヤーン設計の「クーダム70」というガラス張りのビルがある。角地に建つこの建築の間口は2.5m。日本では間口の狭い店舗は少なくないが、街区割りの厳しいベルリンでは、このように狭い間口をもつ建築はおそらくこれだけであろう。全フロアが賃貸オフィスという貸ビルのあり方もベルリンではめずらしい。ベルリン唯一の「バブル建築」である。

このようにツォー駅・クーダム周辺では、建物の高さやボリューム、またそのコンセプトにおいて、東とは明らかに異なった都市がつくられている。しかし考えてみれば、歴史的建造物の修復と保存、教会を中心とした広場周辺の開発、過密したセントラル部分の高層化など、西側諸国では当然といえる都市計画が行われてきたのである。それ

が、再び東が中心になり、いま東で行われている歴史に基づいた街づくりが正当法とされて、西側の町並みは特異なものになったのである。

ウエストサイドシティが自己の位置を確かなものにしたのは、むしろベルリンの中心という肩書きを失った東西統一の後、ということもできる。封印されていたことによって空白の時間をもつ「東」とは違って、「西」では連続する時間を持ち、街の発展のおいても経緯という時間の流れをもっている。例えば中心が東に移ろうと、クーダムで軒を並べるブランド商店は東への移転は考えないし、高級住宅街はあくまでも西側のワンゼーとよばれる湖のほとりにある。西側の「資本」は依然として西にとどまっている。オペラハウスや国立美術館が東と西にそれぞれ一つずつあるように、ベルリンの中心もまた、東の「ミッテ」と西の「セントラル」のふたつがある。そして、そういう二つのベルリンという意識も、西と東の人々の中に見えない壁として今も残っているといえる。

**Berlin Topography 7**

クーダムの西端に建つ、ヘルムート・ヤーンによるオフィスビル。この建築がベルリンに建って異質なものは、高さでもなく形でもなく外壁の材料でもない。2.5mというベルリン一狭い間口である。隣には20世紀初頭に建てられた、閉じた街区ブロックの歴史様式の建物が建つ。



山下昌彦

### 「壁」があった頃

ベルリンに「壁」があった頃を、私はまだよく覚えている。国境の駅フリードリッヒ・シュトラッセには物々しい検問所があり、機関銃を持った東側の兵士が立っていた。東から西に向かう列車にはシェパードが放たれ、車輻の下に隠れて脱出しようとする輩がいなかったとチェックが行われていた。ヴィム・ヴェンダースの名画「ベルリン・天使の詩」(1987)の中で老詩人が呟いていた。ここは、ポツダム広場なんかじゃない。カフェ・ヨスティが無いもの。……大戦前ベルリンで最も交通が賑やかだった広場の付近は、殆ど廃墟のようになっていた。

西ベルリンの中心は既にツォー駅とクーダムで、西側の経済力を背景に股賑を誇っていた。他の西独都市に比べると極めて無秩序で猥雑な街ができていた。一方東ベルリンにはかつての銀座通りフリードリッヒ通りやシンケル等の名建築の並ぶウンター・デン・リンデンが属していた。そこでは大戦で破壊された建物は殆ど手入れされることも無く放置され、東欧独特の単調なモダニズム建築が壊れかけた古い美しい建築群の間を縫うように乱雑に立っていた。動の西と静の東、豊かさや貧しさ、すれっからしの無愛想と素朴な優しさ。西と東は様々な点で対照的で、然しどちらも何となく物悲しげだった。ベルリンの壁が無くなる日は永遠に来ないだろう、と誰もが思っていた。だから1989年、突如「壁」が無くなった時、全ドイツが、この奇跡に無条件で感激した。90年ドイツは再統一され、91年暫定首都ボンからベルリンに首都を移すことが可決された。当時の首相コールは、10年後のベルリンをパリを凌ぐような街にすると明言した。……それから8年たった。

### 「にぎり」か「ちらし」か

ヨーロッパ都市をどう理解するべきか? いささか唐突だが、寿司を比喻に使いたいと思う。最近の一般的な考え方は、に

ぎり寿司ではなくちらし寿司である。個々の建築は都市を構成するエレメント、さしずめネタである。にぎりというのは、建築や区域をできるだけ単一の機能で完結させようとする考え方を指している。ちらしの場合は、各要素の自立性はさほど重要ではなく、全体としてそれらがどううまく散らばっているかということの方が大事である、という志向性を指している。

ヨーロッパでは多くの都市で、官庁の建物や公共施設がかなり分散的に存在している。例えば同じ大学の2つの建物の間に平気でオフィスや住宅を挟み込む。商業施設、オフィス、住宅を混在させる。外観もちょっと見では用途の見分けがつかない。彼等は、故意にシャッフルさえする。そういう観点からすると、五目御飯に近いかもしれない。つまり、意識的に複雑にしているのである。そうすることによって、コミュニケーションの量が増える。交流、刺激、切磋琢磨が生まれ、文化芸術や政治経済が革新され、市民生活の楽しみが豊富になるというわけである。

ドイツでは市民が街づくりをすべて取り仕切っていく。市当局はいわば街づくりを市民から委託されている立場である。例えばベルリンでも都心に住む人は減っている。この事を一番憂えているのは、市民自身である。住民がいなくなれば街は死ぬ。都心は、郊外に住む人も含めて全ての市民にとって、生活上必要不可欠な存在であり、心の拠り処であり、ひいては大切な人類の共有財産でさえある。このあたり我が国の意識とは大分違う。

1970年代以降旧西ドイツの市民が支持して来た一般的な都心のテーマは、楽しい散歩装置を作ることである。公共施設が適度に散らばり、オフィスや住宅がうまく混ざり合い、公園や緑、イベントやマーケットの為の広場、ショッピングストリート、アーケードなどがばら蒔かれたちらし寿司なのである。これは元々ヨーロッパの都市の伝統的な考え方である。

この思想で整備されたヨーロッパの都市は、実際に住んでみると本当に楽しい。実によくできている。但し、こうした一種の全体主義にうまく対応することは、個々の建物の施主や建築家にとっては、大変な重荷である。見方によっては、これは「都市の呪縛」であるとさえ言える。

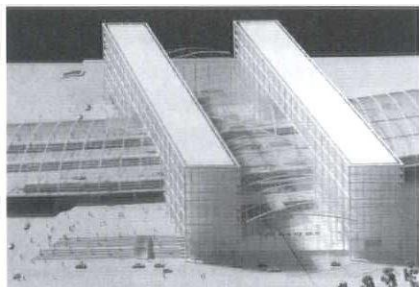
建築や建築群をある単一な用途で統一する事は機能的である。少なくとも効率が良い。東京の霞ヶ関、丸ノ内のような有り様を、私はにぎり寿司と呼ぶ。CIAM的とも言えるかも知れないし、アメリカ的であると指摘する人も居る。この考え方は、戦後から1970年代迄のヨーロッパを支配し、ロンドンにミルトン・キンズ、ドックランズ、パリにマルヌ・ラ・ヴァレー、デファンスなどを生み出した。最近ではリールが同じやり方に従っている。この北フランスの都市は、TGVの新駅と旧駅の間に、ヌーベル・コールハース、ボルザンパルクなどの興味深い単体建築を並べて新都心を作った。これはかなり壮観である。しかし惜しい事にこれらの建築間には、連繋は殆ど無く、トータルとして街になっていない。また、旧市街の方は元々魅力が乏しかったものが更にボロボロになり、すっかり寂れてしまった。

このにぎり寿司的な考え方は、戦後の一時代を画したと言って良いだろう。しかし、今では、ヨーロッパでは、市民の支持を失ってしまった。近年の都心のプロジェクトは、パリの革命200年も、ベルリンのIBAも基本はちらし寿司だ。伝統的な都市を、修理、再構築、再生するという文脈ですすめられ、そして取り敢えず好評を得ている。

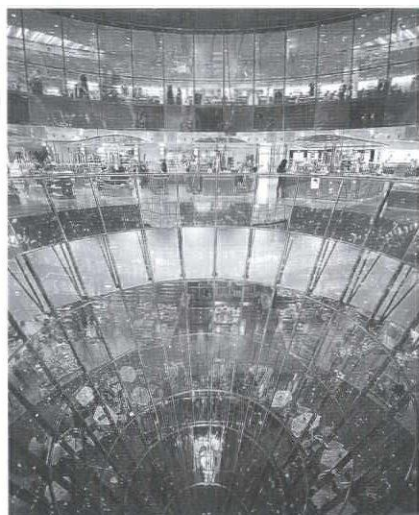
再統一ベルリンをリードして来た市の建築総監シュティムマンは、首都機能を持ち込むに当たって安易な「新」或いは「副」都心型の選択をしなかったことを評価してほしい、と主張している。(Alan Balfour; BERLIN; Academy Editions 1995) ベルリンは、既存の街の構造を



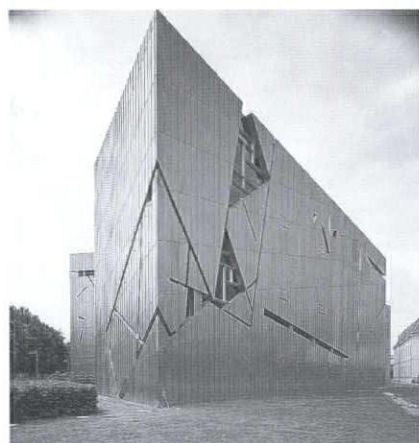
# Special Feature BERLIN TOPOGRAPHY



レールター駅/ゲルカン・マルク&パートナー



ギャラリー・ラファイエット/ジャン・ヌーベル



ユダヤ・ミュージアム/ダニエル・リベスキンド



DG銀行/フランク・O.ゲーリー

復活修復し、その中に、首都機能と市の行政機能を嵌め込む、ちらし寿司型を選んだ。これは確かに、骨の折れる作業を伴う、勇気の要る決断だったかもしれない。

## 1999年のベルリン

ティアガルテンを横切り、都心を東西に貫く軸線、ウンター・デン・リンデンと6月7日通りはベルリンの背骨である。パリのシャンゼリゼによく似た骨格で、ブランデンブルク門はさしずめ凱旋門である。フォスターの手で蘇った「ライヒスターク」新国会議事堂は、その軸に並行に構えている。屋上に上ったとき、これはテット・デファンスだと感じた。兎に角眺めが素晴らしい。建築としても出色の出来だ。屋上のガラス・ドームは、実はオブザベーション・タワーになっている。実に環境に配慮した建物でもあり、オープンな連邦議会室と共に、国民にそして世界に対し、開明的なドイツをアピールしている。

その北隣、シュルテスの勝ち取ったシュプレー・ボーゲン（連邦議会）は、工事中である。蛇行するシュプレー河に真っすぐに突き刺した配置図は、実に新鮮だが、建物はどうか。模型を見る限り、かなり期待できそうではある。その北にゲルカンの設計したレールター駅がある。これも工事中であるが、パースを見るとかなり透明な駅舎ができそうだ。将来のベルリンの中央駅になるが、名物になりそうで楽しみだ。

大戦前のベルリン旧市街の中心は何と言っても東西のウンター・デン・リンデンと南北のフリードリッヒ通りであった。この辺りは戦後東ベルリンに属した為疲弊が甚だしく、現在最優先で、古い建物のリノヴェーションや失われた街区の建て込み等の整備が行なわれている。

フリードリッヒ通りの大プロジェクトの多くは既に完成した。ヌーベルのギャラリー・ラファイエットは傑出している。然し、他の建築は、厳しい都市計画規制

に縛られて四苦八苦している。僅かにゲルカンのアトリウムが、透明度の高い空間を作り出しているのが目を引く位である。こういう沿道型の厳しい規制に対する、建築側のひとつのポジティブな解答は、この通りの裏のツィマー通りの再開発であろう。アルド・ロッシは、ここでは書き割りの的な処理に徹しているので、却って面白い。都市においては、建築の本来の機能と外部空間を構成する外観との間にどうしてもズレがある。彼は仮面舞踏会的なノリで、街に活気を与えた。

この南にあるリベスキントのユダヤ・ミュージアムは難解な哲学的建築だが、興味深い。展示物のない（いつれ展示されるらしいが）白と黒の抽象的空間を体験させられる。設計者も凄いが、こういう建物を実現させてしまうベルリンという風土も面白い。

ウンター・デン・リンデンの西端、ブランデンブルク門に正対するパリ広場には、ゲーリーが面白そうな銀行を作っている。この通りを形成する建築は改装や新築がどんどん進められている。全体としては、第二次大戦前の街並の骨格を復活させようという意識が強い。堅い感じの建物が多いが、ペイのドイツ歴史博物館の別館は期待できそうだ（工事中）。

新生ベルリンのイチオシは、何と言ってもポツダム広場周辺であろう。地域的には、ウンター・デン・リンデンと平行に走るメインストリート、ライプチヒ通りの西エンドであり、ブランデンブルク門のすぐ南に位置する。大戦前は旧市街の一角を形成して居た。今後も中心街の一翼を担うことになるだろう。

「壁」に近かったので再統一時にはこの辺りは殆ど空地だった。1991年に都市計画コンペが行われた時、多くの建築家都市計画家が大胆な提案を行った。何も無いのだから、どんなことも可能だと思われたからだ。然し多くの期待に反して、1位に選ばれたヒルマー&ザトラー案は、極めてオーソドックスなものだった。彼らの決めたガイドラインの下で、



1992年、ダイムラー・シティとソニー・センターの建築コンペが開催された。厳しい設計条件のため、似たり寄ったりの案が多くなった。ダイムラーはピアノ&コールペッカー、ソニーはヤーンが取った。

注目のダイムラー・シティは、ピアノのリードの下、沢山の建築家が参加したが、実体はピアノの独壇場。コンペ当選案に更に様々な都市的あるいは建築的提案をねじ込んで、面白い境界を作り出した。コンペの目玉マレーネ・ディートリッヒ広場の提案は、堅実だが優れている。シャロウンの図書館と旨く折り合いを付けている。彼はまた、大胆に街区に水を引き込み、あちこちに見所を作って飽きさせない。コンペ後の提案、アルカーデンと名付けられたガラス屋根の架けられたショッピング・アーケードは、繊細なディテールといい、ブリッジのカフェといい、とにかく楽しい。とどめは、運河側のデービス本社の超高層のアトリウムである。透明な見ごたえのある空間を現出した。

ピアノが主張した外壁のテラコッタも、ルーバーなどに用いて、模型やパースで見た時より、実にいい感じになっていた。ドイツ風とはいえないが、ヨーロッパ風にはなっている。彼の成功は、コンペ後ベルリンの厳しい都市計画に数々の風穴を開けた事に因っている。彼は実に熱心にアイデアを次から次に出し、市当局とネゴを行った。ダイムラー・ベントンの経済力もそれを支えた。

隣のヤーンのソニー・センターは、その外観は今や殆ど判る。こちらは我々が見慣れたアメリカ風というか今風というか、透明なガラス建築である。ソニーの新しい世界戦略を反映して、3Dアイマックス・シアターと10以上の映画館が入った複合施設になるようだ。楽しみである。しかしベルリンっ子たちには、イマイチ不評のようだ。デザインがドイツ的ではない、という理由なのだそうである。

ポツダム広場には、「壁」は無くなって、天使ならぬ3本の超高層が聳え立っている。正面の景観はこの3本の100m程のタワーによって形成される。左から、ピアノ、コールホッフ、ヤーンという設計者、それぞれ、テラコッタ、レンガ、ガラスという材料である。完成したらどんな感じになるのか、楽しみである。

かつての西ベルリンの中央駅ツォーの周辺は、最も繁華な地域であり、これは将来も変わらないだろう。クーダムは18世紀後半にビスマルクによって作られたエレガントなストリートであり、パリのシャンゼリゼ、ロンドンならリージェント・ストリートといった役どころだ。黄金の20年代にも中心街の一翼を担った。今も境界にはオフィスやデパートが並び、オープンカフェには夜遅くまで人が溢れている。周辺は素晴らしい都市型住宅地であり、散歩しているといつまでも飽きない。しかし、建築的にはこの辺りで、ここ10年位の間にできたもので目を引くようなものは少ない。僅かに目立つのは、グリムショーの商業会議所位である。これは大変な建物であり、一見の価値はある。他には、ロジャースのツォー・フェンスター・ビルが計画されている。12階建のガラス建築であるが、実現すれば、素晴らしいランドマークになるだろう。

## 2つの課題

ベルリンは2つの課題を同時にこなして来た。ひとつはこの都市のアイデンティティを確立すること、もうひとつは、21世紀の世界的な首都を実現することである。簡単に言い換えれば、古き良きベルリンに回帰することと、全く新しいメガロポリスを作り出すことであった。この2つのテーマは、当然、多くの場面で矛盾した。

再統一のときに、内外の人々が異常に興奮したことは、仕方が無いことだった。熱に浮かされるようにして、次々に



ポツダム広場マスター・プラン/ヒルマー&ザトラー



ダイムラー・シティ



ソニー・センター



ダイムラー・シティのショッピング・アーケード



ベルリン証券取引所・商業会議所/ニコラス・グリムショウ



## Special Feature BERLIN TOPOGRAPHY

大コンペが実施された。応募する側は力が入っていた。首都建設は滅多にない機会だ。実現不能な理想や誇大妄想の方が魅力的に見えた時期でもあった。ジャッジは混迷した。

パリはアイデンティティのある完成した都市である。革命200年記念プロジェクトの時、市当局はまず、既存のストックの上に更にどういう魅力を付加したら良いか、じっくり議論を行った。そして、概ね方向を決めてからコンペを行い、新しいプロジェクトを起こした。それでも議論は百出、喧々諤々だった。それに比べて、1990年のベルリンの都市的基盤は、著しく脆弱だった。何しろ自らを養うことを、50年以上忘却して来た都市だ。東ベルリン側には何もなかったと言うだけではない。周辺のブランデンブルク州自体旧東ドイツに属し、且つ元々後進地域農業地帯であった。ベルリン市都市計画課のヴァイスは言う。建築家が思った事をやれなかったとしたら、それは都市計画規制の為ではなく、投資家に余裕が無かったせいだ。ベルリンのマーケットはまだ未成熟だ。建築家は性急に多くを望み過ぎた。(1999.6.4；インタビュー)

### ベルリンが最もご機嫌だった頃

ノスタルジックに言えば、ベルリンが最もご機嫌だったのは、1920年代「激動の20年代」だろう。ライザ・ミネリの「キャバレー」はこの頃のこの街を舞台にしている。ディートリッヒの「嘆きの天使」も、中心街のキャバレーの花形歌手が主人公だった。世界で最も性的に解放された街と言われた。レズビアン・バーもあれば、ダンス・ホールもあり、「ロマーニッシェス・カフェ」には、ヨーロッパ中から集まったありとあらゆるジャンルの芸術家が集まっていた。この頃のベルリンは、パリと並んで、爛熟した欧州文化の一大中心地であった。そういうご機嫌なベルリンは一体どうやってできたのか。

ベルリンは1871年に、統一されたドイツ帝国の首都となり、近代都市としての道を歩みはじめた。まず大幅に市域が西に向かって拡張された。1882年AEG設立、すぐにドイツ最大の電気会社となった。1847年設立の電信電話会社が世界的企業ジーメンスになった。このベルリンと縁の深い電気会社は、今も市の西北にジーメンス・シュタットと言う名の広大な敷地を有している。1902年には地下鉄。20世紀初頭にかけて、学者コッホ、マックス・プランク、作家フォンターネ、ハウプトマン、画家クレー、カンディンスキー等が活躍。

第一次大戦の敗戦で生まれたワイマル共和国は、政治的にも経済的にも不安定であったが、文化的には不思議なほどの爛熟の時期を迎える。ベルリンはスプロールを起し、1920年、周辺を併せ「大ベルリン」を形成。人口380万人を擁し、大陸最大の都市となり、ドイツのプレス・センターとして149の新聞を発行していたと言う。精神的にも文化的にもヨーロッパの中心となり、建築家グロピウス、シャロウン、B.タウト、ベルツィヒ等が活躍。科学者アインシュタイン、文学者ブレヒト、ツヴァイク等の顔ぶれが揃っていた。1923年ドイツで初めてラジオ放送が行われ、1931年のテレビ放送は世界で初めて。1919年の表現主義傑作映画「カルガリー博士」は監督ヴィーネ、ドイツ、シナリオのヤノヴィッツ、チェコ、マイヤーはオーストリア、主演ダゴファ、オランダと言う具合だった。他にもポーランドやデンマーク等から人材を集めていた。当時のベルリンが、中東ヨーロッパの中心都市だった事がわかる。

この幸福は然し、長くは続かなかった。1933年に政権を握ったナチスは、映画人、音楽家、文学者、建築家、画家を文化闘争と称して追い出した。ベルリンは文化的廃墟となった。そして戦争、東西分割となる。

### 大いなる地方都市

既に今年1999年5月に、新しい国会議事堂で連邦集会が開催された。省庁の移転も、急ピッチで行われている。政府関係の施設は殆どベルリンへ来る。これがどうも就業者には余り歓迎されていないらしい。ジェットロの神野氏に拠ると、例えば、経済省1,700人の移転予定者のうち、実際にやって来たのは、1,000人位らしい。700人は、ボンに残る省庁に移籍したり、辞職したりしたらしい。(1999.6.4；インタビュー) ソニーにしても、かなりの数のドイツ人は、辞めるのではないかとされている。日本人社員でさえ本音は戸惑い気味かもしれない。ソニーは今、ケルンに本拠を置いている。ベネルクスやフランスにもすぐに行ける。対するベルリンは僻地で、仕事上西欧諸国への足も悪いし、またレジャーでも周辺に楽しい所が少ない。1998年の資料を見ると、ベルリン周辺の日系企業の進出は23で、うち生産施設を有するものはたった1つである。デュッセルドルフの338(生産施設30) ミュンヘンの125(15) と比べてみてもいかに寂しい。

そもそも、1991年の首都移転の議決の票差は337-320であった。興奮覚めやらぬ時期で、且つボンは元々暫定首都だったにも拘わらず、こんな有り様だった。東西ドイツの融合は、理想通りには行かない事は、かなり早い段階で判ってしまった。長いこと共産主義に慣れた東側の人々にとって、生き馬の目を抜くような資本主義の論理に慣れるのは、容易ではなかった。東独経済は予想より内容が悪く、それを支援することは、好調だった西独経済の足を引っ張った。税金等の負担が増し、インフレと失業率が増加した。東側の人々は、永いこと味わったことの無かった、失業の恐怖に晒された。……こうした東西融合の数々の矛盾が、最もハードに現れたのがベルリンであった。

ドイツは連邦国家で、他の地域の事には互いに余り興味を持たない。宗教も北



と南では新教と旧教で違う。ひょっとしたら、ベルリンに対して心から親しみを感じているのは、ブランデンブルク州の人々だけかも知れない、とさえ思う。ベルリンは元々、大いなる地方都市に過ぎないのである。

それなのに、何故ソニーはベルリンへ出て行くのか？……それは、第一に、ベルリンの位置的な将来性である。将来ポーランドやチェコがEUに加盟してくると、ベルリンは中央ヨーロッパの中心となる。既に、東ヨーロッパの諸都市の復興度は、ベルリンからの距離に反比例していると指摘されているくらいである。(日経新聞1999.7.6フィナンシャル・タイムズよりの引用)但し、東欧の国々が相応の国力を身につけるには、まだ時間がかかりそうであるが。……そして、第二は、ソニー・エンターテインメントのメディア戦略であろう。文化と芸術の都市ベルリンの、底力と将来性を買ったのである。

#### 文化と芸術の街

ベルリンは映画の街である。夥しい数の映画館がある。名画座と呼ぶべきものが多く、東欧、ギリシャ、日本に至るまで、新旧問わず渋いものも、上映している。勿論、ドイツの無名監督の作品をやる時もある。ベルリンはまた世界中の映画ファンに、国際映画祭で知られている。第1回は1951年、以後毎年2月後半に開催され、カンヌ、ヴェネチアと並び称されている。

西ベルリンがまだ「陸の孤島」と呼ばれていた頃、この街には変わったことがやりたい人々が沢山やって来た。彼らはクロイツベルクやシェーネベルクに住んで、小劇場活動や前衛ダンス等アヴァン・ギャルドな芸術活動に血道をあげた。テクノ・ミュージックもそのひとつで、いつしかその中心地となった。1989に始まったラヴ・パレードは、今やこの街の夏のメイン・イベントとなっている。今年は世界中から140万の人が参加した。

(尤も主催者とベルリン市が採めたので、来年はパリになってしまうかも知れないが)ベルリン・フィルばかりが目されるが、むしろ戦後の西ベルリンは変人たちのパラダイスであって、そういう伝統は今も続いている。

西ベルリンはまた、60年代の学生運動や80年代の緑の党の活動など、常に新しい政治運動の発生源であった。東ベルリンも、1990の再統一の拠点となったことがよく知られている。漏れて来たテレビやラジオ放送によって、西側のファッションや音楽に目覚めた若者たちが、運動の原動力となった。ベルリンは、新しいことに敏感な街なのだ。ここはまた、外国人の街でもある。1996年の資料では、347万の人口に対し(因みに2015年にはベルリンの人口は450万になると言われている)外国人42.5万。この比率はドイツ最大である。コスモポリタンの性格は17世紀ユグノーを受け入れた時からの、ベルリンの伝統的特徴である。

#### ベルリンは何処に行くのか

2度の大戦の張本人であり、ホロコーストまで引き起こしたドイツは、欧州では極めてイメージが悪い。過去の汚点を拭うために、どんな場面でも必ずフランスを立て、EUを推進することを戦後第一の国策として来た。経済的には欧州一のドイツであるが、政治的には仏の補佐役の位置を崩さない。ドイツ人には最早、ドイツ人であるよりヨーロッパ人でありたい、という願望が強いように思う。彼等のそうした、思いが結ぶところ、がベルリンである。この十字架を背負った首都は当然、自由な、国際的な、開かれた都市でなければならない。そこではベルリンの持つ「文化芸術の革新の中心、変人や外国人に寛容で、様々な信条宗教の共存を許す自由な雰囲気」といった歴史的な特色は極めて都合が良い。

そもそもドイツ諸都市の都市計画は、出来れば機能はともかく景観だけは大戦

前と全く同じに戻したい、という、恐ろしく保守的なものである。様式も材料も勿論、そっくりそのまま、である。ベルリンは、こういう退嬰的な考え方を採用しなかった。あちこちで内外の建築家にチャンスを与えた。ど真ん中ポツダム広場には、日本企業ソニーを進出させた。然もアメリカン・デザインを輸入してまで。ポツダム広場は、映画やメディアの新しい中心になるだろう。ベルリン映画祭も恐らく会場を移すだろう。少なくともクーダム界隈の映画街は戦々恐々としている。

ドイツ的秩序限界ギリギリのライン上ではあるのだが、革新好きな所がやはりベルリンの真骨頂である。シュルテスは、19世紀の詩人フォンターネを引用し、こう書いている。未来に恐怖する者が、歴史に逃避する。ベルリンのアイデンティティは、守るものではなくて、増やすものだ。我々は旧態を刷新し、新たにベルリンらしさを発明しなければならないのである。我々はこの革新を、ある秩序の中で行わなければならない。(Alan Balfour; BERLIN: Academy Editions1995)ベルリンの街に発明は、未だ十分ではない。然し、大いなる改造は始まったばかりである。21世紀は、中東ヨーロッパ躍進の時代と言われている。その中心都市となるベルリンの、更なる飛躍に期待したい。

(やました・まさひこ/UG都市建築設計事務所代表)

Special Feature  
BERLIN TOPOGRAPHY



# Special Feature BERLIN TOPOGRAPHY

昨年夏、パリとベルリンという二つの都市を旅した。はじめはパリに入り、すぐにベルリンに飛んで、再開で騒然とした風景を隈無く見て歩き、またパリに戻った。短期間にせよ、二つの都市の世紀末に触れたことになる。その二つの都市は、較べて眺めた時、ある種別様のものに見えた。どのようにか。簡単にいえば、パリにはいわばナショナルな都市のありかを感じたのに対し、ベルリンにはそれとは別の「何か」を感じたのである。

パリがナショナルに見えたことについては、いくら説明が必要だろう。しかしより説明を要するのは、ベルリンがそうではない「何か」に見えたという方である。「何か」とあえて抽象的に書いたのは、たとえばパリがナショナルだというような歯切れのいい言い方でベルリンを説明することができないからである。しかしその「何か」を捉えて見せることから、私はベルリンがいまどのような状況にあるのか、さらにいえば21世紀の都市はどうなるのか、その端緒を掴むことができるような気がする。それをこれから考えて見よう。

まずパリがどうしてナショナルに見えたのか。ベルリンのように、パリもいまから十数年前の80年代に、大きな変化を見せた。言うまでもなく、ミッテランによるグランブロージェがそれである。だがそれは都市改造とはいえ、周知のように、大規模に区画を激変させてしまうのではなく、現在のパリはそのままにして、いくつか拠点的に再開発してみせるというものであった。これによってオルセー駅が新しく美術館に生まれ変わり、ルーヴルの中庭にはガラスのピラミッドが出来た。またパリ郊外では、デファンスに新しい凱旋門が出来、ラ・ヴィレット地区は公園として新しく整備されることになった。しかしパリはこうして新しく生まれ変わったようでいて、実はいまも述べたように、旧来のパリの姿をそのままにとどめ、21世紀を迎えることになったともいえる。旧来の姿とは、言うまでもなくオスマンによる19世紀後半の都市である。それを一言で「近代都市」と言ってもかまわないし、ナショナルな都市と言ってもかまわない。このあたりは多木浩二も『都市の政治学』で指摘するところであり、多木は新しい凱旋門によるかつての都市軸のさらなる強調は、「あたらしい都市によって古い都市の歴史を蘇らせる可視的方法」だとする。すなわちグランブロージェは、新しい都市を目指しながら、かえってオスマンのナショナルな都市をより明らかに浮上させる役割を果たしているわけである\*。それにしてもなぜパリはナショナルであり得た

のか。それはこのグランブロージェが計画され、実行されたのが、80年代であったという点が重要である。すなわちその時のパリは、まだ米ソ冷戦構造のなかにおけるヨーロッパの一都市であった。近代社会の実験そのものと言ってもいいソ連邦が崩壊していないこの時、都市は近代国家という枠組みのなかでまだに語りうるということが可能であった。しかし80年代の終わりに、誰も予想しなかったように、この神話が崩壊する。ベルリンの壁がなくなり、続いてソ連邦が崩壊した。冷戦構造が事実上終わり、私たちは90年代の都市を生きて、いまその終わりにいる。パリの再開に対して、いま進行中のベルリン再開は、それゆえパリの改造とは違う90年代とそれ以降の都市を明らかに映すものであり、同時にポスト冷戦構造の都市といえることができるわけである。

そこですでに、国家というものは、確かにいまでも現存しながら、一方でその枠組みが以前にも増して曖昧になりつつある。たとえば冷戦後の産物といいいEU統合は、まさにそれを指し示している。もはや90年代末において、ヨーロッパにおいてEUのモデル都市という言い方は正当であっても、どここの国家の都市という言い回しはいささか古くさく聞こえるはずである。この状況下で、ベルリンはひとまず統一ドイツの新都市というよりも、冷戦以後の、EUのモデル都市という性格をつよく帯びていることがわかる。しかしそれがかえって、ある種の不明確さをも齎らしている。冒頭に言ったような、ベルリンをパリとは違うナショナルなものとは別の「何か」といったのは、まさにこの問題に深く関わっているのだが、つまり「このベルリンという都市は、いったいどの都市なのか」という苛立ちである。

それこそがEUではないか、と言われるかもしれない。それなら「EUとは何か」、その性格の本当のところが、いま一つははっきりと見えてこない。それはナショナルを超えた理念が、いまだよく見えないこととも関わっているのだが、それだけでなく、ベルリンはEUの都市でありながら、一方で厳然と「統一ドイツの都市」でもあるのだ。さらに事態を混乱させるのは、この「統一ドイツとは何か」という事柄が、やはりいまひとつはっきりとしないことである。少なくとも、統一ドイツをナショナルなものの復興とする見解だけは、歴史的な意味合いからもドイツの国家主義再来として多くの人々が眉をひそめるだろう。これは歴史的にみて、日本において国家主義という主題が微妙なように、ドイツにおいても当然敏感な事柄といえる。冷戦以後という視点からも、またもっと深い歴史的視点からも、統一ドイツは不明

確な立場を逃れ得ない。

ベルリンは、このように「EUの都市」であるという曖昧さと、「統一ドイツの都市」でもあるという幻想性の、その両方をはらんで再生しつつある。私がパリとベルリンを見て、冒頭に述べたようにベルリンを「何か」と留保する以外に言葉を見出せなかったのは、こうした事情による。ここにはピアノラによるポツダム広場の〈ダイムラーペンツプロジェクト〉があり、ゲーリーの〈DG銀行〉やリベスキンドの〈ユダヤ博物館〉もある。これらを含めた数多くの作品が旧東西の壁を横断したり、壁沿いに建ったりと、何らかの格好で旧壁跡と関わりながら展開している。それらは単体や単体に分解して見れば十分に刺激的なデザインを見せているが、しかしいま述べたようなベルリンの都市の未来という課題には、ほとんどが答えていない。ただ旧壁に関わっているというだけでは、何の答えにもなるまい。ベルリンはいまどこに行こうとしているのかという問いは、多分21世紀はどのような社会となるのかという問いに等しいが、再開のデザインは、それに対応するものとは必ずしも言い切れないのである。(いいじま・よういち／建築評論家、多摩美術大学助教)

\* 多木浩二『都市の政治学』（岩波新書）



分断される場所と記憶

## ダニエル・リベスキンドとの対話

Daniel Libeskind:

建築家、カールスルーエ芸術大学教授

ベルリンのアクチュアリティ…断片的な視線  
インタビュー…花田和幸

H (花田): 私が初めてベルリンを訪れたのは1987年の夏で、そのときのベルリンの印象は、都市の持つ音響的な効果でした。ちょうどベルリン誕生750年を記念する年で花火が街中に響きわたっていたんですが、体験したこともない空襲がそうであるかのような反響になにか都市に沈み込んでいくような遠い「空虚さ」が強烈に私の記憶として浸透していったんです。それと連動するように、ジョン・ケージのコンサートシリーズがベルリンの教会や公共空間等で催されていました。さて、あなたの幼年時代、ポーランドからベルリンを訪れたことをどこかでノートしています。まず、あなたにとっての幼年時代のベルリンの回想から話していただきたいんです。

L (リベスキンド): これはほとんど忘れられていることですが、ポーランドをはじめとする東欧とベルリンは常に密接に連結されていたんです。私個人とベルリンとの関係は形式的なもののみならず、幼年時代から自ずと深い感情を抱いてきました。ですから裏返すと、私はベルリンに住んでいます。同時にここにはいない、という感覚もあるのです。

H: ポーランドから鉄道でベルリンを訪れるときは、必ずアレクサンダー広場の駅に辿り着くんですね。

L: その通りです。まさに1920年代、ロシアやポーランドからの流れに対して、アレクサンダー広場は古典的なベルリンへの導入口だったのです。そこはまさに当時文化の結節点で、ベルリンの文化的な質を象徴しており、それがこの都市の動力源となっていたのです。そのような事実がベルリンの記憶を支えているのですが、現在では残念ながらその力は失われてしまっています。

H: まさに今の状況とは同じでないでしょう。あなたはまた、どこかでこの都市の形式について「夢」であるという比喩的な言い方をしていたことがありました。

L: その通りです。それは、ベルリンの歴史はまさに不連続的であって、近年においても数年のスパンで政局が変化する度に大きな方向転換がなされ、周知の通りポツダム広場や首都移転といったようなことが平素に生じているのです。そのような切断の歴史は今日に始まったのではなく、ベルリンの歴史全体を象徴しているのです。

H: さて、「チャンパー・ワークス」をあなたが描いていた頃から、常に主題として「線」というエレメントが貫かれています。一方、ユダヤ博物館では、分断され交錯する光や身体的動線としての線の行く末に、ある「空虚さ」が置き去りにされますが、それは回収される場所ではなく、むしろ新たに展開していく契機であったと思います。それはロドチェンコの「線」においてロシアの土壌に宿る神秘主義が20世紀的に「無対象」として現れてきたものとはニュアンスが微妙に異なっていると思うんです。ここでベルリンの歴史を再び振り返るとやはり歴史という時間の線に無数の分断があったように思いますが、そこにはパノプティコンとしての「虚」の力が働いているのではないかと仮説が可能だと思います。このように、あなたの建築とベルリンの歴史の「線」は意図的に結ばれ、あるいは断絶しているのでしょうか。

L: 表層的なレベルでなく、ベルリンのある土壌と結びついているのです。それは思考の線、宿命の線というような線の消失と回復なのであり、この都市の物質となっていくのです。

H: ベルリンが有するこの「虚」としての特質が、少なくとも初期のミースに内在し、そのミースを通して少なからずモダニズムに流れ出していたのかもしれないという仮説が可能かもしれませんが、この効果というのは未だに存続していると思いますか？

L: はい、それはほとんどこの都市における暗黙の運命であると思います。その特質を単純に消し去ったり黙視するような潮流もこの都市は抱えていますが、それは不可能なことだと思うのです。実際に東西思想の流通の間にあって、このベルリンという場所が一体どこなのか、正確に定義することは不可能なものです。ここがドイツの首都でもあり東欧の一部でもあると言うこともできますし、ここが東西の通過点でありドイツでないとも把握できるからです。しかし、ベルリンのこの「脱方向性」の特質は以前より持続しているものであり、例えばナチがミュンヘンからベルリンへ移った際に戸惑ったという経緯もこの場所の特質によるものでしょう。

H: 私がベルリンのリサーチをしていた場所はベーレンスのAEG工場でしたが、今からちょうど100年展と、ベルリンでは急速な工業化に伴う社会構造の変化や新たな技術の萌芽というようなベーレンスの表現を背後から支えることになる現象が表出していたのだと思います。現在、ベルリンの現象のなかにこれからの表現の契機になるようなものを見出すことは可能でしょうか。

L: その点に関しては少々懐疑的です。というのも、現在多くの人々はこの都市に潜む力というものをも認めようとしないうか、あるいはそれに対しどのように対応していけばいいのかわからない、という状況だからです。あるとすれば、アメリカ的な都市像の請け負いか、逆にプロイセン時代の「力のアイデンティティ」というような空想的な伝統なんです。私に言わせるとベルリンはそのような場所であった例はなく、むしろ多様な歴史や文化が浸透し合う混成的な都市であって、そこでの不連続的で非接合的な状況が人々の経験と現実との間に常に奇妙な差異を与え、そのように歴史が都市に作用しているのです。

H: もしかすると、ベルリンの建築家たちはそのような認識に立っていないのかもしれない。

L: とんでもない。彼らは誠実に無意識的なのではなく、仕組まれた企みのようなものだと思うんです。それはポレミカルかつ修辭的、しかも政治的な企みであって、この都市を本来の姿から遠い地平に導こうとしているのです。

H: 同感です。さて、ベルリンの記憶とアクチュアリティについてまた別の角度から問いかけをしたいと思います。

Special Feature  
BERLIN TOPOGRAPHY



が、時間を再び1921年に戻します。(ガラスの摩天楼)ですが、ミースはそこで建築を物質から都市を視覚的に散逸させる光の戯れという地平に変質させました。それはいわば近代的な眼差しに訴える光学的な構えだったと思うんです。私はミースがその反射の戯れという現象の向こう側それを「虚」ととりあえず言ってもいいと思うのですが、-に向かっていたと思うんです。ですから、二重に意味で建築の可能性を表現していたのだと思います。一方、あなたのユダヤ博物館では、視覚を越えてむしろ全体的な問いかけがなされていると思います。そこではもちろん線としての光の詩学が用意されていますが、それは特に光学的というよりむしろ身体的な偏差の一部として作用し、総体としてミースとは異なる位相の「虚」を表現しているような気がするんです。ここで一つの仮定なんですが、ベルリンが孕む「虚」の様態が近代的を支えた視覚から、より身体的な命題へ、というようにシフトしているのでしょうか。

L: おもしろい比喩だと思います。ミースにおけるフラクタルな光というのは(ガラスの摩天楼)だけでなく異なるかたちで(新国立ギャラリー)においても反復されていると思います。いずれにしても、ミースにおけるそのような崩壊としてのフラクタルな都市のイメージ、つまり崩れ去った後のフラクタルな「空虚」という地点が、建築における私の真の出発点となっているわけです。しかしミースに対しそこでは都市に対する指向は変容してきているわけです。つまりミースの伝統においてはより昇華していくような経験を孕んでおり、そのダイナミックな経験はむしろ静的で蒸留するようなものとして現れています。しかし私は、そのような特質を受け継いではいません。むしろ私の場合は、より身体的に作用していく傾斜のある空間によって提示しているわけで、「ガラスの壁」ではなく「空白の壁」を立ち上げ、それを通過していくわけです。ですからある意味ではミースを反転させているのです。

H: そして地下階の床面は傾斜していますが、これもベルリンと関係しています。ベルリンの地形は氷河期に形成されたためほとんどフラットな砂地といってもいいのですが、微地形が確実に存在しています。

L: その微地形が大切なんです。特にこの巨大なプレートはロシアに連なっており、地盤の変形は身体的に感覚されるのです。それに、地下道や防空壕といったベルリンの地下のランドスケープには相当なトポグラフィがあるんです。ですから博物館の地下空間は身体的なレヴェルでもベルリンと呼応しているのです。

H: その身体性に関してですが、フランクフルト・バレエ団のコレオグラファー、ウィリアム・フォーサイスがあなたの「線」を引き、身体の動きという平面において展開しています。ドゥルーズがベケットの『クワッド』について書いた文章の中に「中心のあのわずかなずれ、あのひねり、あの偏差、あの間隙、あの句読点、あの消失、出会いを予期して過ぎるすばやい身のかわし、軽い跳躍なのである」という部分があり、フォーサイスと不完全な呼応関係があると思いますが、いずれにしても「空間」以前に「身体」があるわけです。私のあなたの建築での経験もこのような平面を突き抜けているのではないかと感じるのです。つまり建築という物質を突き抜け、そのような身体性に戻り、ドゥルーズ＝ガタリが「存立平面」といったように新たな知覚を呼び起こしているのではないかと思うんです。

L: まさに身体性なんです。多くの人々がベルリンについて哲学的な次元を強調しますが、そうではなく、他の知性、言い換えるならより情緒的な都市の歴史をこの博物館では表現しているのです。そ

こでは通常にない平均感覚の方程式を開示しています。ベルリンの歴史というのは意味の知性というレヴェルでは不鮮明なものとしてしか現れず、むしろそれはこの都市の特定な場所で厳密な重力の経験として人々に通過されなければならないのです。アインシュタインはかつて「重力は時間／空間を変形し続ける」という言葉を残したんです。まさにこのような経験を、あの建築の中は身体的に経験することができるんです。時間と空間の変形が、多軸の方向的な感覚を通して具現化されているのです。

H: さらに重要なのはその建築がベルリンの壁崩壊以前に計画されたものだということだと思えます。

L: あのコンペの際、私は私的ですが集中した感覚としてベルリンの壁を通過し、消去したのです。それは単にドローイングでの遊戯だったのではなく、それは私には完全に把握されたものとして壁に対し線を通過させたのです。ですから、壁が崩壊したときも、私には驚きはなかったのです。それは私にとっては当時の情報から得た予想では全くなく、内在的な経験だったのです。でなければ壁の時代にあなたも壁がないような線は引きませんでした。このように、ある種の黙示と現実が奇妙に一致したんだと思います。もちろんユダヤ博物館の為に引用されたヴァルター・ベンヤミンの黙示的な母型やシェーンベルグの作品も、壁の崩壊に関係しているのです。計画の際、そのようなテキストを特に選択したのも、壁を透過させることに絡んでいたからです。

H: 別なレヴェルのリアリティとして、壁の崩壊したことで、ベルリン内部での各々の場所の所有がゲンシヤルが物理的な建築を変更することなく大きくシフトしています。壁の前に計画されたあなたの博物館も壁以後、あなたの予想に反して生じてきた意味や位置関係の変更はありますか？

L: 私はむしろ、そのようなベルリンにおける予想不可能な場所性のシフトを始めから計画に組み込んでいたんです。なぜならベルリンにおける建物は、その建築史の一ページ目から「分断」の中に投げ込まれているからです。その不連続性はシケル時代以前からの事実だと認識しています。ですから建築は時として都市生活の中で忘却されたものとして存在するのです。それはまるで強大な氷山が凍り付いた記憶の海を漂流しているようなものです。それがこの都市の建築の在り様なのです。そのような意味で、ベルリンの建築は敷地に対し不完全にしか関係していないのです。ベルリンの全ての重要な建築はそのような特質を有しており、ユダヤ博物館もその例外ではないのです。問題は単に建築の様式とかの形態の問題ではなく、むしろ関係性として生じられてくるものです。

H: その歴史的分断の中に投げ込まれているということについて、あなたは以前アレキサンダー広場のプロジェクトのなかで都市に対する計画を始めから完全に規定されたものとしてではなく、予測されず決定されないことを収拾していく動態としての方法論を提出していたと思うんです。

L: ベルリンでの今の問題は多くの人々がこの都市の歴史に対する真に創造的な洞察を欠いているということです。この場所で進行している活動のほとんどがカモフラージュであり、そのように規定された枠組みの中に住む人々はほとんどヴァーチュアル・リアリティの中にいるのと同義なのです。その意味で、例えばあのポツダム広場は多分今日

における最大の仮想空間なのかもしれません。

H: 建築や都市が物質として変化しなくても、人の意識やメディアが変化することで存在の位置が完全に転換してしまうということは、よく保存された土着的な集落に於いてもベルリンのような固い都市においても同様ですね。

L: そうなんです。ですから建築や都市の計画というのは最初から常に変容していく様態を織り込んでいける余地を設定しておくことが重要なんです。

H: 最後の質問ですが、ポーランドで始まったあなたの人生は常に移動してきました。あなたは常に様々な文化、言語、アイデンティティの中を浮遊し、それらが内部で交錯しているようです。同様のことがベンヤミンや、ヘルダーリンにも生じていたと思うんです。あなたにとっての場所性は、どのように現れているのでしょうか。近代を突き抜けていく表現の新たな基盤をめぐる問いなんですか？

L: アイロニックな質問ですね。近代の普遍性という特質は、人間の深層のレヴェルでホームレスネスという問題を引き起こしています。そして私たちは現在、国家あるいはポリティクスの終焉を向かえようとしていると思うんです。さらに非場所としての場所という現象が至るところで顕著になっています。「接続」ということが問題にされない時代なのかもしれません。いずれにしても場所性に関して次世紀には急速な変化が生じると思います。場所に対し人々がどのように自らを位置づけるか、という問題もさることながら、むしろ人々がある場所に対してどのような書き込みをするかという予想不可能な事態なのです。私たちが単に場所を移動するという現象のみならず、場所自体がそのように変容の過程にあるということなんなんです。

H: ベルリンについても同様の兆候が見え隠れしているのでしょうか。

L: 問題はベルリンの人々がこの場所が孕む「非土地性」に盲目的だということなんです。

H: 物質、つまり建築／都市とその知覚、あるいは記憶という問題に関してベルクソンのテーゼがありました。「事物が身体におよぼしう作用、および、身体が事物におよぼしう作用が知覚そのもの」であり、分離された記憶の中の知覚は、現在における類似した身体作用に触発されることで知覚として蘇るという「知覚と記憶には強度の違いが見出せない」ということでした。

L: いまや都市はもはや経験される実体を越え、「器官なき身体」としてのアクチュアルな器官であり、その位相においては「脱配置」が常に派生しているのです。一体それが誰の身体でどこにあるのかというような問題をまさにベルリンという都市は内在させているのです。

H: そのテーゼに関して、私はあなたのユダヤ博物館での経験を通過することで、再びこの都市が転換した方として現れてくるというような印象があります。

L: まさにそのようなことなんです。私は「歩道行路」を単なるメタファーとしてノートしたのではなく、全く逆に、そのテキストを横断し突き抜けていくことで、再度それを全く異なる側面から経験するというようなのです。ですからそれは当然ベンヤミンとは別な位相にある全く新たなプロジェクトであってそれ自体非常に厳密な実体を備えているのです。いずれにしても、そのような在り様が建築の使命だと思っているのです。



## 様式から社会性へ

# クリスティン・ファイライスとの対話

Kristin Feireiss:

ギャラリー・アエデス代表、オランダ建築博物館館長

H (花田)：あなたがグローマン通りにアエデスを始められたのは1980年でしたが、それ以来20年間、ベルリンにおける都市の「書き換え」を緻密に俯瞰されていると思うんです。

F (ファイライス)：この20年間、常に意識してきたことは、私とその建築現場の外部から批評したり、既存の問題を組み換えたりしながらある状況に対してそれを展開する契機を探ってきたつもりです。さて、ベルリンは表層的には変貌し続けていますが、建築的あるいは都市的枠組みに関しては常にあるフレームによって支配的であったわけですね。端的にいうと80年代のIBAにおいてはいわゆるポストモダンが、そして壁崩壊後の90年代にはもはや虚構でしかない19世紀的な建築や都市構成が規範として暗黙に支配的であったと思うんです。そのように振り返ると、そこには不寛容な原理が働いていたと思います。それら暗黙の規範は80年代ではIBA組織が、そして90年代にはシナート（市政府）が上部から綱を掛けていた側面は否めないと思うんです。それは裏を返せばこの都市が建築というものに対し現代性や都市の感性、あるいは新たな材料や技術の境地を開いていくというような契機を与えなかったということです。いずれにしても、この20年間のベルリンにおける建築の議論が結局は様式的な地平に留まっており、社会的課題という位相では何の提出もなかったということだと思います。これまでにない生活の質やこれからの人間環境といった問題ではなく、建築はむしろ政治的身振りとしての存在だったのです。

H：あなたはこれまでもベルリンの建築的議論においてそのような社会性を帯びた、あるいは時として政治的な独自の批評的立場をとってききましたが、近年の動向に対してはどう思われますか？

F：壁崩壊後の90年代の開発について、とにかく都市のまさに中心部にあった空洞にある秩序を与えていく作業はそもそも、規模が絶対的に巨大すぎたように映ります。多くの人が徐々にあのダイムラー・シティに賞賛を与えるようになってきていますが、私は全く逆の立場なんです。ある都市が有機的に進化していくというプロセスを5年や10年という極度に短い時間のスパンで達成させるということ自体にはじめから無理があるのだと思います。現代的で多様な用途が組み込まれたより自然なアーバニズムへの方法論が決定的に欠如していると思うんです。複雑な社会性の交錯というような常態が全く問われていないのです。住む、働く、休息をとるといった関係にこれからの新たなヴィジョンを描けたのかもしれませんが、そのことに関して私が現在仕事をしているオランダの状況と比較してみるとより鮮明に浮き上がってくる

ことがあると思います。そこでの建築の意識は建築自体のプログラムや様式といったような問いよりも、遙かに壮大な役割を想定しているのです。新たなインフラストラクチャー、交通網、壮大なスケールの集合住宅群などといったことが2030年という時間設定の中で政治的に牽引されながら実験されようとしているのです。多少大げさに聞こえるかもしれませんが、このような社会における積極的な建築の役割がベルリンには欠如しているのです。

H：いずれにしても今後とも首都移転、情報化、あるいは東欧との関係等といったパラメーターも孕みながら、社会的フレームが流動的に変化してくるのだと思うんです。

F：将来のベルリンを予想するならば、社会構造ばかりでなく人口構成も壁崩壊直後のような劇的な変化が起こりうるわけで、建築家には常に転換し続ける現実にも身を置いていくことで真のアーバニズムというものは何かという事を新たに創造していかなければならない使命があると思うんです。具体的に現在のベルリンに必要なことは、予想される社会的移行に対して、どのように対応していくかということだと思います。例えばこの都市が抱える過剰な事務所スペースをどう転換していくかという問題があります。今後はアメリカ諸都市で顕著なように、メディアの普及によってもはや都市の事務所という空間に留まる必要はなくそこから労働人口が流出していくというような現象がベルリンにも派生してくると思いますが、そうなればなおさら深刻になると思います。ですから居住人口が逆に都市内部に戻ってくるということが起こりうるかと予想できますが、その際にどうしても必要となってくるのが機能の変更を最初からプログラムした建築の在り方だと思うんです。

H：あなたは建築を建築内部のみの自立性として捉えるのではなく、政治や地政学的、あるいは社会的要因が流れ込む結節点として捉えられています。とすると、この都市の建築家にとっては意外にも意識外のこともかもしれません。

F：それでもベルリンのようなヨーロッパの都市ではやはり建築家の職能だけでは限界があり、政治的枠組みと共同して社会に対応していかなければならないと思います。事務所スペースという問題の他に、例えばエコロジーに対する建築の役割という問題がありますが、そのような新しい課題はあるところシナート（市政府）がコンペの命題として前面に打ち出していくことで建築家の意識を転換させていくことが必要なんだと思います。いわゆる建築の自立した内部での様式とかでなく、そのようなより広範囲な社会的視点はコンペのアスペクトとして提唱されたことがありませんが、大いなる失策だと思うんです。

H：そのような将来の問題に関して、これまでのように「穴」を埋めていくのではなく、理想的な地平では複数のレベルにおいていかに「穴」を創出していくのかということがあ

るんだと思います。問いを転換させていかなければならないと思うんです。

F：その通りで、当然これまでの開発型の発想がシフトされなければならないのです。ベルリンも現在経済の停滞期ですが、それはあるところに新たなヴィジョンを発酵させる積極的な機会と捉えるべきで、この転換期を境としてある種ユートピア的なヴィジョンの萌芽が待ち望まれているので

しょう。私の認識では、建築史におけるそのようなヴィジョンは決して建築のスタイルというようなレベルではなく、例外なく新しい社会的な視点を孕んでいたと思います。

H：視点を少し変えますが、ベルリンの壁が崩壊したことで一つのイデオロギー的な、あるいは物理的枠が外され、それに伴い都市内部には物理的、あるいは意識において予想できないシフトが生じたと思うんです。また、それによってこの都市の各々の場所の有する意味性が物質的再配置を行わずに根本的に変化していると思うんです。

F：特徴的な現象は、ベルリンでは各々の場所を特性の変化に敏感に嗅ぎ取るのが学生たちであり、彼らが場所間の文化や人口移動を誘導しているということです。10年前はクロイツベルグに学生たちが流れ込んでいましたが、ミッテあるいはプレシツラウアーベルグに確実に移っているのです。ミッテはかつての物理的空洞性を引き継ぎながら新たな磁場を豊穡させています。いずれにしても、そのような場所性のシャッフルのような現象が都市内部において短時間のスパンで派生して起きています。

H：最後に、アートシーンや文化的活動におけるベルリンでの近年の動きについて伺いたいと思うんですが。

F：私はその専門家ではありませんが、まず確認しておくべき事は、ベルリンがドイツにおいて非常に多くの装を持ついわゆるサブカルチャーの都市であるということでしょう。サブカルチャーは時として否定的に扱われますが、それが都市の深層から湧き出しているという経験として私には重要なことです。壁崩壊以前のサブカルチャー・シーンは生気に溢れていたのですが壁崩壊後、それまでビジネスとして価値が希薄だったことから見向きもしなかった有名ギャラリーがゴールドラッシュのようにベルリンに参入してきたのです。しかしそれらはベルリンという都市から何かを生み出すというベクトルには向かっていないようです。いずれにしても、それによってかつてのサブカルチャーは後退していきましたが、それでもミッテのクラブを中心にして新たな臭いが立ち上がってきているようです。

H：20年代ベルリンの躍動は、首都がワイマールに移ったという権力の空洞化を背景として生じてきたものだと思うんですが、いずれにしてもこの場所が孕むある宙づりの歴史の中でこれからどのように変貌していこうとするのか、見守っていこうと思います。



## ベルリン的ラショナルイズムの展開へ ヨゼフ・P.クライフスとの対話

Josef P.Kleihues:

建築家

H (花田): 確かあなたは1962年にベルリンで事務所を開設されたと思います。冷戦の真っ直中を生きていたということだと思いますが、その独特の環境の中でどのように自らの建築的指針を豊穡させていったのですか。

K (クライフス): 激動の時代でした。壁が構築されていたにも関わらずベルリンはかつてと同様に開かれた特質を維持しており、頻繁にこの土地を訪れていた外部からの建築家も含め、活発に建築の議論が行われていたんです。「アクション507」という批判的な展示会を企画したのもその頃でした。これはともすると疎外された「住む」という概念を洗いざらい再考していこうという機会となったのです。このような議論から住環境への提言を含んだ平面を模索し、これからの建築像を提言していったのです。

H: それは西側としてのプロパガンダという意味合いもあったのですか？

K: 当時の西ベルリンの政治的な後押しは確かにありましたが、私たちの意識には特に冷戦という問題を孕んでいたわけではありません。それはともかく、私たちは特に二冊の著作を巡って議論をしていたのです。シードラーの『都市』とロッシの『都市の建築』です。70年代の議論を通して浮かび上がってきたのは、戦争によってでなく、むしろ戦後の都市計画や都市の修復の方法によってこの都市が破壊されてきたということでした。シードラーの「ベルリンの破壊を食い止める」を引き、私たちは「ヨーロッパ都市の破壊を食い止める」と叫んでいたのです。そしてレオン・クリエが最初に発したように「ヨーロッパの都市の再構築を考えるとときだ」というようなテーゼとして少しずつ展開していったのです。

H: あなたが都市の方法として世界に指し示すIBA（ベルリン国際建築展）の背景となる思想がその頃に発酵していたのですか。

K: まさにそうと言えます。アメリカや日本から見ると不可解に映るのかもしれませんが、ドイツや他のヨーロッパの都市には厳密な枠組みが歴史的に規定されているということを忘れてはいけないと思うんです。ある意味では芸術的な理想が隠されているのです。都市は確実に階層的に構想されてきたわけで、私たちはヨーロッパの都市の蓄積から発想していかなければならないのです。今日では、そのような認識が建築家の自由を拘束するものとして捉えられたり、建築の自立性を唱えたりする風潮も一部にあるでしょうが、私たちが既存の都市に生かされというというモラルの問題でもあり、ともすると破壊してしまうことにもなりかねないのです。

H: とはいってもヨーロッパの、あるいはドイツ的な思考法には外部の要素も弁証法的に組み込んでいくという側面もあると思いますが。

K: その通りです。私はヨーロッパの都市の歴史を真剣に捉え直すという作業を進める一方、その蓄積の上に実験的な活動を容認してきたばかりでなく、それを支援してきたつもりです。それは私一人の認識ではなく、ベルリンという都市の持つある寛容な特質がそうさせたような気がするんです。結果的にもこの都市は外部から、しかもある実験的な建築家たちが実績として建築を体現した場所はないでしょう。その意味で、私はベルリンがヨーロッパ全体としても最も開かれた都市だと思っています。

H: 「歴史の書き換え」という作法はあなたの場合IBAの様な都市的スケールばかりでなく、「フランクフルト先史・原始博物館」やベルリンの「ハンブルグ・バーンホフ美術館」といった歴史的建造物を書き換えていく現場においても、その時間の堆積と現代に宿るあなたの感性とがまさに感覚的なレベルにおいて詩的に昇華していたと思うんです。

K: そうだと言えます。再びここで確認しておくべき重要なことは、当時私たち合理主義の建築、あるいは1920年代の建築を巡っていたということです。しかもそれは純粋な合理主義であってではなく、理性という呪縛から逃れる「詩的ラショナルイズム」でなければならなかったのです。さらに私たちはそのようなラショナルイズムの根源をジリーやシンケル、それにシンケル派というクラシシズムの建築に見出していたのです。クラシシズムは啓蒙的でヒューマニズムを孕み、かつ理想的な思想であったと思います。ペーレンス、ミースをはじめタウト、シャロウンに至るまで今世紀のベルリンの建築家たちはほとんど例外なくその発想の起源をラショナルイズムに張っていると思いますが、戦後も私ばかりでなくウンガース、コフホフといった面々も同様の起源を共有しているのです。同じ地点から出発しているにもかかわらず、このように寛容であり、多彩な建築を生み出していることは興味深いことだと思います。

H: とにかく、どちらかというと社会主義的なIBAの運動は「批判的再構築」という指針を打ち出し、運営やコンペあるいは経営の方法から建築的枠組みに至るまで、歴史を書き換えていく戦略的な作法であったわけですね。そして90年代の資本主義的な回収の方法論、あるいはシステムはある側面で「記号の砂漠」になってしまっているように思うんですが、どのように見ておられるのでしょうか。

K: 当然IBAにおいても90年代とは異なるアーバニズムに対する有効な方法があったわけですが、ともかくその差異は、IBAは基本的には集合住宅という限定された機能に拠っていたのに対し90年代には巨大でオフィス、住居、商業が混在した公共空間が誕生してきたということだと思います。

IBAの活動において不運なことはプライベートな資本をほとんど自由に扱うことができなかったということです。それは私たちが政府からの補助金を支えとして集合住宅を促進してきた事に起因していますが、今では私企業からの資本が大々的に参入しており、IBAとは別のディメンションであるということです。

H: それは、あなたが例えばポツダム広場を積極的にとらえているということですか？

K: そういうわけではありません。もしあれがヒルマー&ザトラーによるコンペ案に忠実に行われていたならば、ベターだったでしょう。そこでは全てのブロックの高さが45mと一定に揃えられ、その場所の街区構成や都市の形態が明確に現れるというすぐれた都市的提案だったと思うんです。私も当時のコンペで過ちを犯しましたが、今考えるとポツダム広場には現在のように高層建築は必要ではなく、やはり彼らの案に軍配が上がると思います。

H: それはどのような意味においてですか？

K: 端的に都市計画的コンセプトにおいてです。そこで人々がストリートや広場をどのように感じるかという都市の経験についてです。そのような観点からいうと、現在のようにポツダム広場からランドヴェアー運河に抜ける本来ならば目抜き通りとなるはずの道路部分をガラスで覆い、歩行者用のショッピングセンターにしている処理は全く残念です。というのは、そうすることによって明確な都市の印象が消され、人がそこで方向感覚を失ってしまうからです。また、フリードリッヒ通りについては、高さ規制といった諸々のガイドラインがほぼ完璧に機能しており、その結果が全く素晴らしいと思っています。ともかく、この10年間で一つの都市の心臓部をこれだけ巨大な単位で変更していくということがどれだけ危険を孕むものであったかといことは記しておく必要があるでしょう。

H: IBAのサイトとなったフリードリッヒ・シュタットも以前は壁際の取り残された場所という観があったのですが、壁崩壊後は突然都市の心臓部のミットに接するという転換が起きています。記憶と現在との狭間に予想不可能な偶発性を吸収していけるような方法が待たれているのかもしれませんが、そのようなことも含めて、今後ベルリンには何が要請されているのでしょうか。

K: 一つだけ言えることは、エコロジックあるいは社会的視点から考慮しても、これから都市内部の密度を上げていくことが要請とされているということです。しかもそれは公園を確保し、道路や広場を一層整備していくことと平行して遂行されなければならないでしょう。いずれにしても、今日ではもはや一つの建築的潮流に収斂していくことは不可能ですが、ベルリンについて問かけるとき、この都市にはプロイセン時代以来、ラショナルな傾向という建築に対する大きな力が常に働いており、そこから積極的に展開させていかなければならないということは未だアクチュアルなんです。



## 切断のマニフェスト フリッツ・ノイマイヤーとの対話

Fritz Neumeyer:

建築史家、ベルリン工科大学教授

H (花田): 今からちょうど100年経れば、後にミース、コルビュジェ、グロウピウスが一同に働く事務所となるペーレンスが活動を始める日付であり、時代の転換ということがベルリンという都市で社会現象として急速に明確化されていた時期だと思うんです。端的に、現在ベルリンに潜む時代のポテンシャルとは何であると思われますか？

N (ノイマイヤー): まず、現在のベルリンが置かれている枠組みの条件に関して、ヨーロッパの中でのフレームから確認していく必要があると思います。今日におけるヨーロッパの地政学的なランドスケープは端的に東方に移行しており、ベルリンの位置的關係はまさにその結節点であろうと思います。もちろん近代の根源をなす今世紀初頭ではパリとモスクワの中間点としての文化的結節点でしたが、今日ではその関係がより複雑化しているでしょう。いずれにしても東方を含めたヨーロッパの諸都市間の壮大な交響曲の中で、ある責任を孕んでいると思います。

H: ベルリンは単独では存在したことがなく、常に他者との具体的な関係において流動してきたと思います。一方、ベルリンの過酷な歴史の断片は、近代における断罪と逆に近代の道標を形成してきたという事実との狭間で全てを引き受けてきたという観がありますが、その中で常に歴史を読み換える力が必要なのかもしれません。

N: ここで心得ていなければならないことは、2000年を向かえようとしている現在、この都市が再度その歴史を捉え直し、自ら新たに組み換えていかなければならないということでしょう。これはベルリンが抱えるある特殊な近代性に関係しています。つまり、再度確認しておきますが、この都市は今世紀、あるいは特に大戦以降、政治的運命の中に置き去りにされた場所としてあり、時間が連続しているのではなく、むしろ破壊や分断、そして分割の歴史であったということです。これはある意味で今世紀を体現しており極度な障害だったわけですが、逆にそのような変遷によってむしろグローバルな尺度を勝ち得たとも言えると思うんです。ですから他のヨーロッパ諸都市のような固着的なアイデンティティは消失していますが、伝統によって築かれている場所ではなくむしろ「歴史の分断」によってより開かれたマニフェストとしての特徴を備えているんです。今日ではメディアの流通により都市に集住する意義や有効性が問われてきていますが、ヨーロッパの都市の古典的な枠組みを逃れ、そのような今日の状況と連結しながら新たな都市の在り方を開示すべくポテンシャルを孕んでいると思うんです。そのような位相においてもベルリンは近代への過程を自ら開拓してきたのであり、それを他の都市が追いかけてきたということもできると思います。繰り返しますが、ここは政治的な分断等によっていわゆる場所性を失ってきた「非場所としての都市」で

あると言えるでしょう。またそれは自らの内部に他者を入れ込んだ状態であるということでもあるでしょう。そのような特質はまた、都市を開いていくという別なベクトルへ導く可能性を孕んでいます。

H: そのような現象をうけて表現に昇華しているかどうかは時の経過を待たなければならないようですが、現在ベルリンの建築家の構えは極論してしまえば「伝統」か「実験」かという極があるような感じを受けるのですが。

N: 歴史を振り返ると、1945年以降ドイツでは「伝統」と「革新」は弁証法的には全く捉えることができない状況になったのです。それはご存じの通り「破壊の根源」というような今世紀のドイツ史によるもので、特に1933年のナチズムにおける歴史の連続性という問題を通過した後に派生してきたのです。その結果、それまでの歴史を無化してしまうか積極的に扱うかという歴史認識の分極化という経緯があるのです。そのような時代の後で、再びペーレンスを見直すということは重要なことかもしれません。そこでは「伝統」と新たなものを追求していく「更新性」は一者選択されるものではなかったのです。彼は例えばルネサンスをそれまでとは異なる地平において誕生させていたというように、伝統的連続から全く新たな状況を創出していたと言えると思うんです。いずれにしても、ベルリンの建築史においてジリー、シンケル、あるいはペーレンスのような軌跡なくしてはミースは存在しえなかったと思いますし、それは確実にこの場所が有したポテンシャルと織りなされて生じてきたと言えると思います。そのような連続、あるいは不連続として現在においてもこれまでの軌跡を通過せずに建築の創出があるとは思えないんです。

H: さて、かつてヴィム・ヴェンダースは『ベルリン天使の詩』で壁以前のこの神話的都市において空虚な空間を追いかけましたが、私はこの「空虚さ」という特質が複数のレベルにおいてベルリンの歴史を無意識的に支えてきたんだと思うんです。これは1920年代ミースのランゲ邸の折れ曲がる壁の狭間を彷徨う内部経験が意識の間の「虚」を誘発する感覚を覚えますが、例えばこのようにしてベルリンの特質が近代にも流れ込んだのかもしれません。

N: その「虚」の感覚は、この都市の各部位の構成が不連続な空間や歴史の背景の上に成り立ち、その関係性に常にある奇妙な溝という差異を孕んでいることに起因しているのかもしれません。そのように異なる特質や時間のレイヤーが断片的にコラージュされた都市なのです。

H: 壁崩壊直後に壊されたコンクリート壁を擦りながら壁の間の「穴」に潜り込んだ感覚は、音もなく、その延命不能の場所でプロパガンダとして置かれたシャロウンのフィルハーモニーや東の社会主義的建築、あるいはレネーのテ・ィアガルテンが同時に流れ込むという異なる時空、そして

イディオロギーの狭間の空虚なランドスケープだったと思います。

N: この都市を歩くと常にそのような「空虚さ」を肌で感じます。この都市は各部分が有機的に織り込まれた一つのテクスチャーとして成立しているのではなく、むしろ不連続な島の集合としてあり、その狭間に幾つもの「空白の場所」が吹き出しているのです。未だ建設中のポツダム広場もあるところ「メトロポリスの砂漠」と言えると思いますが、その場所から1kmもいくと旧東ドイツの社会主義的建築群や、その中に埋もれたベルリンの起源的な中世都市的光景に出会しますし、その境界の旧歴史的中心部であるミッテではいきなり「穴」に入り込んだような感覚を覚えるのです。このような歪んだ状況がベルリンの特質であり続けていると思うんです。

H: 一方、戦後はインターバウからIBA、90年代の開発を含め、物理的に「穴」を埋めてきた歴史だったと思います。

N: そのような意図的な行為も含め、ベルリンという都市は不可解な切断や二つの全く異なる世界秩序が衝突する政治性を通してあるところ歴史を消去してきたと言えると思います。そのような「歴史の消去」という側面もこの都市を端的に性格づけているのです。そのような組み換えの認識において、破壊された都市の修復をかつて存在した都市の構造をそのままのかたちで再建するというようなことは全く無意味でしょう。

H: バルトが『表象の帝国』の中で「シニフィアン」が自由な空間であって、意味作用の束縛から開放されていることを示唆していました。私はバルトがいうその都市から移動してきたわけですが、何か極論するとそのような場を全く異なった様態としてベルリンに見るような気がするんです。かつてニーチェは『認識の建築』のなかで「都市を徘徊する時に、我々は自分自身を石や植物に置き換え、我々の内面で散歩をする」というような内在における都市の経験を設定していましたが、そのような場とベルリンにおける時空の不連続性は意外にも戯れの関係にあるのかもしれません。

N: そうかもしれません。ニーチェはそこで、大都市に失われている何かに触れていたのだと思います。それは静寂や遠景のようなものだったのでしょう。そこを散策するとき、聖職者が祈りを囁くことも、かつ、市場の喧噪からも逃れているようなそのような場所を希求していたのだと思います。つまり、理想や倫理あるいは商業的なものの間に逃げていくような空間であり、私たちが自らの内部を歩くことができるような自由な場だったのではないかと思います。

H: そのような「空白の場」と「分断された場」としてのベルリンとの戯れから創出されてくる新たな表現を探っていければと思っています。



## 虚のトボス

花田和幸

ベルリンに足を踏み入れた瞬間から、私は奇妙な偏差を感じていた。壁崩壊直後の厳寒の冬だったろう、叩き壊されたコンクリート壁の穴を擦り付けるように潜り抜けていくと、その向こうには東側の社会主義的集合住宅群、レネーのティアガルテン、そして振り返るとシャロウンのフィルハーモニーが不連続に立ち現れてくる。その延命不能な空間で、全ての反響は、氷河期に北方から運ばれたベルリンの砂の深淵に沈み込み、切り取られた二枚の壁の間には流動する高い雲を擦り抜けてきたピントの合わない暗さが吸い込まれる。この光や音の知覚は、その都市の物質的特質を浮上させるばかりでなく、それを透過し、一気にトボスの根源を指し示すのだ。

そして私は5年ぶりにベルリンに戻ってきた。いつものようにミースのノイエ・ナショナルギャラリーの方からその場所に近づいてみる。かつての空洞の中心は今や巨大な資本の林立と化し、東に向かって露出するように立ち上がっていたシャロウンの国立図書館のスケールが妙に萎縮している。記憶にこびり付く兎の糞や不明な異物を辿りながら、かつては未踏の周縁に位置していた空き地に入り込むと、そこにはガラスのファサードの反射や商業的な雑踏で溢れ、私は不意に記憶の中に迷い、取り残される。

冷戦時代、壁を透過しながらこの土地を計画していたはずのシャロウンに、この予想不能な事態が脳裏を横切ったのだろうか。この都市に配置されている全ての構築物は、固定した物質として実在させながら、革命や暴力的破壊、ナチズム、領土の分断という不可避免的に飛来してくる不断の断絶によってその意図が一挙に意味の差異へと転換していくのだ。ベルリンは計画という都市の書き換えによって定義しようとした途端に逃げていってしまう未完のトボスである。この不意の断絶は、いつ時もアクチュアルな常態としてベルリンの空間や建築、意味、秩序に亀裂を呼び込み、同時に、人々の内部に現れる場所や記憶を引き裂き、そして破碎し続けるのだ。空間と意識という場所における極度の偏差の向こう側に、ある「虚性」が浮かび上がってくるのではなかったか。

その時私はノイエ・ナショナルギャラリーの対岸にあるアム・カールスバッド通りに足を向けていた。首都がワイマールに移りベルリンが権力を逃れた空洞の時代に、ミースが「ランゲ邸」の図面を引いていた現場に近づいていたのだ。クレーフェルトにあるその内部空間に入り込むと、「煉瓦造田園住宅」で外部に引き延ばされた壁がもぎ取られたかのような平面からは予想もつかない空間が創出されているのだ。幾つもの折れ曲がった壁に空いた穴を擦り抜けるように一歩づつ足を進めていくと、次の瞬間に今いた場所は消え去り、異なる領域に飛んでいく。外

に向かってあけられた穴から外部に流れ出ると思われる次の一歩によってそれは再び中断され、白い壁に開いた積層する穴の向こう側に流れがシフトしていくのだ。限定された空間を移動していくと、無数の領域がめまぐるしく交換され、内部と外部の光が浸透し合うのだ。そこは、ミースがかつて〈ガラスの摩天楼〉において「反射の豊かな戯れ」によって都市という物性を意識の向こう側、つまり実在と非在の曖昧な差異へと追いやった非物質的な「虚性」が、物質を通して到達されていた現場であったのだ。厳密なディテールによって支えられたその無意識の彼方に神が待っていたのかどうかは知る術もない。ただ、ベルリンに宿る「虚」の特質が、フリードリッヒ通りの都市像を破碎させる〈ガラスの摩天楼〉という20世紀的モデルとして変換され、そのようにして近代に流れ込んでいったのではなかったか。

ベルリンという都市を切り裂く不明の分断は、今世紀にカフカが出会っていた未知の陰謀に連なっていくのだろうか。ミースが反射光のスタディをしていた頃、ベルリンで貧しい闘病生活を送っていたカフカは、都市を経験する独自の徘徊技術を有するベンヤミンにとって、「お互いに遠く離れた二つの焦点をもつ、ひとつの楕円」であり、「現代の大都市の人間の経験」と「神秘的な経験」によって規定されてきたのだろう。カフカは『城』のある見えない都市において道に迷い、「以前には誰も経験したことのないほど遠い異郷にいる」感覚を覚えるのだ。そこで彼は「迷った道を歩き続けるほかはない」のであろうし、「何よりも忘却されている異郷」としての身体を変形させるようにその場所に投げ込んでいかなければならないのだ。ベンヤミンはカフカのことを「挫折した人間の形姿」であり、「かれには、究極の失敗が確かに思えてから、ようやく、途上のすべてが夢のなかでのようにうまくいったのだ」と言ったが、そのベンヤミンがクレーの『新しい天使』に現れている色そのものでなく「補色の世界」を知覚していたように、我々も目前に現実ではなく「来るべきもの」を知覚していかなければならないのだろう。

ベルリンで幼年時代を過ごしたベンヤミンがいみじくも1936年の著作において捕まえていたように「歴史の広大な時空間のなかでは、人間の集団の存在様式が総体的に変化するにつれて、人間の知覚の在り方も変化してくる」のだろう。そこで彼は複製技術という社会的革新がアウラを消失させた地平をみたが、我々は今、他者としての分断による亀裂を孕んだアクチュアルな非場所を彷徨い、その偏差、歪み、差異を加速させ、予期不能な力を渦の中に回収していくような方法を共に探っていく時なのかもしれない。そしてその向こう側に突き抜けていくベルリンという「虚」の特質は、ミースやベンヤミン／カフカとの重ね合わせによって浮かび上がってくるものであろうし、また、彼らがそうであったように都市という身体を我々の身体で感受し直し、再び身体に帰っていくような地平として新たなレイヤーを探求していかなければならないのだろう。

(はなだ・かずゆき／建築家)



企画協力  
内山佳代子

写真クレジット

アンナ・フェラー (Anna Ferrer) : p.5、pp.18  
～22、pp.24～27、p.28上段2点、p.29上段、  
p.30、p.31左、p.32上段、pp.33～36、p.38、  
p.39、p.41、p.42、pp.44～47、p.49 2・3・4  
段、p.50 2・3・5段  
山下昌彦 : p.50 4段

撮影協力

ハイナー・シリング (Heiner Schilling)

資料提供

"An Urban Experimento in Central Berlin Planing  
Potsdamer Platz", Deutsches Architektur  
Musum Frankfurt am Main : p.6、p.50上段  
杉本俊多 : pp.7～10、p.11左・中央  
"Berlin: The Politics of Order: 1737-1989", Riz-  
zoli International Publications, Inc. : p.11右  
Landesbildstelle : p.12、p.28右下、p.29下段、  
p.31右、p.32右下2点、p.37上段・中央  
GrafikBüro Adler & Schmidt : p.32、p.36  
"World Cities Berlin", Academy Editions : p.37  
下段、p.49上段  
Axel Schultes Architekten : p.40  
Landesachiv : p.42左  
Ullstein : p.43





特集2

## 個性の彩る集住群

長野市今井ニュータウンの試み

’98冬季オリンピック長野大会の選手村として建設された後、集合住宅として転用された〈今井ニュータウン〉。

デザイン・コミッショナー制のもと、

7チームの建築家たちが競演した。

ガイドラインにより調整された集住群ではあるが、それぞれの建築の個性で彩られている。

コラボレーションによる設計手法の可能性を探る。













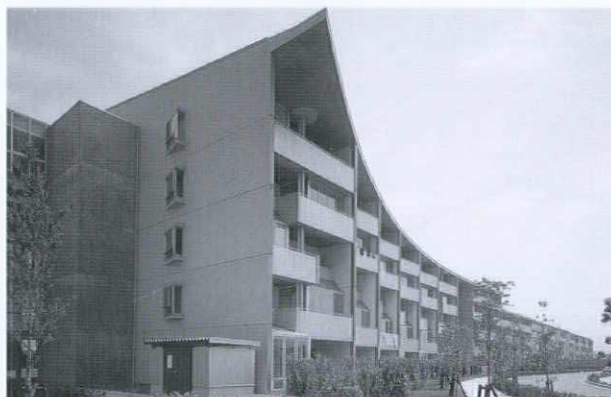
**G 工区**

遠藤剛生建築設計事務所  
アルス設計  
新長野設計  
北沢建築研究所



**D 工区**

富永謙十フォルムシステム設計研究所  
山口設計事務所  
岡澤仁建築設計事務所  
関建築十まち研究室



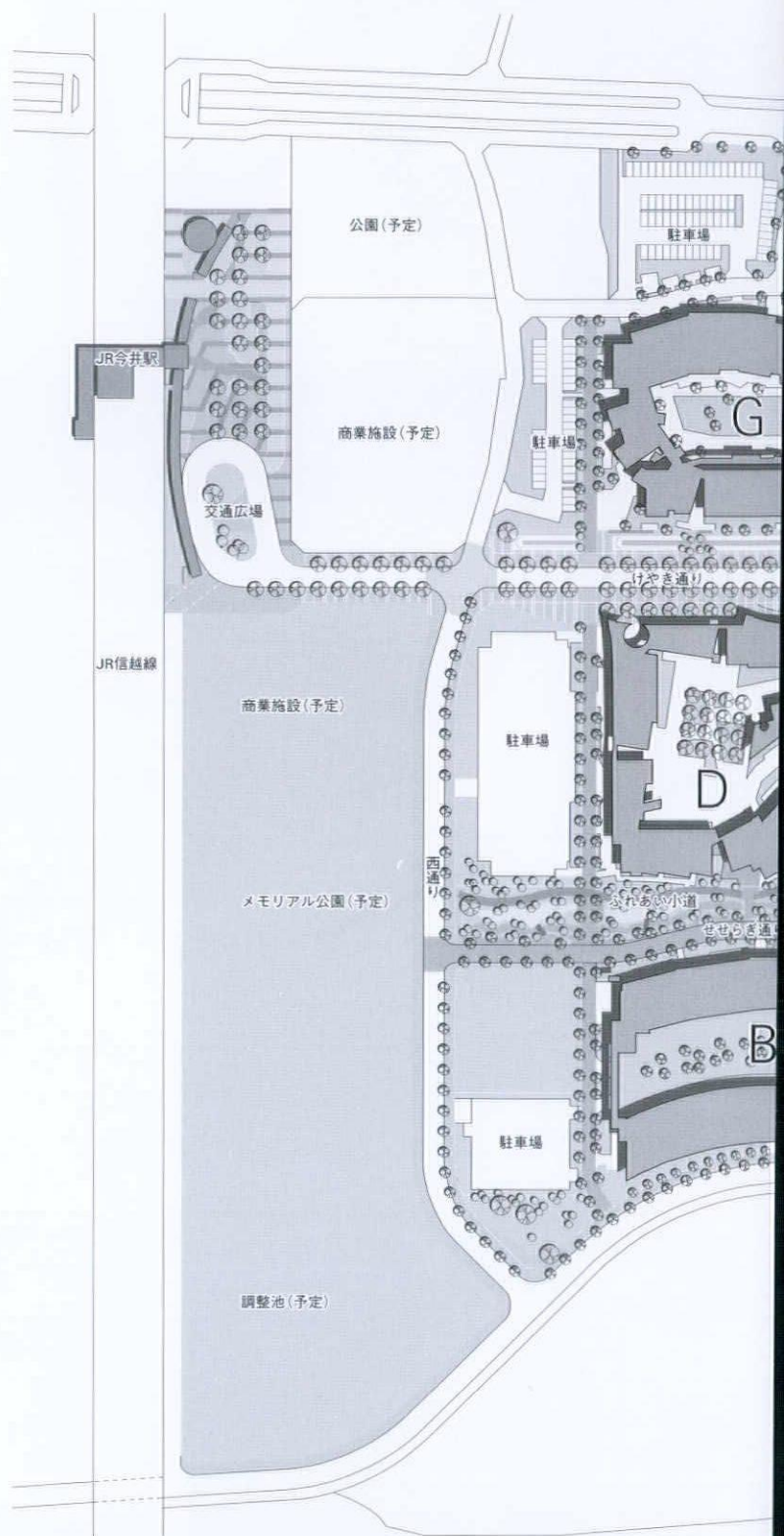
**B 工区**

長谷川逸子・建築計画工房  
エル設計事務所  
誠設計事務所  
基設計



**A 工区**

新居千秋都市建築設計  
後澤建築設計事務所  
竹村建築設計事務所  
第一設計

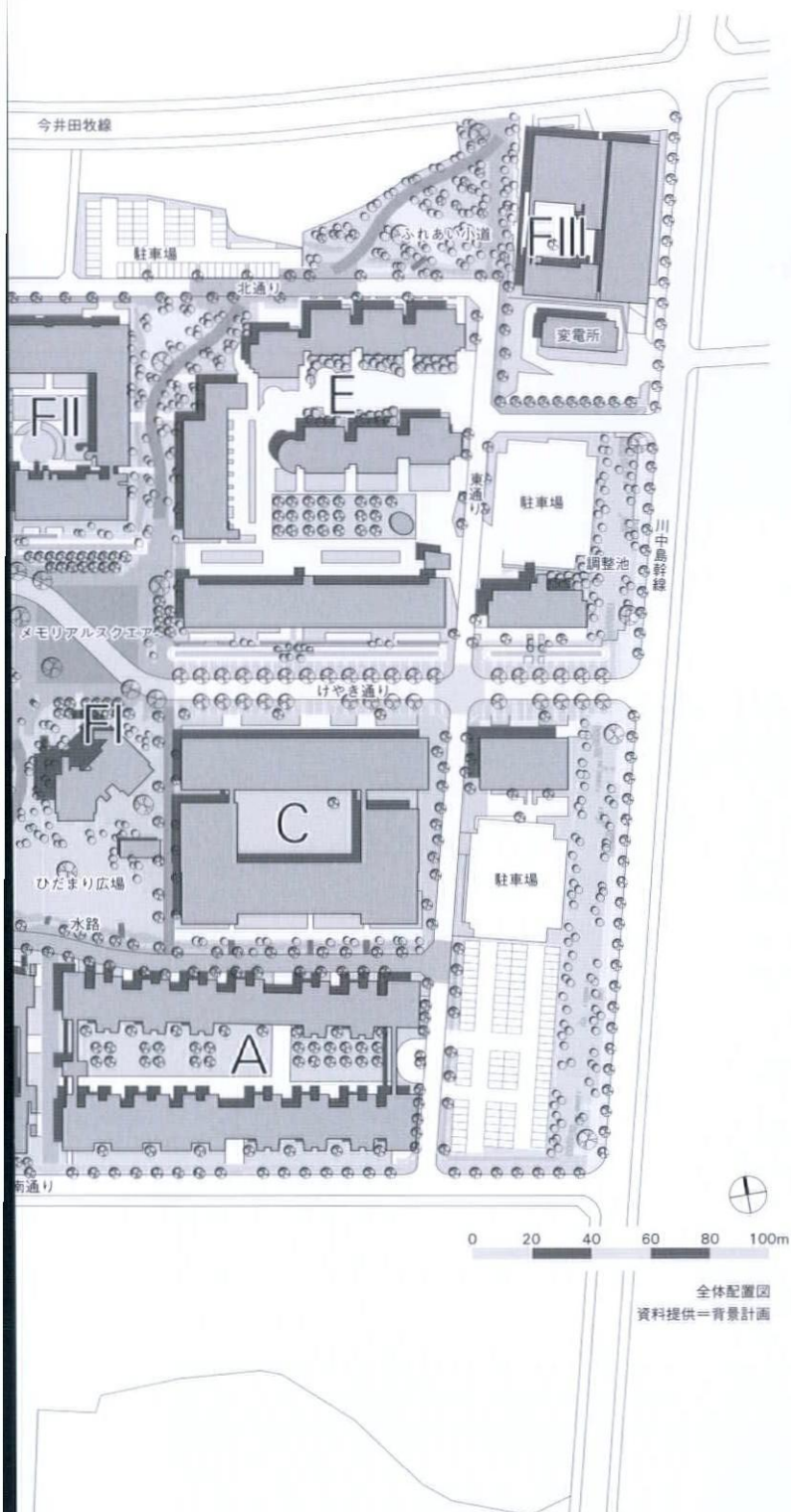


〈今井ニュータウン〉は、1998年冬季オリンピック長野大会の選手村として使用された住宅団地である。長野市の中心部から南へ約6kmの川中島地区に位置し、田園風景の中にはスプロール的に開発された宅地が散在していた。ニュータウンの建設は、オリンピックを契機とした市の地域開発でもある。

長野新幹線と在来線に隣接する敷地には新駅が併設され、19haの区域に約1,000戸、3,000人が入居できる。その大半は、公営住宅、国県市の職員住宅、あるいは企業社宅で構成され、一般への分譲は1割に満たない。オリンピック選手村の一時利用も含め、そのプログラムは特殊な性格を有していた。

全体計画は、〈幕張ベイタウン〉などの実例を持つ、コミッションのもとでのデザイン調整型で進行した。渡辺定夫コミッショナー（工学院大学教授）とデザイン調整チーム（代表＝小田和郎／都市環境研究所）は、マスタープランの作成段階から計画をコーディネートしている。建築設計者は、東京、大阪の集合住宅設計に実績を持つ19の参加者から7者がプロポーザル方式で選定され、これに長野市内の21者が組み合わされて、7つのJVが組織された。





都市設計側である調整チームが建築設計者に提示したデザイン・ガイドラインは、「環境と福祉」を基本として次の3点が重視された。

- ① 冬季の厳しい気候と環境への配慮
- ② 長野の地域性の反映
- ③ バリアフリーの実現（高齢化社会およびパラリンピックへの対応）

地域性の継承をうたうなかで注目されたのは、区域を流れる農業用水路で、親水空間の確保が図られている。各工区の中央にはコミュニティ・スペースとしての中庭があり、幹線道路に対しては「都市型（沿道型：軸線の強調と連続した壁面）」、区画道路に対しては「田園型（変化に富む柔らかな壁面）」の住棟が配置された。コミッションナーは「タウン&ビレッジ」と名づける。

各棟には、白（灰色）を基調色とした色彩計画、片流れ屋根（もしくは切妻屋根）、屋上緑化、冬季の共有空間としてのウィンター・ガーデンの設置、ランドスケープとの調整、などのガイドラインが与えられた。さらに、ランドマーク、ゲート、アイストップといった景観上の役割も求められている。



## F F工区

- ① F-I工区 スタジオ建築計画
- ② F-II工区 エーシーエ設計
- ③ F-III工区 金井設計

植田建築設計事務所



## E E工区

- 近代建築研究所
- 池田設計事務所
- 大沢昇建築事務所
- 橋建築設計事務所



## C C工区

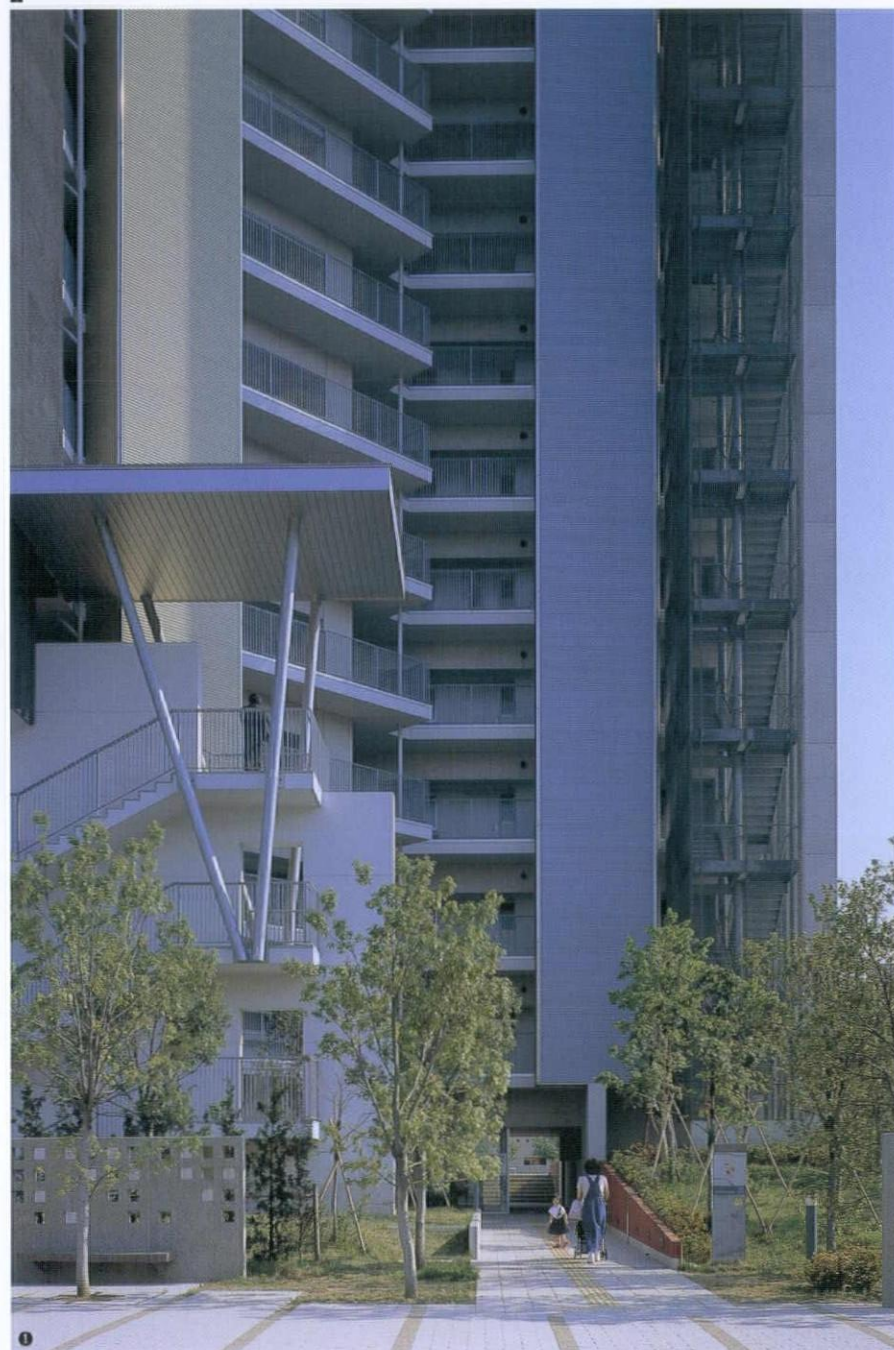
- 内藤廣建築設計事務所
- 宮本忠長建築設計事務所
- 団設計
- アーキプラン



## 生活の視線

若い親子の多い生活風景のなかに、  
建築のフォルムが融合し、  
暮らしの表情が多彩に展開される。

# F



- ① FⅠ工区の北側エントランス。南側のひだまり広場へ通り抜けできる。
- ② FⅡ工区東側のピロティ。奥の中庭はG工区と一体となって形成される。
- ③ 間に浮かび上がるFⅢ工区の夜景。左下に光るのは食堂。
- ④ FⅢ工区中庭から見上げたブリッジ。
- ⑤ B工区中庭からみた夕景。パンチングメタルの西側壁面に山並みが透ける。

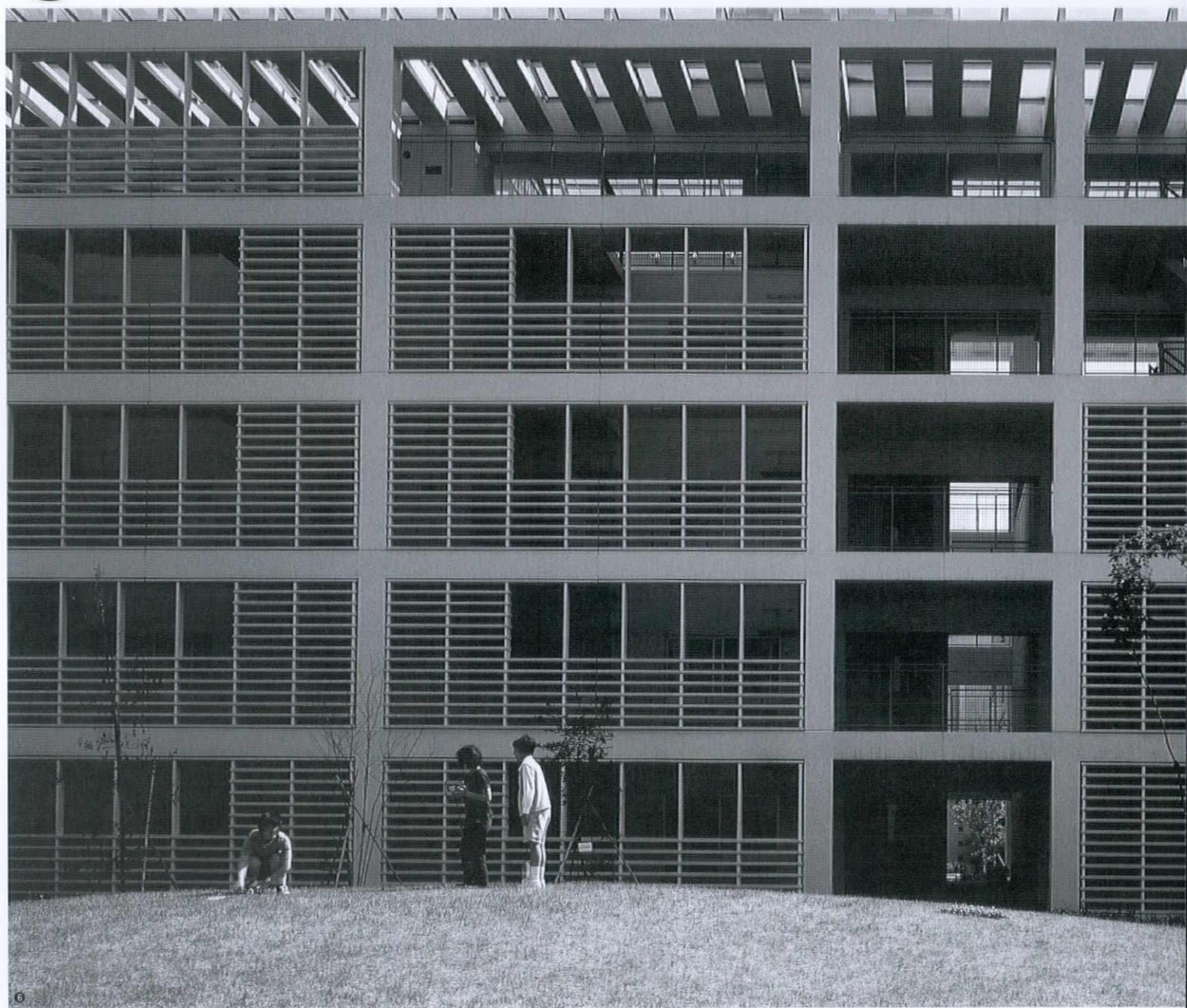


B





C



F



A





# G



# D



- ⑥ 南棟の北側ファサードと中庭。整然としたグリッドと柔らかな曲線の芝が対照的な構成。
- ⑦ 中庭のあずまやで遊ぶ親子。住棟と調和したフォリーが並ぶ。
- ⑧ 夕日を反射するFⅠ工区を中央広場から見る。左にCⅠ区、右にDⅠ区。
- ⑨ 中通り越しの北側外観。凹凸のついたファサードにガラスの階段室が埋め込まれる。
- ⑩ 北側外観。ガラスと手摺の格子で構成する壁面に、ヴォイドとエレベーターシャフト、マリオンの色彩が調子をつける。



## 包まれるパブリック

住棟が包む中庭は、  
物置き、駐輪場、集会場などの生活装置を包含し、  
回遊空間として、ランドスケープとして形成される。

# A





# E

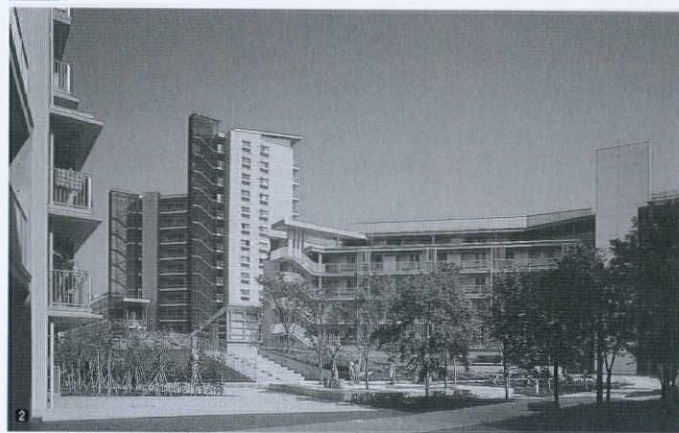


- ① 中庭を囲うピロティ状の通路。4棟の住棟を結び回遊性を生む。
- ② 南棟の分節部分から見たピロティ。手前の柱の向こうは駐輪場。
- ③ B工区東側ブリッジからA工区中庭を見下ろす。
- ④ 西側ピロティから中庭を見る。凹凸のついた壁面の足元を通路がつける。
- ⑤ 南側のEⅡ工区エントランスから見た中庭。手前に駐輪場、奥が4階建てのEⅢ工区。
- ⑥ ランドスケープ化された住棟足元。左はガラスで囲われたEⅢ工区エントランス、右側斜面は駐輪場。奥はEⅡ工区。
- ⑦ 東通りから見通した中庭。左のEⅡ工区足元にはトランクルームなどの付帯設備が埋め込まれている。
- ⑧ EⅢ工区の西棟から中庭を見下ろす。右は都市的な直線、左は田園的な曲線で構成される。





D



B,F



B



C,F



F,G



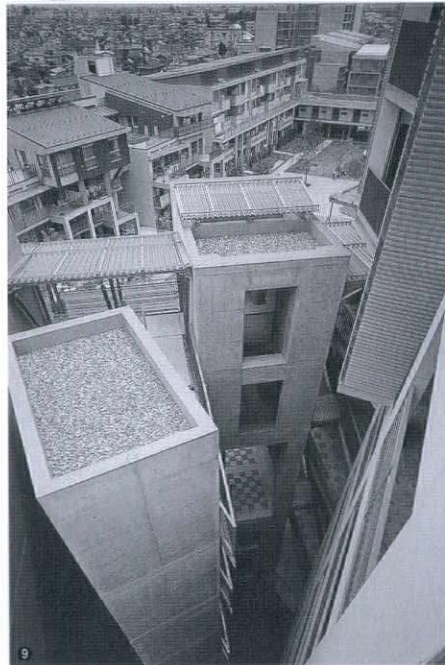


# D,F



# G

# F



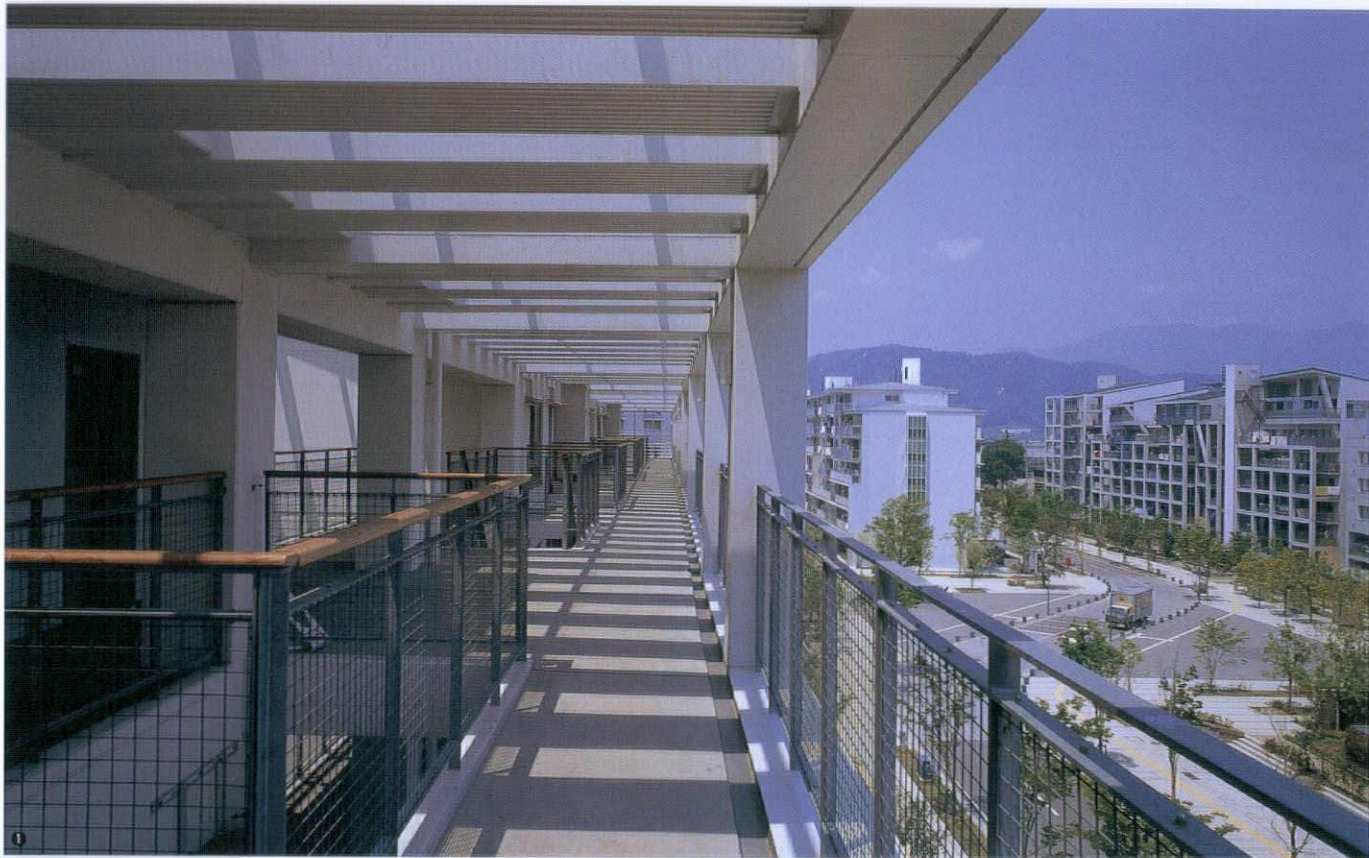
- ① 住棟で囲う中庭を見下ろす。
- ② 北側からみた中庭。左の足元は集会場。高層棟はFⅠ工区。
- ③ ピロティ状のFⅠ工区南側の足廻り。ひだまり広場へと通り抜ける。奥はB工区。
- ④ 西側ブリッジからの中庭。曲面を描くファサードが包む。
- ⑤ グリッド状の住棟とヴォールト状の集会所棟で囲われた中庭。奥にFⅠ工区。
- ⑥ 西南から見たG工区中庭。FⅡ工区と一体となって形成される。
- ⑦ せせらぎ通り沿いの親水水路とひだまり広場の見下ろし。手前がD工区、奥がFⅠ工区。
- ⑧ ひだまり広場。
- ⑨ 多様な形態に囲われる中庭を見下ろす。
- ⑩ FⅡ工区の中庭。右側の2層部分には屋上植栽、左の円形部分は駐輪場。



## 動線のかたち

水平、垂直に流れる動線に、  
曲線、斜線が飛び交い、  
コミュニティスペースが加わる。

# C



# B



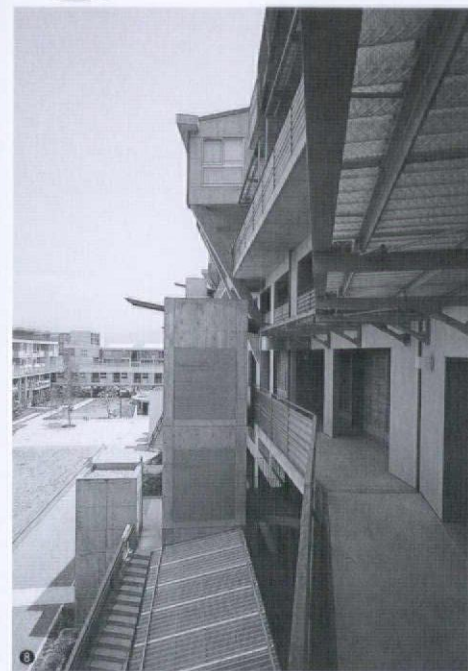


D





# G



- ① 北棟最上階の住戸アプローチ。トップライトは下層まで注ぎ込まれる。
- ② 北棟のウインターガーデン。垂直動線を集中させることで大きなヴォリュームをとっている。
- ③ 各階を結ぶ西側ブリッジ。
- ④ 南棟の階段。半透明のパネルにトップライトが注がれる。
- ⑤ 北西端の階段を見上げる。曲面を描く水平動線とスリット状の垂直動線が交差する。
- ⑥ 西棟アトリウム。トップライトは1階まで注ぎ込まれ、立体交差する動線に陰影を与える。
- ⑦ 南棟6階のウインターガーデン。動線の交差点でもある。
- ⑧ 南棟の住戸アプローチ。複雑な要素が路地的な空間をつくる。





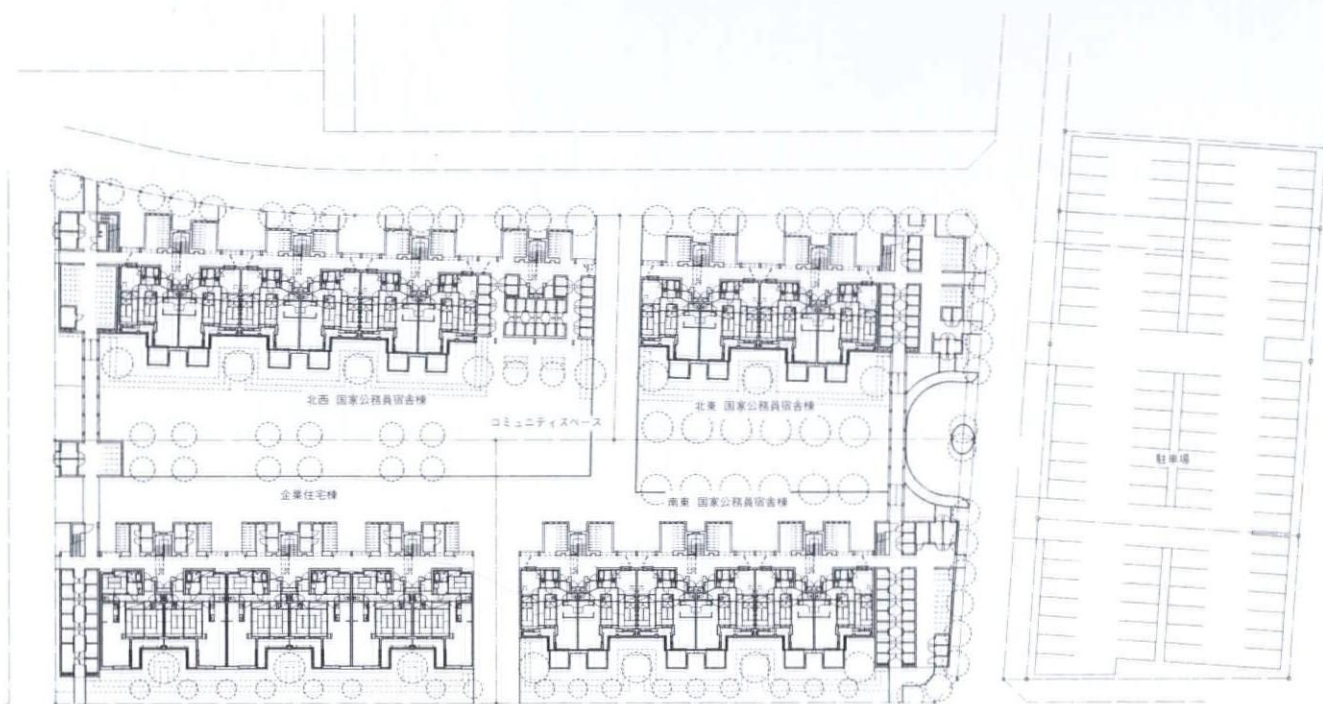
A

A工区

新居千秋都市建築設計

＋  
後澤建築設計事務所  
＋  
竹村建築設計事務所  
＋  
第一設計

敷地面積：10,304.80m<sup>2</sup>  
建築面積：3,697.84m<sup>2</sup>  
延床面積：9,742.47m<sup>2</sup>  
階数：地下1階 地上4階  
住戸数：94戸  
駐車台数：96台（平面）  
構造：鉄筋コンクリート壁式構造  
設計期間：1995年1月～1996年5月  
施工期間：1996年6月～1998年7月  
用途：国家公務員宿舎・企業住宅



配置図・1階平面図 S=1:1000

## 長野サンパウロ計画

新居千秋

## 概要

我々は周辺街区や通りとの調和を図るため、プロポータル・コンペ時の提案である、グランドレベルのデザインをもとに、住棟の一部をピロティ化し、各住棟を一体的に繋ぐ歩行者動線の廻廊を設けた。これに沿って各住棟の付帯施設を分節化して配置し、住棟と一体的に作ることで、ヒューマンスケールな空間構成を目指した。また、この廻廊は主体の違う4棟が空間的にもひとつのまとまりを保ち、かつ冬場の積雪時や雨天時にも軒下で付帯施設にアプローチできるという、地域の気候や風土に根差したものである。また、各住棟それぞれに集会施設を設

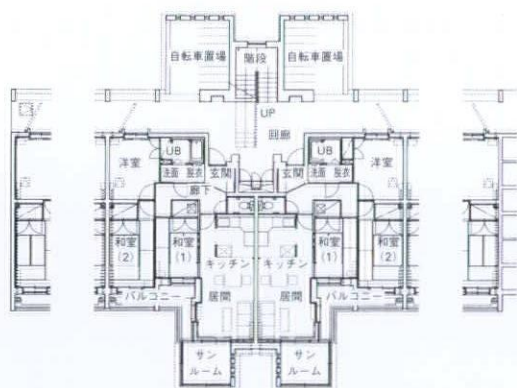
けることが要求されていた。そこでパッシブソーラーの考え方を取り入れたウインターガーデンを設け、住棟の表面に配置することにより、タウンコーナーとなる象徴性の高いデザインを目指した。

## コミッショナーと7人の建築家

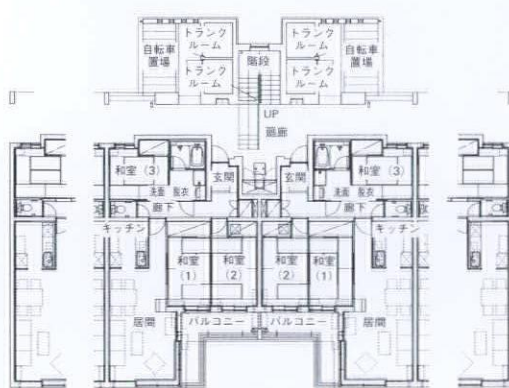
コミッショナーの与えた条件が、切り妻、地域性、ランドスケープ・デザインとの調和、各住棟間のバランスなどであったと思う。私達の棟は発注者が3つの省庁と企業だから、それぞれの管財や営繕の強い指導がある上に、4つの敷地をひとつに見せる（実際には土地からすべて4分割、シンボルツリーも見積もり区分がはっきりしないということで2本）という難しさもあり、苦勞した。7人の建築家と都市計画家、ランドスケープ・アーキテクトとの共同は非常に勉強になった。同じ条件を与えられてもどんどん違う風に解釈する。その違いが実に面白かつ

た。オリンピックの選手村ということはあまりみんなの意識にもなかったし、プロジェクトを進めていく上での問題にはならなかったと思う。私はどちらかというと守りのデザインになったと思う。遠藤剛生さん、長谷川逸子さんの攻め方がとても面白かったし、建物をどう表現させていくのかを学んだ。「メゾネットが駄目だ」と言われた時、松永安光さんが空地の向こうの建売りを指して、「あれは全部メゾネットだ」と言った時、なるほどと思った。内藤廣さんと宮本忠長さんの淡々とした仕事の進め方には、コラボレーションというものはこういうふうになるのかと思った。富永譲さんと元倉真琴さんはさすがに良質な近代建築を作るという感じで面白かった。それらの7人を相手に都市計画家の渡辺定夫さんが言いくるめという会議だった。少し残念といえば、隣の建築家との話しや、コラボレーションがあまりできなかったことで、どちらかというと渡辺定夫さん

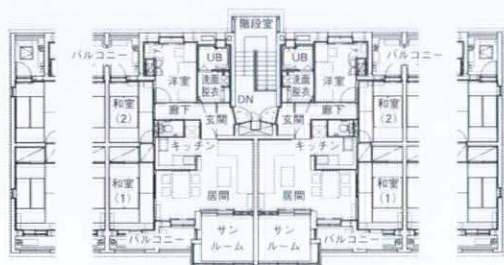




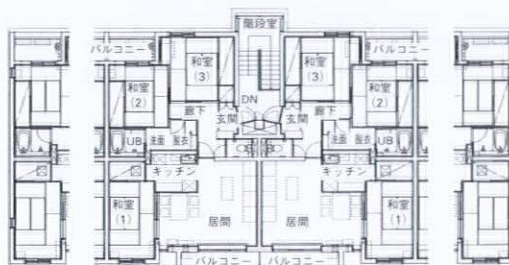
国家公務員宿舎棟 1階平面図 S=1:400



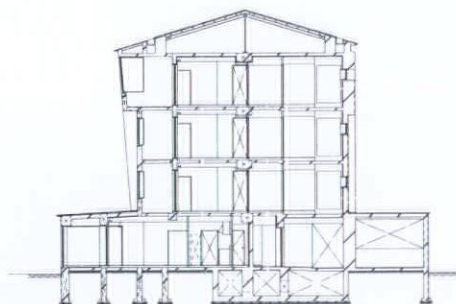
企業住宅棟 1階平面図 S=1:400



国家公務員宿舎棟 4階平面図 S=1:400



企業住宅棟 4階平面図 S=1:400



国家公務員宿舎棟 断面図 S=1:400

の都市計画があり、それに対して7人の建築家が個別、あるときは何人かで打ち込んでいくという感じであった。

#### 長野サンパウロ計画

私はこの計画を〈長野サンパウロ計画〉と呼んでいる。私達はコミッションの言うことや、全体の流れに従い、切り妻の屋根とか、ある種の地域性を出すことを目指した。完了の直前まで全員の屋根も切り妻で屋根が見えたのだが、ある日ガラッと変わった。そう私達が長野で寝ていたら、みんなサンパウロ（地球の反対側）へ行ってしまったという感じがした。隣の長谷川さんの建物の雰囲気や切れ味はさすがだと思った。コミッションの意見と戦いながらアイデンティティを出し、新しいものを作る。私は次に機会があったら、この点を強化しようと思った。しかし、このプロジェクトは街が一律に見えず

に、かつ何か統一性があり、少しキッチュであり、隣を意識しないよう意識している。私と長谷川さんの中庭の連続性や、遠藤さん、元倉さん達の敷地の入り組み方などが出ていて良かったと思う。

#### 均等主義カリビング主義か

平面の特徴としては、各部屋を均一に取るか、個室を小さくしてリビングを広く取るか、プライバシーを守るのか、共同生活（家族）間のプライバシーはあまり重視しないのかということがある。私はかねてからの主張通りに個室を限界値まで縮めて、リビングルームを大きく取る、あるいはLDKを大きく取るという点に力を注いだ。この点は各戸の総面積では一番小さいが、LDKは大きく取れた。この限界の面積の中で家族の集まれる場所、最低ダイニングテーブル+リビングセットが置けるようなところまでは持ち上げられたと思う。他の建築家は住民の

内部の各部屋のバランスや、各室間のプライバシーの問題より、そのユニットごとの組み合わせに力点があったように思う。私の得た印象ではこの住宅の場所、各担当の建築家ごとに各戸の大きさが違うし、また求めるものの意味が少しずつ違った。私達は内部空間の確保に向かい、全体としては外部空間や、パブリック部分の在り方、廊下等に向かったと思う。

#### ランタンハウス

建物の変化はバルコニーやサンルームによって同じ平面図に対して抑揚を与えた。外部廊下をガラスで包み、光の筒が連続するようにデザインした。ウィンターガーデンからの光と共に、ニックネームであるランタンハウスの外観を形成している。デザインが非常に細々しているのは廊下、パブリック部分を最低に持っていく、1階の廻廊やウィンターガーデ





東立面図 S=1:800



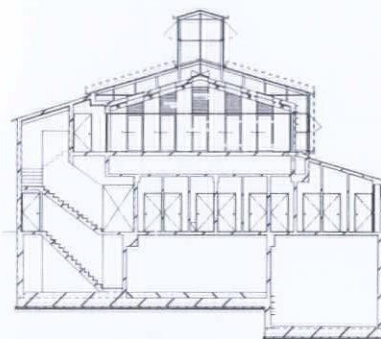
西立面図 S=1:800



北立面図 S=1:800



南立面図 S=1:800



ウィンターガーデン棟 断面図 S=1:400



ウィンターガーデン  
写真＝古館克明

ンにかけたせいだと思う。メンテナンスを考え、屋根はサビナシルーフ（亜鉛の合金）とした。これはメンテナンスが50年以上フリーだから使用した。構造は各階で個室やリビングのプランニングを主にデザインしたので、通常の均等ラーメンとは違い、かなり特殊な構造になっている。この4者の施主との打ち合わせ、プラン中心のデザインを進めた経験から、現在、倉敷で着工中の構造では、両側に厚い壁を取って、中の仕切りはすべて主構造とせず、各階で平面を勝手にずらせる構造と平面計画を構造家の今川憲英さんと実践している。

#### ニュータウン

ニュータウン自体の在り方は、最初から決まっていたので、そのプログラム自体を論議することはできなかった。私達が前にやった〈アルディア・ヌーボ〉などのように、世代間のサイクルや家族の在り

方は、特に私達の街区が杜宅と官舎ということもあって、論議の対象にならなかった。その点も渡辺コミッショナー達ともう一度リターンマッチができたら良いと思う。また、21世紀の日本人の住まいはどうあるべきかということも含めて、他の建築家とのコラボレーションをやってみたいとも思っている。（あらい・ちあき／建築家）



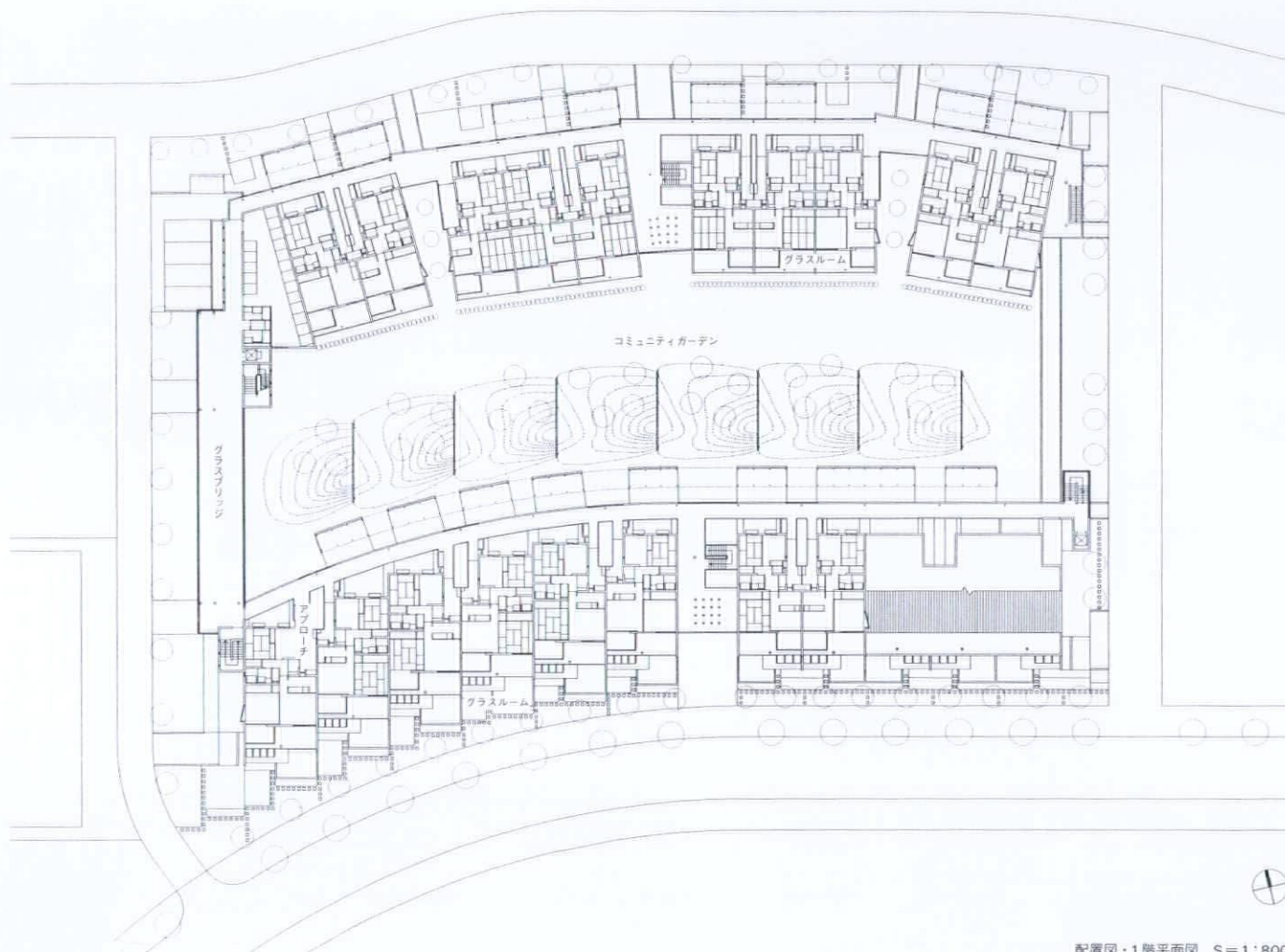
# B

## B工区

長谷川逸子・建築計画工房

＋  
エル設計事務所  
＋  
誠設計事務所  
＋  
基設計

敷地面積：11,782.76㎡  
建築面積：3,734.93㎡  
延床面積：10,231.85㎡  
階数：地上5階 塔屋1階  
住戸数：100戸  
駐車台数：100台  
構造：壁式鉄筋コンクリート造  
設計期間：1995年1月～1996年5月  
施工期間：1996年8月～1998年7月  
用途：市分譲住宅



配置図・1階平面図 S=1:800

### 住居群をネットワークリングでつなぐ

長谷川逸子

プロポーザル提案後、この公営のニュータウン計画にあって唯一民間に分譲されるという特別条件がついたB工区の担当に、マスターアーキテクトによって決められた。戸建分譲中心という現地状況の中で、戸建を購入するつもりの人が入居したいと思える住居のプランと質、メンテナンスのしやすさや管理のサービス、そして集合住宅でのライフスタイルに魅力ある付加価値を持たせるためのきめ細かな提案など、分譲物件としての配慮を行った。

地方では集合住宅に住むことによって逆にコミュニケーションが欠落し孤立してしまうということがある。そうした解体されやすい共同体意識を現代感

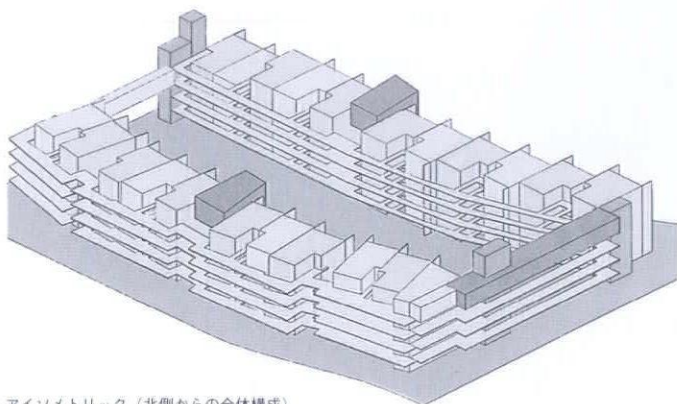
覚で再構成させるために、出会いのチャンスがたくさん生まれるような場をこの建築の中に導入したいと考えた。コミュニケーションが欠落し孤立しやすい原因として、必要以上のプライバシー確保による親密さの喪失、そして重層化による垂直移動による出会いのチャンスの喪失などが挙げられる。コミュニティは出会いを通して形成されることを考える時、利便性の垂直動線だけでなく水平方向への動きを仕掛けることを考えた。水平の各戸をネックレスリングでつなぎ、その中に集会広間や階段まわりの広間などの溜まり場も交じり合わせ、全体を水平移動のチャンネルである「コミュニケーション・ネックレス」のイメージを持たせ、空間の強調を図ったデザインとした。各住戸はひとつの閉じた島のようなものでありながらもネットワーク・リングでつなぐことで、ここにコミュニティシステムが立ち上がることを期待した。ま

た、この集合住宅が今後迎える高齢化社会を停滞ではなく、豊かで成熟したものにするための生活装置となることも期待している。

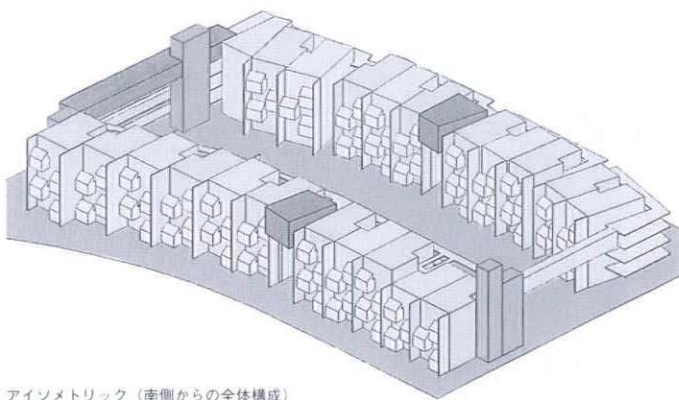
### コミュニケーション・ネックレス

水平方向への動きを仕掛け「コミュニケーション・ネックレス」と名づけた。住居部分から2m離れた通路は目隠しと雪の吹き込み防止の半透明の壁とトップライトをリズムカルに配しながら、各戸の入口にH型鋼の門を建てて広いエントランス廻りの空間をつくり、井戸端会議のできるほどのベンチや漬物などを置くトランクボックスを設置した。特にグリーン色のトランクボックスが北側廊下の表情をつくっている。階段廻りに広場などを配して溜まり場をネットワークし、全体を水平移動のチャンネルであるネックレスとイメージして繋ぎ、この空間の強調を図ったデザインとなっている。

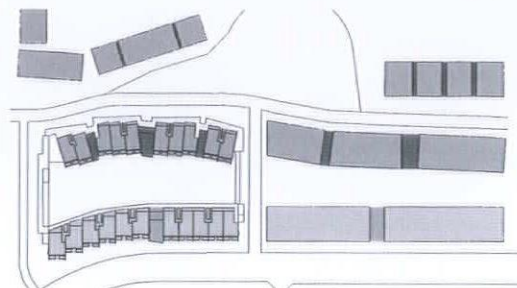




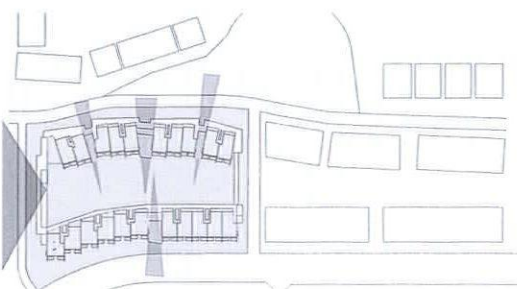
アイソメトリック（北側からの全体構成）



アイソメトリック（南側からの全体構成）



分節



通り抜けスリット



中通り（緑道）

## グラスハウス

各戸には広いテラスと共にグラスハウス付きの形式となっていて、そこは冬は日だまりの中の遊び場やアフタヌーンティーをいただくグリーンハウスなどの趣味の空間となり、夏はリビングの延長の縁側空間となり、四季折々のセレモニーやパーティーを行う場として計画した。個性的なライフスタイルを展開するプラスアルファの空間として用意した。寒冷地であってテラスだけでなく、内部でも四季の生活をエンジョイできる住居としてつくった。

この各戸のグラスハウスは、快適さのイメージを託したイエローの連柱と共にリズムカルな立面をつくり上げている。

## ランドスケープ

大きな中庭は、コミュニケーションスペースと名づけられているが、イメージとしては古いイギリスの

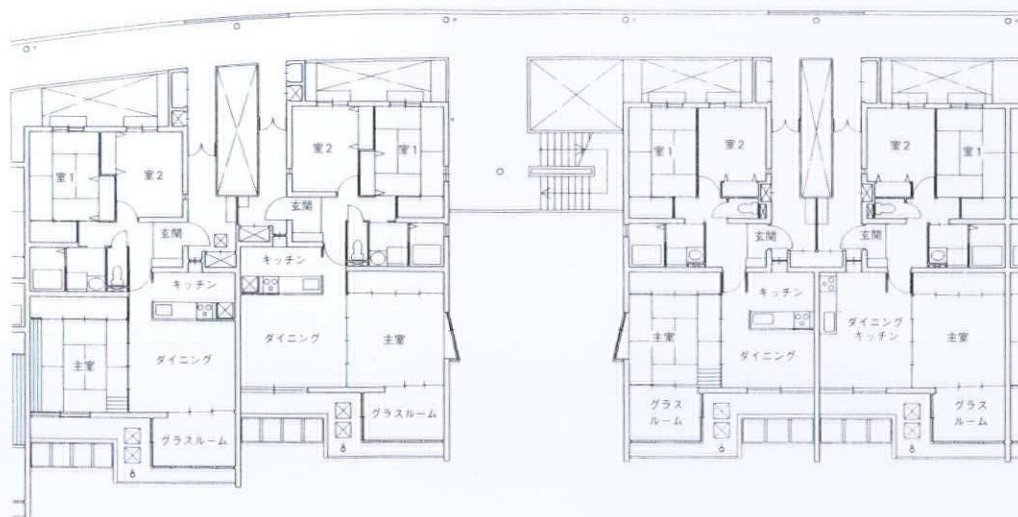
マンションが持つプライベートガーデンのようなものにしたいと考えてきた。良い季節には、みなが自由にピクニックやパーティーができるような芝の広場で、季節の果実や花の香りに包まれた屋外生活の快適さの導入を図ろうという考えである。その果実は共同で収穫し、料理やジャムを作るワークショップと結びつけたい。そうした活動の中で、花を育て楽しむことも導入しようと、南面のプライベートガーデンの生垣と歩道の間の空間をグリッドに仕切った花畑とした。現在、多種類でいろいろな季節の花々をとりあえず植えてある。

周辺はそれぞれに面している隣接地との連続を考えつつ、高木、中木、低木を配置し、全体を緑豊かな環境としてヒートアイランド防止を積極的に行いたいと考えてきた。

## 住棟配置とアプローチ計画

北面は、中通りのビレッジ化に呼応させて4棟に分節し、通風機能を兼ねた風道のデザインがリズムカルなシーンをつくっている。この面は緑豊かな中通りやせせらぎに面することから、そうした環境との連続の内にありたいと植樹してきた。東と西面は、コミュニティスペースの広がりを持つ快適さが通りから見え隠れする。敷地の内部に光輝く空間とさわやかな通風が通りまで感じられるような低木の生垣、上部にはシースルーのアルミバンチングメタルの連絡通路や共有空間がアーチのように空中を飛んでいる。南面はガラスサンルーム・ボックスとイエローの細い円柱が並ぶ。南棟は道路形状に合わせた円弧を描くデザインで連続性を表現した。  
(はせがわ・いつこ／建築家)

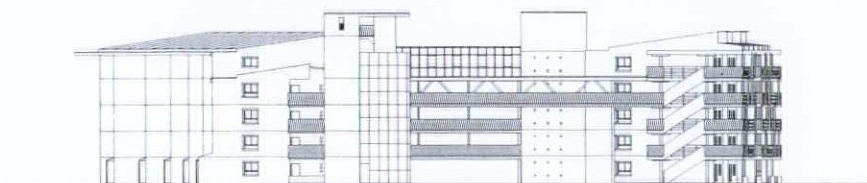




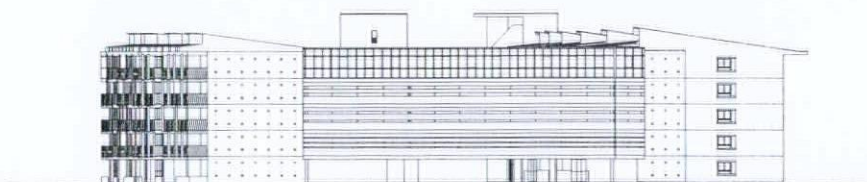
住戸平面図 S=1:300



北立面図 S=1:800



西立面図 S=1:800



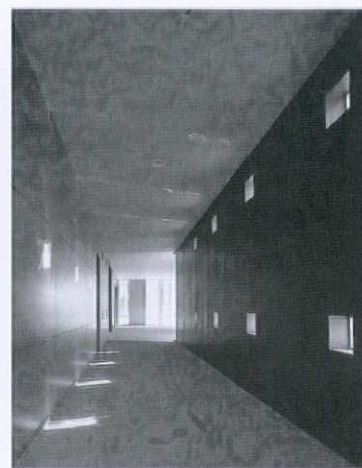
東立面図 S=1:800



ガラスルーム



住戸へのアプローチ



トランクルームへのアプローチ

写真=木田勝久



C

C工区

内藤廣建築設計事務所  
+  
宮本忠長建築設計事務所  
+  
団設計  
+  
アーキプラン

敷地面積：6,879.46m<sup>2</sup>（北棟・南棟）2,859.96m<sup>2</sup>（ゲート棟）  
建築面積：2,717.22m<sup>2</sup>（北棟・南棟）503.20m<sup>2</sup>（ゲート棟）  
延床面積：10,396.52m<sup>2</sup>（北棟・南棟）3,159.84m<sup>2</sup>（ゲート棟）  
階数：地下1階 地上6階（北棟） 地上5階（南棟）  
地下1階 地上10階（ゲート棟）  
住戸数：121戸（北棟・南棟）39戸（ゲート棟）  
駐車台数：160台  
構造：PC組立構法+鉄筋コンクリート造（北棟・南棟）  
PC組立構法+鉄骨鉄筋コンクリート造（ゲート棟）  
設計期間：1994年11月～1995年7月  
施工期間：1996年1月～1998年7月  
用途：県職員住宅



配置図・1階平面図 S=1:1000

## 白い立体格子

内藤 廣

### 整合性と精度の追求

C工区は、マスタープランから求めらる住棟の階数の設定、日照条件などの諸条件を検討すると、全体配置の自由度はほとんどないといった状況でした。建築のデザインの在り方など、与えられた工区全体のガイドラインを尊重しながら、できるだけ合理的なフラットをつくることを基本方針としました。また、各住戸の面積的な与条件も厳しいことから、オリンピック開催時の仮設的な使われ方を考慮した上で、ここでは各住宅ユニットの個性や住棟ブロックのヴァナキュラーな形態にはこだわらないことにしました。

我々のチームが目指したのは、合理的なフラットの形成と均質な標準プランを前提として、これらの洗練度をどこまで上げていけるか、ということでした。そうしたものが導き出すであろう規則性を、どこまで美しい形で提案できるか、です。我々に与えられた街区に、他の街区との間に何らかの際立った差異があるとすれば、このスタンスを終始貫いたことに尽きるのではないかと思います。全体のシステムを、整合性の取れた精度の高いものにすること、それがもたらすであろう美しさが建物全体に韻律をつくり出すこと、を中心に作業を積み上げました。スタンスがはっきりしていたので、共同設計の場でも議論を常に前向きな気持ちで進めることができました。

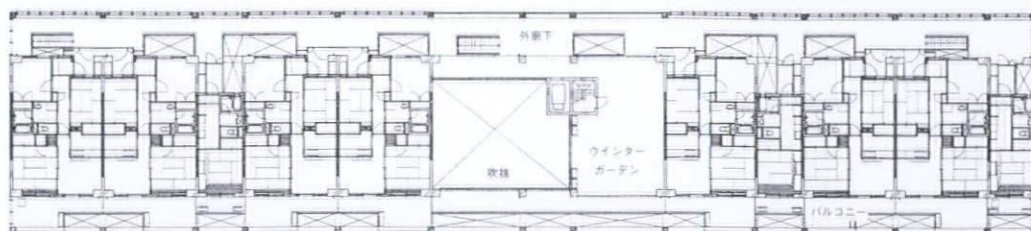
### PCaのフレーム構成

繰り返しが多いこと、短工期であること、寒冷地の

RCの打設状況、などを考慮し、架構にプレキャスト・コンクリート（以下、PCa）を採用しました。躯体を工場製作するため、建築の構成部材を単純化する必要がありました。シンプルな構成の住棟の外周部には、PCa化された450角の柱と梁を用いて、明快なフレーム構成のファサードをつくり上げています。住棟の外側に取り付けたPCaのフレーム構成のファサードによって、住棟の大きな立面を分節化することを図りました。

北側のフレームには、雪が吹き込まないように防雪柵ルーバーを取り付けました。この防雪柵ルーバーは、PCa製の一体成形品です。脱形勾配、水きり、RC強度、剥離材の種類、凍害を考慮したRCの空気量、PCa表面の気泡発生状態、PCaの含水率とPH値、塗装の仕様のチェック、などを検討しながら何度も試作を繰り返しました。最初の冬にオリンピックが開かれましたが、選手村として使用して





北棟6階平面図 S=1:600



集会所



集会所から中庭を見る



北棟バルコニーから南棟を見る

写真提供=内藤廣建築設計事務所

いる時に、この防雪柵ルーバーのお陰で廊下にほとんど雪が吹き込まずに済んだそうです。この防雪柵ルーバーは、廊下と向かい合う反対側の建物からの視線を遮り、住戸のプライバシーの確保にも役立っています。PCaの格子状のフレームとともに、住棟北側の表情にスケール感を生み出し、街並みのテクスチャーをつくり出すことにも貢献できたのではないかと考えています。

各住戸の南側のバルコニーは、テーブルを置いて食事のできる奥行きを確保しました。それと同時に住戸内部にも十分な光を入れるため、バルコニーは各階ごとに吹き抜け部分と床板を交互に配置しています。

ファサード面のPCaのフレームと防雪柵、住棟の本体のハーフPCa、これらの高品質の材料を使うことによる躯体コストの上昇は、構法の合理化を図ることや現場の工期短縮の努力によって、厳しい予

算枠の中で収めることができました。また、これらの工法を採った結果、建設時の仮設資材、使い捨ての資材を大幅に減らすことができました。長野オリンピックの大きなテーマのひとつであった環境に対する提言にも答えられたのではないかと考えています。

#### パッケージされた明るい空間

ガイドラインで大枠を決められた住棟ブロックのヴォリュームと各住戸面積を積み上げたヴォリュームとの間に、若干のゆとりがありました。このゆとりを建物の中央部に持ってきて、大きな吹き抜けの共有空間をつくりました。規則的なPCaフレームと防雪柵ルーバーでパッケージされた住棟ブロックのなかにできた大きな隙間です。

これをガラスのトップライトで覆い、ウインターガーデンとしました。これとは別に、最上階の廊下

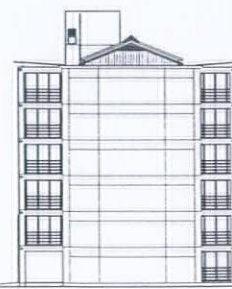
にトップライトを設けました。ここから入る光は、各階の廊下に設けられた「光の井戸」を通して下の階まで降り注ぎます。これは各階の北側廊下に明るさをもたらすと同時に、共用廊下と各住戸のテリトリーの心理的な区分にも役立っています。ウインターガーデンと廊下部最上階に設けたトップライトからブロック内部に取り込まれた光は、中央通りに面した北側の大きなファサードを、内側から明るく照らし出します。大きな明るい空間を内側に抱えることによって、北国の集合住宅の北側立面の暗い印象を払拭できたのではないかと考えています。

設計・監理は、地元の設計事務所との共同作業で行われました。計画の各段階でディスカッションを繰り返し、長野の気候風土に対する経験を提供してもらいながらディテールを共同で検討していきました。それぞれのノウハウを提供しあい、知恵を出しあい





北棟 北立面図 S=1:600



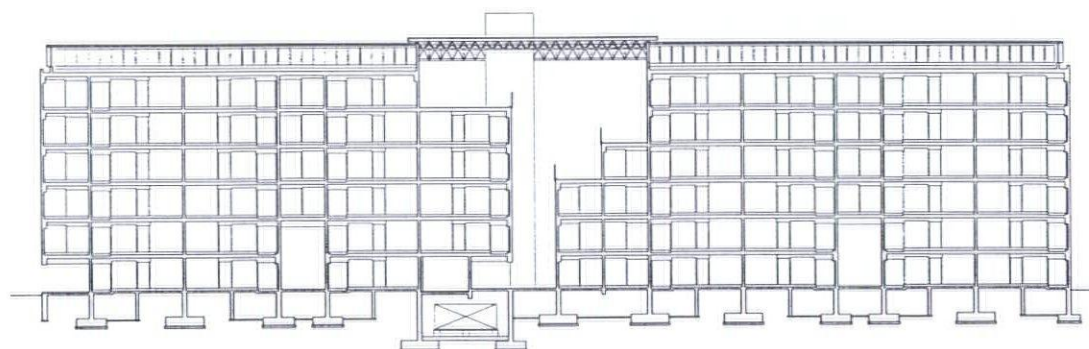
北棟 西立面図 S=1:600



北棟 南立面図 S=1:600



北棟 東立面図 S=1:600



北棟 断面図 S=1:600

ました。良いまとまりで最後まで共同作業ができた  
ことを誇りに思っています。建物の成果は、我々チ  
ームのコミュニケーションの成果でもあります。  
(ないとう・ひろし/建築家)

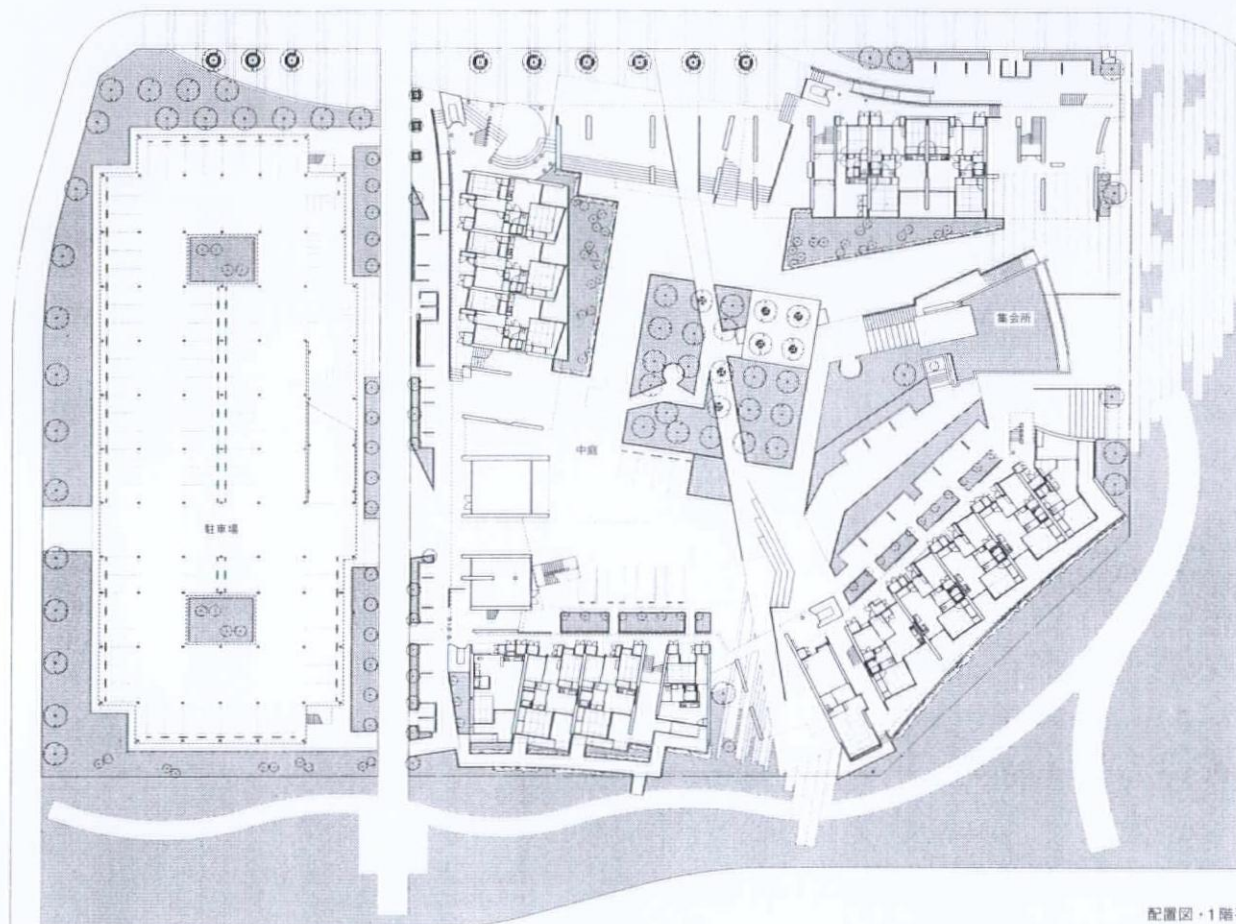


# D

## D工区

富永譲十フォルムシステム設計研究所  
+  
山口設計事務所  
+  
岡澤仁建築設計事務所  
+  
関建築十まち研究室

敷地面積：12,942m<sup>2</sup>  
建築面積：3,124m<sup>2</sup>  
延床面積：13,586m<sup>2</sup>  
階数：地上7階 塔屋1階  
住戸数：141戸  
駐車台数：258台  
構造：鉄筋コンクリート・ヴォイドラーメン造  
設計期間：1994年11月～1995年9月  
施工期間：1995年12月～1998年7月  
用途：市営住宅



配置図・1階平面図 S=1:1000

### 小さな都市の尺度の構想

富永 譲

#### 小さな都市

様々な規模の住戸単位が141戸集積して、でき上がった全体像は、すでに小さな都市である。あるいは1.3haの都市の断片である。7人の建築家に敷地が割り振られ、それぞれが住まいの空間の側から「小さな都市」を設計することが〈今井ニュータウン〉の興味深いテーマであると思った。7人は以前から作風もよく知っている建築家であったから、住まいの場に対する考え方も大体承知していた。しかしデザインを進める過程で、コミッショナー側を中心として頻りに会ったミーティングは、7人の建築家がどんな説得やリズムで実際の設計の現実を動か

しているのかを知ることができ、魅力的であり、学ぶところも多かった。建築家チームは、住戸単位の側からチェックして、住まい手側からの経験を吟味し、141戸の小さな都市の全体を構成しようとする。一方、コミッショナーや他の建築家は街区のつくる全体像に対して介入してくる。例えば元倉氏の高層棟の高さが高くなることには全体風景として全面的に賛成であったが、それは私達のブロックの1階部分の住戸としての日照がとれないことを意味していた。その時、一緒に街を設計している実感を持てたし、実に面白い体験であった。

与えられた小さな都市のスケールが150戸内外であったのも、住戸内部から伸ばしていつて届きうる範囲であり良かったと思う。計画の予定された敷地を初めて訪れた時は、桃の畑があり、農業用の水路がところどころ走っている、のどかな全くの平坦な畑がりであり、自分がこれから計画するものが、

どれだけのスケールを持った実体として印象されるのかを想像しようとしたが、なかなか把握できなかった。頼りになるのは、敷地の隣を横断して人を運ぶ長野新幹線のコンクリートの連続する土木スケールの柱脚の列であり、四周を限定する遠い山並みの輪郭であった。それは雪や夕焼けによって美しく変化した。

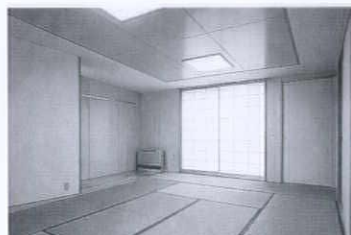
#### スケールを実感すること

設計の大半は、このスケールを身近なものへと引きつけ、実感するための作業であったように思う。断面のスケッチを描いたり、模型をいろいろなスケールでつくったり、1住戸のプランをスタディしながら、敷地の大きさを計測していたのである。特に中央の庭についてはこの集合住宅のテーマであり、その大きさが成功するか、失敗するのか、最後まで不安であった。この扇形に囲まれた場合は、このニュー





ガラスで囲われた  
ウィンター・ガーデン



和室



廊下から中庭をみる

資料提供＝  
富永 謙十フォルムシステム設計研究所

基準階平面図 S=1:500

タウンの中で1住戸と街の間にあって、そこで心が開放される自立した空白の場所として考えていた。基礎が打たれ、躯体が建ち上り、サッシュが入り、外装が施され、地上面の集会室、自転車置場などの付属屋が建ち上り、地面の段差が設置され、地表がペーブされてゆくにつれ、扇形の庭の大きさは変化していった。竣工後、植木が成長した時に訪れるとまた別の印象を受けた。恐らくこのニュータウンに住みつき、季節が移ろい、雪や夕焼けの中で生活する時、この空白の庭はまた別の次元のものへと変容しているに違いない。

設計期間とは敷地の大きさを計測し、実感するための試行錯誤を繰り返す旅の時間である。幾何学を当てはめるといった上空飛行的思想から、風景の中に住みつくといった土着的感覚の想像にうまく至るまでの、行きつ、戻りつの旅の時間である。150戸内外の小さな都市のスケールは、ギリギリの建築の

スケールであり、「幾何学的空間」から「生きられる空間」へと想像の羽根を伸ばして行って移行しようような規模であったと思う。そしてすでに生活が始まっている〈今井ニュータウン〉の小さな都市は、僕達が構想し、計画し、寸法を与えた「建築的空間」とは別の次元のものに移行しているに違いない。「生きられる空間」は、社会的、経済的、文化的生活スタイルに支配され、あらゆる住み手の人々が、これから長い時間に渡ってそれぞれに産出する空間である。しかしそうした「社会的空間」に関する様々な情報が「変わるものと変わらぬもの」の弁別、僕達の構想を培うのである。

#### D工区の固有な設計条件と形体

広場は、囲み型の配置であるが、閉鎖された場ではなく、スリットやピロティを用いて7人の建築家の敷地と人の動きに対して開かれ、それらを取り結び

うるものであり、しかしまとまりのあるひとつの世界をつくり出しうるものとして構想した。広場の空間に楽しさやリズムを与えようとしたピロティやスリットの位置は、実は日照条件から住戸を計画することのできない部分や、住棟のエクスパンションジョイントを利用している。そしてファサード壁面の形状の微妙なそりや凹凸のズレは、7層という高さのスケールをいくらかでも和らげることにつながっていると思うが、これも実は、この市営住宅のD工区に課せられた大きな与条件を建築的に解決した結果でもある。与条件の中で最も大きかったのは住戸タイプの多さである。ニュータウンの特殊なタイプの住戸がここに集まっていたからである。広さについては1LDKから4LDKまで4種類、また一般向仕様以外に、シルバー住宅および障害者向けの住宅の区別があり、なおかつそれぞれについて1種、2種の区別があるとなると、公営住宅法の種別だけで



北立面図 S=1:1000



西立面図 S=1:1000



南立面図 S=1:1000



東立面図 S=1:1000



中庭 断面図 S=1:1000



18種類を数えた。また、配置計画として囲み型を採用したことによる南北住棟の発生、6戸に1台というエレベーター配置による端部住戸の存在により、異なるプランタイプが発生し、最終的には48種類に昇った。

また、数多くのプランタイプについては、種別ごとに戸数と住戸面積が決められており、それらを矛盾なく中庭を取り囲む住棟に割りつけてゆくといったパズルを解く中で変化させながら生み出した建築的方策が微妙な形状であった。そうしたプログラムの持つ難しい、しかし現実化するには重要な条件を解決してゆきながら、それを切っ掛けにして建築家はスケールを身近なものへと引きつける機会とするのである。計画全体から見ればささいなことであっても、生きられる空間の側から見れば大事な、検討されるべきものが一杯詰まっているというのが集合住宅の設計の実際であろう。だから固有の条件は

(解決しうるものであればの話であるが) 多ければ多いほど、計画は人間的尺度をそなえることに違いない。

#### 「空白の庭」の構想

扇形の囲まれた場は、かなり高密度な住宅地の中で、地面を歩いてホッとするような水平の拡がりを感じさせる場でありたいと思った。住まい手の日常生活の中で、廊下やテラスの上部から一望のもとに見下ろされる庭となることも意識した。市営住宅の住人にとって、この扇形の広場を俯瞰する全景は、家路へ帰り着く時に繰り返し出会う光景であり、機能が充溢した1戸の住宅の内部から開放された空白であり、ニュータウンの空間と住戸の間に、そうした自立する空白を挿し込むことに価値があると考えた。はっきりとした予測ができない、これからの「社会的空間」の変化に対して、この「小さな都市」が長

い時間生き続けてゆくのに一番大事な「変わらぬもの」であると思った。1.3haの建築空間の構想である。

(とみなが・ゆずる／建築家)



中庭の俯瞰

資料提供＝富永謙＋フォルムシステム設計研究所



# E

## E 工区

近代建築研究所  
+  
池田設計事務所  
+  
大沢昇建築事務所  
+  
橋建築設計事務所

敷地面積：14,596.4m<sup>2</sup>

建築面積：1,226.4m<sup>2</sup> (E I 工区)

400.7m<sup>2</sup> (E II 工区)

2,637.5m<sup>2</sup> (E III 工区)

延床面積：5,426.6m<sup>2</sup> (E I 工区)

3,207.2m<sup>2</sup> (E II 工区)

7,829.6m<sup>2</sup> (E III 工区)

階数：地上6階 (E I 工区)

地上10階 (E II 工区)

地上4階 (E III 工区)

住戸数：80戸 (E I 工区)

50戸 (E II 工区)

100戸 (E III 工区)

駐車台数：241台

構造：鉄筋コンクリート造 (E I 工区)

鉄骨鉄筋コンクリート造 (E II 工区)

鉄筋コンクリート薄肉床壁構造 (E III 工区)

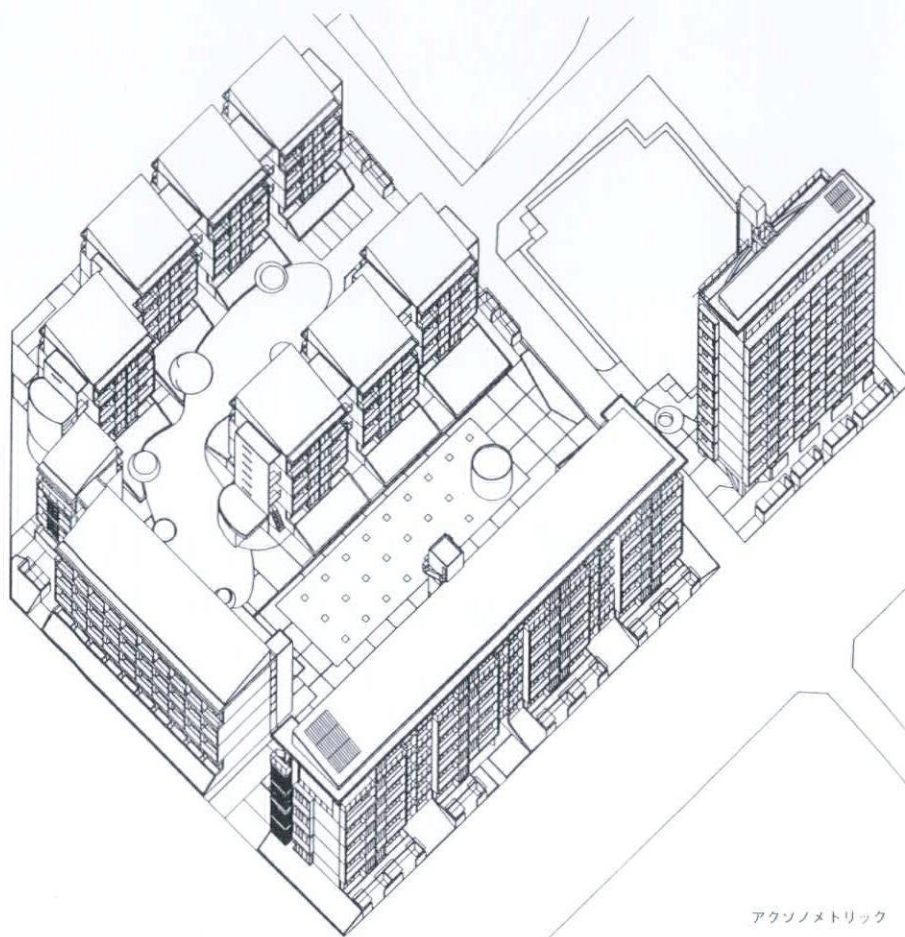
設計期間：1994年9月～1995年9月

施工期間：1995年12月～1998年9月

用途：県職員住宅 (E I 工区)

県教職員住宅 (E II 工区)

市教職員住宅 (E III 工区)



アウソノメトリック

## 「生活」から「構成形式」へ

松永安光

### 生活とは何か

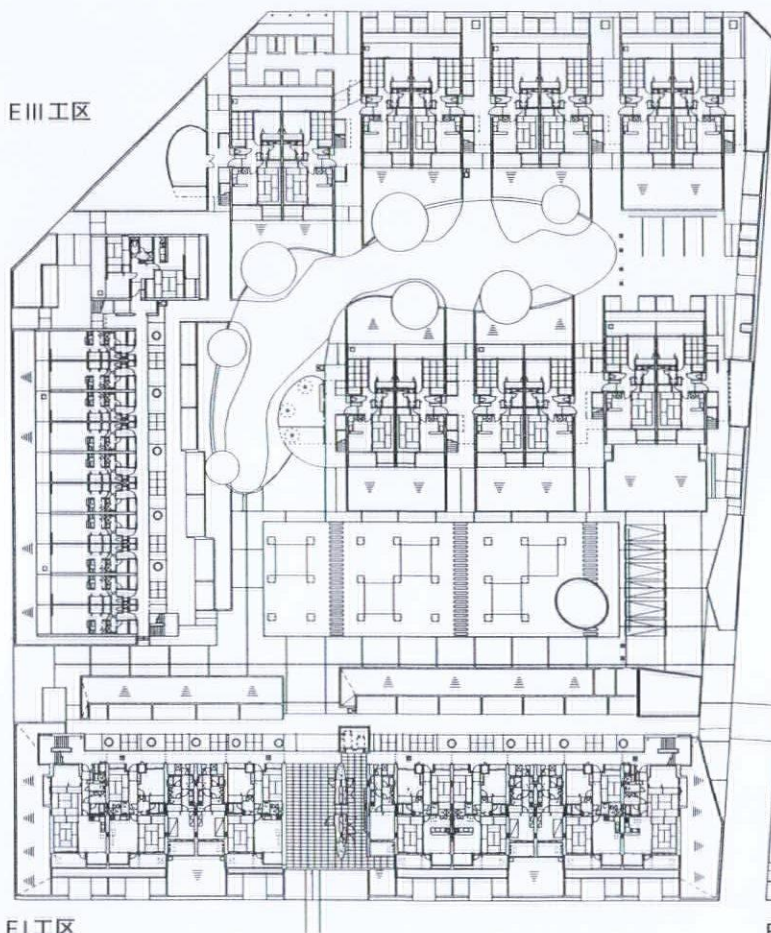
我々建築家は「生活」の場として物理的環境を作り出すことを職業としている。そして、そのための教育を受け、経験を積み、現在に至っているのである。一般に、「生活」はある局面に限定して調査分析され整理され、要求条件、あるいは「プログラム」というものが策定される。我々はそれに対する模範解答を作成することを求められるわけである。〈今井ニュータウン〉の設計においてもまさにそのような役割を期待されてプロポーザル・コンペが行われ、われわれもそのデザインチームに参画することになったのであるが、我々はこのプロジェクトへ

の関わり方をプロポーズするだけに止め、一切デザイン的な提案を行わなかった。

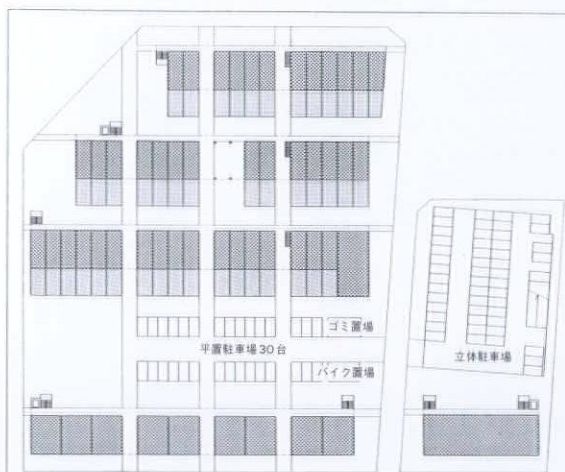
その理由はいろいろあるが、このプロジェクト自体のもつ、理解を超えたプログラムに対して明快な回答を提示する自信がなかったことが大きかった。つまり、それほど人口集積も進んでいない地方都市の田園的な郊外に高密度の「ニュータウン」を建設するということの意味が分からなかったのである。次の理由として挙げられるのは、これまで関わってきた〈熊本市営託麻団地〉や〈幕張ベイタウン〉などの入居者達との対応の中から、彼らの「生活」と、物理的環境として我々が作り出したものとの関係が、それほど単純化し得るものではないことが分かってきていたことである。彼らがそこに住む理由は、家賃が安い、分譲価格が安いなどの経済的側面もあろうし、住み慣れたところだから、通勤通学に便利だからという側面もあろうし、千差万別なので



EIII工区

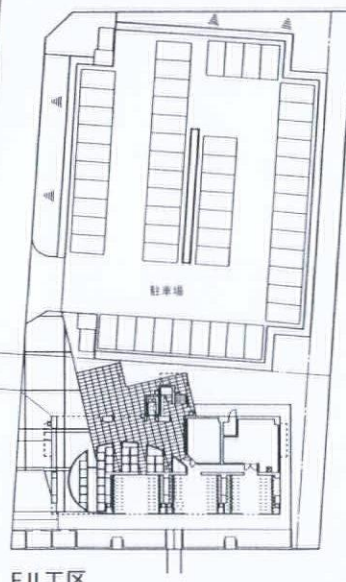


EI工区



低層高密度案 S=1:2000

マスタープランの4階建て分散配置案に対して、メゾネットを中心とした専用庭付き路地型高密度案を提案したが拒絶された。この他にも、いくつかの修正案を提案したがどれも受け容れられなかった。



EII工区

配置図・1階平面図 S=1:1000

ある。我々の産物である物理的環境の良否に関心を払う人はほとんどいない。住民側から出てくるのは些細なことに關する山のようなクレームばかりである。

100年前、エベネザー・ハワードが「田園都市論」を唱えた時、彼には既存都市の悪がはっきりと見えており、それを克服するためのカウンター・プロポーザルを明確にすることができた。しかし、ここに想定されているのは家内で生業を営まなくなった都市勤労者の画一的な生活パターンであり、当時も今も、住民の生活はそうのように総括することはできなかったし、今もできない。そのような視点で見ると、集合住宅から都市に至るまでこれまでに提案されたほとんどすべてのプロジェクトは、冒頭に述べたようなプロセスを経ていない。全く独断的に物理的存在としてまず提案され、それを正当化するために住民の「生活」が持ち出されているに過ぎない

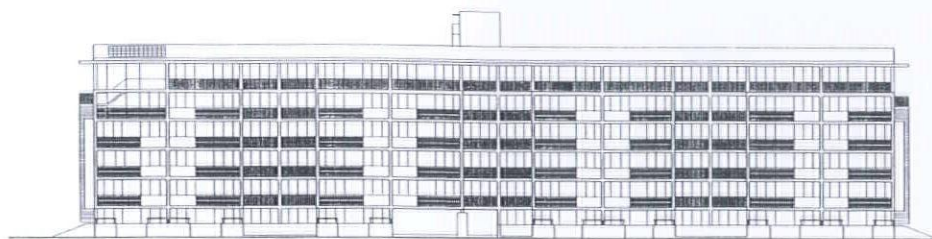
ことが分かる。

かつて、幕張のデザイン会議で、入居者にとって快適な建物を作りたいと私が主張したところ、箕原敬氏が烈火のごとく怒って、「君のような人が町を醜くしているのだ」と言うので驚きあきれたが、当時の私は、おめでたかったというほかない。また、今度の今井のデザイン会議で、日当たりが良く階数も低い低層案を提案したところ、コミッショナーに「デザインチームから降りろ」と言われた理由も良く理解できる。「生活」などというものは人により千差万別で、時間とともに変わる。「生活」があつて「住まい」があるなどという思想は原始時代にとどめるべきであつて、都市時代になってからは物理的存在としての建築は、そのようなものに関わつてはいけないということを今回深く悟つた。

### 建築のランドスケープ化

古来建築には、特定の機能などというものはなかった。ニコラウス・ペブスナーの『ビルディングタイプの歴史』を紐解くまでもなく、建築を強いて分類するならば、その物理的構成のタイポロジーが考えられるのみである。いまさらボザールのデュランに戻るわけではないが、機能主義に基づいた近代建築理論や都市理論が、それに勝るといふ確信が揺らいでいることも事実なのである。むしろ、空間配列の構成や形式の方が、時間の経過に伴うプログラムの変遷に対して不変性を有し、寿命が長いというべきである。100年建築などというものが提唱される現在、我々が関わるべき事は、「生活」などという移ろいやすいものではなく、空間の構成形式なのである。このように理解した時、〈今井ニュータウン〉に内在したさまざまな問題点は一挙に解決し、我々の仕事はただひたすら普遍性を有する無性格な空間





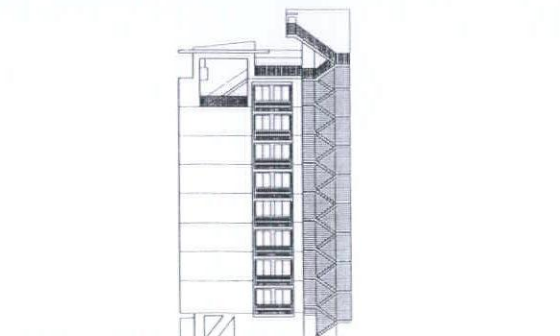
E I 工区 南立面図 S=1:800



E I 工区 西立面図 S=1:800



E II 工区 南立面図 S=1:800



E II 工区 西立面図 S=1:800



E III 工区 南立面図 S=1:800



E III 工区 西立面図 S=1:800

により与えられた街区を構成する作業ということになった。ここは、ある時にはオリンピックの選手村となったが、ある時には公務員の住宅となり、やがては老人ホームとなるかもしれない。あるいは、今では想像もつかない新たなプログラムに対応することもある。使われた材料や細かいディテールに至るまで、このような発想が優先した。

近代建築の寿命が、古典時代の建築に比して異常に短いということが指摘されて久しいが、それは用いられている材料の問題でもあり、かえってその物理的生命ばかりか、社会的生命を短くしているという側面が影響している。これまでのようにせいぜい40年程度のタイムスパンで建て替えを考えることが経済的にも、環境的にも不可能になってくる時、我々は新しい建築の概念を見出さなければならないのではなかろうか。

このような考え方は、建築計画学においても論議されているが、アーバンデザインの面では「アーバン・ランドスケープ」という概念が注目されている。AAスクール校長のモイセン・ムスタファビが唱えていることではあるが、現在建設されている巨大なショッピングセンターや、空港、駅などは、すでに全体像が完結した建築の範疇を超え、一種のランドスケープの一部となっているという見方である。そして、建築そのものも急速にこのようなランドスケープ化の傾向にあると指摘している。つまり、建築は行き止まりの閉ざされた空間ではなく、周囲に対して開かれた一種の通過点となっているという考え方が示されている。

東京工業大学の坂本一成研究室の周辺を中心として提案された『ハウジング・プロジェクト・トウキョウ』（東海大学出版会）には、ランドスケープ化したハウジングによって東京を改造する思考実験が

示されているが、都市における「生活」がハウジング内部にとどまることがなく、外在する都市空間と連続していることへの認識からこの発想が得られたことを報告している。このような視点に立つ時、〈今井ニュータウン〉の設計に際して我々が議論すべきであったのは、むしろ田園的な環境の中において最も適切なハウジングの構成形式の問題であったにも関わらず、色彩や形態についての議論に終始したのである。

私個人としては、この時の考察を踏まえて今春完成した〈中島ガーデン〉（『新建築』1999年6月号、『GA Japan』38号）でひとつの提案をすることができたので興味を持たれる方は参照して頂けると良いと思う。

（まつなが・やすみつ／建築家）



# F

## F工区

スタジオ建築計画 (F工区)

+

エーシーエ設計 (FⅠ工区)

+

金井設計 (FⅡ工区)

+

植田建築設計事務所 (FⅢ工区)

(FⅠ工区)

敷地面積: 2,681.60m<sup>2</sup>

建築面積: 454.73m<sup>2</sup>

延床面積: 4,789.56m<sup>2</sup>

階数: 地上14階

住戸数: 46戸

駐車台数: 3台

構造: 鉄骨鉄筋コンクリートラーメン構造 一部鉄骨造

(FⅡ工区1)

敷地面積: 1,613.22m<sup>2</sup>

建築面積: 565.38m<sup>2</sup>

延床面積: 2,297.69m<sup>2</sup>

階数: 地上6階 塔屋1階

住戸数: 24戸

駐車台数: 3台

構造: 鉄筋コンクリートTWFS構造

(FⅡ工区2)

敷地面積: 2,431.5m<sup>2</sup>

建築面積: 1,178.54m<sup>2</sup>

延床面積: 2,599.66m<sup>2</sup>

階数: 地上4階

住戸数: 30戸

駐車台数: 2台

構造: 鉄筋コンクリートTWFS構造

(FⅢ工区)

敷地面積: 3,047.83m<sup>2</sup>

建築面積: 1,700.25m<sup>2</sup>

延床面積: 5,222.49m<sup>2</sup>

階数: 地上7階

住戸数: 100戸

駐車台数: 100台

構造: 鉄骨鉄筋コンクリート造 鉄筋コンクリートTWFS構造

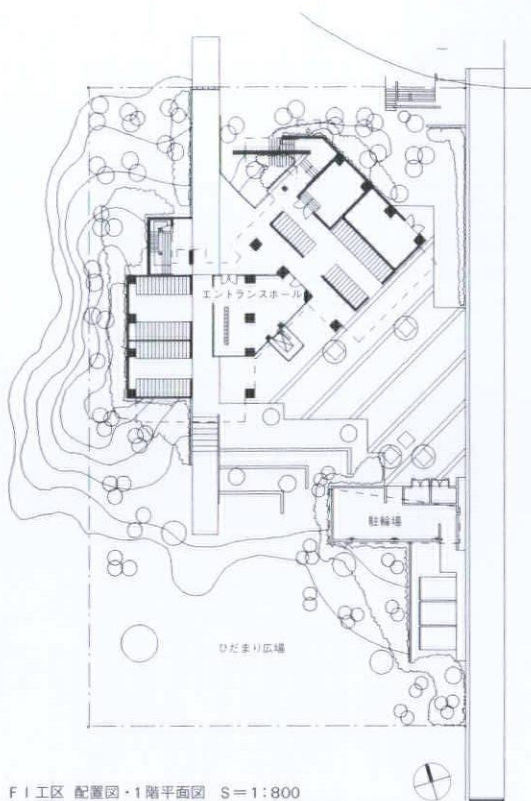
設計期間: 1994年11月~1995年10月

施工期間: 1995年11月~1998年7月

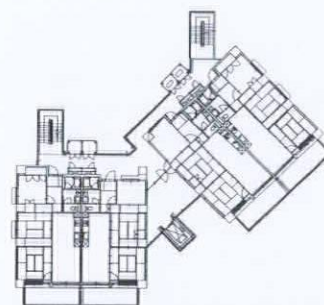
用途: 市営住宅 (FⅠ工区・FⅡ工区1)

市職員住宅 (FⅡ工区2)

企業住宅 (FⅢ工区)



FⅠ工区 配置図・1階平面図 S=1:800



FⅠ工区 基準階平面図 S=1:800



FⅠ工区 北立面図 S=1:800



FⅠ工区 南立面図 S=1:800

### 早回しされた時間の中での試み

元倉真琴

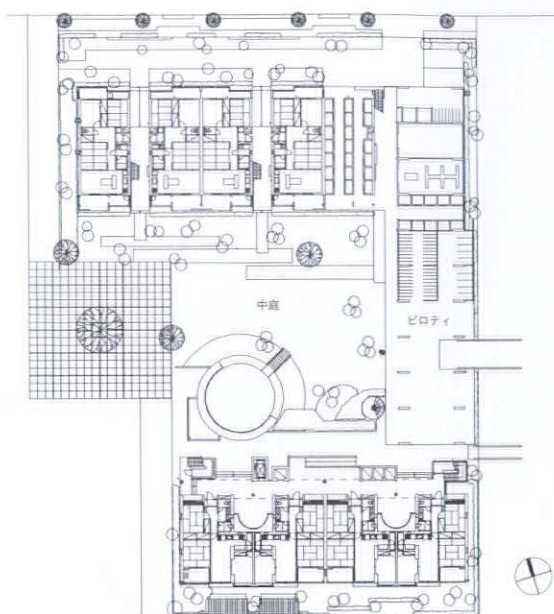
イタリアの山岳都市からインドネシアのカンボンまで、世界には様々な形式の集落がある。そしてどれも魅力的である。それに対して、今日私達のつくる集合住宅は、やや退屈で魅力に欠ける。それは私達の想像力の乏しさというより、集住体の生成の違いに原因がある。ヴァナキュラーな集落の多くは、住戸という単位とその集合で構成されている。それらは均質ではあるが決して均一ではない。地形や気候の条件を敏感に受けて、微妙な差異と変化のある集合の世界を形成している。そして集落は一度にできてしまったのではなく、長い時間をかけて営々とつくられていったものである。時間もまた集落の変

化をつくる重要な役割を果たしている。

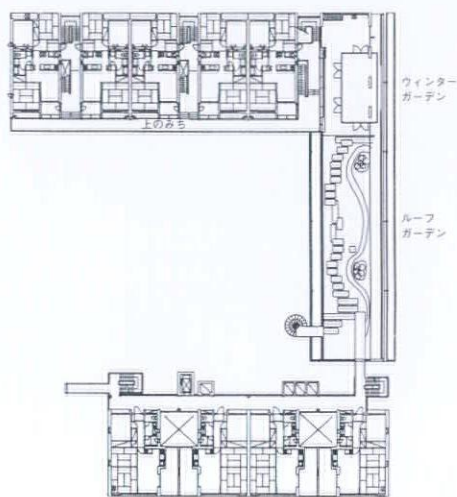
〈今井ニュータウン〉のような計画では一度更地になったところからスタートする。建築は地形の微妙な違いに対して、反応することはない。また、建物も一度につくられる。周りの状況に反応しながらつくるわけにはいかない。このような計画が均一で退屈なものになってしまうわけがここにある。〈ヒルサイドテラス〉はひとりの建築家が30年かけて、時間に反応しながらつくられた街の良い例として挙げられる。しかし、オリンピックに間に合わせるためにはそんな悠長なことは許されない。

ここに今回のように、建築家が多く集められた理由があるのだろう。一度に多くの建築をつくる中に、擬似的(ゲーム的)に時間のファクターを入れる仕掛けである。つまり自分が建築を設計しようとする時に、必ず周りの他の建築があることを意識しなければいけないという仕掛けだ。今、人々





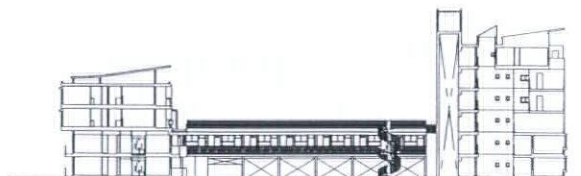
FII区 配置図・1階平面図 S=1:1000



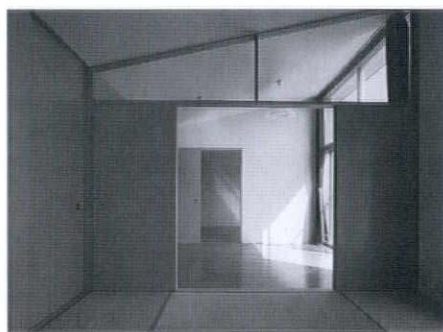
FII区 3階平面図 S=1:1000



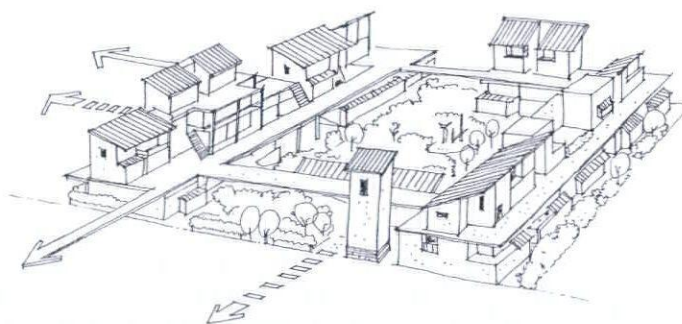
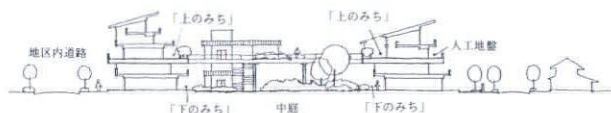
FII区 東立面図 S=1:1000



FII区 断面図 S=1:1000



FII区 住戸内部  
資料提供=スタジオ建築計画



が住み始めた状態を見て、時間が蓄積された集落的環境が形成されたとは思わないが、このバラバラで分裂症気味の建築群をよく見ていくと、高速で早回しされた時間でのやりとりの「かけら」が散らばっていることが分かるはずだ。

この仕掛けの中で私達がどのように反応し、対応していったのか、紹介してみたいと思う。

#### プロポーザルの一部が何とか実現できたFII区

設計者選定のプロポーザルで私達は次のように提案した。「一軒一軒の住戸が集まってつくられた街でありたい。(ビルが街をつくるのではなく)それは住戸と「みち」の生き生きとした良い関係をつくりだすことである」。具体的には、立体的な「みち」による歩行者のネットワークをもった住区をイメージしていた。それに対して計画サイドから私達に与えられた敷地は、まとまりのあるブロック(住区)

を与えられた他の工区とは異なり、3カ所に分かれたものであった。それは数字合わせの調整のしわ寄せの結果なのだが、考えようによっては他の工区の間を縫って、ゲリラ的にまたは調整役的に活躍するという面白い立場でもあった。

FII工区だけが何とかプロポーザルのイメージを実現できそうだった。G工区と一体になって中庭をもった住区を形成するというものである。私達は、Cの字で囲みにきたG工区をコの字型で受けとめた。マスタープランでは住戸は南面配置が原則で、FII工区もふたつの住棟が平行配置されたものであったが、市職員住宅の小規模住戸10戸分を東西採光型の南北軸住棟を提案し、受け入れられた。それによって中庭をコの字に囲む配置ができた。屋上に土を入れて公園化し、さらにガラスの集会室を経由して北側住棟の南を通るアプローチを設けることで、3階レベルで3つの建物をつないだ「上のみち」を形

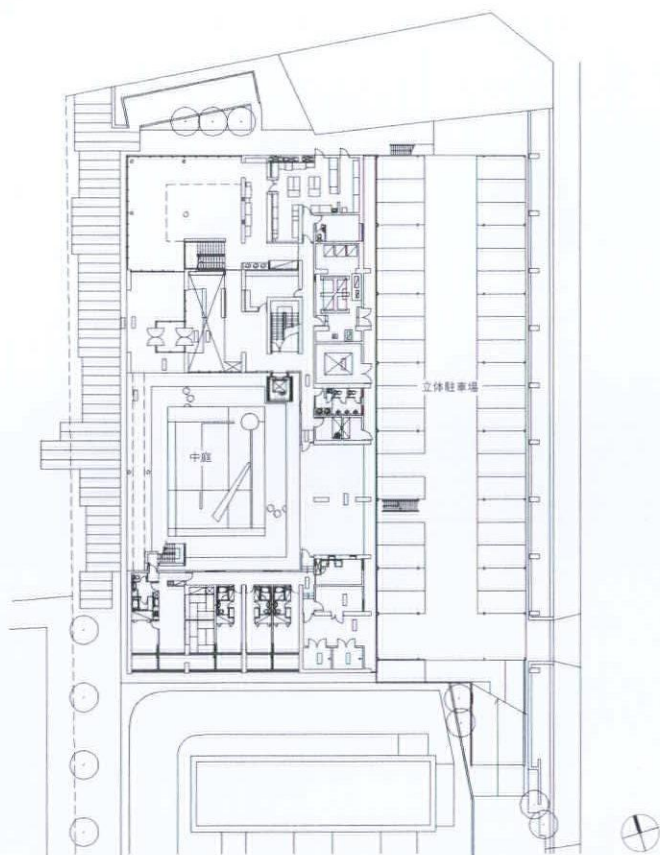
成することできた。そしてG工区とブリッジでつながり、さらに大きなネットワークをつくることのできた。

#### 全体計画での役割に徹したFI工区

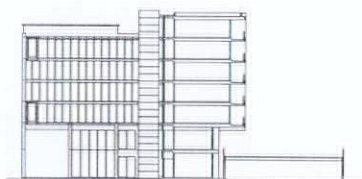
FI工区は、当初のマスタープランではニュータウンの中央で最も高い建築として意味づけられていた。しかし、5戸並びの10階建てでは鈍重でうっとしい壁にしかならないものだった。

私は、住戸の集合形式として、高層住宅を良いと思っていない。地面や道が様々な行動や活動を広く受け入れることのできる容器であるのに対して、エレベーターによるアプローチは人の行動を一義的に規定してしまう。それをある程度補うものとして、エレベーターを3層ごとに停止させ、3層12戸単位の立体広場を縦に積み重ねるという「縦のみち」を提案した。しかし、パラリンピック対応と高齢化時

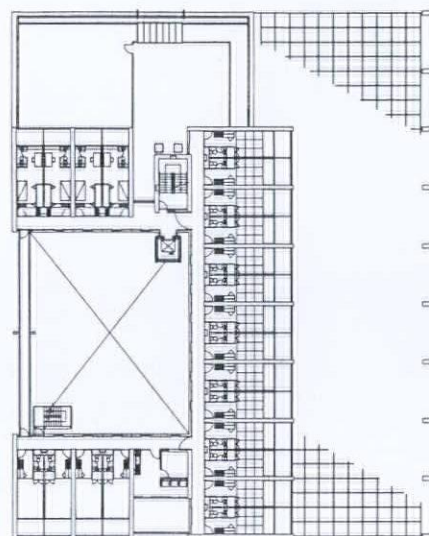




F III 工区 配置図・1階平面図 S=1:800



F III 工区 断面図 S=1:800



F III 工区 3階平面図 S=1:800



F III 工区 住戸アプローチ

代の配慮としての全住戸バリアフリーの規定は、集合の単位をつくる意味を失わせ、多くの建物を片廊下形式にさせてしまった。

新しい集合の形式を断念した後、徹底的にランドスケープの見地から組み立てることに方針を変えた。まず建物のヴォリューム感を減らすために、集合住宅をなるべく小さい単位にばらした。住戸、エレベーター、階段、倉庫それぞれを塔としてデザインし、その集合体としての建物を考えた。14階、10階と高さをずらしたのも、塔としてのイメージをはっきりさせるためである。また45度に振ったのは、中央広場で曲がった道への配慮を求めたコミッションの提案に答えたものである。もうひとつのランドスケープ上の配慮は、中央広場を構成するメインの建築として意味づけたことだ。マスタープランの配置より大分北側（広場側）に寄せることを提案した。その結果、D工区に日照の問題が生じ、変更を

お願いした。また、建築の広場への構えをもっと明確にという要求に対して、階段の低層部は広場を見下ろすフォリーのような要素とデザインで対応した。北に寄せたことによって、南側にできた大きな原っぱを専用の広場とはせずに、誰でも利用できる「ひだまりひろば」とした。そのふたつの広場は、足下のピロティで見通しよく結ばれるはずであった。14階に高くしたこととその足下のピロティは、大震災で神経質になっている長野市サイドの抵抗にあった。最終的には足下にマウントをつくってピロティをまた埋め込むという不可思議なデザインを余儀なくされたが、〈今井ニュータウン〉でのこの建築のランドマークとしての意味はおおむね理解してもらえた。

#### もう一つの集合住宅の形式としてのF III 工区

F III 工区の建物は、他のものとはまったく違ってい

る。ある企業の単身者寮として計画され、マスタープランの中でもやや関心の外に置かれていた。このままでは孤立無援の施設になってしまうと考え、意識的に他と同じように、小さいけれど住区を形成する集合住宅としてデザインした。F II 工区と同じように中庭を巡る「みち」に各住戸が取り付いている構成をとった。3層と6層では周回できるようにブリッジを設け、エレベーターも中庭側にセットした。閉鎖的な寮という形式ではなく、住戸の集合体としての寮を提案した。

(もとくら・まこと／建築家)



G

G工区

遠藤剛生建築設計事務所

+

アルス設計

+

新長野設計

+

北沢建築研究所

敷地面積：10,931.61m<sup>2</sup>建築面積：3,226.21m<sup>2</sup>延床面積：9,863.21m<sup>2</sup>

階数：地上8階 塔屋1階

住戸数：107戸

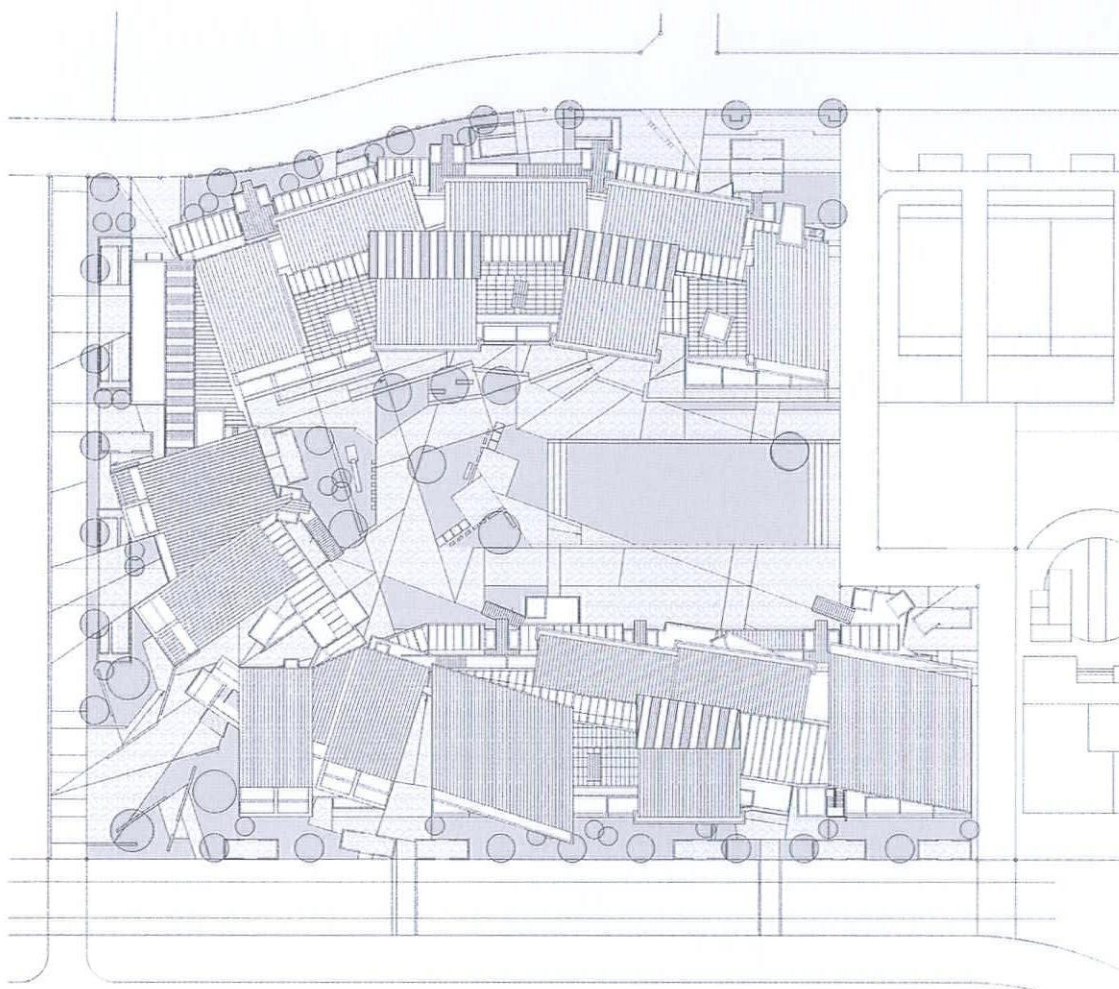
駐車台数：100台

構造：鉄筋コンクリート造、ラーメン構造

設計期間：1995年5月～1995年9月

施工期間：1995年12月～1998年7月

用途：市営住宅



配置図 S=1:800

## 組織化された混沌

遠藤剛生

### ニュータウンの在り方

〈タピオラニュータウン〉(A.エルヴィほか、1951～70年頃)を歩いてみると、近隣住区単位をプロトタイプとして用いているが、その構造が読み取れる程この街は単調ではない。イギリスで生まれた田園都市構想が今も引き継がれ、永々とつくり続けられている。その成功には種々の理由があるが、私は場所の力を活かした計画手法が、その大きな理由だと考えている。ヘルシンキ湾に面し、スオミ(湖の国)という名にふさわしい湖と白樺や松林が続く変化に富んだ風景が展開されている。地面には岩盤が顔を出し、ほとんど表土もないと言っているよう

な場所である。このような自然の中で、低密度の計画が行われ、住棟周辺の道も居住者が勝手に岩の上の歩きやすい場所を選択し、車も自由に止めている。この厳しい自然が、プロトタイプに場所ごとの変化を加えている。しかし、世界の大部分のニュータウンは、人工的で、歴史も地域文化も自然さえも否定した。今イギリスでは、その反動として、パンダリズムの嵐が吹き荒れている。しかし、1966年にロンドン北部にスタートしたイギリス最後のニュータウン〈ミルトンケインズ〉では田園と新しい街の共生を試み、計画がスタートした。現場に立っても、どこにニュータウンがあるのかは定かでない。すなわち、自然と生活と空間の新旧が境界線を消して溶け合っている。日本のニュータウンも新しい空間の形式に目を向けて計画を進めたが、場所性を否定したことが結果的に新しい街と古い街の、歴史的、生活的、空間的不連続をつくり出した。

### 自然、生活、空間の連続性

今井の集落に流れている時間は今日でも一定のリズムを持っている。計画地北側の集落から風景をスケッチすると、北西の犀川から流れ出した農業用水は集落の中の畑や住戸沿いを流れ、東南の千曲川に向かっていく。その両脇には桃や柿の木が植えられ、その向こうに向日葵や朝顔の花が咲いている。こののんびりした田園風景の東西に山並みが連なり、このような自然の中で、人々が生活環境を育ててきた。かつての家畜と人しか通らなかった道は車社会になると幅を広げるなど、不断に変更を加えながら素朴に、自然な気持ちでつくられた環境である。この環境を支えているのは生活そのものであり、言葉を変えるなら「時間の流れ」そのものとも言えよう。このような職住近接の農業従事者のライフスタイルから生まれる時間の流れと、南の今井ニュータウンに生活する人々の住まいに特化されたライフス





4階平面図 S=1:500



①



②

タイルでは、時間の流れは異なっている。

同じ田園牧歌な地域でも、専業・兼業の違いはあるが、片や、自前の領域での自前の生活、一方は給与所得による都市型生活者、このライフスタイルの違いが空間の違いを生み出している。

その都市型生活者の新しい街を、自然、生活、空間に分けて捉えてみると、周辺集落では伸びやかであったはずの自然が家畜化され、人工的な環境へと置き換えられていく。生活においては、住むことと働くことが重なった生活領域の広がりと、住むことのみに特化されたそれとの差も歴然とある。生活を支える空間的要素も、前者は多様であるが後者は画一的である。このようなふたつの異なる環境を連続一体的なものへと導くことが今回の計画目標のひとつである。

すなわち、自然、生活、空間が、渾然一体となった環境を生み出す基本的な考えは、新しい計画の全

ての要素が外に向って開き、ネットワーク化され、ふたつの時間の流れが溶け合うことが理想である。

#### アーバンプランナーと7人の建築家のコラボレーション

最初にコミッショナーから示された周辺の自然環境や、立地特性などから導かれた基本的な考え方と、具体的に示されたマスタープランとのギャップに困惑した。それは、内外の空間密度の差と、機能的、景観的インフラの不連続性であった。原因は、プランナーの問題と言うよりも、高密度な計画フレームから発生する、内外の落差であり、マスタープラン以前の問題だったと言える。

マスタープランでは、場のアイデンティティを生み出す、場所ごとの特性が明確に示されていた。それらを受けて個々の街区がその役割を果たすなら全体の街の空間構造がおのずと見えてくる方法であった。

- ① 北側農家や畑、戸建住宅と新しい計画が渾然一体になり、風景的魅力を高めている。
- ② 木質素材や自然の石を用いたランドスケープによって、内外の空間的同質性を求めている。
- ③ 路地に面した住宅には専用庭を設け、日常生活のにじみ出しが通りの空間を豊かに育てる。

資料提供＝遠藤剛生建築設計事務所

しかし、正直言って、各々の建築家が街の空間全体を理解するには、本質的な議論が不十分だった。7人の建築家のコラボレーションは、まさに、アイデンティティの連鎖を意味するが、同時平行的に進む作業の中で、周辺ブロックの空間を読みながら自分の街区の調整を行った。あらかじめ示されたマスタープランの場所特性を手がかりに、例えばG工区では、駅前の顔をつくるというテーマに対し、長谷川棟、富永棟、遠藤棟との関係から、西側住棟の配置や、形態に思いを巡らした。敷地南側にはメインストリートが走り、向かいの富永棟、東の元倉棟、さらにその東の松永棟を頭の隅に置きながら、東南に見える内藤棟との関係性を計ることに努めた。

中庭は元倉棟と不可分の関係にあり、ジョイント部分の住戸の配置やランドスケープは注意深くつながりを考えた。北西角のG工区から一番遠いA工区の新居棟は直接的な関係は薄い、7街区共通の





北立面図 S=1:600



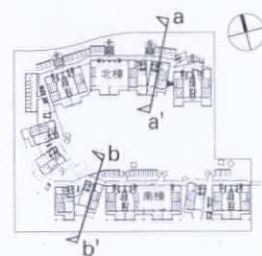
西立面図 S=1:600



南立面図 S=1:600



東立面図 S=1:600



a-a'断面図 S=1:600



b-b'断面図 S=1:600

ウインターガーデンや屋根の形態等で関係性が計られた。いずれにしても、各工区ごとの条件の違いと、ひとりのオーガナイザーのもとで複数の建築家の異なる考え方が連鎖する楽しい経験だった。

#### 具体的計画

G工区の長野市営住宅は、ライフスタイルも、ステージも異なる不特定多数の人々が不断に入れ替わることを前提とし、なおその上に個々の居住者のステージごとの家族構成の変化にも対応できるフレキシビリティの高い住戸が求められている。G工区全体を大別すると3タイプの住戸に分けられるが、基本的な考え方は居間、食堂、台所を主採光面側から廊下まで直列につなぎ、その公室に2室続きの和室も6枚の襖が全部開き、壁の中に収納できる開放的なものになっている。

住戸と住戸をつなぐ共用空間は、1階レベルでト

ランクルームや自転車置場の配置によって、雪が積もる冬期でもその間からちらちらと白い雪景色を楽しめる路地をつくり、2階は自転車置場の上を歩くガラス屋根のある、本体から離れた道とそれらをつなぐ橋によって、3階以上の階と異なったものになっている。南棟3、4、5階は公営住宅、1種、2種の面積の違いを活用し、廊下側の柱の外と内に廊下を階ごとに覚えて配置し、冬期は内部階段を使い、水平移動には柱の内側の廊下を選択できる計画になっている。また、北棟4階と南棟7階には様相の異なる路地型住棟構成を行い、路地に開いた住戸を配置している。南棟6階には各街区共通のウインターガーデンを設け、1階では内外をつなぐ13ヶ所のスリットを設け、その中心的役割を西側のメイン、サブエントランスが担い、F棟との間の空間が外の街とつなげる空間になっている。外の街との関わりは屋根や壁の分節や、グレーの色調、唐松の板や、

コンクリートブロック、珪藻土掻き落し、専用庭の塀には堅木のジャラ材を用い、庭には自然石を用いて様相の一体感を生み出そうと考えている。

いずれにしてもこの計画は竣工すれば全てが完結するものではなく、居住者がこの多様な住空間を住みこなし、この街や周辺の街に溶け込めるよう個室を公室に、公室を共用空間に、共用空間から街に、機能的にも空間的にも外に向かって開く計画を行っている。

(えんどう・たかお/建築家)



渡辺定夫（わたなべ・さだお）  
1932年 東京生まれ  
1956年 東京大学工学部建築学科卒業  
1962年 東京大学大学院博士課程修了  
1973年 東京大学工学部助教授  
1984年 東京大学教授  
1993年 工学院大学教授、東京大学名誉教授

## 建築敷地の配列は都市の姿をつくる

我が国では、敷地に一建築物があることを原則に市街地が成立しているが、建築物はそこそ自由で建てられるので、敷地の配列だけから市街地の景観や街並みを予想することは難しい。しかし、敷地の大きさや形が似かよって並んでいればおおよそ街並みの姿は見当がつく。敷地を粒と考えると、粒の大きさや混ざり方によって市街地の姿は変わるだろうし、変化のありようもある程度予想される。

都市は、今日でもそうであるが、建築敷地の粒の集団を配置、配列した集合体として、都市以外の地域とは明らかに異なる空間の構造を備えている。小粒の敷地には、小型で低い高さの建築が並び、大型の敷地には構造的に可能な限り大きく、高い建築が成立してきた。都市の建築は、建築敷地に見合っただけの種類の形式でつくられ、それでいて限らない都市空間の変化を生み出した。建築敷地の集団には、あたかも共通の建築規制がかけられ、その結果としてあるような沿道風景が生まれたのである。がしかし、敷地の奥に入ると、そこは採光、通風が得られない惨めな中庭や路地、それだけにしか頼ることのできない建築と劣悪な居室が並び、まさに衛生状態の悪い環境が発生していた。

沿道はまだしも、裏庭こそ建築規制すべき対象空間である。規制された裏庭がなくなれば、道路で囲まれた街区には建築の建たない建築敷地の集団が生まれる。通風、採光の条件を多少とも良くしようとすれば、さらに建築の高さをそのために制限すれば良い。建築敷地に高さの規制と裏庭空地の確保を義務づければ、そここの街区の建築環境は保障されたことになる。敷地に建つ建築は、道路空間と自らの敷地空間の両方で健全性を備えることができることになる。

建築敷地の分割に歯止めをもたない場合、大都市のどこにもある零細敷地の大集団が発生し、安全な環境が維持できなくなる。緑地や庭先の空地は消え、やせ細った建築とその予定地が道沿いの景観をつくることになる。50m<sup>2</sup>の敷地に3階建ての住宅、しかも長持ちするとは思えない欠陥住宅が建ち並ぶ風景は、防災上の危険より前に、建築敷地の最後を見る思いがする。なぜなら、その敷地には2度と同じ容積の住宅は建たないからである。これは安定した住宅地の風景ではない。

一方、これと正反対の風景は農村集落にある。そこでは、建築敷地に建築の自由がまだ成立し、集落の風景は建築の自由を良く表現している。建築は大型化しても一定のルール、伝統的な技術や家相の思想など、誰でも納得していた原則に則っ

ているので、集落の風景は世代の連続としてある方向に向き、破壊されない。持続可能な住宅地の風景は、恐らく建て変わっても、大きく変化しないことにあるから、建築の自由を支える敷地の大きさは、安定した風景にとって必要な条件といえる。

しかし、50m<sup>2</sup>の敷地に建築の自由はない。建築の集団規模という、建築を容れる鳥籠が敷地を覆っているの、3階建ての鳥は自由に飛ぶことはできない。都市の建築は、多かれ少なかれ建築の自由を制限されてしか成立しない建築である。それが都市である所以でもあるが、籠の鳥が飛べないような鳥籠で建築制限するのはおかしい。

建築制限の目的のひとつは公共の福祉を増進すること、制限によって市街地が安定し、公平に外部環境を享受でき、生活環境が確保できることにあるのだから、鳥籠一杯につくられた建築は、自らの環境を維持するために必要な外部空間を、例えば、道路だけに頼らざるを得なくなる。建築に外部環境を提供する能力は、もはや敷地にはない。

問題が鳥籠にあるとしたら、籠の構造をゆるめれば良い。大きさ、容積を決めておけば、建築敷地を越えて、例えば、街区に鳥籠をかけておくことも、ひとつの考え方である。街区の中では、鳥は多少とも飛ぶことができる。また、建築敷地の中で、空地面積の確保を前提に、鳥籠がない部分をつくることも考えられる。鳥籠は、いずれにせよ、地区に特定された固有の問題として考えた方がよい。敷地と建築物の関係に建て方のルールが生まれ、敷地の配列が街並みの姿を予定することになるのである。

## ニュータウン、郊外開発の生き残り

東京大都市圏の広がりは半径50kmに及ぶ広大な空間である。この地域空間は30～40年間でつくられ、新たに都市化された市街地の大半は住宅地で占められている。大変短期間に全国から都市化人口を受け入れたので、とりあえず住むこと、通勤すること、子どもを育てることに心が払われた。生活環境の価値はその限りで評価され、一生に一度の買い物は1物件として、しかも国の住宅政策に則って求められてきた。

このように中流意識の国民的合意のもとで形成された住宅地は、当然、性格上の特徴を持たされる。一言でいえば住宅専用の土地利用、市街地である。住宅建築に戸建て、集合の変化はあっても、でき上がる住宅地は純血かつ均質な空間的性格を帯びざるを得ない。その典型的な開発がニュータウンであり、郊外の住宅団地である。一世代で出現した市街地であるから、一様に子供が育ち、一様に親は老いていく。

3代住んでやっと土地つ子が誕生するそうであ

る。何も同一家族が3代続く必要はないにしても、土地が人々の生活を受け入れ、生活の場になるには、その程度の時間はかかるものである。一世代25年とすると、70～80年の時間がかかることになる。新しい市街地をつくってからまだ半分の時間しか経過していないので、持続可能な住宅地になるためには、これからの30～40年、今までとは違った考え方を修復、整備に取り入れ、安定した生活空間の定着を図る必要がある。

そのひとつは、住棟、住戸、そして周りの環境を徹底的に歩行容易なものにすることである。さらに、歩く楽しみを身近な空間、施設に備えることである。植栽の手入れ、育成など緑の施設は、中でも重要な施設である。もうひとつは、仕事の間をつくることであるが、事務所や工場をつくるわけではないから、サービス産業ということになる。この産業が地域に定着できれば、そこには再生の息吹、賑わいの芽が育つことになる。

住宅地で、高齢人口を抱えた所では、世代を繋いでいくために、かつては家庭内で行われていた仕事が山ほどある。これらは世話焼き産業、おまかせ産業に転換する可能性がある。また、住宅などの維持管理産業も捨てたものでない。おしなべて言えば、地域整備と地域産業の推進と言って良い。しかも、こうした産業を支え推進するためには、家庭内、世代間にあったやりとりを地域で、個人相互のコミュニケーションで可能にする必要がある。それは正に情報通信網の確立であり、それを駆使する業務の発生である。再生に当たって、取り組むべき大きな課題であることは間違いない。

## 歩行の楽しみをつくり出す

今井の住宅団地はニュータウンというものの、住宅以外の生活関連施設を団地内に備えているわけではない。全くの純粋な住宅専用の団地である。しかし、いわゆる一団地の住宅地計画によってつくられたものでもない。敷地一街区による市街地づくりがこの団地の特徴的性格である。いさゝか高密度な住宅地であるので、住棟は高層になっている。各街区はそれぞれ自身が建築敷地であるから、建築の環境は公共空間と敷地空間の両方で保障される必要がある。壁面の後退線の位置と中庭はその結果である。

ローマの中心市街地を描いた「ノーリの地図」は有名である。白抜きのところは道路や広場、会堂や遺跡がつくる建築空間である。要は誰でもがただで歩くことのできる空間が表示されていると思えば良い。黒地は占有されている建築空間である。黒地が地図の大部分を占め、白地は細く網の目のように全体を覆い、白黒のいずれが図で、いずれが地か判断つかない。



## 私の選んだショット

植田 実

今井の住宅地を「ノーリの地図」に倣って描けば、黒地は細い線でしかない。白地は道路、緑地、河川、中庭などである。ここでの白地の役目は、街区相互を連結し、黒地の線に沿って歩く楽しみをつくることにある。従前の農地であったときの周辺風景が、遠くに見える景色を媒介に、所々の場所で想い起こせることも歩く楽しみのひとつである。黒地の建築は、従って、歩行を誘導する役目を担うことになる。

だからこそ、道路空間が卓越するところでは、高さを揃えながらも変化に富んだ立面が必要である。緑や野の小川が支配するところでは、ある程度、建築の自由が見られた方がよい。自由と言っても、共同住宅に限定されるから、建築の立体的変化がその表現となる。緑と陸みあいながら、歩行に楽しみを提供する役目がこの黒地にはある。

周辺の既存市街地、集落と今井の住宅団地を比べれば、明らかにスケール、マスの点で違和感どころか、断絶がある。人口密度からいえば、この事は自明であるが、周りに少なくとも圧迫感を与えない工夫は必要である。

工夫の第一は、団地から外の集落を見たとき、建築のスケールがつながりを持って感じられること、そのために、団地の中心建築を高く、周辺を低く、外へ高さをすり付けること、あるいは、緑地で分け隔てること、水路の風景を周辺に馴染ませること、などなどである。こうした工夫は、歩行の楽しみをしつらえる道具建てもあるので、団地の外周は外部へ連続するようにした方がよい。

これとは逆に、団地の中心部は周りと強い関係はないから、それ自身で独自の新しい空間を実現したい。やがてこの団地にも住民の世帯構成に変化が起こるだろう。そして再生の整備へ向かうだろう。その時、駅前を中心市街地は賑やかな街路に変わっていくかも知れない。そうした変化に耐えられるように、空間のしつらえ方をしておく必要がある。何よりも、賑わいを楽しめるようにしておくことが工夫のポイントである。

しかし、この団地の生活者像には身体に障害を持つ人、高齢者のみの世帯など、いわゆる歩行弱者があり、工夫の仕方も細心の注意がいる。当然のことながら、歩行という連続的行為を支え、しかも楽しめる空間を展開するためには、施設づくりだけでなくサインや交通防災管理など、建築敷地と公共施設の両方にまたがる問題がある。工夫はそれぞれに関係する主体が納得しない限りできないが、歩行弱者対応というキーワードには、それを乗り越える力がある。

(わたなべ・さだお／都市計画家、工学院大学教授、東京大学名誉教授)

竣工間近の時点で見せてもらったときは、集合住宅でありながらその前に、オリンピック選手村の宿舎として住戸内を仮開いている作業の最中だった。各工区を担当した建築設計チームの個性を加味しながら、さいごに集合住宅団地に戻ったときの光景を思い浮かべてみたのだが、今回再び訪ねたそこは、私の頭のなかになんとなく建ち上げていた団地よりも、ずっとよかった。

大学のキャンパスみたいでもある。だから各住棟のまとまりは、市営住宅学部とか県職員住宅学部とか呼んでもいいような印象で、それが新鮮だった。FⅠ工区のタワー①、FⅢ工区の独身寮③などはその端的な例だ。梅雨の合間の久しぶりのよく晴れた土曜の昼だから、どの工区も若い親たちや幼児たちが庭でくつろいだり遊びまわったりしている。洗濯物が満艦飾だ。それでも一般の住宅団地とどこか違っているのは、住棟や外構の設計に微妙な工夫がされているからだろう。

といっても全体を統一する規制のなかで各設計チームがそれぞれに変化をつけているという印象ではない。たとえば〈ペルコロニス南大沢〉や〈幕張ベイタウン〉は、ずっと支配性の強いマスタープランによって、従来の版状並行配置を脱しているはずなのに、逆に集合住宅団地の抜き難い性格を露呈しているようなところがある。今井はむしろ従来の制約のなかで、つまりかなりの高密度であり、4時間日照の隣棟間隔を守りながら、とどのつまりはデザインで、集住体の顔を少しズラして見せている。そのわずかなズレの工夫が大きく働いているような気がするのだが、それほどの工区にも大なり小なり見られる作用であり、結局は全体の統一感に及んでいる。つまりマスタープランから個々の敷地に、というより、細部のデザインがそれぞれの工区の個性に結びつき、さらには全体のまとまりへと及んでいる。そのように逆の流れが感じられるのである。それが意図的に

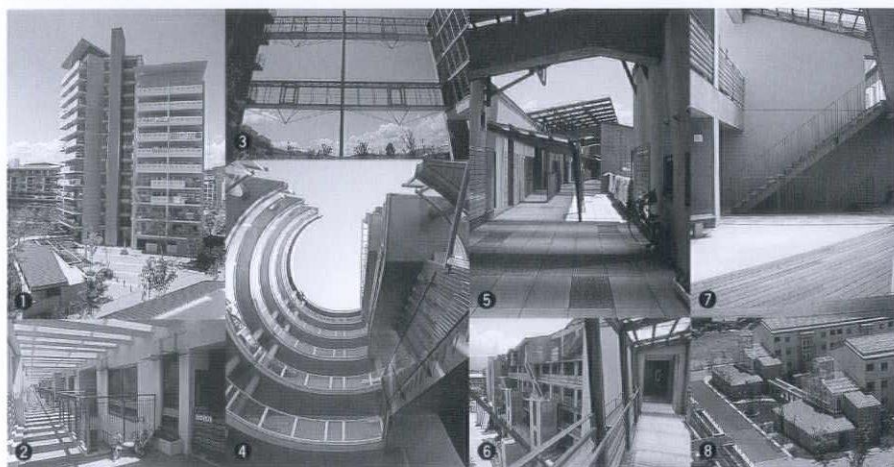
操作され調整された成果だとすれば、よくできたマスタープランなのだ。

前に触れたように、この団地における唯一のポイントタワーが、ありきたりの高層住宅棟としての性格をあえて弱められているとすれば、設計担当者も説明しているように、タワーのヴォリュームを縦に割いて束ねなおしたからだろう。それによってランドマークとしての常套的な印象もクリアしている。このタワーの東隣りに位置し、またJR今井駅からは正面中央に見えるD工区も、表通り側のファサードが垂直方向にえぐられ④、中庭側でもぐりと囲む建築のヴォリュームが分割されて生じた垂直方向にヴォイドがまず図として見えてくる。つまり中庭というヴォイドが放射状に飛び散り、地としての建築にまで突きささっている。その転換が通路手摺などの細部にまで影響を及ぼしている。結果として住宅団地のイメージをちょっと外している。

こうした様相は、C工区とG工区においてもっとも積極的におしすすめられている。C工区は、繊細な防雪柵のスクリーンに一面おおわれた北側ファサードがとりわけ特徴的だが、住戸の積層がスクリーンに還元されて見えるほどに徹底している。どこまでも等質な網の目、いいかえれば濾過された光と風のなかを歩くのはなんとも気持ちいい②。団地内での体験とは思えない。

一方G工区では、折れ曲がる通路とそこにとり付く住戸の体験的シーケンスを第一義に構成している⑤のために、表通りや中庭に面したファサードは映画のオープンセットか大看板の支持体みたいな「裏側」として現れている⑥。しかもその南側はバルコニーの前に好日植物みたいな元気な格子が視覚的に自立し、北面は内側のプランが壁や窓を勝手気ままにつくりあげ、ほとんど全体が破壊しているかのごとき表情になっている。

つまり現代ではどのような集合住宅においても





植田 実 (うえだ・まこと)

1935年 東京生まれ

1960年 早稲田大学文学部卒業

『建築』『都市住宅』『GA HOUSES』などの編集を経て、現在フリー。

住まいの図書館出版局編集長。

まぬがれぬことができない等質性と多様性のバランス——それはどこに支持点を移しても結局は同じであるという閉じた関係を、この対極的な2工区が切り開き、団地全体を風通しよく、というか突風が吹きこんだような感じだが、他の工区におけるそれぞれの工夫も改めてよく分かる手掛かりとなっている。そんなふうに見える。

各工区に共通する付帯設備その他が、どのような話し合いのなかで決められていったのかはよく知らないのだが、コミュニティ・スペースを「ウインター・ガーデン」と限定することで、ただ広めにとった場所に終わらない配慮をしていること、各住戸の外部収納や駐輪場、あるいはブリッジやテラス状の通路が積極的にデザインされていること、中庭が、建築と一体化して工区ごとに変化をつけられていること、等々は、住棟そのものの設計にもまして、団地を身近に、しかも新しい風景として見せる役目を果たしている。

共通する、といったけれど、デザインそのものは個々になされている。そこがとてもおもしろい。ウインター・ガーデンは半屋外的に扱われていたり（たとえばG工区⑦）、閉じたガラスの部屋（たとえばA工区⑧）であったりする。外部収納は、E工区の中庭に並ぶメッシュ・ボックスのタイヤ収納庫が植栽とうまく調和してパブリック・アートのような趣を呈しているし⑨、A工区の通路にアルコーブ状に組み込まれた駐輪場や倉庫は、心地よい長いトンネルをつくり出す⑩。あるいはB工区の中庭のグリーンのなかに突如浮上してできたような駐輪場⑪。このA、B工区の、余計なデザインの手がほとんど入っていない、隣り合う中庭は、その境界に対照的な通路（一方は土色のスタッコの列柱と家形、もう一方は金属とガラスのブリッジ）を介して、相互に異世界を垣間見せつなだらかに連続する⑫⑬。何気なく2列に並ぶ立木がふしぎな効果をあげている。同じ

ようにまったくシンプルなC工区の中庭の両端をふさぐ集会室と駐輪場・倉庫の同形のシリンドー屋根の表情もじつに静かで、ある緊張感にみちている⑭。これまでの住宅団地には見られなかった場所である。

逆にさまざまな床仕上げや目地を中庭にたっぷり描きこんだところもある。D工区はそうした入り組んだ図形のなかから休息コーナーや集会室が隆起してくるような一体感をもし出し⑮、G工区では通路の外側に分離した外部収納を何層にも重ねたタワーを見下ろすとエッシャーの絵に似た鏡像の錯視的なめまいを感じるほどが⑯、そのヴィジョンが多方向に乱反射する影としての中庭が連続して見えてくる。それは隣接するF II工区での、南面の親しみやすいテラス通路や集会室の屋上庭園、その下の落ちつきのあるピロティに転調しながらさらに連続している⑰。

つまりここに共通しているのは統一のための枠組みではなく、従来の機能や施設内容を少しずつズラし、色あいを変え分節することで、住宅団地に新しく付加された要素のごとく見せる。そうした共通の手法である。そのデザインは各設計チームに自由にまかされていたようにも見える。しかし、〈ネクススワールド〉のような住宅博覧会ふうの展開にならないのはもちろんで、かなりの人口密度と4時間日照の条件をクリアするという制約のなかでの自由だから、かえってよかったのだろう。

これもどのような打ち合わせがあったのか知らないが、はじめに触れた建築ヴォリュームの細分化は、ほかの工区にも陰に陽に表れている。通路と住戸の入口あるいはサービス・バルコニーまわりを切開いて各フロアを垂直に掘り抜くスリットや小さな吹き抜け（たとえばB工区⑱、C工区⑲、D工区⑳）は、従来の通路やバルコニーなどの水平方向の強調よりはるかに雄弁である。

つまり表立った連続よりひそかな分割への意志が共通して感じられるのだ。各住戸の自立をきわだたせる手法とも思える。ウインター・ガーデン、外部収納、駐輪場、集会室、植栽などのイマジナティブな表現に比べると、負の手法ともいえる。

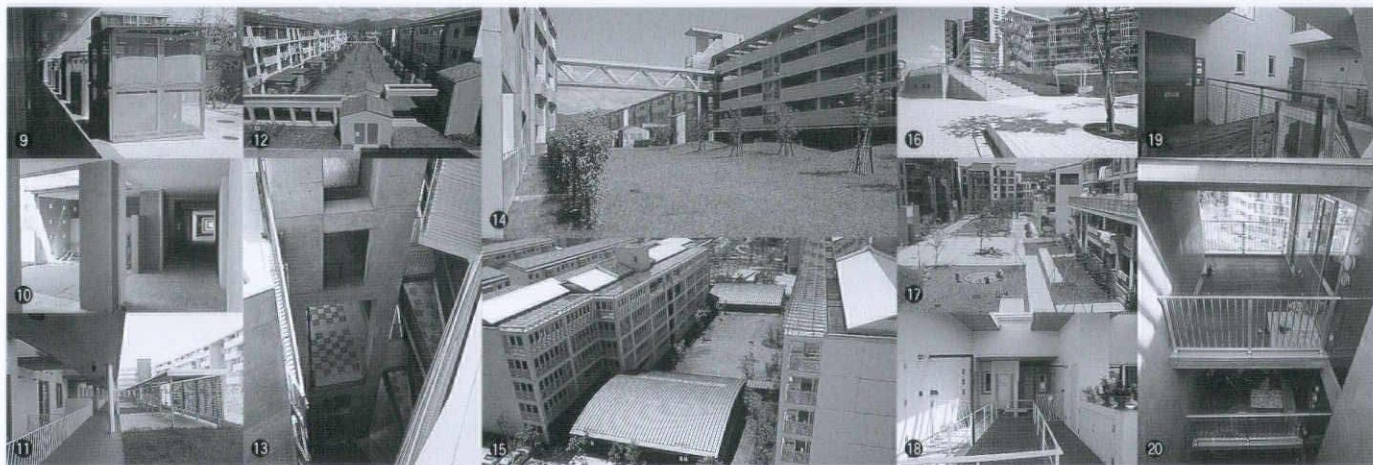
それは私たちが半世紀前に突如出くわした、通路に沿って延々と並ぶスチールドア、南面に連なる浅いバルコニー、同一形の版状住棟が反復される集合住宅団地の光景から受けたトラウマに、どこかで結びついているように思われるのだ。

この団地が今井という場所の歴史とどう融合しているのかは、外からの訪問者には判断できない。これまでどこでもそうであったように、唐突に団地、なのであれば、ここに住んできた人々にとっても、むしろいつのまにか馴染んできた風景だろうし、逆によそから来た計画者や建築家がこの場所を誠実に読みとって新しい場所や建築に反映させた部分があるとすれば、それはものめずらしくどこよりも遠い世界のように見えるかもしれない。写真を知らない人間が、はじめて撮影された自分の肖像写真を見るようなものだ。

要するに親しい場所も異世界も、その成り立ちが単純に分かってしまうのであれば、どちら側の建築もすぐつまらなくなる。生きられてきた場所とこれから始まる場所との距離が錯綜しているほど、時間が待っていてくれるような気がする。とりあえず大学キャンパスのようだったといった場所のなかを歩くほどに、その第一印象から、よく知っている住宅団地の顔にも出会い、意表をつく迷路にまぎれこんだり、またさらに多くのからみ合った枝葉が現れてきた。それはきっと住みやすい場所なのだったと思った。

(うえだ・まこと／編集者)

写真＝著者











## 『底』

まあ、20年代じゃあるまいし、もう、さあ、市場まかせでわけにいかないからねえ、と、その投資家は遠目をした。われわれの役目も、限られたものでしかない。非線形シミュレーション経済計画で、イランやヨルダンやカナダが、あそこまで実績あげてる時代に、市場信仰でもないでしょう。特にインフラ面ではね。前世紀末の民営化ブームが世界各地で破綻したし、特に東欧地域でのBOTプロジェクトが、こつこつと失敗したのは大きかった。日本でも、前世紀にPFI法とつくったはいんだけれど、いつまでたっても実績なし。それで集めて、鳴り物入りではしめたプロジェクトが、このザマだ。やっぱインフラは公共整備しかない。しよせん市場のままぐれでは、まともな整備は望めないつてんだ。

そのプロジェクトの取材で今日はかれに会いにきたのだ。

まあ、かなり無茶なところはあった。駅舎再開発と鉄道の路線増強に、地下鉄新線建設事業とからめた、複雑な代物でぞ。路線のほうはほとんど採算性がなくて、それで、駅舎とて、いくして、そちらの収益で路線の赤字分を補うスキームだったんだ。

photograph 1: 第一ホテル正面 photograph 2: JR京都駅 photograph 3: 祐天寺の集合住宅 design: Shin Akiyama / Les septuagies

それがどうして、と尋ねた。

時代がね。当時の商業の主流は郊外の大さしに移行しつつあって、駅ビル自体に魅力がなくなりつつあった。政府も、いよいよけんめい外部を人居させようとはしたんだけれど、おのずと限界がある。商業ビルも鳴りやまず、鉄道と地下鉄は予定通り赤字。いろんな意味で、いまから考えろと無茶なプロジェクトだったんだ。いや、いまは環境も変わってるし、駅ビルで勝負もできる。このまま競売にしちゃうのは惜しいよね。実はそれを心待ちにしてる連中もいるんだ。だから最近物騒なんだ。

投資家は、写真家をカメラとした通路につれてきた。ぼくは、ここがなんとなく好きなんだ。という、このプロジェクトの縮図みたいだろう。外のいろんな人のいろんな思惑が映りこんで、あつちも見えて、後ろも見えて。でも中は、いかにどうのどん底、みんなの思惑しか見えない。どうだ。

そう言われて、写真家は、二、三それをカメラにおさめた。

旗振りプロジェクトだから、政府が面子にかけてもコケさせろま、と愚図って、それでぼくたちみんな金を出したんだけれどね。甘かったよ。相手が人間の役人なら、いざ知らず、計画用のコンピュータじゃね、あはは。しかもなまじやこしいスキームなので、ぼくたち投資家も利害が入り組んで、再建もほとんど不可能。プロジェクトの債券も、ジャンク以下だし。あれ以来、もうプロジェクト・ファイナンスは国内では無理だ。それ以前からむずかしいんだけど、もう決定的にできなくなった。

こことらんと。東京証券取引所の部だよ。無理矢理入れてもうったんだ。といつても、もうあまり意味はないな。場立ちも、ぼくが高校生の頃になくなったし。最近の株価低迷で、しけたもんだ。まあ、あまり関係ない。合理的な部分は全部コンピュータが全部勝手にアビトラージがけりし。それで取引量は増える一方だけとね。もう人がつまらん小細工する時代じゃないのかもしれない。国の計画シミュレーションとのリンクも、人間だと不可能だし。ところどころの鏡張りの雰囲気は、ちよつとそつと似てるな。

そういわれて、写真家は、この写真も撮った。自分自身も映っている。

これからの見込みをきいてみた。

いや、なんともなうよ。鉄道と地下鉄は公共が引き取る。あとの部分で、いま、債権者集めてワークアウトのスキームを練ってる。建物だけなら将来的には有望だし、みんななんともいいたくは思ってるんだ。いまさら競売はないだろう。いまが底だ。もうちょとこがいはらない。

わたしはこの話をミッドに伝えた。数日後、男の死体が見つかった。ナイフで首を切られて、顔とくしゃくしゃにぶぶされ、アパートの谷底に投げ込まれていた。プロジェクトはイラン系資本が参入して、改修工事中だ。



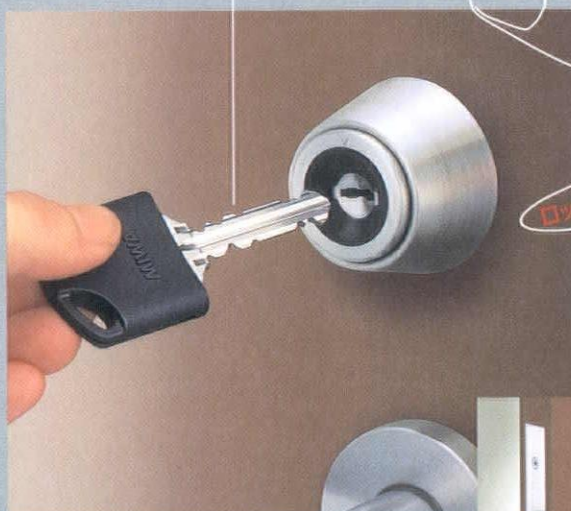
photograph 1



安全で快適な社会づくりのために…

# MIWAは製品に〈やさしさ〉を加えました。

キーがさし込みやすいスリバチ状の鍵穴と  
大型キーヘッド付きリバーシブルキーを  
持つ「UR」シリンダー



ロックにも数々の工夫

握りやすく、操作が楽な  
樹脂製の大型サムターン



使いやすく、衣服の引っか  
かりなどを未然に防ぐ形状  
のレバーハンドル

ロックなど戸締りのための機器は、確かな防犯性能に加え、健常者はもちろん目や身体の不自由な方にも使いやすく、操作や通過の際に安全であることが大切です。

MIWAは、この考え方に沿って、エレクトロニクスや新素材など最新の技術を駆使しながら、独創的なアイデアで製品の開発を進め、ご家庭の戸締りから、たとえば福祉関連施設などの総合管理まで、幅広いニーズに細やかにお応えできるバリアフリー対応製品をラインナップ。プランニングから施工、メンテナンスまでの一貫した総合力で、安全で快適なセキュリティ提案を行っています。



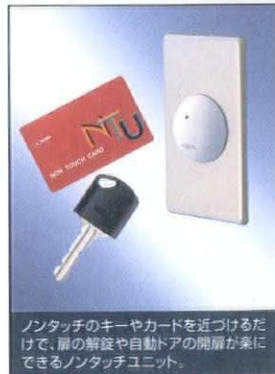
鍵違い数約1億5千万通りの  
「UR」シリンダー（標準搭載）

リモコン施錠だから楽で  
便利な「楽楽Key」。



電源・制御部・アンテナを一体化した  
リモコン錠なので既存の扉への取付け・  
取替えも簡単。

かざすだけで解錠。便利な  
セキュリティシステムの構築に。



ノンタッチのキーやカードを近づけるだ  
けで、扉の解錠や自動ドアの開扉が楽に  
できるノンタッチユニット。

力の弱い方にも使いやすい  
ワンアクションのドアハンドル。



引く、押すのワンアクションでらくに開扉  
できる引戸用グリップハンドル（左）と  
玄関ドア用プッシュプル錠（右）。

特にゆっくりした速度で扉を  
閉じるので通過時も安心。



ドアをいっばいに開いた状態から70～  
80度あたりまで特にゆっくり扉を閉じる  
ディレイドアクション装置付ドアクローザ。

\*ここに紹介した製品は一例ですが、他にも各種高級ロック、各種セキュリティシステムとその機器類、ドアクローザ、建築金具類など豊富に揃えていますのでご相談ください。

アフターメンテ&リフォーム



美和ロックサービス代行店〈SD〉を全国に展開、万全のアフターメンテ体制でお応えしています。

SDとは、美和ロックが専用の施設で専門技術や社会的モラルの大切さなどの研修を行い、厳重な審査を経て認定したロックミス（錠前技術者）です。

美和ロック株式会社

〒105-8510 東京都港区芝3丁目1番12号 TEL.03(3452)5551(代) FAX.03(3455)2437

●美和ロックホームページ <http://www.miwa-lock.co.jp/>



[主催]

鹿島出版会SD編集部

[大阪展共催]

大阪芸術大学

[後援]

朝倉不動産株式会社

[協賛]

ノールインターナショナルジャパン

[審査員]

林昌二 (建築家)

播繁 (構造家)

芦原太郎 (建築家)

小川晋一 (建築家、近畿大学工学部助教授)

[問い合わせ先]

鹿島出版会SD編集部

107-8345東京都港区赤坂6-5-13

Tel.: 03-5561-2555

Fax: 03-5561-2565

大阪展:

大阪芸術大学建築学科合同研究室

585-0001大阪府南河内郡河南町東山

Tel.: 0721-93-3781



[東京展]

会期:

1999年9月15日(水)→9月26日(日)

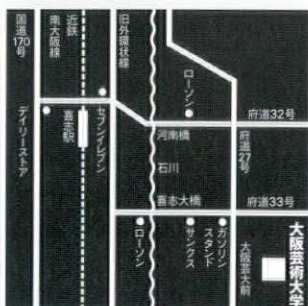
12:00→19:00

土・日・祝日も開催

会場:

東京都渋谷区猿楽町18-8

ヒルサイドテラスF棟ヒルサイドフォーラム



[大阪展]

会期:

1999年9月30日(木)→10月11日(月)

10:00→17:30

土・日・祝日も開催

会場:

大阪府南河内郡河南町東山

大阪芸術大学芸術情報センター展示ホール

喜志駅より阪南ネオボリス行きバスor学バス(平日のみ)



SDレビュー1999

第18回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

# SD Review 1999

Space Design

The 18th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings

入選者

I.C.U

新井清一

アンドリュース・バーリー＋ミヌストリー

石田壽一

岡河 貢＋PARADISUS ARCHITECTS

金井謙介＋小池聡子

川人洋志

駒井貞治

清水祐効

寺岡豊博

平沼かおり

更田邦彦＋岩岡竜夫＋岩下泰三

馬淵富夫＋北岡治＋徳野博子／大成建設設計本部

安田博道

山口 隆

山田 良







## 極北のダンス

ピナ・バウシュとヴッパタール舞踊団が3年ぶりに来日し、彩の国さいたま芸術劇場で5月から6月にかけて4作品を上演した。舞踊や演劇についての私たちの強固な常識をたった一人で覆してしまった天才の作品をこのようにまとめて見られるのは世界でも稀な幸運である。しかもプログラムは代表作『ヴィクトール』を含めて初期作品から近作までを並べ、彼女の全体像が見えるように配慮してある。

20世紀の後半、アメリカに生まれたモダニズムというイデオロギーが芸術界を風靡した。それは芸術各ジャンルの自己批評こそ前衛の道だという考えで、作品は美術についての美術、ダンスについてのダンスであることを要求する。50年代のカニングハム、60年代のミニマル・ダンス、70年代のポストモダニズムのダンスなどはこの文脈で評価された。しかし70年代の半ばに登場し80年代に世界の舞踊界の頂点に立ったピナ・バウシュは、その流れに無縁というより、むしろそれに逆らうもののように見えた。そこでアメリカのモダニズムに対するドイツ表現主義の逆襲という図式が語られたりもした。ピナ・バウシュ自身は表現主義と呼ばれることを拒否していたにもかかわらず。

1974年のダンスオペラ『タウリスのイフィゲネイア』を見るとき、やはりドイツ表現舞踊の伝統を思わずにはいられない。

その美しさや完成度の高さにおいてモダンダンスの到達点であるとしても。だが86年の『ヴィクトール』になると、もはや表現舞踊ではなく、モダンダンスですらない。ピナ・バウシュ独自のタンツテアターという他はない。作品は多数のシーンのコラージュから成る。ダンスシーンはわずかしかな。ほとんどは演劇の断片のような、さまざまな振る舞いや台詞でできている。だが演劇の常識からはほど遠い。ふつう芝居は筋がわかるからこそ面白く、言いたいことがわかるからこそ感銘を受けるのだが、ここではどちらもまるでわからない。といって視覚的に美しいだけの「イメージの劇場」ではない。観客は話わからぬままに劇的なものを感じ、わけわからぬまま涙を流す。ここには優れた演劇を見た時と同質の感動がある。だからこそ私たちは「演劇の領域が広がった」としてしまうのだ。演劇の極北なのかもしれない。10年後の『フェンスタールプッツァー』(97年)も同じ方法で作られている。これはピナ・バウシュの一般的な作法なのである。最後に上演された『ダンソン』(95年)はある意味で大部分がダンスシーンである。ただ普通のダンスはほとんどない。人の動作がダンスとして成立するぎりぎりの場面を次々と送り出す。見慣れたダンス形式がほとんどないのに、私たちは確かにダンスを見ているのと同じ快感を感じる。これはダンスの極北と言ってもいい。

ピナ・バウシュはけっしてモダニズムの人ではない。しかし彼女の仕事は演劇や舞踊の成り立つ限界を探り、その領域を拡張し、その概念を変革した。これが演劇についての演劇、舞踊についての舞踊でなくてなんだろうか。

# C u l t u r e C a f e

BUYO

今月の舞踊

### ピナ・バウシュ&ヴッパタール舞踊団

『タウリスのイフィゲネイア』

『ヴィクトール』

『フェンスタールプッツァー』

『ダンソン』

会場：彩の国さいたま芸術劇場大ホール

日時：1999年5、6月

演出・振り付け：ピナ・バウシュ

美術：ペーター・バプスト

衣装：マリオン・スイー

協力：マティアス・ブルケルト、

アンドレアス・アイゼンシュナイダー

### 尾ヶ崎 彬

あまがさき・あきら／学習院女子大学教授

1947年愛媛県生まれ。東京大学文学部美学芸術学科卒業。現在学習院女子大学教授。著書に『花鳥の使』『日本のレトリック』『ことばと身体』『緑の美学』、編書に『芸術としての身体』『メディアの現在』がある。



タウリスのイフィゲネイア  
左ページはダンソン



ヴィクトール

写真＝池上直哉







## パブリックシアターの 新しい風

7月15日、世田谷パブリックシアターにおいて宮沢賢治原作、佐藤信演出の「ネネム」を見た。飢饉で両親を亡くしたお化けの子ネネムが、妹ママミをさらわれながら、森の昆布取りという苦勞をしつつお金を貯め、書記を目指して都会に出て、フーフィーボー博士の教室を主席で卒業し、ついにばけものの国の世界裁判長になって、名裁きで最高の地位まで上りつめ、サーカスのスターになったママミとも再会を遂げる、しかし大きな安心故に犯してはならない重罪（人間の世界に出現するという罪）によって破滅する……という教訓的童話物語である。演出の佐藤は音楽劇仕立てに直しつつも原作をかなり忠実に描いてゆく。オーストリアの舞台美術家レギーナ・エッセルベルガーによる高彩度の中間色を用いた構成的空間設定、透視画法を戯画化した書き割り、凝った衣裳の重ね合わせが、ブレヒト流の異化作用を所々に配した佐藤演出に解釈の多様性を与えている。自然の動きを象徴するかのように静かに揺れる自然色の幕、下手から昇り上手に沈む日食のような黒い太陽が意識や時間の流れを端的に表現していた。結城孫三郎一座の小さな操り人形は佐藤お得意の手法であるが、物語の非現実性と教訓的リアリティとを融合させる接着剤として効果を発揮していた。佐藤自身が設計に参加した世田谷パブリックシアターは平土間の客席勾配を変えることができる。これは演劇には正面から見て有効なものと思える角度が有効なものがあると佐藤が強くこだわった仕掛けである。今回は緩い勾配の客席を採用していた。佐

藤は今回の演出で舞台の重層的な重ね合わせを意識したのであろうか。構成的な要素と戯画的要素を違和感を残しつつ併置させた舞台美術はそうした意図を支援していると理解したい。

さて、宮沢賢治の原作にない設定は、チベットのお寺の少女が地上に落ちて意識を失ったおばけネネムの夢に寄り添うことで記憶を回復させるという筋書きである。最初は意志のないネネムに変わって少女（穂谷友子）が夢の中のネネムの役を演じ、世界裁判長として出世したネネムの時点で男（みのすけ）に切り替わる。男に切り替えることで後半の男性社会の実存性を強調するうまい設定であったと思う。しかし、気になるところがある。結末である。原作では失敗を犯した裁判長ネネムが自らの罪を自らで裁こうと決意する素直な幕引きなのだが、佐藤はネネムを罪によって人間に転生させるという輪廻の物語に置き換えている。少女はその道を導く仏の化身という設定だ。おそらく佐藤は自分で自分を裁くというネネムの偉さの持続に違和感を覚えたのだろう。そこで自らを懺悔させる輪廻転生の物語へと異化させたのではないかと。意図は分かるような気がするが少し甘くなりすぎたような印象を受けた。

最後に、「ネネム」は（財）地域創造の「公共ホール演劇制作ネットワークモデル事業」による支援を受け、世田谷パブリックシアター、盛岡劇場、（財）びわ湖ホールの共同で制作されたプログラムである。公共ホール連携によるオリジナル作品の制作は近年にみる新しい方向であり、経済負担を分散することで地域の自立した創造活動を活性化する意図を持っている。世田谷パブリックシアターがこうした企画を重ねることで旧態然とした公共ホールの創造事業に新しい風を送り続けてくれることを期待したい。

## C u l t u r e C a f e

### PLAY

今月の演劇

### 『ネネム』

会場：世田谷パブリックシアター

日時：1999年7月10～18日

原作：宮沢賢治

脚本：藤原正教

演出：佐藤信

出演：穂谷友子、みのすけ、他

### 清水裕之

しみず・ひろゆき／名古屋大学教授

1962年名古屋市生まれ。1974年東京大学建築学科卒業。1978年～80年ハーバード大学留学。愛知芸術文化センター、彩の国さいたま芸術劇場など数多くの公共文化施設の構想立案、プロジェクトマネージメントに参加。現在名古屋大学教授。建築家、劇場計画者。



写真＝石川純





# Exhibition Report

展覧会レポート

アンジェロ・マンジャロッチェ彫刻展

会期:

1999年5月26日～6月27日

会場:

スフラジジョ教会、カラーラ、イタリア

## 彫刻におけるDNA

堀川絹江

photos: Studio A. Mangiarotti



The Gallery and Presence



The way



Balance in life  
SD9909

アンジェロ・マンジャロッチェといえば、殆どの人が、建築またはデザイン界の巨匠、と思ひ浮かべるだろう。しかし、彼の創作活動の一環として、大規模の建築物を計画するのと相違ない情熱をこめて、半世紀以上、彫刻作成に取り組んでいる事実を知っている人は数少ないであろう。

1999年5月26日から1ヶ月間、イタリア中部の大理石の産地、カラーラ市で、「彫刻におけるDNA（原題はil DNA della scultura）」と、タイトルされた彼の彫刻のみの展覧会が開催された。

会場となったSuffragio教会前面に3点の大理石の等身大の作品"The way"、"The gallery"、"Presence"（原題はIl percorso, La galleria, Presenze）、教会内部には、大理石、雪花石膏、アルミニウム、鉄、ブロンズ、木、プラスチック……等々、さまざまな素材から形成された大小50点の作品が陳列された。

彼のそれぞれの作品の根底には、この展覧会のタイトルにもある「DNA……形を構成するための基本的な資質」が存在する。

素材・マテリアルに対する認識と探究、形態とそのバリエーションの無限な可能性の追求、制作における現代技術の最大有効利用、また、作品を鑑賞する者へ、実際に実現された形とその意義の関連性の提起。対象物（建築、デザイン、彫刻）を問わず、マンジャロッチェは常に、このDNAを創作の原点として、作品のなかに盛り込んできた。

今回展示された「均衡シリーズ」とテーマづけられた作品群は、彼が永年、独自に試みていた、素材、形態実験の末に生まれたものであり、全て、計算されたラインで構成されている。また、前述の"The way (Il percorso)"においても、彼の創作意図が手にとるように感じられる。ビアンコ・カラーラ大理石のブロック（400×200×90cm）を一本の糸で切り取って形づくられたこの作品は、彼がデザインした品格のある美しい曲線を介して、見る者に、時の流れや空間に対する感情を間接的に伝える。

マンジャロッチェがいかなる建築家、デザイナー、つまり形を創造する人なのか、これらの彫刻がその解を持っているのである。

もうひとつ、記しておかなければならないことがある。

「満と空の関係」である。

シンプルな板から、ある形を切り抜く。

切り取られた形には、新たな生命が宿り、ひとつのオブジェとしての価値が発生する。これが「満」の部分である。板には、当然、切り抜かれた穴が残る。「満」のオブジェと同じ輪郭を持つこの穴が「空」の部分である。この「空」のオブジェも「満」のオブジェと同じ様な価値を持つ、とマンジャロッチェは常に強調してきた。

この「満と空の関係」をテーマにした数多くの作品を前にして、彼は私にこう語った。

「『満』の思想は西洋的であり、『空』の思想は東洋的であるように思う。これらの彫刻を創りあげることで、表現方法は異なっている、西洋文化と東洋文化がそうであるように、『満』も『空』も同一の価値を持つ、ということを実証したかった。」

展覧会は連日多数の人で賑わい、ジャーナリスト達にも大きな反響を残して幕を閉じた。

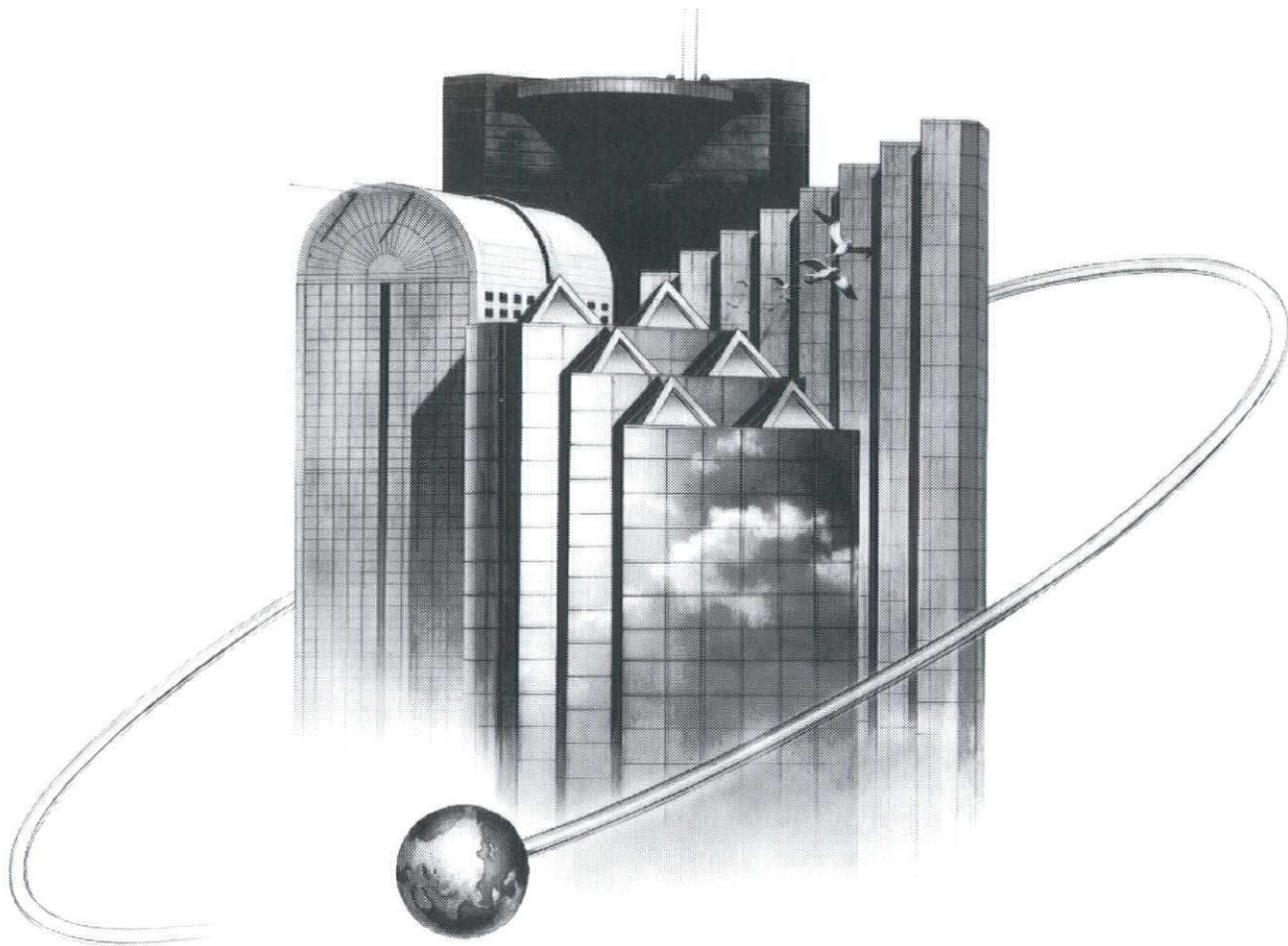
とにかく、マンジャロッチェという才能と、彼の発想の広大さに圧倒された展覧会であった、と言っても決して過言ではない。

モノを創るという同じ世界に属する人間のひとりとして、彼に、大きな大きな拍手を送りたい。

（ほりかわ・きぬえ／建築家、在ミラノ）



# 快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。

それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。

都市、コミュニティ、産業施設…人を取りまくさまざまな環境について考え、

その理想を追いつづけている三機工業は、

いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。



**三機工業株式会社**

〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03(3502)6111



# Exhibition Report

展覧会レポート

ハーバードGSDレビュー

会期:

1999年7月13日(火)~8月1日(日)

会場:

ヒルサイドテラスF棟ヒルサイドフォーラム

## 刺激の交錯、そして成長する展覧会

榎本弘之

GSD——ハーバード大学大学院——比肩しうるもののない最高の「最高学府」としてのその響きは、建築を極めんとする若い人々を、戦後からこの方ずっと魅了し続けてきた。

その同窓会名簿には、4番目に戦後最初の留学生となった芦原義信の名が見える。翌年には横文彦が、そして1年にひとりずつ波多江健郎、穂積信夫、鹿島昭一という錚々たる面々が並ぶ。日本の戦後復興という熱い想いを胸に、文字通り日本を背負って海を渡った彼らが、強烈なアメリカの豊かさに圧倒されながらも、世界一の教育体制の元で、眼を輝かせて建築や都市のありうべき形を模索していた姿が目浮かぶようである。

それ以来140人がGSDを修了したという。建築、アーバンデザイン、ランドスケープの3分野で、ハーバード卒業生は着実に日本のデザインを主導している。年間6万人を突破したという海外留学ブームの中でも、ミーハーな海外旅行気分と、志なく気軽にホームステイする大多数の学生とは違って、やはりGSDの卒業生は別格である。

今回そうした面々のうち30代、40代の30人が集まって、代官山ヒルサイドテラスで展覧会を開いた。建築、アーバンデザイン、ランドスケープの卒業生がほぼ3分の1ずつを占め、近作をひとり2作品ずつ展示する。過去に建築雑誌を賑わした竣工作品あり、小住宅あり、広大な造園計画あり、イマジナリーなプロポザルありと、なかなかの百花繚乱ぶりである。これらを横断的に見て共通項を見出そうという試みは、言うまでもなく空しくあろう。同じ大学出身といっても20年も違えば、時代も教授陣も学生の意識もまるっきり異なるからだ。しかし、ひとつだけ感じられることがあるとすれば、彼らが皆、自らの納得を求めて、作品に強烈な意志を封じ込めようとしている点だろうか。月報の如きは建築雑誌の多くを占める発見性のない建物ではなく、エネルギーに満ちた作品群のパワーに包まれるのは、何とも爽やかな気分である。

出展者の何人かにGSDでの教育を問うて興味深かったのは、ふたつの正反對とも言うべき教育が同時に、しかも徹底的に行われているということだった。ひとつは、単純化して言えば、歴史の分析と理論に基づいて、あくまでも正統的な建築を求めさせようという方向である。学生は歴史上の建築を数多く解説し分析さ

せられると同時に、ボザールや近代建築の理論を研究する。そしてラファエル・モネオらの教授下に、ファッションに流されない「正しい」建築を学ぶのである。もちろん、真に正しい建築や普遍的な理論など厳密にはあろうはずはない。が、展示されている作品群を見ると、こうした教育の成果だろうか、いかに独り善がりを廃するか、いかに説得力を与えるかという奮闘の過程が読み取れるような気がしてくる。

もうひとつは、発見とオリジナリティの教育である。分かっていることはやらない、物マネはもつての外。発砲スチロールを溶かすなどして出来る予測不可能な形の中から、どこにもない新しい形態を発見して独自の世界を構成する。工房で巨大な模型を作っては試行錯誤を繰り返す。こうして歴史を先に進める方法論を、実験を通して身につけさせるというのである。

この展覧会で最も興味深いのが、後者を実際に見せてくれた展示だった。会場中央にはある想いをもって巨大な横田基地の敷地模型が横たわる。ここに出展メンバーが毎日一定のキーワードの下にエレメントを付加していくという試みである。こういったコラボレーションは実際にGSDでマイケル・ソーキン指導の元に行われたというが、異質なものが重合し衝突し変形しあって意外な状況を生み出し、そこから次なる手法を発見するという方法は確かに魅力的だ。この会場でも、デザインは結果をスタティックに並べるだけでなく、そのプロセス自体が展示される。日本人のシャイな性格ゆえか、未だパチパチと火花を散らすほどには至っていない部分も多いように見えるけれども、成長する展覧会というのはいかにも新鮮である。

おおよそ展覧会を開くということの意義は、半分は出展する側にあるのであって、観客側には残りの半分しかない、といつも思う。とりわけ今回のようなグループ展では、出展者は自らの出自と初心を確認し、同じ基盤を持つ仲間と刺激を与えあうことが最大の成果となろう。

そして我々は、この刺激の交錯を外側から見守ることで、出展者と体験を共有するのである。

(えのもと・ひろゆき/建築家)



会場風景

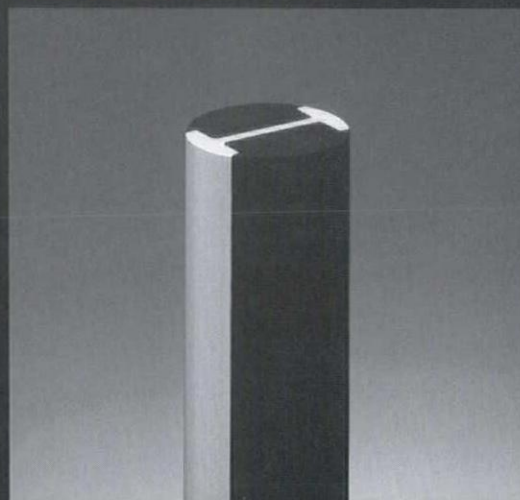
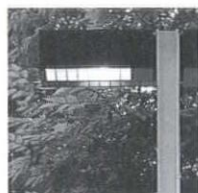
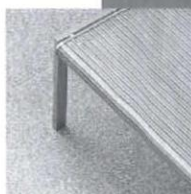
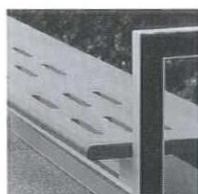


ワークショップによる都市デザイン・プロジェクト

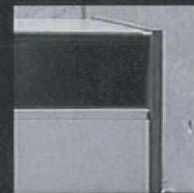
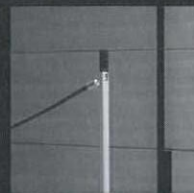


# NECESS LANDSCAPE PRODUCTS

求められる働きに対して  
必要最小で最大の働きをするようデザインされた  
シンプルかつ機能的な都市景観材...  
その新たな方向性



NECESS(ネセス) LANDSCAPE PRODUCTSは、都市における景観形成を行うアイテムを豊富に用意しています。場と場に境界を設けるボラードやガードフェンスをはじめ、街を行き交う人々が利用するベンチ、トラッシュボックス、アッシュトレイそして、光による明かり機能と演出性をもつ照明灯や案内、誘導サインシステムなどがあります。いずれも軽快感を持ち、部材構成と素材感、色彩、シャープなプロポーションとデザインフォルムに至る全体的な統一感をもって構成されています。そして、ことさら主張するのではなく、都市景観の中のひとつの道具として役割を演じつつ、単体として機能することを使命としています。構造においても、自重・水平荷重・垂直荷重の力に対し、マグネシウム、シリコン、銅などの含有量を変えた高強度アルミ材を主材に用い、強度・耐久性・耐候性を高めることで、最適な「材」の使用を求めました。また、緩衝材にゴムや再生木を採り入れることにより、人に触れられる道具として安全性・触感・視覚的やさしさをもたせています。YKK APは、NECESS LANDSCAPE PRODUCTSの提案において、景観材としての機能の達成の先には、道具としての存在を感じさせないコンテキストと共生する本当の姿があると考えます。



YKK  
AP

YKK AP アーキテクチュラルプロダクツ株式会社

東京都千代田区神田和泉町 1

YKK AP ホームページ <http://www.ykkap.co.jp/>



**mitsubishi**  
三菱電機

エネルギー効率に優れた  
PMギヤレス巻上機を採用。

薄形制御盤を昇降路内に収納。  
全階で多様な乗場意匠を実現。

# 昇降路だけの エレベーター 三菱〈エレパック〉誕生。

機械室にあったすべての機器を昇降路内にすっきり収納しました。もちろん制

◆登場◆

エレパック

# ELEPAQ

三菱エレベーター／機械室レスタイプ

御盤も昇降路内に設置。エレベーター乗場の出入口わきなどに置く必要はありません。昇降路だけのエレベーターですから、設計の自由度がアップ、すべての階で多様な乗場デザインを可能にします。

## 建物の設計自由度がアップ

ベントハウスがないので、日影規制への対応が容易。機械室と居室の位置関係で悩むこともなく、建物内外の設計がいっそう自由になります。

## ビル有効面積の増加

機械室がないうえに、昇降路面積も従来のロープ式並みの省スペース。居室などに利用できるスペースが大きくなり、レントラブル比も向上します。

## なめらかな乗り心地と省エネルギー設計

加速・減速がなめらかで騒音も少なく、エネルギー効率に優れたPMギヤレス巻上機を採用。高級エレベーター並みの、静かでスムーズな運転を実現しました。また、油圧式エレベーターに比べて電力消費量はおよそ1/3になります。

## 環境に配慮

油圧式エレベーターでは避けることのできなかった廃油処理の必要もありません。「環境にやさしいエレベーター」、これも〈エレパック〉の優れた特長です。

Efficient, Reliable & Comfortable  
Vertical Transportation Systems  
All Over The World

効率がよく (Efficient)

信頼性に優れ (Reliable)

快適な移動空間の創造 (Comfortable)

エレベーターの3つのキーワードを基に  
そのすべてにおいて、世界トップクラスの製品を  
全世界に向けて提供します。

 三菱電機株式会社

お問合せ・資料のご請求は……三菱電機株式会社 〒107-6150 東京都港区赤坂5-2-20 (赤坂パークビルディング)

本社ビル事業部 TEL.(03)5573-3793



シンポジウム Design for the World '99 東京

会期:

1999年7月5日(月)・6日(火)

会場:

日本海運倶楽部国際会議場

## 21世紀に向けての新たなデザイン運動

山内陸平

テレビの特番で「愛は地球を救う」というのがあったと記憶している。今回の「Design for the World」と銘打ったシンポジウムは、まさに「デザインは地球を救う」という壮大な目標を掲げ、他に類を見ないものとなった。

昨年設立された「Design for the World (以下 DW)」という国際組織とこのシンポジウムの持つ意味は、「かたち」と「なかみ」の両面において、加えて時期という点においてもデザイン領域における先世紀末を想起させ、二重に意味あるものであったといえてよい。

第一の「かたち」についての意味は、これまでデザインの国際的な組織はその領域ごとに分かれてそれぞれ個別に活動してきたが、今回、ICOGRADA、ICSID、IFIの3つの組織が中心となり、それぞれの領域を越えて地球をデザインするという新たな視座でDWという国際組織が創設されたことにある。

今世紀、特に第二次世界大戦後の先進国におけるデザイン活動は、その成熟化とともに領域の専門分化が進められてきた。もともと近代デザイン誕生時には、今日ほど領域が意識されず、人間生活の造形領域は互に関係性のある共通認識が存在していた。それは、デザインの本質ともいえるもので、人間個々や民族を越えたところの人間性(Humanity)に根差したものである。21世紀を目前にしてデザインの本質に立ち戻り、その総合力を生かすことは時代的要請でもあろう。

第二の「なかみ」については、DWの活動が地球的課題を中心にした点にある。これは、今日地球上のさまざまな問題に対してデザインが上記の本質の上に、創造性を生かして活動しようとする「21世紀に向けてのデザイン運動」といえよう。さらに、今回のシンポジウムの特筆すべき点は、地球的課題という、とてつもない内容にもかかわらず、観念論に終始することなく、すでにスタートしている具体的プロジェクトが提示されたことである。その一例として、セッションAの「地球課題へ挑戦するデザイン」では、インドネシアをはじめとする大規模煙害地域のためのユニバーサルマスク。セッションBの「地域問題を解決するデザイン」では、HIV/AIDSなどの感染症に対処する安全注射器の開発と配布など数多くのプロジェクトが主にDWの理事によって示され、いずれもが今後NGO、UNESCO、WHOなどの国際機関と連

携していくとしている。

当日、これまでのデザインシンポジウムとは異なった内容に戸惑いを覚える参加者がいたことも事実であろう。記念講演で、現在の国連の抱える課題を3つ(①グローバリゼーション——その光と陰、②開発に関する諸問題——発展途上国への援助の問題、③安全保障——人権とのからみ)をあげ、そのいずれもが国連といえども今日容易に解決不可能な状況にあり、デザインにも地球課題解決のため力を注がれることを期待する、という波多野前国連大使の発言は、参加者に対し説得力を持った。

こうした成果の一方で、DWの今後の活動に課題も残った。そのひとつは活動のための資金である。先に記したユニバーサル防塵マスクの場合を例にしても、とりあえずの目標である250万個(最初の8ヶ月間)に対して190万ドルが必要であり、スポンサーを募るのだとしている点からも解る。また、セッションCの「ワールドデザインの行動計画」において、支援に関して少なからず問題も露呈した。メセナに関して、われわれとはその考え方に基本的差異を持つDWの欧米側理事と、折からの経済不況の中で日常のデザイン活動に耽溺せざるを得ない日本側参加者(デザイナー)との間に、温度差があったことも否定することはできない。フィラントロピー的デザイン活動の資金問題は少しの時間的猶予が必要なのかもしれない。

さらに、今回示されたプロジェクト制によるDWの行動計画は、それ自体の意義と同様に国際組織の活動方向としては当を得ていて、疑問を差し挟む余地はない。しかし、その一方で地球規模の課題解決に圧倒的なウェイトを占めるとされるのは、人々のモノの消費(使用)における、「価値観とライフスタイルの変革」である。この点にこそ、デザイナーが日常活動を通して力を発揮すべきである。

「持続不可能な社会モデル」の構築に少なからず手を貸してきたデザインが、企業の商業主義の桎梏からいかに解放されるのか、それともデザイナー個々のディレンマとして放置されるのか、これはDWの活動とともに21世紀に向けてのさらなるデザインの課題であろう。

(やまうち・りくへい/京都工芸繊維大学デザイン経営工学科教授)



# Book Review

書評

評者 宇野 求

## メッセージとしての現代建築講義

熱気に包まれた会場はみるみる席が埋まっていく。立ち見の人が部屋の外に溢れだし、講演会の始まる時間がきた。僕は舞台の袖から集まった観衆を眺めていた。東京大学工学部11号館の講堂は立錐の余地のないほどの人で埋めつくされている。これだけの人間がこの空間を埋めたことを見たことがなく、ほとんど事件と見てよいほどの入りだった。東京で行われるのは珍しい安藤忠雄の講演会に、若い人たちが参集したのである。美しい建築スライドと冗談を交えながらのわかりやすい語り口のレクチャーは聴衆をぐんぐん引き付けていく。自分で企画し、人を集めておいてこんなことを思うのも妙だが、ずいぶん来るなあ、と半ばあきれつつ、安藤忠雄の人氣に改めて驚いたものだった。今から10数年も前のことである。

大学院に在籍しながら設計事務所をつくり設計活動を始めた僕たちは、同時に企画事務所のようなものもやろうとか何とかいって、東大の5月祭で安藤忠雄展を企画した。現在京大にいる竹山聖と建築家の榎本弘之、そして僕が中心となって展覧会と講演会をたちあげ、パンフレットの作成には日本女子大の篠原聡子などが参加していた。本郷キャンパスでの会場の設営には建築学科の大学院生が多く加わっていた。安藤事務所からもスタッフが送られてきていた。

鉛筆で描かれた数々の大型ドローイングとモデルが製図室に展示され、抽象化されたモノトーンの壁や床、そこに刻印された光と影の構成が鑑賞者の意識を釘づけにする。第二次オイルショック後の日本は沈滞した気分が社会に漂い、建築界ではポストモダンスタイルの建築を巡って多くの議論が行われていた。この時期、安藤忠雄は建築設計界に彗星のごとく登場して、コンクリート打ち放しによる明解な構成の建築を次々に作り上げ、混迷の時代にあって凜とした魅力的な空間を提示し続けていた。

本書『建築を語る』は、時を経て、東京大学の教授に就任した安藤忠雄が、大学院の講義でおこなった5回のレクチャーをまとめた講義集成である。一読して驚かされるのは、20年近くも前に彼をはじめて東大に招いて行った講演会会場の臨場感と緊張感が、この本からもまったく変わることなく伝わってくるのである。安藤忠雄は一言、真剣に生きろ、と若い人間に向けて言い続けている。30代のころに大阪で『都市ゲリラ』と称して

自己と社会と格闘しながら建築をつくっていた時と比較するならば、現在の安藤忠雄は世界レベルの指導的建築家となり、社会的立場や位置づけは変わったのかも知れない。国内外で幾多の業績を上げ、成功も収めているのだから、スライドで紹介される建築作品はもちろん変化している。講義で扱う自作の建築は国内各地、さらに世界各地へ広がり、当然のごとく規模も内容も拡張拡大している。しかし、建築を目指す原点は変わることなく、個からの建築を、というメッセージが伝わってくる。

秩序があいまいで輪郭をはっきりとたたない日本の都市空間において個の空間を獲得するために、幾何学的構成と徹底的にシンプルな素材によって風や光を切り取り建築内部に導入するという方法を、若き日の安藤忠雄はすでに築き上げており、大阪で身につけた優れた寸法感覚がさらに空間へオリジナリティに富む魅力を与えてきた。たとえば、代表作〈住吉の長屋〉には今日の安藤忠雄の建築の原形のすべてがあり、〈小篠邸〉には地形や場所と建築の応答がある。徹底した個からの発想、個からのアプローチで内外の建築界にとどまらず広く一般社会からも多くの支持を得て、安藤忠雄は「世界のアンダー」となったのである。

5回の講義の内容は、自身の仕事の展開を通じて安藤忠雄が近代建築をいかにとらえてきたのかということを知りやすく講述したものであり、同時に1960年代から今日までの現代建築の動きをヴィヴィッドに伝える優れた現代建築講義でもある。安藤忠雄が建築から軸足をはずすことなく、多くの異分野の人々と出会い、社会の動きや現代美術の流れとともに走ってきた足跡が説明され、建築創造のプロセスを考える上で興味深い。また、若者に向けての講義であることから、現在の安藤忠雄を決定づけた1960年代を振り返りながら、20代の人間がいかに生きるべきかを現代建築のありようを通じて問いかけていることも本書の魅力となっている。徹底した思考、変わらぬ意思、わかりやすさ、そうしたことの大切さも教えてくれる。建築専門書としてはもとより、一般書として現代人が読んで得ることの多いテキストである。

(うの・もとむ／建築家、千葉大学助教授)



『建築を語る』

安藤忠雄＝著

A5変型 262頁

東京大学出版会 2800円



# Books

新刊紹介

『タンポポ・ハウスのできるまで』

藤森照信＝著

B6判 346頁

朝日新聞社 2400円

「なぜ屋根にタンポポか」を「話せば1冊の本になるほど長いから」書いたという著者自邸の本。一読すれば、建築の歴史と理論から設計と施工、建築を超えた素材論まで、万人が楽しく学べる。「素材は形に優先する」といった金言も眩しい。



『ヨーロッパのレストランデザイン』

武藤聖一＝著・写真

A4変型 208頁

プロトギャラクシー 4700円

西ヨーロッパ7カ国、47件の飲食スペースを豊富な写真を中心に紹介するもの。時代の気分をストレートに反映するこの手のスペースを高い鮮度で扱っている本書は、著者の素材への愛着ゆえに心地よいデザイン・レシビに仕上がっている。



『FH リプレセント2/ヨハネス・ダイカー』

矢萩喜徳＝企画・写真・デザイン

ヤン・モレマ＝文

A5判 56頁

アー・ドウ・エス パブリッシング 1800円

オランダ機能主義を代表する建築家ヨハネス・ダイカー（1890～1935年）の作品集。社会性を最重要課題とした作品は、RC造の即物的なデザインで、構造の合理性と空間の透明性に溢れている。



『建築のはじまりに向かって』

内藤 廣＝著

B6変型 240頁

王国社 1900円

『時間と共生する建築』を目指す著者が、〈海の博物館〉以降の思考をまとめた一冊。設計の逸話だけでなく、モンゴルやA.アアルトへの憧憬など、内容は多岐に渡る。「建築は時間意識を醸成する孵化培養器」という文節が、作品の印象と重なる。



『新居千秋 喚起／歓喜する建築』

ギャラリー・間＝企画・編集

A4変型 112頁

TOTO出版 1810円

人を感動させ、記憶に残るような、歓喜に溢れた建築を謳う新居千秋の作品集。爪楊枝から摩天楼までに領域の広がる活動を「Urbanism」「Resort」「Real Education」「Creating Culture」の4章に分けながら、各作品を多面的なテーマで紹介する。



『間(ま)・日本建築の意匠』

神代雄一郎＝著

B6判 208頁

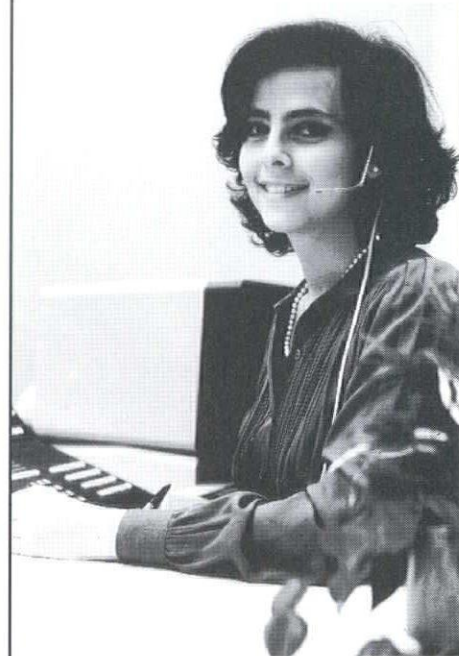
鹿島出版会 2400円

柱の囲む「間」によって、日本建築の空間意識と空間意匠を切開いた名論の再録。社寺、住宅といったビルディングタイプが中心の建築史解説を脱却した意匠論である。三間四方の部屋「九間」に着目し、農耕集落から現代の住居単位までを解く。



きーるい地盤を、ほめるくつひ  
日立電線

## 情報とエネルギーの ネットワークをつくる 日立電線



情報やエネルギーを伝える技術を中心に、人と人、人と世界を結ぶグローバルなネットワークをつくり、「私達の住む地球をまあるくつむす」。日立電線は、いま、快適で豊かな暮らしの創造をめざして多彩な活動を展開しています。21世紀に向かって、ますます進展する情報化社会——たえず革新を続ける情報・通信、エレクトロニクス、エネルギーの世界でひとつの大きな役割を担っているもの——それは、ハイテク技術を駆使した日立電線の製品です。

日立電線株式会社 東京(03)3216-1616



## 建築家空間講義 VI 全15回 参加者募集

期間：1999年10月8日～2000年2月18日

毎週金曜日

時間：19：00～21：00（講義）

21：00～21：30（懇親会）

会場：JIA館3階セミナールーム

対象：建築学科の大学院生、20才代の建築家

募集人数：各回120名（一括申込者優先）

受講料金：15,000円／全15回（講義録VI代金含む）、1,500円／1回（講義録VI別売り）

講師：青木淳（10/8）、大野秀敏（10/15）、塚本由晴（10/22）、トム・ヘネガン（10/29）、谷内田章夫（11/5）、佐々木睦朗（11/19）、国広ジョージ（11/26）、千葉学（12/3）、伊東豊雄（12/10）、工藤和美（12/17）、渡辺武信（1/14）、北川原温（1/21）、元倉真琴（1/28）、宮本佳明（2/4）、鈴木了二（2/18）

問い合わせ：社団法人 日本建築家協会（JIA）

「空間講義」担当（山岸）

東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館

Tel: 03-3408-8291 Fax: 03-3408-7129

## 第5回関西建築家大賞 受賞者決定

本大賞は、過去10年間にわたり近畿地域で活躍する建築家に対し、その優れた建築活動を顕彰するもので、毎回異なるひとりの審査建築家によって様々な価値判断に基づいて受賞者を選定している。今回の審査建築家は原広司。

受賞者：遠藤秀平（遠藤秀平建築研究所）

素朴な材料であるコルゲート銅板を活用して、美しい形態のシェルターを構築し、いずれも小規模な建築でありながら、公共建築、独立住居に適用し、その一般的応用可能性を示し得た点を評価された受賞。

問い合わせ：社団法人 日本建築家協会近畿支部（事務局 出利葉、担当 穴井）

Tel: 06-6229-3371 Fax: 06-6229-3374

## 磯崎新「栖十二」銅版画連作展

氏がこの一年間、ごく少数の人々（限定35名）に向けて発信し続けていた、エッセイと銅版画を展示する。

会期：9月21日（火）～10月9日（土）

日、月曜日、祝日休廊

時間：11：00～18：00

会場、問い合わせ：ギャラリーサカ

東京都港区赤坂9-5-12

Tel: 03-3401-6446 Fax: 03-3408-9465

## 第33回建築文化懸賞論文募集

課題：「都市のヴィジョン」

審査員：大野秀敏

応募資格：なし

応募内容：400字詰原稿用紙25枚以内、またはそれ相当のワープロ原稿。上記の字数には注記も含む。原稿は未発表のものに限る。また、応募原稿とは別に400字詰原稿用紙2枚以内（あるいはワープロ原稿800字以内）の梗概と、氏名（ふりがな）、住所、電話番号、年齢、勤務先または学校名、略歴を明記したものを添付のこと。原稿以外に本誌2ページ以内に納まる図版などの添付は可。但し、単色印刷が可能なものに限る。また、この懸賞論文はあくまでも論文による審査のため、図版はレイアウトせずに添付のこと。

応募締切：10月31日（日）当日消印有効

賞：下出賞1点（50万円）、佳作数点（各10万円）  
入選作品の出版権は彰国社に帰属し、応募論文は返却しない。

入選発表：「建築文化」2000年2月号誌上（予定）

問い合わせ：彰国社「建築文化」編集部

東京都新宿区坂町25

Tel: 03-3359-3231（代） Fax: 03-3353-5391

## 第28回JIA建築事情視察団

### ヨーロッパの最新建築を訪ねる旅 南欧編 参加者募集

期間：10月29日（金）～11月9日（火）

コーディネーター：淵上正幸（SYNECTICS INC）

費用：498,000円（予定）

視察都市：ビルバオ、ボルドー、リヨン、マルセイユ、ニーム、リモージュ、クレルモン・フェラン、フィルミニ、シャンペリイ、アルル、グルノーブル、ダックス、レジェ、ベサック、ボンテサック、他（オプションでバリ）

視察内容：1. ゲーリーのグッゲンハイム美術館をはじめとして、ヌーヴェル、コールハース、ロジャース、ピアノ、フォスター、ロッシ、ボッタといった現代建築のスーパースターの最新作品とラ・トゥーレット修道院、ユニテ・ダビタシオンなどのル・コルビュジェの作品を視察。2. ヌーヴェル設計のホテル・サンジェイムズ、コルビュジェ設計のラ・トゥーレット修道院、ユニテ・ダビタシオンに宿泊。

問い合わせ：（社）日本建築家協会

Tel: 03-3408-7125（担当：田辺）

近畿日本ツーリスト（株）銀座海外旅行支店

Tel: 03-3562-4911（担当：永崎）

## 第16回JIA東海支部建築設計競技 作品募集

テーマ：「商店街に住もう——場所に問う」

提出図面：1. 設計意図、配置図、平、立、断面図、透視図または模型写真（但し、上記の諸図はあくまでも「標準」であり厳守の必要はない）。2. 図面の大きさはA2サイズ（420mm×594mm）。パネルなど巻けないものは不可。図面の表現は自由だが、2枚以内にまとめ、すべて縦使いまたは横使いで統一すること。3. 使用する言語は日本語か英語とする。4. 図面には氏名、暗号等目印となるものは記入しないこと。

応募資格：〈学生の部〉大学、短大、高専・専門学校、高校及びその海外姉妹提携校の学生（大学院生は除く）〈一般の部〉制限なし。

提出締切：10月18日（月）17：00まで

発表：入賞者には、11月中旬に郵送で各自に通知。また、朝日新聞、各雑誌等でも発表予定。

審査員：岸和郎、光崎敏正、安田文吉、他

賞：〈学生の部〉金賞1点（30万円）、銀賞2点（10万円）、銅賞5点（一般の部）金賞1点（30万円）、銀賞2点（10万円）、銅賞3点

問い合わせ：（社）日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル5階

Tel: 052-263-4636 Fax: 052-251-8495

## OPEN STUDIO NOPE サマーワークショップ 参加者募集

アート活動と社会との接点をつくり出すことを目指す、「開かれたアート空間」OPEN STUDIO NOPEに所属するアーティストが9月4日（土）から10月23日（土）にかけて様々なセミナー、ワークショップを展開する。

日程、参加費、対象等については下記まで。

問い合わせ：OPEN STUDIO NOPE

東京都港区三田2-12-5 みずほ会館2階

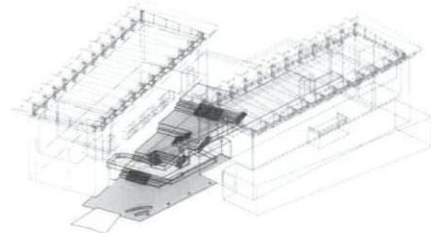
Tel: 090-9230-5329 Fax: 03-3769-9893

お詫言と訂正

SD9908号p.8に掲載した、新津市美術館のアトリウム構成図の天地が逆になっておりました。

訂正してお詫言申し上げます。

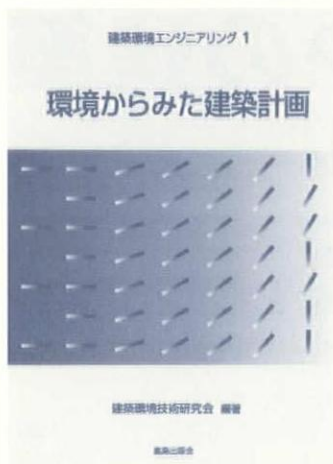
正：





# 今月の新刊

建築図書の最新刊書と、それに関連した書籍を紹介しております。  
当社の新刊すべてをご覧になりたい方は隔月で奇数月発行の「新刊案内」をご請求ください。  
当社のホームページ上でも新刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



## 建築環境エンジニアリング シリーズ

建築環境技術研究会 編著／全4巻(各巻A5判)

地球的規模の環境保全の動きは、建築計画においても重要な課題である。本シリーズは、新たな世紀の建築のために、建築設備・環境設計に関する基本的な実務知識を、建築や設備設計者向けに解説したものである。

### ①環境からみた建築計画

188頁 本体3,400円+税

環境全般についての概説および建築が環境に及ぼす影響、人間が建築のもつ環境から受ける影響等について概説する。建築の環境設計では何が重要な課題なのか、幅広く記述する。

●目次 第1章 地球環境問題と建築とのかわり／第2章 省エネルギー建築計画／第3章 室内環境からみた建築計画／第4章 防災・安全環境からみた建築計画

●以下続刊

②建築にかかわる設備計画

③電気設備計画

④空調・衛生設備



共同建て替え「コープ愛宕」(撮影=上山益男)

## まちづくりの科学

佐藤滋 編著

A5判・384頁 本体3,500円

### 20世紀に到達したまちづくり理論の大系

20世紀最後の30年、人々が地域で暮らす生活のあらゆるシーンが「まちづくり」として立ち現れた。今日までの各地での具体的な実践から抽出された、若手中堅の研究者と実務家による学問的まちづくり理論の最高到達点。

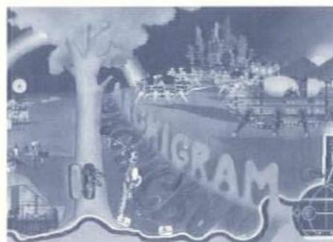
●目次 序章 まちづくりとは／第1章 まちづくりがめざしたもの／第2章 まちづくりが実現する世界／第3章 まちづくりのテクニック／第4章 まちづくりの展望／終章 まちづくりの科学

●関連図書

### 住み続けるための新まちづくり手法

佐藤 滋、新まちづくり研究会 編著／A5判・256頁 本体3,200円+税

まちに住み続けたい人必読の実録&手引書。



## アーキグラム

アーキグラム 編 浜田邦裕 訳

B5判・148頁 本体 3,400円

### 60年代の寵児「アーキグラム」を1冊に編集

ポップとサイケの60年代、めくるめくドローイングで世界中の建築ヤッピーをとりこにしたアーキグラムグループ。彼らのマニフェスト「アーキグラム」誌を1冊に編集。新鮮な衝撃は少しも減じない。詳しい解説つき。

●目次 1.建築／2.消耗品化と消費者／3.リビング・シティ／4.ズーム／5.プラグイン／6.カプセル／7.やぶれた殻／8.制御と選択／9.終わりのなきもの／10.インスタント・シティ／11.モンテ・カルロ計画／12.庭師の雑記帳／13.マウンド、ないしょの宝物／14.夢、そしてマニフェスト

●関連図書

### 建築の解体 一九六八年の建築情況

磯崎新 著／A5判・450頁 本体4,200円+税

後のポストモダンの到来を予告した衝撃の書。



# 8月の新刊

8月に刊行した建築図書と、それに関連した書籍を紹介しております。  
最近の新刊すべてをご覧になりたい方は、隔月で奇数月発行の「新刊案内」をご請求ください。  
当社のホームページ上でも新刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



## 時間のなかの建築

ON WEATHERING - The Life of Building in Time

モーゼン・ムスタファヴィ、デイヴィッド・レザボロー 共著

序文=横文彦 黒石いずみ訳

B5変判・144頁 本体2,800円+税

ISBN4-306-04391-6

### ウェザリングをキーワードに「建築」を問い直す

建築は竣工した時を「完成した」「理想的な」姿だと思われがちだが、  
実はその後の時間的経過と環境の作用によって変貌してゆく過程  
——ウェザリング(風化)を経てますます豊かになるものこそが  
真の建築のあり方だと論ずるユニークなエッセイ。

#### ●関連図書

モダニズムの巨匠たちは、建築と時間の関係をどのように捉えていたのだろうか。



#### ル・コルビュジエと日本

高階秀爾・鈴木博之・三宅理一・太田泰人 編  
A5・256頁 本体2,800円+税

#### ル・コルビュジエの建築 —その形態分析—

G.H.ペイカー 著 小野節子 訳  
B5・300頁 本体6,500円+税

#### ル・コルビュジエ

理念と形態  
W.J.R.カーティス 著 中村研一 訳  
B5・330頁 本体8,200円+税

#### ル・コルビュジエのペサック集合住宅

P.ブードン 著 山口知之、杉本安弘 共訳  
A5・228頁 本体2,800円+税



#### 巨匠 フランク・ロイド・ライト

D.ラーキン、B.ファイファー 編 大木順子 訳  
B5変形・240頁 本体3,200円+税

#### フランク・ロイド・ライトと日本文化

ケヴィン・ニュート 著 大木順子 訳  
A5・256頁 本体3,800円+税

#### 知られざるフランク・ロイド・ライト

E.ターフェル 著 谷川正己、谷川睦子 共訳  
B5・240頁 本体5,700円+税

#### 《SD選書7》

#### フランク・ロイド・ライト

谷川正己 著  
四六・230頁 本体1,800円+税



#### 白い机①:若い時

アルヴァ・アアルトの青年時代と芸術思想  
G.シルツ 著 田中雅美、田中智子 共訳  
A4変・296頁 本体9,500円+税

#### 白い机②:モダン・タイムス

アルヴァ・アアルトと機能主義の出会い  
G.シルツ 著 田中雅美、田中智子 共訳  
A4変・288頁 本体14,300円+税

#### 白い机③:円熟期

アルヴァ・アアルトの栄光と憂うつ  
G.シルツ 著 田中雅美、田中智子 共訳  
A4変形・336頁 本体19,000円+税



#### ルイス・カーン 光と空間

ウルス・ビュッティカー 著 富岡義人、熊谷逸子 共訳  
B5・192頁 本体4,200円+税

#### ルイス・カーン研究

建築へのオデュッセイア  
前田忠直 著  
A5・224頁 本体 3,400円+税

#### 《SDライブラリー14》

#### ルイス・カーン建築論集

L.カーン 著 前田忠直 編訳  
A5・258頁 本体3,600円+税



#### 評伝ミース・ファン・デル・ローエ

F.シュルツ 著 澤村明 訳  
B5・384頁 本体8,900円+税

#### 《SDライブラリー13》

#### ミース再考 その今日的意味

K.フランプトン 他著 澤村明、EAT 訳  
A5・224頁 本体3,300円+税



# 好評既刊書

建築図書の既刊書を中心に、話題の本を紹介しております。

既刊書すべてを収録した年度版の図書目録も用意しておりますので、ご請求ください。

当社のホームページ上でも既刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



## ル・コルビュジエと日本

高階秀爾・鈴木博之・三宅理一・太田泰人 編  
A5判・256頁 本体2,800円+税

本書は戦前から戦後にかけて日本の近代、現代の建築に大きな影響を与えたル・コルビュジエと日本の関係を様々な角度から述べたもの。20世紀の建築史に新たな視点を与えるものとなる。



## マリオ・ボッタ 構想と構築

マリオ・ボッタ 著 古谷誠章 訳  
B5変形・160頁 本体2,700円+税

自らの論理を語ることの少ない建築家ボッタがここでは単体の建築、都市的なプロジェクト、そして家具・照明器具などのデザインについて平明な語り口で述べており、魅力あふれるドローイングとともに彼の全貌を伝えている。



## エコテック 21世紀の建築

キャサリン・スレッサー 著 難波和彦 監訳  
B4変・192頁 本体7,300円+税

ハイテクを駆使した建築デザインの、ヨーロッパを中心とした最新事例のドキュメント。単なるファッションではなく、サステナブルでエコロジカルな環境を追求する、21世紀を志向する新しい建築をヴィジュアルで紹介。



## 巨匠 フランク・ロイド・ライト

D.ラーキン、B.ファイファー 編 大木順子 訳  
B5変形・240頁 本体3,200円+税

コルビュジエ、ミースとならぶ近代建築の巨匠であり、アメリカン・スピリッツの象徴である建築家フランク・ロイド・ライトの全貌を美しいカラー写真と平易な解説で紹介。没後40年を経た今日でも新鮮な感動を呼び起こす。



## 自然共生建築を求めて

宿谷昌則 著  
A5判・192頁 本体2,300円+税

厳しい自然から人間を護るための建築が、生活の依拠するその自然に逆に負荷を与えてしまっている現在、エコロジカルな建築を技術的解決に還元するのではなく、生活様式との関係から理念としての在り様を説き起こす。



## 建築のイコノグラフィーとエレクトロニクス

ロバート・ヴェンチュリ 著 安山宣之 訳  
A5判・296頁 本体4,300円+税

二冊の建築理論書で知られる著者が、80年代から90年代半、建築家として、その理念の検証と実現に向けてなされたあくなきたかひの全貌が綴られた書。真摯な姿、率直な筆致、読者を深い感動に誘う。



## ガラス建築

SD編集部 編  
A4変形・186頁 本体3,200円+税

パートI:ガラス建築の現在と今後を予見させる作品群、海外5、国内8、作品を紹介。  
パートII:過去の作品を通して発展してきたガラス建築のファサード表現と技術を11の有名作品を通して紹介。ガラス建築年表付。



## 安らぎと緑の公園づくり

ヒーリング・ランドスケープとホスピタリティ  
三宅祥介・浅野房世 共著  
A5判・228頁 本体3,200円+税

生活に身近な緑空間が「いやし」の場となる意味合い、さらに介護者や高齢にとって歩いて行ける公園とは何か。初めてのヒーリングランドスケープを、究極の癒し、具体的事例、ガイドライン、ホスピタリティで解説。



## ルドルフ・シンドラー カリフォルニアのモダンリビング

デヴィッド・ゲバード 著 末包伸吾 訳  
B5変形・192頁 本体3,700円+税

ウィーンでワグナー、ロースに、渡米してライトに師事した建築家シンドラーは、1900年代前半のカリフォルニアのモダンリビングを確立した。21世紀をむかえようとしている今、アメリカでも再評価の気運が高まっている。



## 21世紀の地域劇場

パブリックシアターの理念・空間・組織・運営への提案  
清水裕之 著  
A5判・248頁 本体3,700円+税

本書は21世紀に求められる新たな地域と劇場との関係をパブリックシアターと位置づけ、そのあり方を探る。市民の手で創造する新たな舞台芸術への提案を地域、劇場との関係をふまえて述べるもの。劇場関係者必読の書。



## 《現代の建築家》シリーズ

SD編集部編 A4変型判

《現代の建築家》シリーズは、常に建築界に大きな影響力を持ち、その時代の先端を走り続ける建築家たちの珠玉の作品集である。各建築家にとって記念碑的の完成を機に、SD編集部独自の視点により継続的に編まれる、他に類をみない画期的総特集である。豊富なカラー写真、図版、ドローイングと論文を盛り込み斬新なレイアウトによる美しい誌面で構成されている。著名建築家たちの活動を時間軸で知る格好のシリーズといえる。(SD特集部分の上製・保存本)

## アルヴァ・アアルト

216頁 本体4,000円＋税

巨匠、A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。「A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー」＝武藤章

## 金壽根

160頁 本体3,000円＋税

韓国の巨匠・金壽根の作品集。馬山聖堂、韓国海外開発公社社屋、徳成女子大学家政館・薬学館 他

## 榎 文彦 [1]

180頁 本体3,800円＋税

初期から'79年までの全作品集。岩崎美術館、代官山集合住居、立正大学熊谷校舎、大阪臨海スポーツセンター 他

## 榎 文彦 [2]

196頁 本体4,200円＋税

豊富なカラー写真により榎文彦の'80年代の活動を知る第2作品集。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館 他

## 榎 文彦 [3] 1987-92

218頁 本体4,400円＋税

'86年の特集に続く第3集。幕張メッセ、東京体育館などの公共建築、慶応大学湘南藤沢キャンパス 他

## 林 雅子

168頁 本体4,300円＋税

女性建築家として初の建築学会賞を受賞した林雅子の全作品集。ルーテラスをもつ家、傾斜地に建つ家 他

## カルロ・スカルパ [1]

214頁 本体3,000円＋税

イタリアのマエストロ、カルロ・スカルパの総特集。「スカルパ特集に寄せて」＝白井晟一、作品・年表・参考文献

## カルロ・スカルパ [2]

134頁 本体3,398円＋税

最後の作品であるプリオン家墓を始めたとする、主要作品の大胆かつ緻密なドローイング約150点を収録。

## 白井晟一

160頁 本体4,000円＋税

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐背館、ノアビル、聖キアラ館、昨雪軒、辰別山寮、虚白庵 他

## 安藤忠雄 [1]

178頁 本体3,500円＋税

'80年代初期までの総特集。詩＋ドローイング＝安藤忠雄。ガラスブロックウォール、帝塚山の家、住吉の長屋 他

## 安藤忠雄 [2]

196頁 本体4,700円＋税

'80年代の主要作品を、精緻でそして圧倒的な迫力で迫るドローイングと共に網羅した特集第2弾。

## 安藤忠雄 [3] アンビル・プロジェクト

148頁 本体3,689円＋税

実体として実を結ばない数々のプロジェクトの膨大な図面、模型、ドローイングから安藤の建築哲学に迫る。

## 石井和紘

170頁 本体4,175円＋税

独自のキーワードを用い、話題作をつくり続ける石井和紘の初期から'80年代後半までの全主要54作品を収録。

## 岡田新一

178頁 本体3,000円＋税

論文《抽象と細密》と、充実した作品年表、ドローイングにより、その輝かしい足跡を辿る。最高裁判所庁舎 他

## 堀口捨己

176頁 本体3,204円＋税

庭の大家としてはもちろん、歌人として、達意の文章家としても知られ、その心はそのまま作品に生き続けている。

## ジオ・ポンティ

88頁 本体2,300円＋税

建築、家具、絵画、彫刻など、多岐にわたる作品を短しサ・ポンティの解説で年代を追いつつ紹介する、ポンティ追悼号。

## 丹下健三 [1]

108頁 本体4,500円＋税

広島計画、東京都庁舎、東京計画'60年、代々木国立屋内総合競技場、赤坂プリンスホテル 他'80年までの全作品集。

## 丹下健三 [2]

220頁 本体4,000円＋税

赤坂プリンスホテル、広島厚生年金文化会館、サウジアラビア王国国王宮殿・国家宮殿 他'80年以後の作品を網羅。

## 丹下健三 [3]

212頁 本体4,466円＋税

OUBセンター、ナンヤン工科大学、バリ・イタリア広場、横浜美術館、東京都庁舎 他'80年代の作品を収録。

## 丹下健三 [4]

202頁 本体4,078円＋税

新都庁舎を中心に、国内外の近作とプロジェクト、及びヨーロッパで展開している21世紀に向けての都市計画。

## 磯崎 新 [1]

194頁 本体4,000円＋税

初期から'76年までの総作品集。「位置と動き」＝ハンス・ホライン。秀巧社ビル、Y邸、群馬県立近代美術館 他

## 磯崎 新 [2]

196頁 本体4,800円＋税

衝撃的作品つくばセンタービルを中心に、'76年以後の主要作品を網羅。福岡相互銀行本店増築、MOCA 他

## 磯崎 新 [3]

170頁 本体4,660円＋税

'85年・'91年の作品集①。水戸芸術館、サンジョルディパレス、東京キリスト教圏チャペル、お茶の水スクエア 他

## 磯崎 新 [4]

138頁 本体4,369円＋税

'85年・'91年の作品集②。ティームディズニービルディング、ロサンゼルス現代美術館、EXPO'90国際陳列館 他

## 黒川紀章 [1]

180頁 本体3,000円＋税

初期から'78年までの作品集。対談＝山崎正和＋黒川紀章、芦原義信＋黒川紀章。国立民俗学博物館 他

## 象設計集団

180頁 本体3,884円＋税

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出しつづける象設計集団の初めての作品集。名護市庁舎 他

## 高松 伸

210頁 本体3,689円＋税

'88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、全主要作品を一挙掲載。

## 早川邦彦

168頁 本体4,175円＋税

プロジェクト・商業施設・都市型複合建築・集合住宅・住宅・コンペ案まで、初期の作品から'88年までの全主要作品。

## 斎藤 裕

190頁 本体4,078円＋税

既成概念を白紙に戻し、自らの感性で捉え直した作品群、'75年以降の主要21作品。るるる阿房、屋久島の家 他

## 原 広司

174頁 本体4,300円＋税

「様相論」を軸として展開してきた建築を収録した作品集。地球外建築、空中都市計画、梅田スカイビル 他

## 山本理顕

156頁 本体4,200円＋税

建築空間の変容を予見し、通念的な空間論に刺激を与え続ける山本理顕の'90・'95年の主要作品集。

## 長谷川逸子 [2] 1986-95

164頁 本体4,200円＋税

自立する建築を追求していた時代から、建築の公共性を重視するという姿勢を打ち出した'86・'95年の主要作品集。



# 磯崎新の本

1960年代以降、磯崎新は日本のリーディング・アーキテクトとして、世界のISOZAKIとして走り続けた。  
21世紀のインザキの新たな戦略は、この7冊の本に鑑められている。

## ●著書

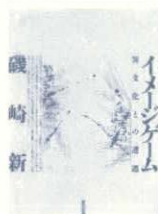


### 見立ての手法

日本的空間の読解

磯崎新 著  
A5・338頁 本体3,400円+税

めざましい設計活動を展開する国際的建築家・磯崎新の最新建築論集。本書は、日本人建築家の作家論、あるいは都市論・庭園論をとおり、日本の空間または日本文化を論じたユニークな評論集である。



### イメージゲーム

異文化との遭遇

磯崎新 著  
A5・306頁 本体3,400円+税

今この世界が、イメージだけが浮遊する決定不能の場となり、私たちのすべてのデザイン行為が、イメージをもてあそぶゲームの様相を呈しているという状況認識をもつ著者の建築を中心とする、ポストモダンへの眼差。



### 始源のもどき

ジャパネスキゼーション

磯崎新 著  
A5・320頁 本体3,800円+税

伊勢の式年遷宮に秘められた謎を解き明かすイセ論をはじめ、日本の建築文化の近代化の過程にくりかえし現われる和様化を論じる、グローヴァルな日本文化論。



### 造物主議論

デミウルゴモルフィスム

磯崎新 著  
A5・336頁 本体3,800円+税

「建築」とは何か? という根源的な問いを自ずから投げかけ、ティマイオスからニーチェにいたるさまざまなテーマで織りなす「建築論」の一大ページェント。「建築」の現在を問い、未来を展望する磯崎新の話題作!!

## ●対談集



### 建築の一九三〇年代

系譜と脈絡

磯崎新 対談  
A5・250頁 本体2,400円+税

磯崎新の対談第2集。吉田五十八、生田勉、土浦亀城、吉武泰水、稲垣栄三、高山栄華、河野鷹思の7氏と語り、日本現代建築の「系譜と脈絡」を明らかにした。



### 空間へ

根源へと遡行する思考

磯崎新 著  
A5・522頁 本体4,600円+税

磯崎新の建築家としての出発点を決定づけた「プロセス・プランニング論」また思想的自伝「見えない都市」など、1960-70年代の空間論・都市論32編を収録する処女論集。四半世紀を経たいまでも新鮮さを失っていない。



### 建築の解体

一九六八年の建築情況

磯崎新 著  
A5・450頁 本体4,200円+税

1968年の時点で後のポストモダンの到来を予告した衝撃の書。ホライン、アーキグラム、ムーア、プライス、アレグザンダー、ヴェンチュリ、スーパースタジオ、アーキズムを論じる。改めて磯崎の慧眼ぶりに脱帽。



### 手法が

カウンター・アーキテクチャ

磯崎新 著  
A5・336頁 本体3,800円+税

建築家・磯崎新の「近代建築との絶縁宣言」としてさまざまな手法の駆使によるメディアの生成を論じた「手法論」、情報装置構想からカタログ文法論までを含む「模型論」のほか、「反建築ノート」等1970年代の軌跡の集大成。



### ポスト・モダンの時代と建築

磯崎新 対談

A5・280頁 本体2,600円+税

ポスト・モダニズムに関しても最大の話題の主である磯崎新の、最近10年間(1975-84)の対談集。内外の批評家17人と、日本も含めた世界の文化の具体的な状況、「ポスト・モダン」という時代の兆候について語っている。



## SD選書

本選書は、高度に細分化し、専門化した現代文明のあらゆる課題をあつかいながら、新鮮でダイナミックな視点を提供し、各領域をつなぐかけ橋となるものである。

写真・図版を豊富にとり入れて、ヴィジュアルに編集し、

今日の造形文化に関心のあるすべての人々の感性と知性に鋭く訴えかける、新しいタイプの選書。

## 建築思潮 (建築家の建築論)

- 15 ユルバニズム**  
ル・コルビュジエ 著 樋口清 訳 本体1,800円
- 17 私と日本建築**  
A.レーモンド 著 三沢浩 訳 本体2,000円
- 21 建築をめざして**  
ル・コルビュジエ 著 吉阪隆正 訳 本体1,800円
- 33 輝く都市**  
ル・コルビュジエ 著 坂倉準三 訳 本体1,800円
- 49 住宅論**  
藤原一男 著 本体1,800円
- 95 建築とは何か**  
B.タウト 著 藤田英雄 訳 本体1,800円
- 96 続・住宅論**  
藤原一男 著 本体1,800円
- 111 モデュロール I**  
ル・コルビュジエ 著 吉阪隆正 訳 本体1,800円
- 112 モデュロール II**  
ル・コルビュジエ 著 吉阪隆正 訳 本体1,800円
- 120 人間の家**  
ル・コルビュジエ 他共著 西沢信弥 訳 本体1,800円
- 128 オレゴン大学の実験**  
C.アレグザンダー 著 宮本雅明 訳 本体1,800円
- 138 三つの人間機構**  
ル・コルビュジエ 著 山口知之 訳 本体980円
- 141 続建築とは何か**  
B.タウト 著 藤田英雄 訳 本体980円
- 142 四つの交通路**  
ル・コルビュジエ 著 井田安弘 訳 本体980円
- 143 ラスベガス**  
R.ヴェンチュリー 他共著 石井和雄 他共訳 本体1,800円
- 148 東方への旅**  
ル・コルビュジエ 著 石井勉 他訳 本体980円
- 154 住宅と宮殿**  
ル・コルビュジエ 著 井田安弘 訳 本体1,200円
- 157 エスプリ・ヌーヴォー**  
ル・コルビュジエ 著 山口知之 訳 本体1,200円
- 158 建築について(上)**  
E.L.ライト 著 谷川睦子 他共訳 本体1,800円
- 159 建築について(下)**  
E.L.ライト 著 谷川睦子 他共訳 本体1,200円
- 172 建築家の発想**  
石井和雄 著 本体1,800円
- 174 建築の多様性と対立性**  
R.ヴェンチュリー 著 伊藤公文 訳 本体1,800円

- 185 プレシジョン(上)**  
ル・コルビュジエ 著 井田安弘 他共訳 本体1,500円
- 186 プレシジョン(下)**  
ル・コルビュジエ 著 井田安弘 他共訳 本体1,500円
- 191 アルド・ロッシ自伝**  
A.ロッシ 著 三宅理一 訳 本体1,800円
- 204 ミース・ファン・デル・ローエ**  
D.スペース 著 平野哲行 訳 本体1,800円
- 205 表現主義の建築(上)**  
W.ベント 著 長谷川章 訳 本体1,500円
- 206 表現主義の建築(下)**  
W.ベント 著 長谷川章 訳 本体1,500円
- 207 カルロ・スカルパ**  
A.F.マルチアノ 著 浜口オサミ 訳 本体1,800円

## 評論(現代建築)

- 63 近代建築**  
V.スカーリー 著 長尾重武 訳 本体1,500円
- 82 アメリカの建築とアーバニズム(上)**  
V.スカーリー 著 香山壽夫 訳 本体980円
- 83 アメリカの建築とアーバニズム(下)**  
V.スカーリー 著 香山壽夫 訳 本体980円
- 97 建築の現在**  
長谷川純 著 本体980円
- 131 アメリカ住宅論**  
V.スカーリー Jr. 著 長尾重武 訳 本体980円
- 139 インターナショナル・スタイル**  
H.R.ヒッチコック 他共著 武沢秀一 訳 本体1,800円
- 144 ル・コルビュジエ**  
C.ジェンクス 著 佐々木宏 訳 本体1,800円
- 150 近代建築の失敗**  
P.ブレイク 著 星野郁美 訳 本体1,800円
- 155 イタリアの現代建築**  
V.グレッグティ 著 松井宏方 訳 本体1,200円
- 212 建築計画の展開**  
W.M.ベニヤ 著 本田邦夫 訳 本体1,500円

## 建築家論

- 7 フランク・ロイド・ライト**  
谷川正己 著 本体1,800円
- 34 アルヴァ・アアルト**  
武藤章 著 本体1,800円

- 123 ライトと日本**  
谷川正己 著 本体1,800円
- 132 タリアセンへの道**  
谷川正己 著 本体980円
- 165 アドルフ・ロース**  
伊藤哲夫 著 本体1,200円
- 170 ブルネッレスキ**  
G.C.アルガン 著 浅井朋子 訳 本体1,500円
- 181 ジュゼッペ・テッラーニ**  
B.ゼーヴィ 著 鶴沢隆 訳 本体1,500円
- 187 オットー・ワーグナー**  
H.グレッツェン 他共著 伊藤哲夫 他共訳 本体1,800円
- 189 ルイス・マンフォード**  
木原武一 著 本体1,500円
- 196 オーギュスト・ペレ**  
吉田鋼市 著 本体1,500円
- 197 アントニオ・ガウディ**  
鳥居徳敏 著 本体1,800円
- 217 ボッロミーニ**  
G.C.アルガン 著 長谷川正允 訳 本体1,800円
- 218 ヴィオレ・ル・デュク**  
羽生修二 著 本体1,800円
- 219 トニー・ガルニエ**  
吉田鋼市 著 本体1,800円
- 222 パラディオへの招待**  
長尾重武 著 本体1,800円
- 226 ウィリアム・モリス**  
藤田治彦 著 本体1,800円
- 227 エーロ・サーリネン**  
穂積信夫 著 本体1,800円

## 建築論

- 78 実存・空間・建築**  
C.ノルベルグ=シュルツ 著 加藤邦男 訳 本体1,800円
- 124 空間として建築(上)**  
B.ゼーヴィ 著 栗田勇 訳 本体1,800円
- 125 空間として建築(下)**  
B.ゼーヴィ 著 栗田勇 訳 本体1,800円
- 130 建築空間…尺度**  
P.ブドン 著 中村貴志 訳 本体980円
- 134 思想としての建築**  
栗田勇 著 本体980円
- 168 モラルティと建築**  
D.ワトキン 著 榎本弘之 訳 本体1,200円



## SD選書

## 221 古典建築の失われた意味

G.ハーシー 著 白井秀和 訳 本体1,800円

## 224 芸術としての建築

S.アバロンビー 著 白井秀和 訳 本体1,800円

## 都市論

## 22 メガロポリス

J.ゴットマン 著 木内信蔵 訳 本体1,500円

## 58 新しい都市の人間像

R.イールズ 他共編 木内信蔵 監訳 本体780円

## 81 爆発するメトロポリス

W.H.ホワイト Jr. 他共著 小島将志 訳 本体980円

## 85 アーバン・ゲーム

M.ケンツレン 著 北原理雄 訳 本体980円

## 162 見えがくれする都市

横文彦 他共著 本体1,800円

## 164 環境計画論

田村明 著 本体1,800円

## 171 装置としての都市

月尾嘉男 著 本体1,500円

## 208 都市の街割

材野博司 著 本体1,500円

## 210 まちづくりの新しい理論

C.アレグザンダー 他著 難波和彦 監訳 本体1,800円

## 228 都市デザインの系譜

相田武文、土屋和男 共著 本体1,800円

## 232 都市・住宅論

東孝光 著 本体1,800円

## デザイン

## 1 現代デザイン入門

勝見勝 著 本体1,800円

## 5 日本デザイン論

伊藤ていじ 著 本体1,800円

## 42 道具考

榮久庵憲司 著 本体1,500円

## 56 環境とデザイン

G.エクボ 著 久保貞 訳 本体2,000円

## 149 建築鑑賞入門

W.W.コーディル 他共著 六鹿正治 訳 本体1,800円

## 156 バウハウス

杉本俊多 著 本体1,800円

## 167 水空間の演出

鈴木信宏 著 本体1,800円

## 178 木のこころ

G.ナカシマ 著 神代雄一郎 他共訳 本体1,800円

## 182 水のデザイン

D.パーミングハウス 著 鈴木信宏 訳 本体1,800円

## 188 環境照明のデザイン

石井幹子 著 本体1,800円

## 192 屋外彫刻

M.A.ロビネット 著 千葉成夫 訳 本体1,800円

## 194 トーネット曲木家具

K.マング 著 宿輪吉之典 訳 本体1,500円

## 198 インテリアデザインとは何か

三輪正弘 著 本体1,800円

## 202 椅子のデザイン小史

大廣保行 著 本体1,800円

## 203 都市の道具

GK研究所、榮久庵祥二 著 本体1,500円

## 209 日本の伝統工具

土田一郎 著 秋山実 写真 本体1,800円

## 215 行動・文化とデザイン

清水忠男 著 本体1,800円

## 216 環境デザインの思想

三輪正弘 著 本体1,800円

## 223 ディスプレイデザイン

魚成祥一郎 監修 清家清 序文 本体1,800円

## 225 フラクタル造形

三井秀樹 著 本体1,800円

## 素材・技術

## 9 素材と造形の歴史

山本学治 著 本体1,800円

## 36 カテドラルを建てた人びと

J.ジャンベレ 著 飯田喜四郎 訳 本体1,800円

## 67 木の文化

小原二郎 著 本体1,800円

## 72 ヴィラール・オヌクルの画帖

藤本康雄 著 本体780円

## 89 江戸建築と本途帳

西和夫 著 本体980円

## 183 ゴシック建築の構造

R.マーク 著 飯田喜四郎 訳 本体1,500円

## 201 自然な構造体

F.オットー 著 岩村和夫 訳 本体1,800円

## 日本建築史

## 4 江戸と江戸城

内藤昌 著 本体1,800円

## 12 新桂離宮論

内藤昌 著 本体2,000円

## 37 日本建築の空間

井上充夫 著 本体1,800円

## 53 茶匠と建築

中村昌生 著 本体1,800円

## 152 日本の近代建築(上)

稲垣栄三 著 本体1,800円

## 153 日本の近代建築(下)

稲垣栄三 著 本体1,500円

## 178 日本の空間構造

吉村貞司 著 本体1,800円

## 235 間(ま) 日本建築の意匠

神代雄一郎 著 本体2,400円

## 世界建築史

## 25 都市形成の歴史

A.コーン 著 星野芳久 訳 本体1,800円

## 66 天上の館

J.サマーソン 著 鈴木博之 訳 本体2,000円

## 140 北欧の建築

S.E.ラスムッセン 著 吉田哲郎 訳 本体980円

## 169 ペルシア建築

A.U.ボープ 著 石井昭 訳 本体1,500円

## 175 広場の造形

C.ジッテ 著 大石敏雄 訳 本体1,800円

## 176 西洋建築様式史(上)

F.バウムガルト 著 杉本俊多 訳 本体1,800円

## 177 西洋建築様式史(下)

F.バウムガルト 著 杉本俊多 訳 本体1,800円

## 195 劇場の構図

清水裕之 著 本体1,800円

## 200 ヴェネツィア

陣内秀信 著 本体1,800円

## 213 スペイン建築の特質

F.チュエッカ 著 鳥居徳敏 訳 本体1,500円

## 214 アメリカの巨匠たち

P.ブレイク 他 著 小林克弘 他共訳 本体1,800円



## SD選書

## 美術・文化論

- 8 きもの文化史**  
河端実英 著 本体1,800円
- 14 現代絵画の解剖**  
木村重信 著 本体2,000円
- 19 芸術空間の系譜**  
高階秀爾 著 本体1,800円
- 20 日本美の特質**  
吉村貞司 著 本体1,800円
- 27 イタリアの美術**  
A.プラント 著 中森義宗 訳 本体2,000円
- 35 幻想の建築**  
坂崎乙郎 著 本体1,500円
- 46 キュビズムへの道**  
D.H.カーンワイラー 著 千足伸行 訳 本体1,800円
- 55 空間の生命**  
坂崎乙郎 著 本体1,500円
- 75 部族社会の芸術家**  
M.W.スミス 編 木村重信 他共訳 本体780円
- 106 光の死**  
H.ゼーデルマイヤ 著 森洋子 訳 本体980円
- 114 ロマネスク 上**  
H.フォション 著 神沢栄三 他共訳 本体1,800円
- 115 ロマネスク 下**  
H.フォション 著 神沢栄三 他共訳 本体1,800円
- 116 ゴシック 上**  
H.フォション 著 神沢栄三 他共訳 本体1,800円
- 117 ゴシック 下**  
H.フォション 著 神沢栄三 他共訳 本体1,800円
- 146 鏡:虚構の空間**  
田水常雄 著 本体980円
- 234 さあ横になって食べよう**  
バーナード・ルドフスキー 著 奥野卓司 訳 本体1,800円

## 環境・アメニティ・都市

- 28 明日の田園都市**  
E.ハワード 著 長素達 訳 本体1,800円
- 103 プライド・オブ・プレイス**  
シヴィック・トラスト 著 井出久登 他共訳 本体980円
- 118 アメリカ大都市の死と生**  
J.ジェコブス 著 黒川紀章 訳 本体1,800円
- 119 遊び場の計画**  
R.ダットナー 著 神谷五男 他共訳 本体1,800円

- 129 都市はふるさとか**  
F.レンツロー・マイス 著 武基雄 他共訳 本体980円
- 135 人間のための都市**  
H.ペーター・タース 著 河合正一 訳 本体980円
- 136 都市憲章**  
磯村英一 著 本体980円
- 147 イタリア都市再生の論理**  
陣内秀信 著 本体1,800円
- 220 住環境の都市形態**  
P.バヌレ 他共著 佐藤方俊 訳 本体1,800円
- 233 ふれあい空間のデザイン**  
清水忠男 著 本体1,800円

## 住宅

- 11 プライバシーとコミュニティー**  
S.シャマイエフ 他共著 岡田新一 訳 本体1,800円
- 110 現代のコートハウス**  
D.マッキントッシュ 著 北原理雄 訳 本体980円
- 133 建築VSハウジング**  
M.ボウリー 著 山下和正 訳 本体980円
- 190 いえとまち**  
鈴木成文 他共著 本体1,800円
- 211 建築環境論**  
岩村和夫 著 本体1,800円

## 庭・ランドスケープ

- 23 日本の庭園**  
田中正大 著 本体1,800円
- 43 ヨーロッパの造園**  
岡崎文彬 著 本体1,800円
- 87 日本の公園**  
田中正大 著 本体1,800円
- 98 都市の景観**  
G.カレン 著 北原理雄 訳 本体1,800円
- 163 街の景観**  
G.パーク 著 長素達 他共訳 本体1,200円
- 193 作庭記からみた造園**  
飛田範夫 著 本体1,800円
- 229 サウンドスケープ**  
鳥越けい子 著 本体1,800円
- 230 風景のコスモロジー**  
吉村元男 著 本体1,800円

## 庭園から都市へ

材野博司 著 本体1,800円

## 心理学

- 145 デザインの認識**  
R.ソマー 著 加藤常雄 訳 本体980円
- 161 建築形態のダイナミックス (下)**  
R.アルンハイム 著 乾正雄 訳 本体1,200円
- 166 空間と情緒**  
箱崎総一 著 本体1,500円

## フィールドワーク (デザインサーベイ・人類学)

- 54 住居空間の人類学**  
石毛直道 著 本体1,500円
- 59 京の町家**  
島村昇他 編 本体1,800円
- 61 住まいの原型 I**  
泉靖一 編 本体1,500円
- 76 キモノ・マインド**  
B.ルドフスキー 著 新庄哲夫 訳 本体2,000円
- 77 住まいの原型 II**  
吉阪隆正他 共著 本体2,000円
- 126 かいわい**  
材野博司 著 本体1,800円
- 184 建築家なしの建築**  
B.ルドフスキー 著 渡辺武信 訳 本体1,800円

## 情報

- 71 現代建築事典**  
W.ベアント 編 浜口隆一 他監修 本体1,900円
- 91 イギリス建築の新傾向**  
R.ランダウ 著 鈴木博之 訳 本体980円



# N 日章工業株式会社

代表取締役社長 福田 三 丈

●本 社 〒101-0047 東京都千代田区内神田 3-11-7 (日立神田別館) ☎03-3254-3000  
●大 阪 支 店 ●横 浜 支 店 ●仙 台 支 店 ●広 島 出 張 所 ●福 岡 出 張 所

日立製作所電機特約店  
日立化成工業特約店  
日立機材特約店  
日立建機特約店

旭化成建材代理店  
新明和工業特約店  
大和ハウス工業特約店  
大昭和製紙特約店

## 施 設 商 品

エレベータ・エスカレータ  
ホームエレベータ  
機械駐車設備  
ゴミ処理設備  
バスユニット・流し台  
洗面化粧台  
集中浄化槽・パネルタンク

空調衛生電気設備工事  
受変電・自家発電設備  
空調機・ポンプ・送風機  
監視防犯システム  
節水バルブ・節水トイレ

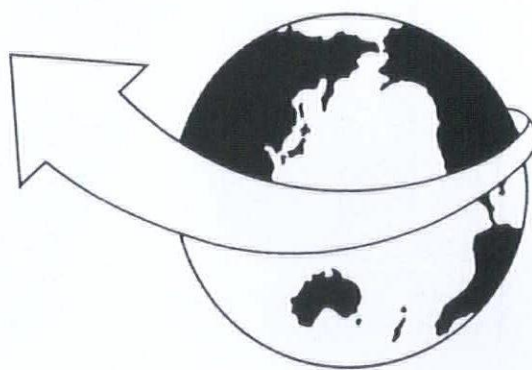
## 建 材 商 品

PHCパイル・シテイガイ  
イーゼット・現場造成杭  
地盤改良  
ヘーベル・グランデ  
押出成形版・金属パネル  
屋根・硝子工事  
フリーアクセスフロア・OAフロア

クリーンルーム床工事  
ハイベース・ハイスプリット  
ユーボード・軽量鉄骨  
プレハブ規格建築  
大昭和ユニボード  
九木ライトフォーム・シールド  
クロラクレーン・耐火被覆

# 未来に向けて...

限りある資源  
限りある空間の中で  
より快適な環境づくりの  
ために努力しています。



## ●営業品目

空気調和・冷暖房・給排水・衛生設備・設計施工



## 株式会社朝日工業社

本社・東京支社 〒105-0013 東京都港区浜松町 1-25-7 電話 03 (3434) 5711  
大 阪 支 社 〒532-0031 大阪市淀川区加島 1-58-59 電話 06 (6302) 2273  
支 店 北海道／東北／北関東／横浜／名古屋／中国／九州



# TOSHIBA

## エレベーターから機械室が消えた！ 大好評、マシンルームレスのスペースセル。

「スペースセル」は、マンションなどの住宅用だけでなく、オフィスやテナントビルなどの兼用、病院など医療施設の寝台用と充実しています。さらに、最大昇降行程は60m、20階建ての建築物にも対応するなど、設計・デザインの可能性をいちだんと拡大。まさに時代が求めた新世紀のエレベーターです。

### スペースセルは ここが違う！

#### デザインフリー

スペースセルは、機械室の設置は不要。ですから、屋根のデザインの自由度が拡大。建物高さの面でも制約が少なくなり、建築構造としての美観を自由に追求することを可能にしました。

#### レイアウトフリー

スペースセルなら昇降路の位置を自由にレイアウト。高さ制限上も有利。既存の建築物のエレベーター増設にも柔軟に対応します。

#### スペースを有効利用

エレベーター設備のべ面積を大幅に縮小。いままでエレベーター設備に要していた共有部分を有効スペースとして活用できます。

#### 省エネ&建築・設備工事を削減

スペースセルは、モータ容量が従来のロープ式や油圧式よりも低く抑えられるので、電源設備容量や消費電力量を低減します。また機械室のものが無くなるため、従来必要だった機械室の建築・設備工事はすべて不要になります。

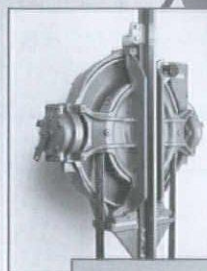
#### 新保守システム「スーパーTERM(東芝遠隔監視メンテナンス)」で 万全の保守点検サービスを提供

東芝エレベーターが開発した新しい遠隔監視メンテナンスシステム「スーパーTERM」がエレベーターを止めずに遠隔診断、機器の状態変化をリアルタイムに察知し故障の未然防止につとめます。また万一の故障の際にも、より迅速な対応が可能となります。

#### いまお使いのエレベーターをハイグレードにリニューアル

ビルのリニューアルをお考えになる時、東芝エレベーターでは、最新モデルのスペースセルへのグレードアップをおすすめします。事前の調査にもとづき効率のよいリニューアルをご提案します。

コンパクト化に徹した  
新しいタイプの巻上機  
昇降路内の設置を可能にした薄型  
ギヤレス巻上機を採用。高効率ギヤ  
レスシステムにより、省エネルギー  
を実現しました。



#### 超薄形の新開発制御装置。

超薄形設計のインバータ装置や最新の制御用プロセスを搭載  
した高密度・高性能の制御基板を採用。厚さわずか100mmの  
制御装置を最上階のりばに配置することができました。

東芝マシンルームレスエレベーター スペースセル

# SPACE



株式会社 東芝 昇降機システム社 本社 〒105-8001 東京都港区芝浦1-1-1 (東芝ビルディング) TEL (03) 3457-4620 FAX (03) 5444-9275 ホームページアドレス <http://www2.toshiba.co.jp/ing/syoji/>  
北海道支社 ☎ (011) 214-2451 北陸支社 (金沢支店) ☎ (076) 224-2815 新潟支店 ☎ (025) 246-8263 北関東支社 ☎ (048) 640-1130 東関東支社 ☎ (043) 299-1017 神奈川支社 ☎ (045) 664-8614  
静岡支店 ☎ (054) 221-1787 中部支店 ☎ (052) 564-8511 関西支店 ☎ (06) 6440-2281 中国支店 ☎ (082) 542-3277 四国支店 ☎ (087) 837-0790 九州支店 ☎ (092) 735-3056  
\*東芝マシンルームレスエレベーター(スペースセル)はフィンランドKONE社からのライセンスに基づき、同社製の巻上機(EcoDisc™)を使用します。EcoDisc™はKONE社の登録商標です。



# 広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい(五十音順)

## ●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (6362) 6515

FAX06 (6362) 6052

## ●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX (3818) 1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル 06 (6231) 4548

FAX06 (6227) 0268

## ●新建社

神奈川県三浦郡葉山町堀内533

0468-77-1207

FAX0468-77-1208

## ●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (6379) 1791

東京——東京都千代田区神田須田町2-5-2

須田町佐志田ビル (3255) 8411

名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

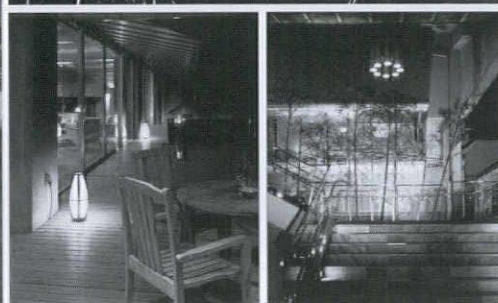
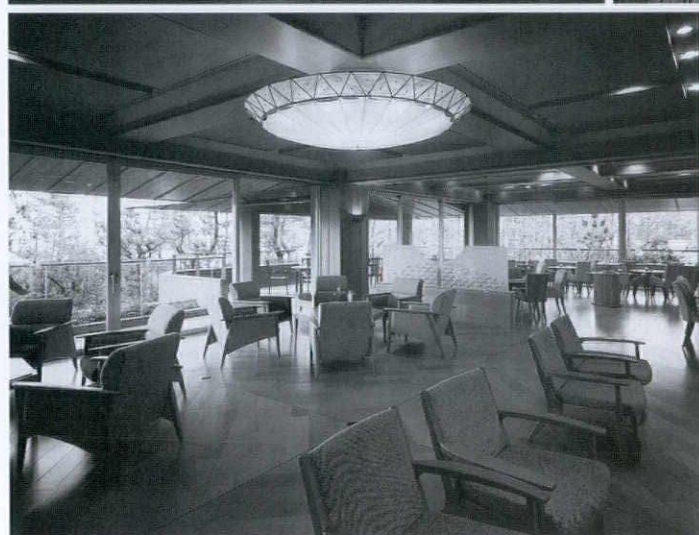
名古屋センタービル052 (221) 7641(代)

|   |                      |       |
|---|----------------------|-------|
| ア | (株)朝日工業社             | A13   |
| オ | 大崎電気工業(株)            | A1    |
| カ | (株)関電工               | 表2    |
|   | 鹿島                   | A4・A5 |
|   | 軽井沢ホテル鹿島ノ森           | A6    |
|   | 川崎電気(株)              | A11   |
| ク | 栗原工業(株)              | A10   |
| サ | 三建設備工業(株)            | A10   |
|   | 三機工業(株)              | 113   |
| ス | 住友電設(株)              | A9    |
| タ | 大興物産(株)              | A8    |
|   | 大栄電気(株)              | A11   |
|   | 高砂熱学工業(株)            | 表3    |
| ト | 東陶機器(株)              | A12   |
|   | (株)東芝                | A14   |
| ニ | (株)西原衛生工業所           | A3    |
|   | 日章工業(株)              | A13   |
| ヒ | (株)日立製作所             | 表4    |
|   | 日立電線(株)              | 119   |
| ホ | ホテルイースト21東京          | A7    |
| マ | 松下電器産業(株)            | A2    |
| ミ | 美和ロック(株)             | 105   |
|   | 三菱電機(株)              | 116   |
| ヤ | 山田照明(株)              | A16   |
| ワ | YKKアーキテクチュラルプロダクツ(株) | 115   |



# 表情多彩

照明は空間づくりの重要なポイント。  
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい……。山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



季一遊（静岡） 設計監理：株式会社 石井建築事務所

**yamada**

山田照明株式会社

本社/ショールーム 〒101-0021 東京都千代田区外神田 3-8-11 TEL.03-3253-5161  
横浜支社/ショールーム 〒220-0005 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL.045-311-1731

仙台支社 〒980-0824 仙台市青葉区支倉 4-34 TEL.022-267-1630 大阪支社 〒557-0006 東大阪市橋根 2-2-6 TEL.06-6745-6811 福岡支社 〒812-0042 福岡市博多区豊町 1-9-61 TEL.092-414-8531  
札幌営業所 〒003-0807 札幌市白石区菊水七条 2-61 TEL.011-811-2215 北関東営業所 〒370-0861 高崎市上中居町 51-1 TEL.0273-26-4111 名古屋営業所 〒461-0005 名古屋市中区東横 1-10-9 TEL.052-963-8411  
広島営業所 〒730-0805 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL.082-293-6119 鹿児島営業所 〒890-0055 鹿児島市上荒田町 23-10 TEL.099-258-0031 宇都宮事務所 〒321-0871 宇都宮市海道町 818-2 TEL.0286-60-1381